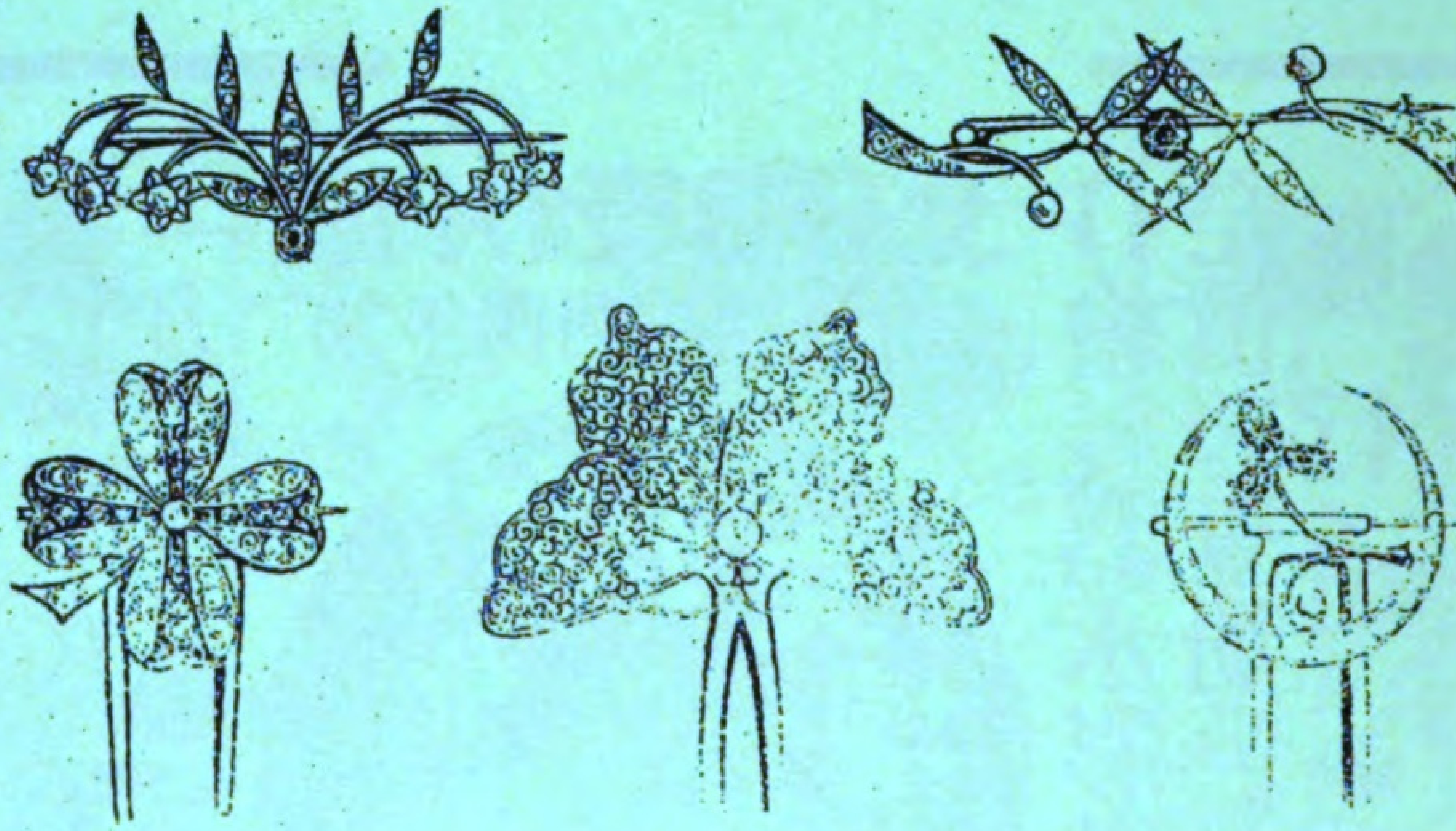
女學世界

第七巻
第十二號



博文館發行

女學世界 第七巻第拾貳號 目次



ブローチ兼用ヘーヤピン

貴婦人界今日の流行に從ふて新式の胸飾兼用簪各種を發賣致候其樣式は歐米最新の流行を汲み更に意匠を加へて十八金臺に銀色の眞珠を背とし眞紅（ルビー）綠（エメラルド）藍色（サファヤ）の各寶石又は金剛石を點嵌して華麗なるものあり瀟洒なるものあり何れも色彩の配合に意を用ゐたれば之れを胸に飾り或は頭にかざして自然の麗容に又一の美觀を添ふべし

此外首飾腕環等貴品に應じ製作仕候得ば何卒御用命あらん事を伏て奉願上候

價格……○貳拾五圓　參拾圓　參拾五圓　四拾圓　五拾圓

金剛石入　七拾五圓　壹百圓　貳百圓以上各種

○平素の御愛顧に酬ゆる爲め金細工寶石玉の御修繕品有之候時は早速調製上納可致候間御下命被下度候

振替貯金口座
第九二九三番

東京市京橋區[illegible]

大西白牡丹

株　電話本局三十番

文（いの一）



營業品目
美術造花材料
器具幷ニ半製品
刺繡用器具幷ニ材料
袋物器具幷ニ材料
摘ミ細工
撚細工材料
造果用材料幷ニ木型
其外御婦人用美術技藝品一式販賣致シ居リ候
地方御注文ノ節ハ代金引替小包郵便ニテ御送リ申上候
婦人技藝材料販賣
東京市本郷區弓町貳丁目
倉持商店
(切取線)
女學世界



カメリヤ
洗粉(あらいこ)
カメリヤは色を白くし
艶をよくする最新最良の洗粉なり
カメリヤは優美なる香氣を
有し一度之れを用ゆれば芳
香永く身邊に薫りて自から
心氣爽快ならしむ
殊に貴紳淑女の
高等化粧料とし
て大に社會に高
評を博せらるゝ
本邦唯一の洗
粉也
定價
大瓶 廿五錢
瓶入 十二錢
袋入 五錢
小袋 三錢
本舗
東京神田 小林富次郎
ライオン歯磨 發賣元

時世粧



榊原蕉園筆

（ろの一）

胃病根治劑

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全にならす靈藥

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさえ）ムチスカシ的姑息式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ眞藥あるを見ず、玆に獨乙國高名大醫ノーテル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる最新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を增進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は普製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上貳藥**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且（月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥**專賣元** 東京市神田五軒町十六番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

（その二）

女（ろの三）

女(ろの四)

虫聲



日高嶋助筆

●婦人科
●小兒科
專門

午前宅診 午後往診

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

女醫 鷲山彌生

醫科大學病院辭職
專門的治療院開設

院長 平田章之丞

◎男子 婦人 生殖器科 睾丸陰莖 卵巢子宮

◎梅毒 痳疾 科

殊に機能障害、神系衰弱、ヒステリー

東京淺草
七軒町三
入院隨時

明治療院



香氣乃清秀耐久は天下無敵なり
久邇宮妃殿下
屢御買上の
榮
上流社会及西
洋人ヨミ高評あり
藝人界ニ於テハ高麗藏丈率先愛用せらる

大瓶 一円八十銭
小瓶 四十銭
懷中瓶 廿五銭

オペラ香水本舖

東京日本橋區
米澤町一ノ一

鳳舞園

電話浪花四〇三九

オペラ香水特約販賣店

東京横山町 柳下藤五郎
同 上 脇田盛眞堂
同 米澤町 吉田萬珠堂
大阪博勞町 小林支店

女（にの二）

らい病根治新藥 レプラ丸

本劑は獨乙國醫學博士ホルベルヤイ氏が癩病の病原より探究し多年の辛苦と數萬の患者に就て實驗を積て終に成功したる靈藥にして如何なる難症も本劑に依て全治するを得る一大奇藥也●にせ物注意あれ

價一劑廿五日用二圓●二劑五圓五十錢●小四劑十圓●小包料金十錢

梅毒根切の藥 パウル氏丸

りしき難症も根治し身體を強壯にす特効非凡なり

禮狀多供一覽

●十五日分七十錢●卅日分一圓卅錢●六十日分二圓四十錢●小包料金十錢

肺病根治劑

有名なるエベレツト大博士の發明方劑にして如何に長年の大患にても五十日分にて驚くべき奏効する事を保證す●(にせ物御注意あれ)●定價

●價一週五十五錢●二週一圓●三十日貳圓●五十日三圓●小包料金十錢

色を白くする藥

男女成美劑

此藥はアンダルソン大博士の秘方劑なれば効能の確實なる事世上雜多の賣藥化粧劑の類にあらず

小瓶三十錢 大瓶五十錢 特別〆一圓 小包料十錢

毛のはへる藥

驚くべき天下唯一の保證藥禮狀山の如し●●偽藥館名御注意あれ●●凡てあるべき處に毛のなき●やけど●できもの●はつぼう等のはげ●頭髮まゆ毛ロひげはへぎわ等の薄き●病後のつけ毛●多年實立の生毛特効驚くべき奇藥

藥價

●壹圓●壹圓半●濃厚正圓半●参圓半●小包料十錢

子宮神藥 女宮丸

●ちの道●産前産後●ヒステリー●子宮病●寸白●しらち●ながち●つわり●のぼせ●ぶつう●めまひ●きのふさぎ●顔色あしく手足だるく食すゝまざる等に用ひて奇効あり特に身體滋健となりて子なき婦人に一日も缺くべからざる特効藥なり

藥價七日分五十五錢●十四日分一圓●卅日分二圓●五十日分三圓●百日分五圓五十錢●小包料十錢

美容散 やせる藥

藥價(一週)七十錢(二週)一圓(五週)二圓廿錢

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ひて害なく身體美容となる保證藥なり

皮膚病專門藥

たむし	いんきん	おまづ
あざ	ざくろ鼻	あか鼻
わきが	ひぜん	ぜにがき

偽物注意

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢宛

專賣本舗　東京本郷區本郷三丁目　新宮藥館

○季節向新柄取揃有之候○

袴乃親玉



卸 ㋯ 部

東京日本橋長谷川町
美濃磯本店
(電話浪花二八五九番)

本郷五丁目 美濃磯支店 (電話下谷一四一五番)
淺草區諏訪町 美濃磯支店
日本橋區佐内町 美濃磯支店
深川區高橋際 美濃磯支店
神田區小川町 美濃磯支店
芝區新櫻田町 小田商店
牛込區神樂坂 伊澤商店
四谷傳馬町一丁目 伊澤支店

三大博士

發明

神經衰弱貧血頭痛ヒステリー陰痿等通俗的症候解説療法攝生法根治藥詳説の雜誌をハガキで依ト是的申込次第無代進呈す

肺病救濟

アドルフ博士新發見肺結核治療藥は醫界新紀元也我國に傳へ公私病院長醫家實驗廿七名の不思議の効果を確認せる全治報告根治療法詳説の雜誌を救濟の爲無代進呈ハガキで申込……

東京京橋越前堀 樂天堂藥房

洋畫講義錄

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペイ畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯
三宅克己先生
岡田三郎助先生
大下藤次郎先生
中澤弘光先生
外大家十數名

新學期開始！

東京市麻布飯倉四丁目 大日本繪畫講習會

繪畫講習錄

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ、毎號美麗なる繪畫數葉を挿入す、毎月二回發行一年卒業會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯
川端玉章先生
荒木寛畝先生
寺崎廣業先生
梶田半古先生
外大家十數名

女(はの三)

東京勸業博覽會

名譽銀牌受領

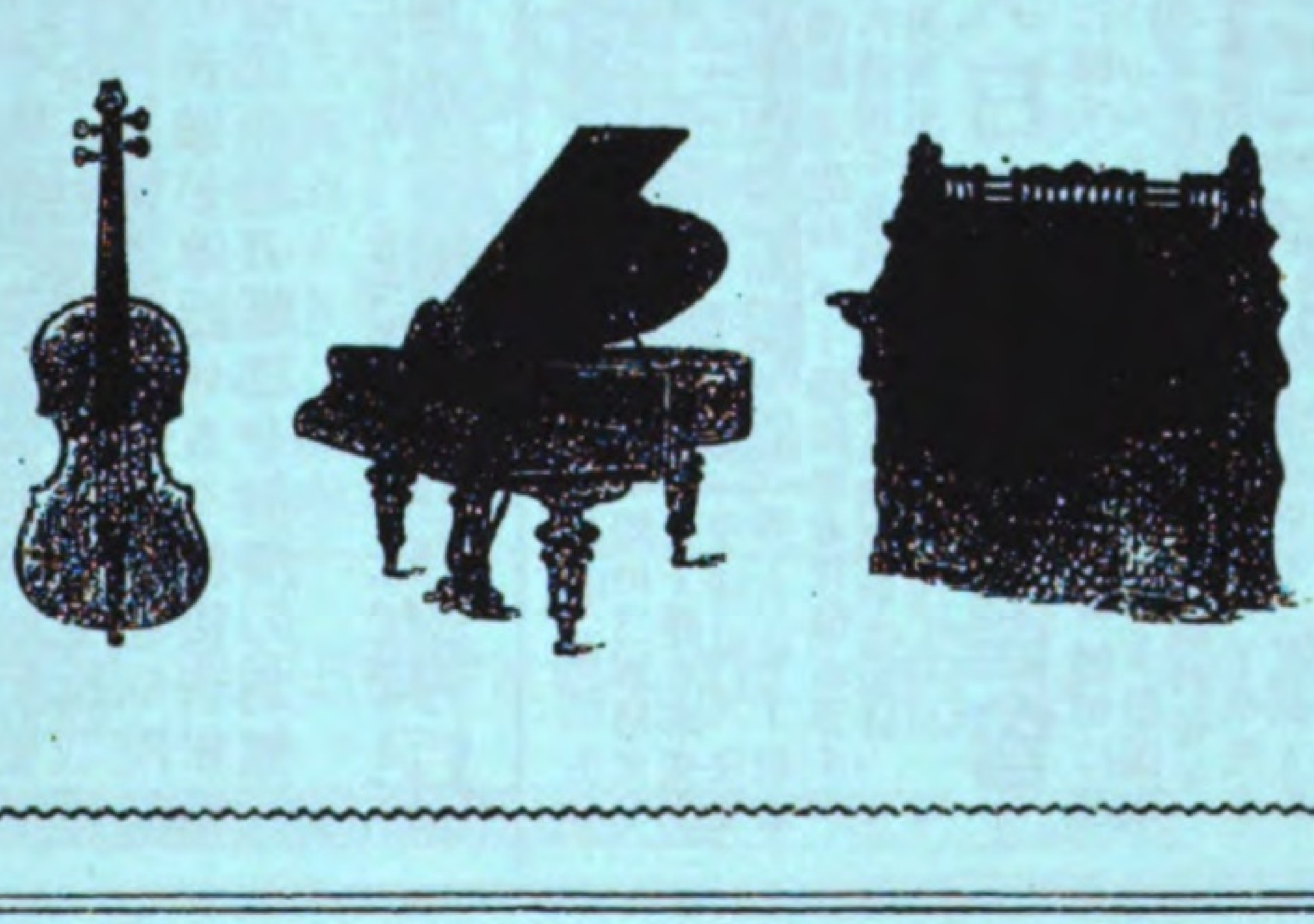
▲山葉オルガン（金拾八圓ヨリ金參百五拾圓迄）

壹等賞牌受領

▲山葉ピアノ（金參百參拾圓ヨリ金壹千參百圓迄）

壹等賞牌受領

▲鈴木ヴァイオリン（金貳圓ヨリ金百廿圓迄 弓、箱其他附屬品各種）



東京市京橋區竹川町十三番地

山葉風琴、山葉洋琴、鈴木ヴァイオリン 合資會社

西洋樂器、和洋音樂書大販賣所

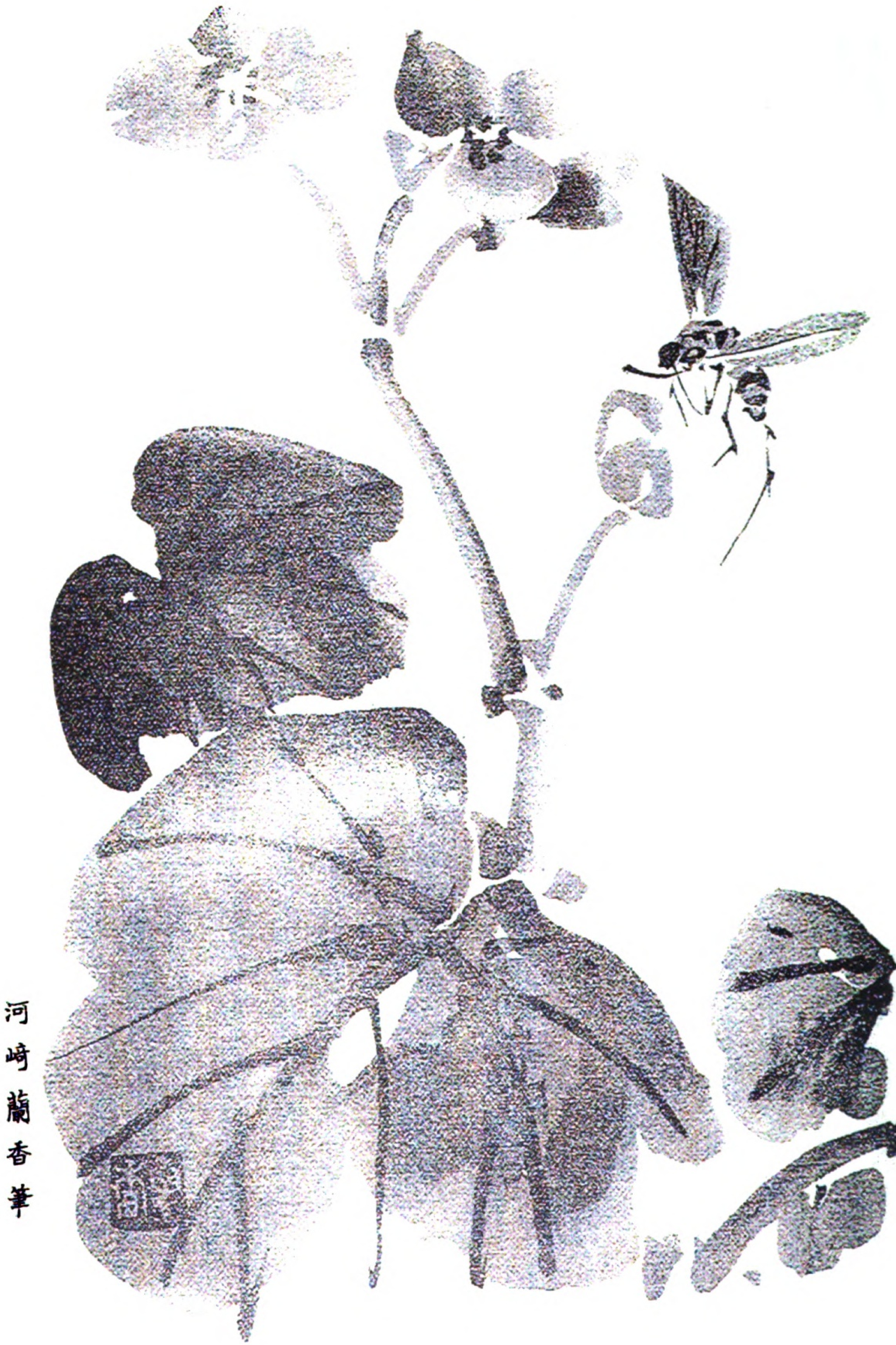
共益商社樂器店

電話新橋五二九、電信略號キヨ

振替貯金口座 千五百八十番

（はの四）

秋海棠



良夜



一條成美筆

文學博士木村正辭先生
東宮侍講本居豐穎先生　監修
文學博士井上頼圀先生

文學博士上田萬年先生
文學博士萩野由之先生　總序
文學博士木村正辭先生

文學博士松本愛重先生
其他　諸大家　解題
畫伯中村不折先生裝禎意匠

珍本秘本豫約出版

國文註釋全書

●本全書は夙に學者の珍重する所の國文註釋書中にて容易に手に入ること能はざる珍本秘本の精華を普く網羅せしもの也故に苟も國文の精髓を味はんと欲するものは先づ必ず本書に據らざるべからず幸に御講讀を翼ふ

◀▶洋裝美本　全部貳拾册
紙數約　壹萬八千頁
菊版
▲定價金六拾圓也▼

本書掲出書目、解題、體裁見本及び豫約法は見本册子を看よ

掲出書目

●平家物語抄●同考證●平[illegible]器議●五武器談●太平記抄●同年表●同音義●同賢愚抄●同系圖●源平盛衰記問答●同問答抄●河海抄●花鳥餘情●源氏年立●紫女七論●萬葉集抄●詞林采葉抄●和漢[illegible]抄●[illegible]流抄●源注拾遺●源氏玉椿●枕草紙春曙抄●同存疑●世諺問答考證●岷江入楚●徒然草野槌●[illegible]新說●[illegible]衣下紐●方丈記[illegible]●同流水抄●古今餘材抄●古今顯昭註●新古今擬抄●尾張の家苞●[illegible]られぬ水●源氏[illegible]●源氏官職故實秘抄●源氏外傳●榮花物語抄●同[illegible]考●榮花物語問答●増鏡問答●大鏡短觀抄●同[illegible]評●錄●蜻蛉日記解環●土佐日記考證●紫式部日記解●十六夜日記殘月抄●大井河行幸和歌考證●伊勢物語集註●同新考●勢語臆斷●勢[illegible]●圖說●多武峯少將物語●唐物語提要●四十二物語考證●大和物語[illegible]抄●同錦繡抄●取かへばや物語考證●竹取物語抄●十訓抄考証●鳴門[illegible]考證●宇治拾遺私記●[illegible]物語[illegible]解●今昔物語[illegible]●宇津保物語玉琴●同玉松●阿抄●神樂歌辨●催馬樂註秘抄●梁塵後抄●謠曲古抄●謠曲拾葉抄●鈴木重胤祝詞講義●[illegible]二等珍本約壹百種八百卷

豫約法

▲申込期限は本年十月三十日限り▲配本第一册本年十二月

豫約價(1)一時拂金貳拾八圓(2)三回拂金參拾圓也(3)每月拂金參拾貳圓▲送本料實費を申受く

見本進呈

往復はがきにて申込あれ送呈す

▶業務大擴張紀念出版◀

大景品

壹萬部に對し第一等壹百圓（書籍券）五本を始め

金八千圓（書籍券）贈呈

詳細の景品目錄及方法等は見本册子を看よ

●發行元豫約申込所●

▶東京市神田區三崎町三丁目（電話本局二千二百〇二番）◀

帝國書院（振替貯金口座東四三一一番）

THE ALLENBURYS' FOODS.

古來未曾有の乳いらず!!!

アレンバリー小兒滋養食

人乳ナクシテ小兒ヲ養育センニハ母乳ノ成分ト同一ニ配合セル食物ヲ撰フヲ肝要トス小兒ノ消化力ト營養ノ需要ハ出生ノ時ヨリ生長ニ伴ヒ漸次增進スル故此理ニ適合セサル食物ハ其發育ヲ妨ゲ又一生虛弱ノ者トナス恐レアリ愛兒養育ノ責任者ハ大ニ顧慮スヘキ事ナリ

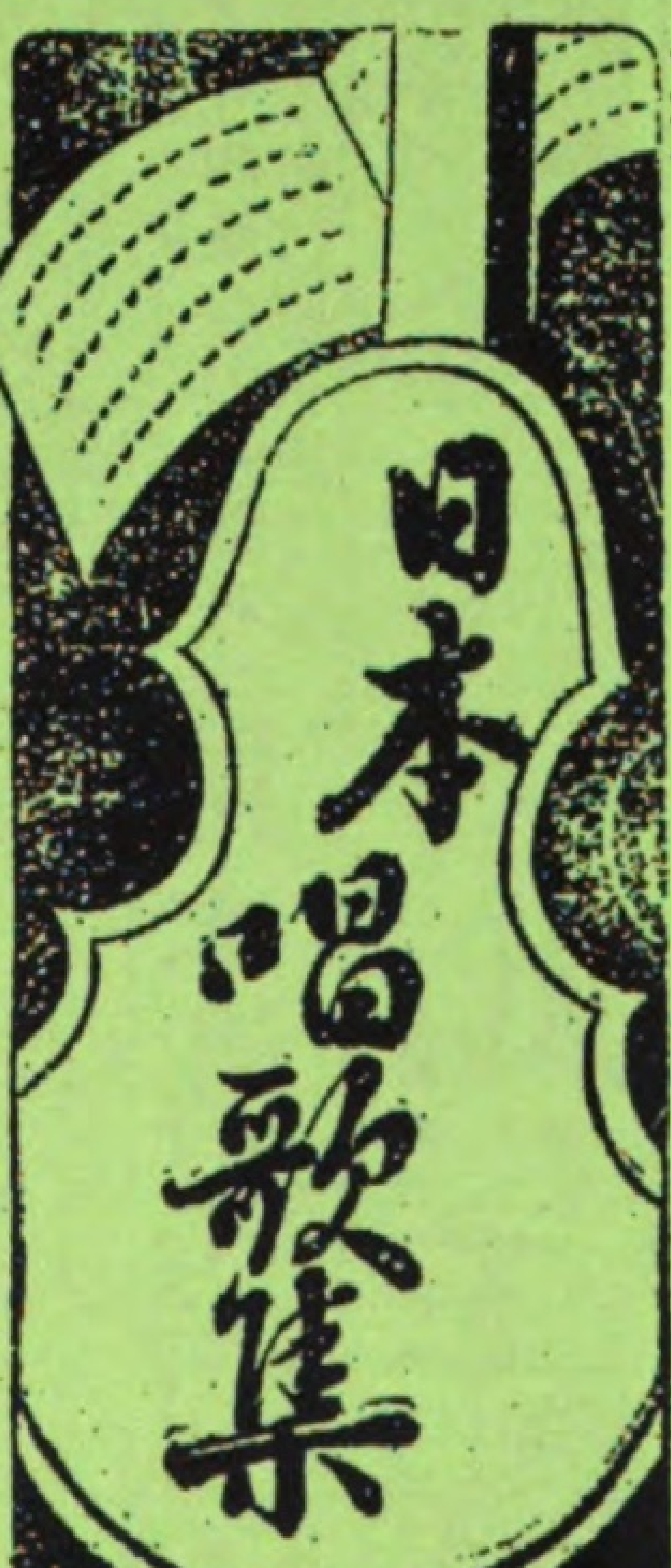


英國有名ノ「アレンバリ」小兒食ハ特ニ此點ニ注意シ**第一號**ハ生後三ケ月**第二號**ハ四ケ月ヨリ六ケ月迄ノ間ノ小兒ニ適スル樣成分ノ割合ヲ人乳ト同一ニナシ**第三號**ハ六ケ月後ノ兒用トシテ麥芽ヲ調和セル物ニテ從來發明ノ類似品中未ダ如斯精良ナル者ナシ無比ノ効能ハ御試用ノ上實驗アレ

東洋總代理店 **ストローム商會**
神戸磯上通一ノ四　横濱山下町十二番

特約一手販賣店 **田邊元三郎**
東京日本橋本町四丁目(電話本二八七三)

樂書刊行協會編 日本唱歌集 全一冊



洋裝總クロース紙數六拾頁
正價貳拾錢 郵稅貳錢

文部省檢定濟

◉目次概要◉

東京本町 **博文館**

女(にの三)


於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醬油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
ヒゲタ印醬油
宮内省御用達
千葉縣
田中玄蕃醸造
銚子港


造花及半製品
造
裝具材料卸小賣
造花裝飾用達
花
東京市
九段坂
吉住商店
營業目録は御申込次第御送付可仕候

女くにの四

わかくにの
こらにさとせる
ことのはの
なをみてゆつる
あそらしかのやまの

阪正臣筆

心静なれは身涼し
とは申しにくゝとも暑
さの凡ならず夏のさ寸
にくは觸さわらぬものなし
あつさしらう行の
こゝしまれ

婦人の滋養強壯品

精分を増し體内を温め血の巡環を善くす

美味にして婦人及小兒の滋養に適す



壹週分小罐 參拾錢　貳週分大罐 五拾錢

からだのつよくふる藥飴

東京 大木 細井 玉置 中田 山崎 吉田
大阪 高橋 丹平 谷 會社
京都 田中 川杉
神戸 村上 西村 中田 三浦

各地有名藥舗にあり無き時は本舗へ注文を乞ふ

病氣見舞は此飴に限る

肺病全快

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發見に付志願に付明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井　川名助次郎

醫學博士 松本先生指導　醫學士 佐藤先生閲　天眞堂醫院長 吉雄齊著

梅毒痳病療法

世間幾多の梅毒痳病患者よ一讀再生の効を全すべし若ふ言を疑はゞ此讀め、希ふ

望者は送料二錢切手封入申込次第社會の爲無代進上す

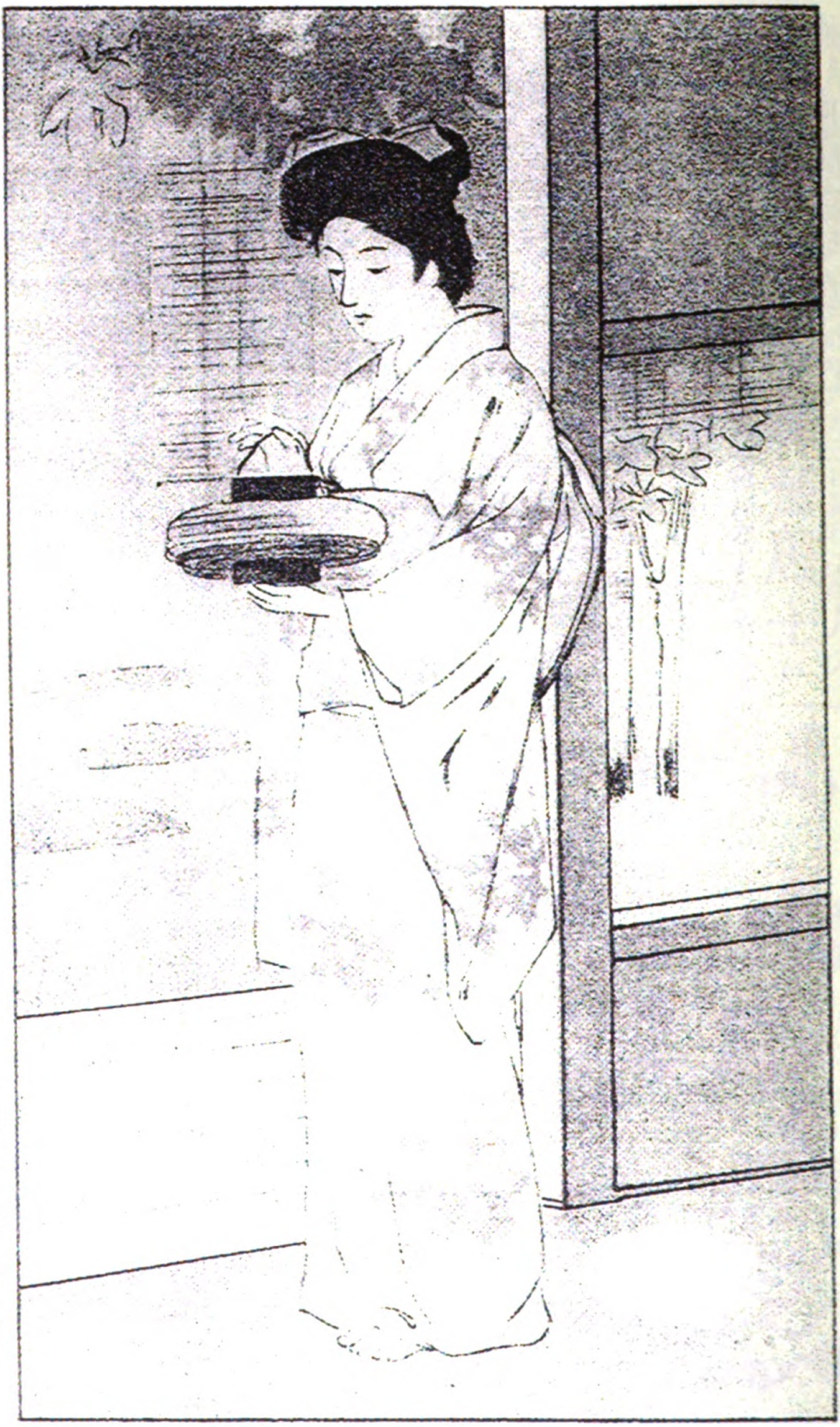
東京市芝區愛宕町二丁目　弘濟藥院

參(其の三)


THE GEM
衛生家必携
懷中良藥
ゼム
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用に終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の害を輕減にし心神を爽快にし疲勞を減し息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を増進し消化を助くゝ故にゼムは衛生を重んずる上の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾病食當り水傷りを治して神効あり舟車の弊を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入十錢　四百卅粒入五十錢　容器入ゼム
百六十粒入廿錢　九百粒入一圓二十錢
日本一手發賣　東京馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎
支舖　大阪高麗橋二丁目　山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

(其の四)

夕すゞみ



宮川安信筆

婦人世界第六號（昨年十六月三日發行）婦人の日常生活中「十五」の條に**弦齋居士**が（髮の油は何を用ゆべきか）の題目の下に其の効能を確認せられし**賛辭**あり參照あれ

純粹椿

三宅油



●近來僞物販賣する商店あり御買求の節は三婦人の商標に御注意を乞ふ（◎升賣は本舖のみに御座候）

定價

改良大瓶一壜金八拾五錢　小）拾二錢（滿韓）卅五錢

中瓶一壜金四拾五錢　包（內地）拾二錢（臺灣）卅五錢

小瓶一壜金貳拾五錢　料（八錢）三拾錢

●爲替は東京蛎売町郵便局宛郵劵代用壹割増

本舖　東京市日本橋區人形町通り水天宮際　間宮三宅堂

（電話浪花六二二〇番）

◎其外みやけ香油、みやけおしろいみやけ油製すき油發賣仕候

創業十年

●品質精撰●

●出荷迅速●

造花材料

卸小賣

三國屋

東京市淺草區駒形町十四

最近受驗界

附 明治四十年度 各官立學校 入學試驗問題集

正價金貳拾錢　郵稅貳錢

受驗は學生諸君に取りての一種の死活問題也。而してこの難關を首尾よく撃破せんには勉強も大事なり膽力も亦必要なれど受驗界一般の狀態、並びに其背後に伏在せる暗潮に通して此等の實際智識を得ると、これを最要の事業とす。且つや、學校に依りては、それ〲特殊の受驗方法あり技術もあるなり。即ち「最近受驗界」に當代受驗者の必須科目を網羅して彼等に學問以外の一大便宜を與ふるものとす。

◎中學世界定期増刊（九月廿日發行）



◎口繪水彩畫（二頁大）一葉◎

◎繪葉書一葉　寫眞版十數葉◎

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

東洋

婦人畫報

四十年九月一日發行

定價廿五錢
郵税一錢半

九月の卷

畫報

▲水邊の家（彩色石版畫）藻谷國四郎氏筆
▲皇孫殿下の御遊戯
▲山階宮家の御繁榮（五王殿下最近の御寫眞）
▲三浦醫學博士の家庭と應接間
▲前田家の養鷄（鷄舍中の夫人と令妹令孃）
▲令孃鑑（一）（琴とバイオリンの秀才）
▲令孃鑑（二）（閨秀書家と音樂家）
▲妃殿下諭旨を賜ふ（愛國婦人會神奈川支部に於て）
▲知事官邸前に於ける閑院宮妃殿下
▲女子大學生の禮法と厨房
▲高師家事講習會員と宮川女史教授の模樣
▲シンガーミシン女學院教室と女子學院卒業生
▲令孃の割烹と龜井まき子女史の厨房
▲大隈伯の臺所
▲令孃鑑（三）
▲令孃の裁縫と復習
▲下村房次郎氏の家庭
▲將校婦人會靜岡支部發會式
▲東洋婦人會清國教員養成所卒業生
▲榊原伯爵培養朝顔の珍種
▲婦人の半棒仕合ひ
▲柔道を學べる外國婦人と愛兒
▲京都淑女高等女學校の夏期講習會員

讀物

●前田家の養鷄
●山草の趣味　野口幽香子
●米國人の厨房　S Y 生
●女中難　枝 風
●美しかりし時代の三輪田眞佐子
●滯英中の雜感　澤田撫松
●余が家庭教育　宮川壽美子
●歐米の婚禮　秋元興朝
●西洋奇話　林民子
●伯母の家　K M 生
●思ひ出草　佐久間よし子
●初秋風　遠山稻子
●小說仲たがひ　竹柏會同人
●名家談片　高中菊代
●流行
●藥報

畫報發行所
東京神田小川町四十一番地
東京社

女（への三）

天賞堂博覽會出品優賞受領謹告

本堂ハ東京勸業博覽會ノ開設セラル、ヤ首トシテ其擧ヲ賛シ特ニ貳拾餘萬圓ヲ支出シテ美術館、工業館、外國製品館等ノ數ケ所ニ渉リ多數ノ出品ヲ爲セリ其結果今回斯業中第一ノ優賞ヲ授與セラレ畏クモ兩陛下並ニ皇太子殿下ヨリモ屢々御買上ノ恩命ヲ蒙レリ是レ實ニ本邦博覽會創設以來曾テ比類ナキノ榮譽ニシテ寔ニ愛顧紳董諸君ノ賜ナリ本堂益々進ミテ一層ノ擴張ヲ期セントス冀クハ倍舊ノ寵眷ヲ垂レ給ハランコトヲ

●名譽賞牌……青華日本晴花瓶……(美術館出品)
●名譽賞牌……貴金屬製品各種……(工業館出品)
●壹等賞牌……銀製紅蘿小禽花盛器……(美術館出品)
●壹等賞牌……木彫郭子儀置物……(美術館出品)
●壹等賞牌……木彫群羊額面……(美術館出品)
●壹等賞牌……闔家全慶彫刻花瓶……(美術館出品)
●壹等賞牌……裝身具各種……(工業館出品)

此他二等賞牌以下三十餘個

東京市京橋區尾張町貳丁目
天賞堂主 江澤金五郎

女(への四)

西洋高貴夫人の理髪型



獨逸皇太子妃殿下（高廂）



獨逸第二皇太妃殿下（丸廂）



白耳義皇后陛下（撫で髮）

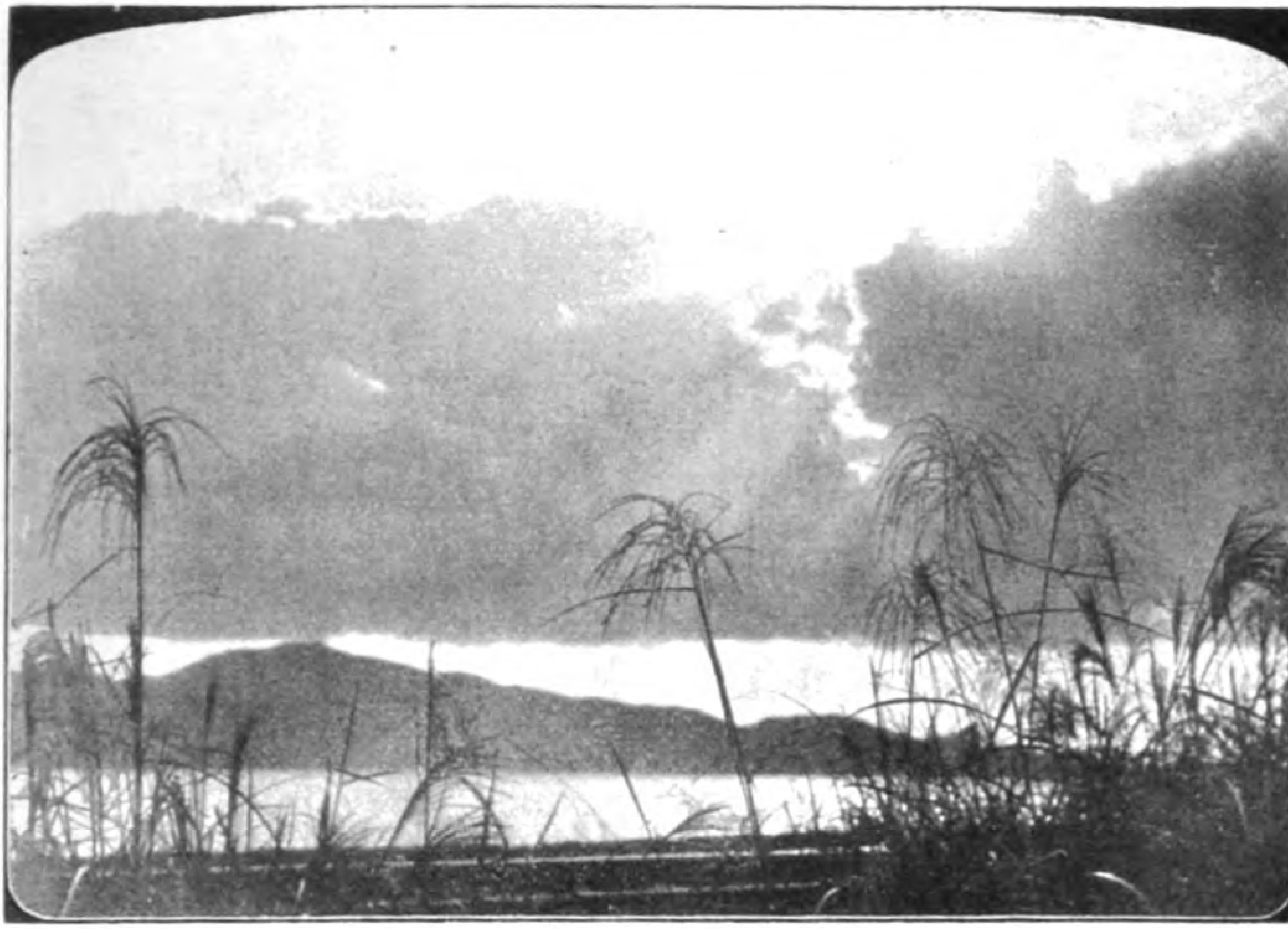


英國皇太子妃殿下（カメリ十巻）



ルーズベルト夫人（[illegible]廂）

秋の雲





秋の月

小兒新藥童丸生る

小兒科專門醫學博士

瀨川昌耆先生方劑



●童丸は健童強兒の源泉なり

●童丸は二十世紀の育兒法に適す

●童丸は幼兒の生命也第二の慈母也

効能

●小兒失氣 ●吐乳病 ●五疳驚風

●腸加答兒 ●小兒食欲不進又は飲過

●小兒吐氣 ●腸痛中毒

●小兒虫氣一切又は熱さましによし

定價

拾粒入 金五錢	八拾粒入 金參拾錢
廿二粒入 金拾錢	百四十粒入 金五拾錢
五拾粒入 金二拾錢	三百粒入 金壹圓

●童丸は有名藥店にあり若無くば發賣元へ御注文あれ

發賣元

東京市日本橋區通四丁目七
振替貯金口座第一六八〇番
津村順天堂

大阪市堺筋大寶寺町南入
振替貯金口座第三一六二番
津村順天堂

(その一)

善良なる主婦となるべき女學生にして未だ本誌を讀まざる人ありや

體裁優美

婦人世界

記事親切

九月十號 一日發行 毎月一回 二卷 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊郵税共九十錢 十二冊同一圓七十五錢

△本號には誰にも出來る新案の大懸賞募集あり

◎辨當料理談(弦齋夫人)

◎私の感心せる奥樣(山脇房子)

◎我等は如何なる妻を望むか(在米日本人會)

◎娘を嫁にやりし實驗談(原いれ子)

◎女中より成功せし呉服店の主婦

◎私の感心せる女學生(上野女學校長)

△何人も聽かんと欲して聽く能はず言はんと欲して言ふ能はざりし大教訓

◎男女戀愛論……村井弦齋

△娘も母も男子も亦此大教訓を讀まざれば百年の悔あるべし

◎小兒に果物を與ふる注意(加藤醫學博士)

◎強情な子供の癖を矯正せし實驗

◎不姙症全治者の實例(榊醫學博士)

◎大困難と戰ひたる棚橋絢子刀自

◎男の子は如何にして產まるるか(伊庭學士)

◎少女欄 小説より面白く倫理より有益也

△口繪 ◎侯爵西鄉寅太郎氏令夫人◎名流令孃寫眞◎櫻井中尉新婚寫眞◎朝の女學生◎きぬた(花蹊)◎秋の花(安信)◎蟲(珠子)其他數葉

(その三)

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社 (郵便振替貯金口座六參貳番) 賣捌 全國書店

三週年紀念の東洋婦人會



皐月會第一回試演會



同會は天野北村兩女史の創立せる音樂の家塾にして其第一回試演會を神田青年會館にて擧行せり、前列右より菊地初子、西宮愛子、千澤長子、菊池きぬ子、末弘すき、三大芝孃、大塚政子、太田みち子、桑原とよ子、伊達孃、第二列野村壽子、後藤靜子、天野愛子、北村初子、阿部長子、飯盛生子、目賀田竹代、第三列泉かはる、川端こん子、三宅せい子

月刊美術文藝雜誌

ハガキ文學

九月一日發行●第四卷第十號●一冊十錢郵税不要 八冊前金七十五錢

▲內容概目▼

●秋聲の賦 一記者
●偉大なる精神 山路愛山
●小說『手』 水野葉舟
●打塊吟 大須賀乙字
●予の中學生活 腕白入道
●懷中劍
●心中江戶三界
●小說『旅』 鈴木秋風
●大發明家の妻 風信草
●多摩川寫生行 於歌野生
●應募諸國珍話
●奇談 棒下生
●秋風來 鵲秋生
●文藝界消息 XYZ
●俳諧土用干 大島寶水
●地方新聞記者 氷骨散人
●清朝の詩文 形影山人
●小說『漁師』 相馬御風
●新英文和譯 僞嫣生

●普通文 久保天隨選
●新體詩 兒玉花外選
●ハカキ文 橋本春郊選
●和歌 窪田空穗選
●俳句 內藤鳴雪選
●新川柳 窪田而笑子選
●一口噺 編輯部選
●懸賞募集スケッチ、漫畫、繪葉書圖案
●表紙 中澤弘光
●長夜(エハカキ)
●俗謠十二題(九) 佐藤生巢

其他口繪寫眞數葉 太田三郎 木版挿繪數面 和田三造、岡野榮、太田三郎、佐藤生巢 記事豐富、趣味津々、青年文藝好誌友

發行所 東京小石川 日本葉書會●賣捌全國各書林

▲趣味▲横溢

最新刊繪葉書

送料一組に付二錢

三宅克己畫 石版極彩色刷
水彩 明媚十二景
上下各六枚組 ●定價各廿錢

大下藤次郎畫 石版極彩色刷
水彩繪はがき 山紫水明
六枚組 ●定價廿五錢

柴田常吉寫 コロタイプ
繪はがき 富士三景
三枚組 ●定價六錢

和田三造畫 石版彩色刷
ペン畫繪葉書
六枚組 ●定價十八錢

竹久夢二畫 石版彩色刷
戀日記
六枚組 ●定價十八錢

●佐藤生巢案 臺紙付二十枚綴
新案實用繪葉書
●定價十二錢

發行所 東京小石川久堅町 日本葉書會
發賣元 東京日本橋本町三丁目 博文館

女(ちの二)

女(ちの三)

女(ちの四)

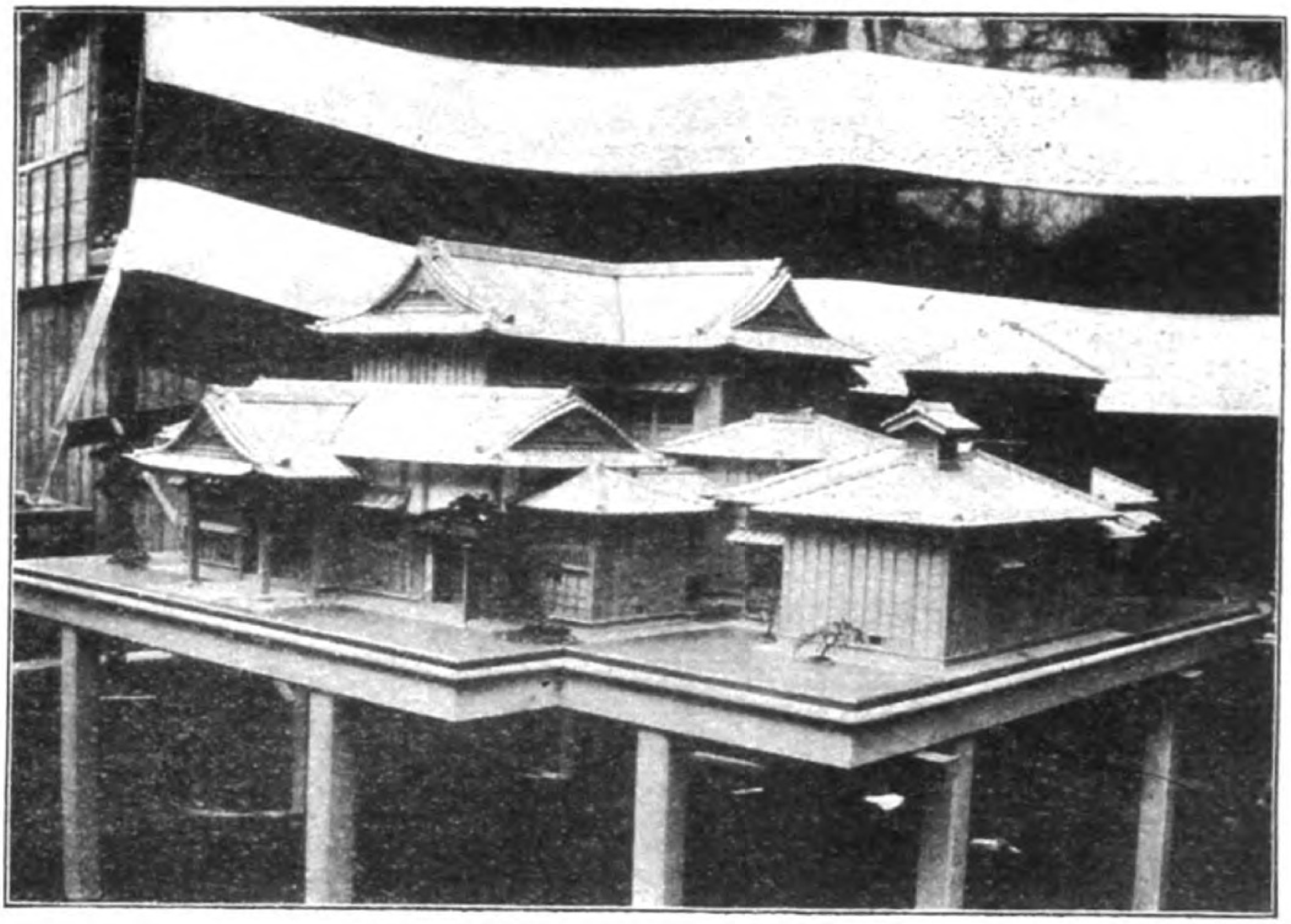
西洋婦人の理髪型

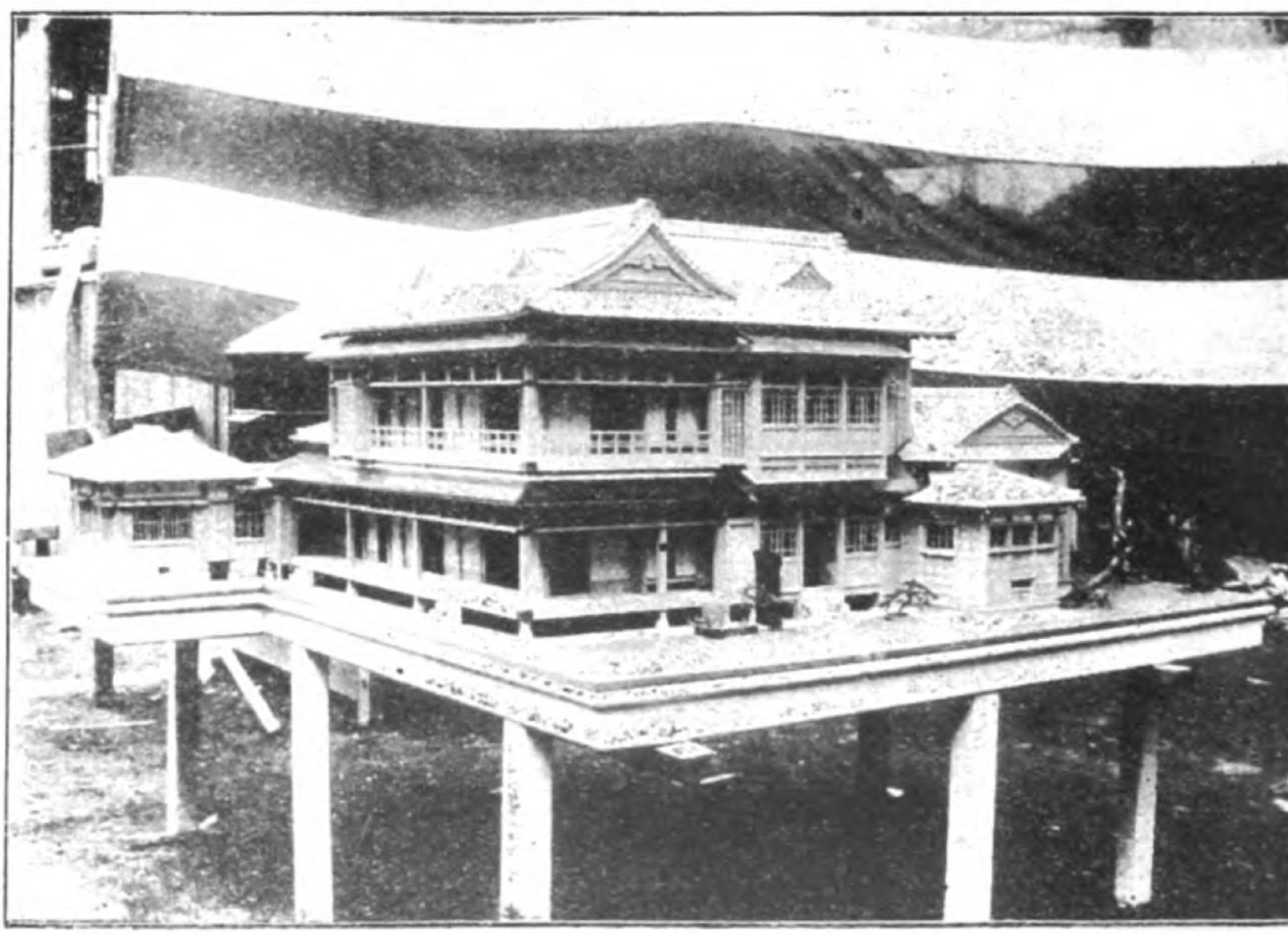


（１）巴里の婦人理髪師デフオセー（２）第一カメリヤ巻（３）第二リウズ巻即ち廂髪の甲種（４）第一カメリヤ巻（５）第二リウズ巻の乙種（６）第四髷結び（７）第四髷結び（８）第三分け髪の甲種

（記事參照）

衛生的家屋の模型





大日本私立衛生會より萬國衛生及び「デモグラフヰー」會議へ出品したる日本家屋の模型なり(記事參照)





(りの一)

●九月號は大光彩を放つて出でんとす●



◉每月一回八日發行　一册正價二十錢郵稅二錢

◉寫眞畫報を見ざるは社會以外の仙人のみ何人にも面白き好雜誌！

◎三色版の艶麗は天下無比なり。

◎鮮明新奇なる寫眞版数十面。全世界の活劇を洩らさず、時事の眞を傳へ、猶ほ第一流の名畫あり、演藝あり、美人あり、絶景あり、諷刺あり、實に珍中の珍、奇中の奇たり

◎彩色石版畫は現代大家の傑作を收む。

◎記事は常に奇拔と愉快とを主とし、來る九月號には何人も實行し得る百歳長壽術を初とし、旅行奇談あり、冒險小說あり、社會照魔鏡あり、滑稽珍談あり、當世穴探しあり、演藝評判記あり、其面白きこと限りなし、

◎坪谷水哉氏世界周遊の途に上り、爾後每編最新最妙の通信を寄せらるべし

◎每編奇拔の大懸賞問題あり、來號の問題は如何？

◉八月號發行即日賣切となる。御購讀は急を要す！

發行元　東京日本橋區本町　博文館

女(りの二)

最上醤油

香

キハウ印

醸造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電話略號ハク又キハウ

東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

男女兩用毛髮用煉香油

ビューテーオイル

大瓶四十五錢

送料十錢



近頃化粧と云ふ事が進歩したのにも拘はらず毛髮油は更に改良が出來ないので舶來の油を用ゆる事が盛んになつたが舶來の香油は西洋人に適當する樣に出來て居るので永く使ふ中には毛が赤くなるとか又は折れる樣になる事が有るので種々研究して日本人の毛髮に適當なる椿油に含める毛髮の發育と光澤を助くる主成分を探り之れに高尚なる芳香と油の通油性を去るべき藥品とを配合して日本人男女兩用の練香油を製出し之れをビューテーオイルと名付けて發賣せり

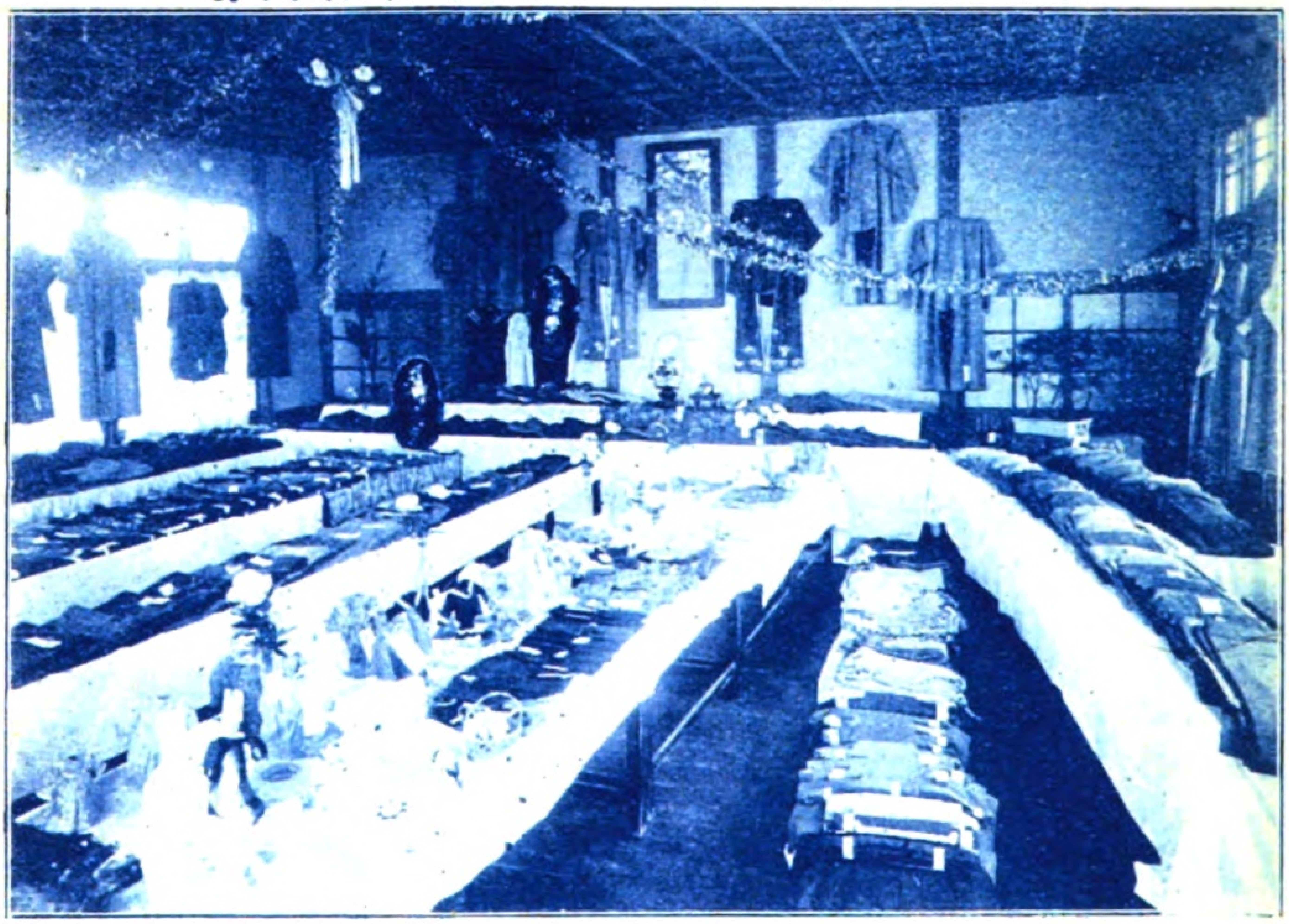
發賣元

東京日本橋區蠣殼町水天宮前
井筒油本舗 井筒屋香油店
象印齒磨本舗 安藤井筒堂

見本御入用の方は女學世界愛讀者に限り郵券四十五錢を御送附になれば特に送料を要せずして一個御送り可申候

女(りの四)

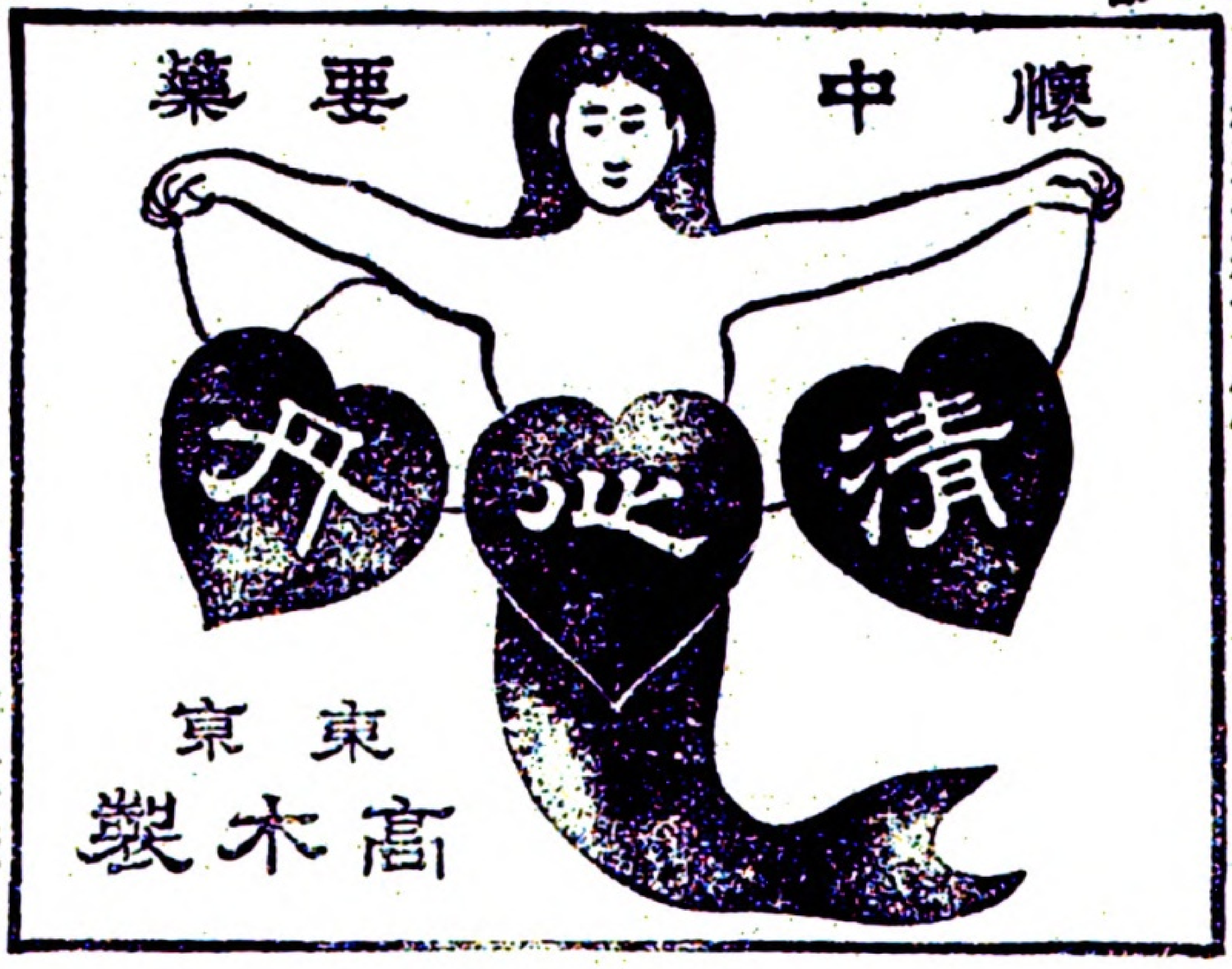
仙臺高等女學校生徒製作品陳列場





同上卒業生

近來同名類似之品數多相見へ候に付御要求の節は人魚の商標と高木與兵衛の名義に御注意被下度候



定價

箱入 金一圓
同 金五十錢
同(ニッケルカン入) 金三十錢
同 金十五錢

紙包 金二十錢
同 金十錢
同 金五錢

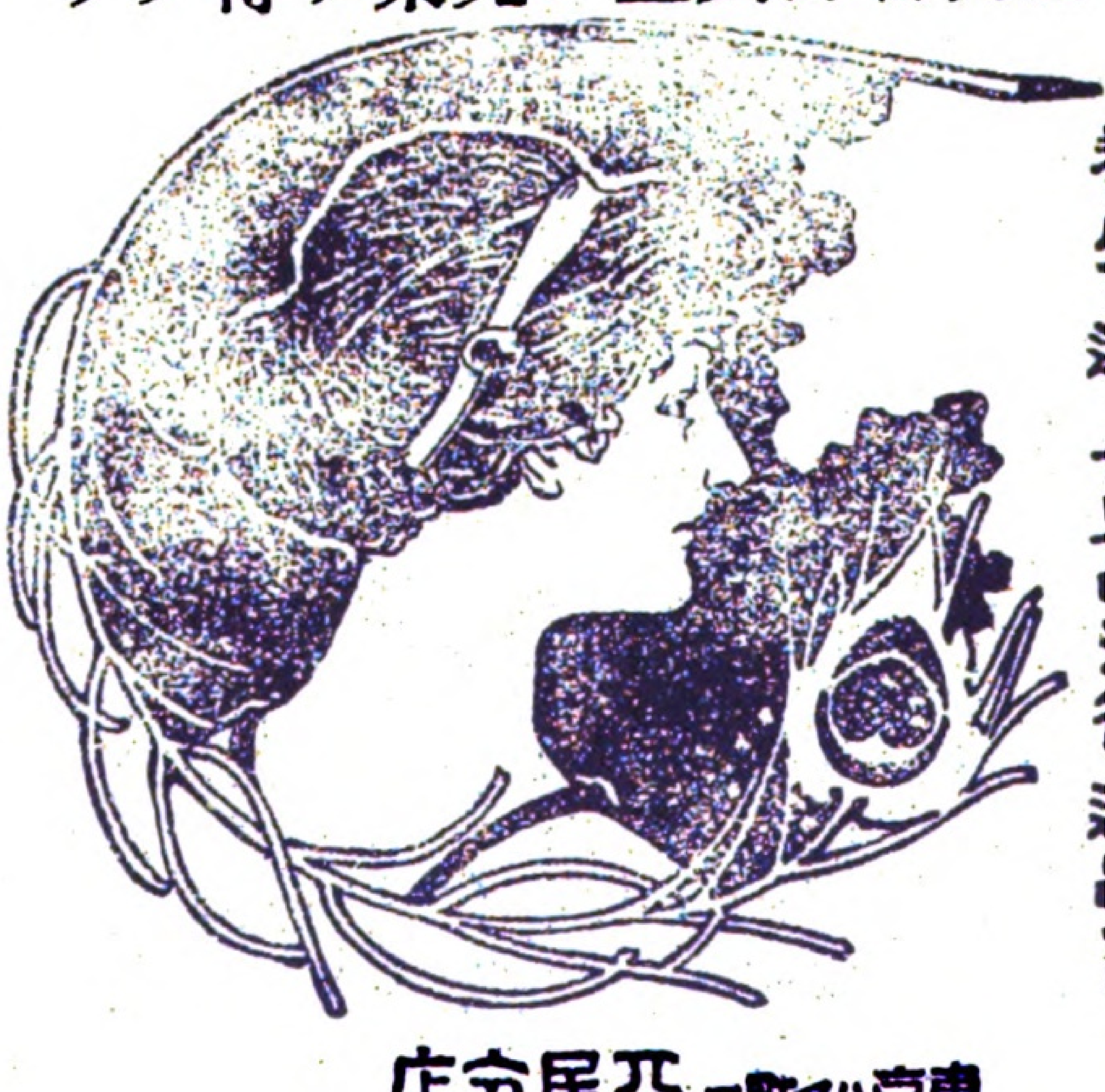
東京博覧會賞牌受領

パール

四季ノ化粧及ビ毛髪ノ養生ニ適シ世界的流行逸品ナリ

毛髪料
美顔料
二種

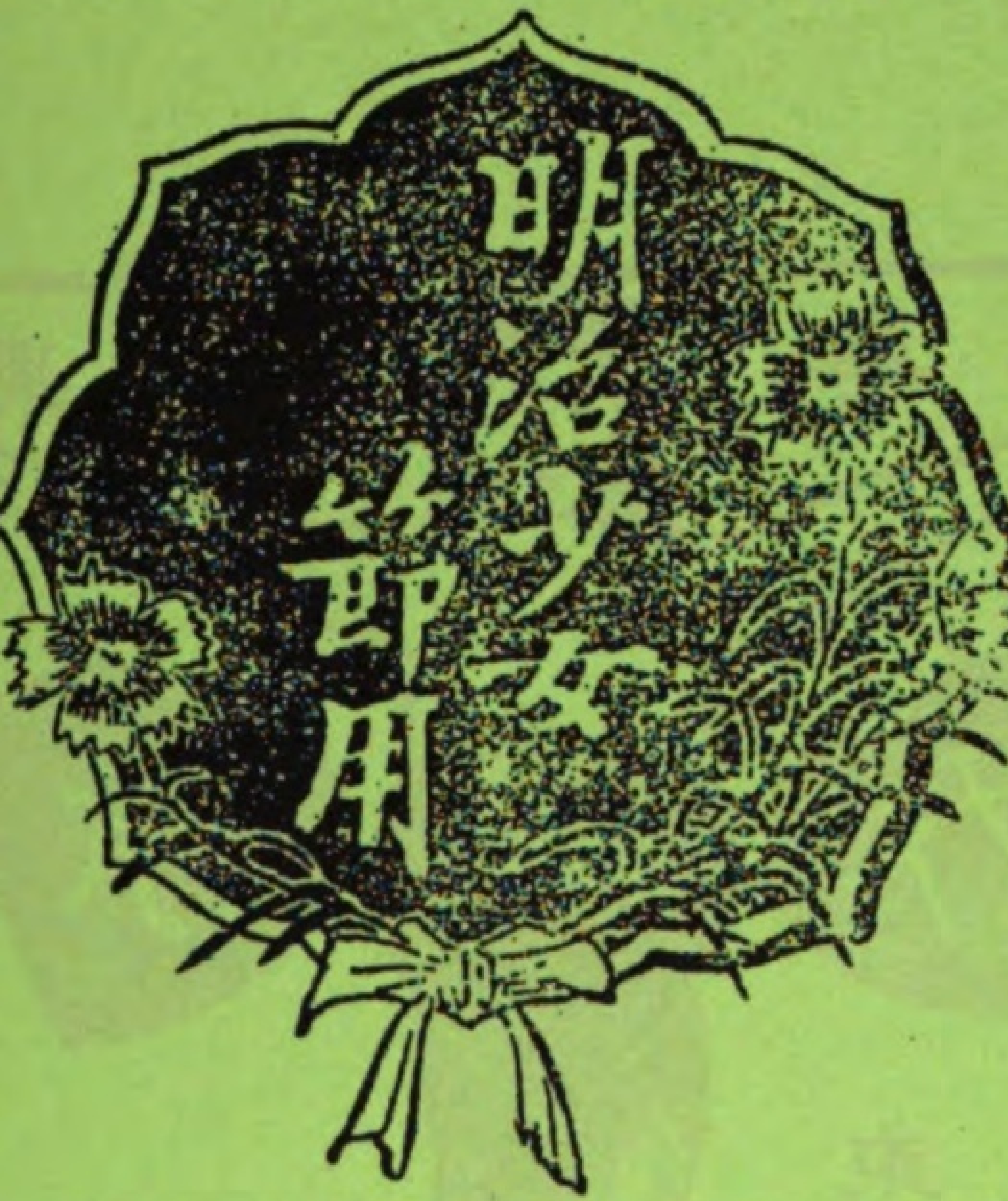
宮内省御買上ノ光榮ヲ得タリ



東京ハマ町一 平民商店

女(ぬの一)

侯爵夫人 鍋島榮子題詠
學習院女子部長 下田歌子題詠
高等女學校長 山脇房子序文
修學 巖谷小波 沼田笠峰
竹貫直人 木村小舟 合編



既刊

全一册三六版特製
金模様クロース表紙
紙數約六百頁
口繪十枚挿畫四百餘個

定價金八拾五錢 郵税八錢

(其の二)

少女諸君、諸君がお待ち兼の明治少女節用は今度いよ〳〵美装して誕生致しました、御覧なさい先づ口繪には、東宮妃殿下、各内親王殿下の御寫影及び、本邦女子教育大家の肖像を掲げ、極彩色石版には、日本國旗章、外國旗章、女子の勳章、明治時代頭髮の種類、日本女子服裝變遷圖、女子の用具等、日常必須の材を撰み、又本文には少女訓、日本歴史、外國歴史 日本地理、外國地理、動植鑛物、物理化學、天文地文、算術英語、音樂國文、茶の湯挿花、裁縫編物、衛生料理、刺繡、禮法、體操遊戯、農業等苟くも日本女子の心得ふべき學科は一も洩さず、加ふるに卷頭には少女立志談、少女お伽噺等を掲げて、一層其の趣味を深からしめ、別科には考物、笑話、福引、紋形、手毬歌、吉凶占ひ、秘傳、採集法、小鳥、金魚の飼養、少女年中行事等約三十餘題趣味豐富なるものを集め、記述面白く筆法平易、挿畫美に、印刷製本又善美を盡し、少女諸君の無二の玉手函としました、諸君は宜しく一日も速かに此書を手にして、一は學業の枝折とし、一は娯樂の伴侶とし給はんことを希望致します。

博文館本

女(5の三)



最新藥ハロールは歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞讃好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と

毛はへ

老錬なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する醫着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する売等丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮の生へぎは、まゆげ、ひげ陰毛等の薄を濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿は頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵劵代用一割增の事

取次所ナキ地方ハ直接本舖へ注文アレ

毛はへ藥〜〜東京市本鄕六丁目赤門前 瓜生藥局

取次所〜〜名古屋市鐵砲町 谷田藥局

らい病

醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール 一ヶ月分 貳圓

複方ザノサール 一ヶ月分 參圓

此のらい病藥は數種の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむることは難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

三河國碧海郡刈谷町 益世館藥局主

本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

函館大石裁縫女學校卒業生



大英國皇室御用品



世界貴婦人社會ノ公認セシ美艶劑

スミス氏洗粉

●當分ノ内壹個十五錢

近世紀中ニテ尤モ賢明ニシテ且ツ美麗ニアラセラレシ故ヴィクトリヤ女皇陛下ニ美顔料トシテ三十年間ノ御愛用ヲ蒙リシ本品ハ如何ニ歐米貴婦人社會ニ歡迎セラレツヽアルカ吾同盟國ノ貴女紳士一度本品ノ使用ニ依リテ生スル美麗ノ効果ヲ驚ク勿レ

●直輸入元へはがきニテ申込メバ見本無代進呈ス

女（ろの一）

製造所倫敦市タウン街 エージースミスソン商社

直輸入元 大阪松屋町通高麗橋南 古市商會
發賣元 東京日本橋區横山町 脇田盛貢堂
同 大阪南區大寶寺町西之町 脇田トイレツト商會

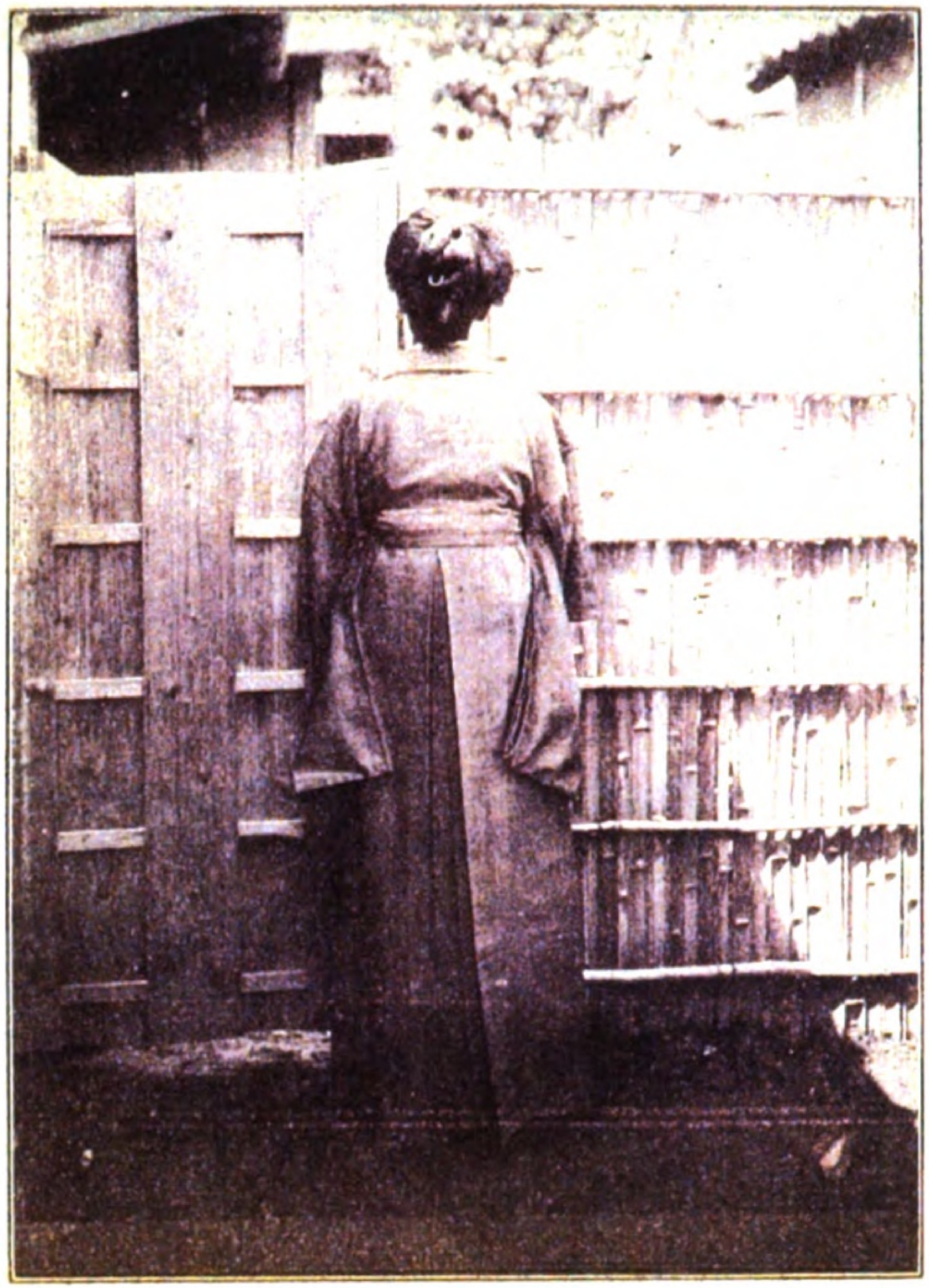
音樂生の夏季講習

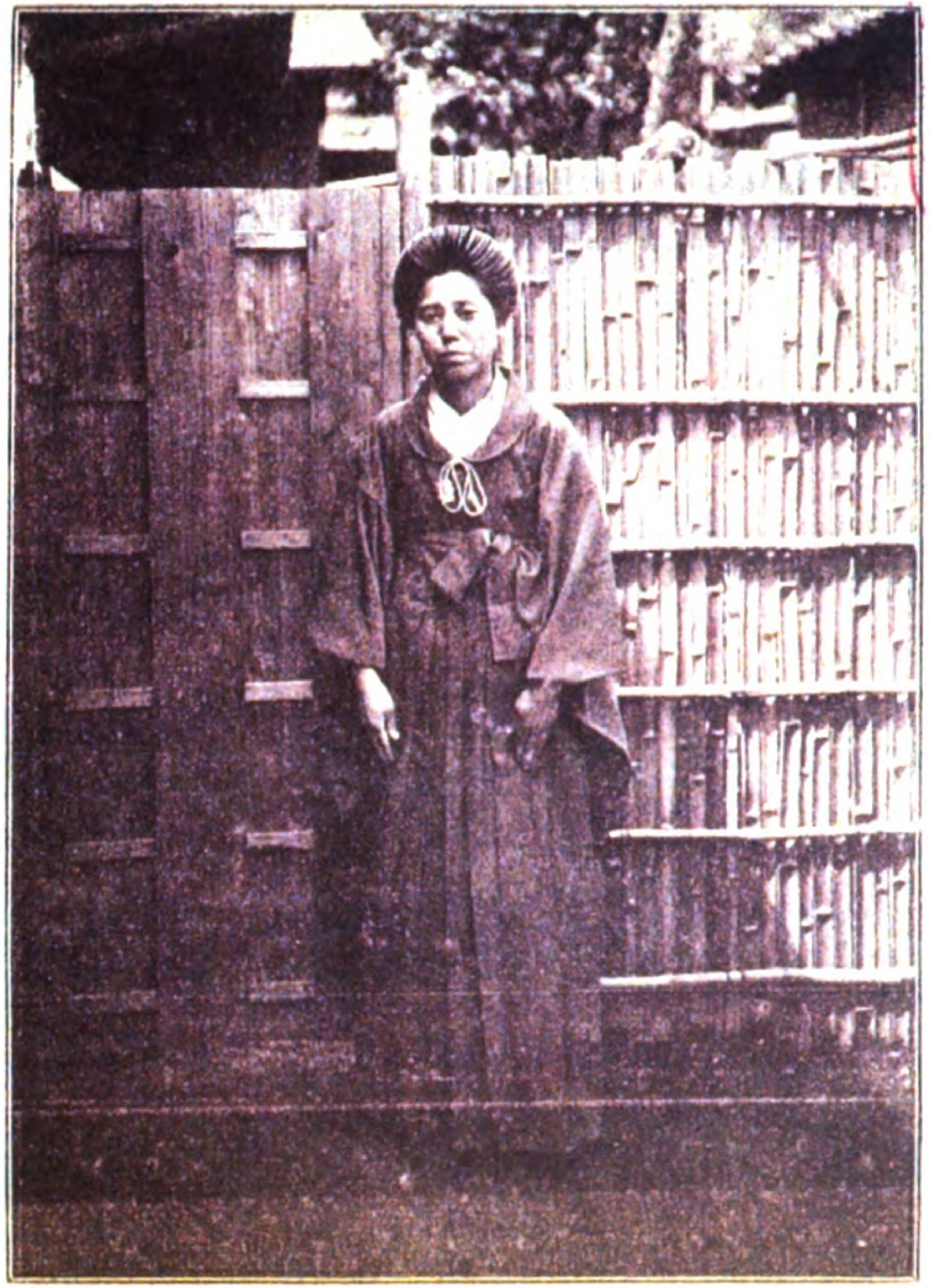


（東京女子音樂傳習所）

女（その一）

將校婦人會新案の改良服





（記事參照）

蔚月子撮影

（わの二）

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五拾冊——毎月一回發行——第一巻五月創刊す

和裝頗美本 ◉紙數三百頁 ◉石版彩色口繪一葉、挿畫十數個

▲定價一冊金四拾五錢——郵稅八錢

家庭整理の指導

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ことに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は、最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

發兌元 東京

婦女必讀の大全書發行

第一編 新家庭訓

三輪田高等女學校長
三輪田眞佐子女史著

第二編 四季料理

宮中臣民兩流料理師範
大日本割烹學會々長
石井泰次郎君著

●緒論●春の巻みの字盡料理○春の西洋料理●夏の巻蠶豆料理○鮎料理○南瓜料理○豆腐と煉みそ○茄子料理○鶏卵料理 ○神武天皇祭料理献立●秋の巻栗料理○近江八景料理○松茸料理○紅葉づくし料理●冬の巻天長節料理○この頃の料理○紀念戰事料理献立○新年重詰拵方●附錄一月節の取合せ○二月節の取合せ○三月節の取合せ○四月節の取合せ○五月節の取合せ○六月節の取合せ○七月節の取合せ○八月節の取合せ○九月節の取合せ○十月節の取合せ○十一月節の取合せ○十二月節の取合せ○料理の名品○料理の習學法○日本料理を誤解したる事○第一料理を心なしに云ふ人○第二料理教師を選む心得○第三家庭料理を習ふ時の心得

裁縫指南

女子高等師範學校教授
喜多見佐喜子女史著

和洋菓子製造法

東京治庖會講師
龜井まき子女史著

本町 博文館



女學世界

第七卷　第拾貳號

九月五日發行

秋

誰がいひ傳へけん、秋を興あるものに言はずして寂莫の代名詞に用ゐ來れる、いと怪しき限りなり、ゆくてに霜と木枯らしありて、颯々たる山おろしに散り行く紅葉ばのあはれを見るとはいへ夏のすがたをか緑の梢にとゞめて、籬の朝顔、朝毎に莟の數小さうなりゆけど、日ならずして、柿の實赤う栗は月のお前に頬笑むにあらずや、紫の葡萄房、香たかき松茸の膳に上るも秋なりけり。げにや朝日にきらめく露の玉、これぞ千金の寶玉にもたとふべきにあらずや。



遺傳の影響

（婦人の飲酒に就て）

安部磯雄

△婦人の誇り

女子には種々なる虚榮心があつて、或人は容貌を誇り、或人は衣服を誇り、或人は門閥、或人は兩親、或人は夫を誇るといふことがあるが、容貌や衣服を誇ることの如何につまらないかは多く論ずるに足らぬことで、夫を誇るといふことすら餘り感心すべきことではない、世には己れの人格と才學によりて立派なる夫を得たる女子もあるだらうが、一方には亦親の位地や財產の力によりて不相應に良き配偶者を得て居る女子も少くないから、己が夫を誇るといふのも餘り適當でない樣に思はれる。然らば女子が眞に誇りとすべきは何であるだらうか。余は慥に自分の子女であると思ふ。人が己れの兩親を誇ることに比すれば、其子女を誇ることは遙に多く理由のあることである。

△生前に於ける子女の敎育

善良にして才學ある小兒は決して偶然に出來るものではない、必ず兩親が丹精を凝らして敎育したる結果である。茲に余が敎育といふのは廣き意味に用いたのであつて、決して子女の生れたる後の敎育のみを指すのでなく、生前の敎育てふことをも含むのである。世

人の中には生後の教育のみを重んじて生前の教育といふことに多く注意せぬ人があるけれども、實際は生後の教育に優りて生前の教育は强大なる力を有するものである。家庭教育や小學教育は素より大切なるものには相違なきも、斯る教育は決して銅を變じて黃金となすことは出來ない。子女の性質は既に生れた時に定まつて居るので、これを磨いて光を添ゆることは出來るが、全く其性質を造り更ゆるといふことは困難である。若し生後の教育の力が三か四でありとすれば、兩親より遺傳したる性質の力は六か七である樣に思はれる。これは實際小兒を教育する人の常に實驗する所であらうと思ふ、單に身體の事を考へても分るではないか。虛弱なる身體には元氣も乏しく忍耐力も少ないから、斯の如き體質を受けたる人の意志は必ず薄弱である。亦耳とか鼻とかに故障のある人は甚しく知力の發達を妨げらるゝのであるから、兩親は絕へず子女の身體に注意する所がなくてはならぬ。兎に角身體の精神に及ぼす影響といふものは强大なものであるから、兩親が子女に强壯なる體質を遺傳すると否とは子女の幸、不幸に大關係あるではないか。若し教育といふものが子女の生れたる後に始まるものであらば兩親の責任は比較的輕いけれども、生前の教育が尙ほ一層大切であることが明白となれば、兩親は平常衞生の事に注意し、己が品行を愼むことを怠つてはならぬ。

吾人が衞生を守り品行を愼むといふのは單に自己の幸福の爲のみではなくて、子孫の幸福を謀る所以である。子孫の幸福は亦吾人の幸福となるのであるから、其影響の及ぶ所は決して狹小ではない。世には子孫の爲に多額の財產を遺さんと苦心して居る人が多いが、此財產に優りて大切なる善き體質と精神とを子孫に傳へんとする人が果して幾何あるだらうか。余は生前教育の一要件として飲酒と女子の關係に就き少しく陳べて見たい。

△飲酒の害毒

飲酒は久しく人類の習慣となつて居るので、誰もこれに對して奇異の感を生じないけれども、其弊害に至

りては決して梅毒に異なることはない。否これよりも一層甚しいかも知れぬ。何となれば梅毒の恐るべきことは何人も常に聞いて居るのであるから、上品なる人は其害を蒙ることも殆んどないのであるが、飲酒に至りては全く其趣を異にして居る。婚禮にも葬式にも、送迎會にも親睦會にも之を用ゆるのである。啻に中年老年の人々が此惡習に染むのみならず、多くの青年も亦其犧牲となつて居る。甚しきに至りては女子にして此惡習に染むものも少くない、殊に飲酒の弊を幇助する點に於ては女子も亦其責任を負はねばならぬと思ふ。

△遺傳の法則

瓜の蔓に茄子はならぬといふ諺は慥に兩親の性質が子女に遺傳することを認めて居るのであるが、世には往々遺傳法を無視して居る人も少くない。名家の子女に愚鈍なるものが生るれば世人は如何にもこれを不思議なることの如く思ひ、其兩親たる人も彼の牝雞が自分の孵化したる鶩の水中に飛込むを見て驚くが如く、『どうして自分等にコンナ子女が生れたのであらう』と怪むのであるが、これは果して遺傳の法則が破壞されて居るのであらうか。否々決して左樣ではない。想ふに兩親は酒慾とか色慾とかを節しなかつたが爲に終に不健全なる身體と思想とを其子女に遺したのではあるまいか。若し何等の妨害もなければ子女は必らず其兩親の性質を其儘に遺傳すべきである。或學者の說に依れば遺傳の法則は恰も物體が(何等の障害もなければ)一直線に動くが如く、兩親の性質を其子女に傳へ、子女は亦之を其子女に傳ふべき筈である。名家の子女に愚鈍なるものを生じたるは全く酒毒とか梅毒とかいふ障害物があつた爲めで其間に何等怪むべきことはないのである。

△鳶は鷹を生まず

以上陳べたることゝは全く反對で、無學文盲なる人の子女に才學操行並び秀でたるものを見ることがある。世人は驚いて、これは恰も鳶が鷹を生んだ樣なものだと評するけれども、これ亦決して遺傳の法則を破壞し

たるものではない。位地が卑いとか無學文盲であるといふことは必ずしも其人に健全なる身體と精神のないといふことを證明することゝはならぬ。其人は教育を受けなかつた爲め恰も泥に塗れたる玉の如く其光を發することが出來なかつたのであらう。然れども彼は其強壯なる身體と卓越せる精神を子女に傳へたのであるから、一たび教育の錬磨を受くれば子女が遺傳したる寶玉は忽ち其光を發するのである。予は飽くまでも遺傳の法則を信ずるのであるから、鳶が鷹を生んだり、鷹が鳶を生む樣なことは信ずることが出來ぬ。名家の子女に魯鈍なるものがあり、無學者の子女に英才のあるのは必ず其れ相應の理由がなくてはならぬ。

相當の教育ある男女でも往々迷想の爲に誤らるゝことがある。彼等自身に非凡の才學があれば彼等は必ずこれを子女に遺傳することが出來ると思ふて居る。亦父親にして一世に名を轟かす程の人物ならんか、其母親の人物の如何に拘はらず、其子女も亦俊秀の人なるべしとは自分も考へ人も思ふのである。『女の腹は借り物だ』といふことは昔から考へられて居るのであるが此誤れる思想は今日も尚ほ勢力を有して居る樣に思はれる名家にして、醜業婦や操行の下劣なる女子を妻として居るものは少くない樣であるが、斯くして俊秀なる子女が得らるゝものと考へて居るのは實に抱腹の至りである。然し『女の腹は借り物だ』といふ思想は獨り男子のみに限られては居ない。女子も亦幾分か此思想に誤られて居るので、彼等は子女の遺傳に關して自ら責任の半を負はねばならぬことを考へて居ない樣だ。女子の體育、智育、德育を增進することに對しては啻に男子のみならず、女子の中にも往々反對の意見を有して居る人がある。單に體育のみの事を考へても女子教育の方針の如何に誤つて居るかゞ分るではないか。男子の理想とする美人は如何なるものであるかといふに、多くは纎弱にして衣服の重さにも堪へぬといふ風情、顏は瘦せて白く、少しく悲哀を帶びたるヒステリー性の女子ではないか。女子も亦男子の意を迎へんが爲に好んで斯る風に陷るのである。我國民が男女を別

たず一般に苦勞性とヒステリー性なるは多く母の性質を遺傳したるものではあるまいか。若し健全にして快活なる國民たらんと思はゞ、男子は宜しく女子を虐待することを止めよ彼等をして快活なる氣樂なる生涯を送らしめねばならぬ。女子を虐待してヒステリー的たらしむるのは決して大國民を造るの途ではない。

△姙娠中の注意

女子が平素男子と同様に健全なる身體と高潔なる精神を有すことが、子孫の爲に如何に必要なるかは以上陳べたる通りである。然し女子が姙娠するに至れば胎兒に對する彼の責任は決して男子の比ではない。彼に起つて來る身體上及び精神上の變動は必ず大なる感動を胎兒に及ぼすものであるから、彼は姙娠中寸時の油斷も出來ないのである。ナポンオンの母が姙娠中にプルタークの書いた英雄傳を讀んで居たことは有名なる話であるが、胎兒の敎育中には決して耳に淫聲を聽かないとまで注意して居る人もある。遺傳といふことは實に恐ろしきもので、ドンナ小さき事でも親は其子に傳へて行くのであるが、母が姙娠中に其見聞したる所、感じたる所の影響を其子に及ぼすのは敢て不思議の事ではない。若し女子が姙娠中に高潔なる美人の肖像を日夕眺めて、其氣高き容貌を敬慕して居たならば、其子の容貌にも少からぬ影響を及ぼすものである。胎兒と母との關係が斯く密接でありとすれば、女子の飲酒が如何なる害毒を其子に與ふるかは略推測することが出來るではないか、大酒家の子供には魯鈍なるもの、不具なるもの、癲癇或は癲狂病に罹るものが多くある。是は決して怪むべきことではない。酒は人々の神經を痲痺せしむるのであるから、其瞬間には多く理性を失ふて愚鈍なる人間となるのである。更に甚しきに至れば飲酒者は全く一時的の狂者となるのである。斯る人々の子女に立派なるものゝないのは寧ろ當然だと言はねばならぬ。

△飲酒の慣習

酒の慾といふものは決して食慾や色慾の如く人性に自然に具はつて居るものではない。一たび其惡習に染

んだる者は容易にこれを改むることは出來ないけれども、始めから用心さへすれば決して斯る習慣に陷る氣遣はない。酒にしても煙草にしても始めて之を飲むものは必ず多少の苦痛こそ感ずれ、決してこれを嗜むものはないのである。唯人々が飲んで居るから甘そうだといふて無理に其習慣を養ひ、終に其習慣の奴隷となるのである。想へば世の中に斯の如きつまらぬことがあるだらうか。飲酒の弊は全く習慣上より來つたもので、吾人々類の爲に何等の利益なく、百害ありて一利なしと言ふも差支はあるまい。

△酒に害なき分量

飲酒家が自ら飲酒の利益を説くのは少しも當にならぬことで、恰も盜賊にも一部の理があるといふが如きものである。大酒は害あれども少量の酒には害なしなど自分免許の辯護論を爲す人があれども勿論これも取るには足らぬ。余は此問題に關しては醫學者の説に重きを置かねばならぬと思ふから、少し長くはあるが左に七月五日發行の「愛國婦人」より醫學博士土田卯三郎氏の説を引證することにする。

曰く『飲んで害なきだけの酒量は何程なるか』と云ふ問ひに對し、三宅博士の家事衞生の講義を拔萃して答てあるが、小生は此の講義錄の原本を讀まざるも拔萃記事の瑞西國の醫師云々に就て一言致さんと思ふ。

酒精問題は久しく種々に議論せられた。併し有害にして無効なることは三宅先生の述べられたる如くである。殊に最近の種々なる方面の研究の結果は、又一點の疑ひを挿む餘地がない。即ち換言すれば酒精は量の如何に拘らず全然有害のものである。酒精は如何なる人又如何なる時と雖も決して生活需要と認むる場合更になし。

乍併 三宅先生の述られたる如く、酒精の禁斷といふことは非常に困難である。已に一部の人は之を實行して居る故に全く不可能ではないが、却々六ケ敷い。故に已に飲酒の習慣となりたる人は節酒するより致方ないが、茲に最も注意す可きは未だ强度の飲

酒習慣なき人就中小兒及壯年者にして、飲酒を始めんとする人物は、此酒精の非常なる有害物にして且つ一度飲酒の惡習に染む時は、又容易に脫すべからざるの恐れあるを思ひ大に自ら謹まざる可からず。之れと同時に兩親殊に母たる者は家庭敎育上に於て注意せられたれば其の効果甚だ大なる者であらう。

酒精問題は梅毒が大にしては國家問題とす可き如く、酒毒の害は慥に其以上に位する大問題である。クラフトエービング氏の諷刺せし如く、文明は梅毒と變質と相關聯し相移行すると云ふ如く、吾人人體の變質の原因は酒毒に基くこと梅毒に起因するより以上である。

酒精の害は生活體の凡ての器官が侵さるゝのである。二日醉の胃病は主に酒精の直接刺激に由るが一度體中に吸收したる酒精作用の尤も著き影響を受くるは、神經系で即ち酒に醉たると云ふは腦に酒精の働きたるに過ぎない。故に酒精の害に就ては、諸學者より研究せられたるが就中神經病精神病學者に因て證明せられてある。殊に最近獨逸國、瑞西國等にて小生の目擊したる處は、中々盛である。其研究の結果は、神經病及び精神病等の原因の過半は、酒精の罪として居る。瑞西國の癲癇病院の報告などでも兩親の大酒家たること大多數である。即ち酒精の害は只々飲酒家自身而已ならず、害を子孫に及ぼすのである。

數十萬の財產を遺されたる親の厚恩は感謝す可きであるが、精神病神經病の原因が兩親の不攝生に基くと識りたる時は、其患兒は兩親に向て如何なる感念を起すであらう乎。假令身は錦衣玉殿の榮あれども、若し病の爲め醫師より結婚を禁じらるゝが如きは、生涯の不幸此上なからずや。

三宅先生の講義中に瑞西國の醫師の說に一定量の酒精は格別の害がないと書いてあるのは、其は報告が古いのであるか、否らざれば其醫師一個人の考へならん。酒精の量は一般の人に向て、其量を一定するは不可能であらう。即ち見易き例は酒量は各人異な

るが如くである。量と人と害とは各人不同である。毎日一升以上の大酒家にして七八十歳以上に長命する人もある。又其の反對もある。之れ誠に一般人をして酒毒の疑ひを起さしむる所以である。之れ先天的に各人の素質の差である。故に凡ての人に向つて量を定めろといふことは不可能である。

最近學者の研究は酒精は全然有害と確定されて居る。瑞西國の精神病學會に小生招待され、其際某教授が、日本に神經病精神病は多き乎、日本人の飲酒の程度は如何と問はれ、禁酒法さへ充分行へば神經病精神病は消滅する故に歸朝後は之に向つて大に盡力せよと言はれた。

乍併飲酒の習慣ある人が急に禁酒する時は一定の障害がある。例之ば食機不振、羸痩、元氣沈衰等を來し飲酒家をして一種の恐怖心を起さしめ、再び飲酒を初むるに至る。此障害は多くは一過性のものにして、漸次に除去せらるゝと雖も、普通夫れ迄堪へ得ないのである。獨逸國の或る大工場にて英斷を以て職工の飲酒を禁斷せし時、工夫が元氣を失ひ事業に堪へなくなりし爲め再び之を許した例がある。之れ其方法の宜しからざる爲めにて甚だ先見のなき致方である。斯る場合には瑞西國の醫師の云ひしが如く、節酒法を行ひ漸次に禁酒に至らしむるが宜い。

小生が玆に拙文を草する主意は、瑞西國の醫師が一定量の飲酒は無害なりと云ひしことを信じ、少年者等の之により飲酒を始めんとするは最も恐る可きことである。殊に世人の知る如く酒量は漸々增量する而巳である故に、其初に於て謹むことが肝要である。

△酒は疲勞を治せず

土田氏の說は誠に善く飲酒の弊害を示して居るので、是を讀む人は誰でも其道理に服するに相違はない。世には疲勞を休めるために飲酒する人があるが、土田氏の說に依れば勿論これも宜しくないのである。酒は興奮劑であるから一時これが爲に精神も爽快になるには相違ないが、一たび醒め來れば必ず前に優つて不愉快を感ずるに相違ない。原來興奮劑を用ゆる人は決し

てこれを或適當の度に止むることが出來ないから、終に興奮劑を用ゆることが慢性となり、從つて餘り効力を有せぬこと〻なる。例せば試驗前深更まで勉强する所の學生が其睡氣を拒ぐ爲に煙草を用ゆるが如き、一時精神を爽快にすることは出來るかも知れんが、一たび興奮したる精神は忽ち沈衰するのである。これが爲め幾度も煙草を用いて無理に精神を興奮さすれば、一晩二晩はこれに堪ゆることも出來るが、最後に於て彼は必ず神經衰弱に陷るに相違ない。彼の北極探撿に出かける人々は寒氣が非常に甚しいから一滴の酒をも飲まないそうだ。大槪の寒氣ならば酒を飲んで身體が暖かくなるといふことがあるけれども、北極の如き烈しき寒氣に遇ふて酒を用いれば一旦暖まりたる後は其の反動として非常に寒さを感じ終に凍死するに至るそうだ。これに依りても興奮劑が役に立たぬものであることは分るではないか。

△婦人と禁酒

以上陳べ來りたる事に依り女子の飮酒が極めて有害であることは明白になつたと思ふが、余は終りに臨みて尙ほ一言を添へて置きたい。苟くも多少の敎育ある女子であれば衛生上若くは風儀上禁酒して居る人が多數であるに相違ないから、女子に禁酒を勸むるのは無益の事であるかも知れぬ。然れども女子は自ら禁酒して居ることを以て滿足してはならぬ。更に進んで男子に禁酒を實行せしむるといふ覺悟を有することが必要である。未婚の女子は其夫を定むるに當り、其男子の禁酒家たることを一の條件としては如何であらうか。勿論兩親たる人が此點に注意すべきは勿論であるが、女子自ら固く主張したならば必ず兩親と雖も其意見を採用するに相違ない。斯の如きことは餘りに極端であるといふ人があるかも知れぬが、古來結婚の約束を爲すに當りて血統を調査するといふことは廣く我國に行はれたる習慣ではないか。若し癩病の血統が子孫の爲に恐るべきものでありとすれば、肉體と精神と兩ながら害する所の飮酒は何故に恐れないのであるか。或國に於ては癩病者に對するが如く大飮酒家に對して結婚

を禁ずるの法律を設けて居る位である。若し一般の女子が飲酒の習慣なき男子を撰擇するといふことになつたならば、漸次に此悪習を撲滅するにドノ位力となるかも知れない。

次に既婚の婦人は誠意誠心を以て夫に禁酒を勧むるが善い。家庭の快樂からいふても、子女に及ぼす感化からいふても、婦人は極力夫の反省を促さねばならぬ。若し婦人が自己の利益を考へず、一に夫に子女の幸福の爲に之を説いたならば、夫も必ずこれに動かさるゝに相違ない。若し夫にして到底救ふべからざるものなりとせば、婦人は全力を子女の薫陶に注ぎ、子女をして生涯一滴の酒をも口にせじとの決心を爲さしめねばならぬ。飲酒の習癖は慥に多くの不幸、悲惨、不品行、罪悪の根源である。而して女子は此罪悪と戦ふべき最好の位置にあるのだから、其責任も從つて大なりと言はねばならぬ

女子と商業教育

日本女子商業學校學監　嘉悦孝子

女子教育に對する世間の非難を聞きまするに、今の娘は、少し教育があると云ふと、所謂生意氣になつて、商人の家に生れた者でも、店に出て商ひをすることを厭がる樣になる。從つて半襟の掛かつた着物を嫌ひ、前掛姿を厭ふと云ふ風になつて、而かも相應な縁談があつても、お内儀さんなんぞと云はれる處はいやだ、奧樣と呼ばれる處でなければ、お嫁に行かないとか、一生獨身で暮らすとか、そんな事ばかり云つて、氣位ばかり無暗と高くなつて仕樣がない、と斯う云ふ樣な話であります。

成程そんな事を云ふ樣になられては、全く仕樣がありません。総じ教育を受けた爲めに、氣位が高くなつて、商家の娘でありながら、商業を嫌つて、商ひは厭だなどゝ云ふ樣になられては、大きに困る譯です。私共の見る處でも、今の女學生中には、實際然う云ふ傾

向が確かにあるやうに思はれます。

併し人は、向上心が無くてはなりません、ですから女子が地位ある良人を求め、奥樣と他人に尊敬さるゝことを望むも、強ち非難すべき事ではありません。けれども、茲に憂ふべきは、所謂虚榮心に驅られて、徒に贅澤な生活を望み、自ら大いに働くと云ふ考へが、甚だ缺乏して居ると云ふ風が見える事で、前掛姿になることを嫌つたり、店頭に出てお客に應對することを厭がつたりすると云ふは、約り今申す樣な處から起ることであらうと思ひます。

商家の女子が教育を受けた結果、然う云ふ弊に陷ると云ふ事は、教育家たる者の研究すべき問題で、大に顧慮する所がなくてはなりませぬが、苟も教育を受けた女子にして、年頃になつて見れば、自身でも少しは考へなければならぬ事ではありますまいか。

商家と申しても、問屋もあれば、小賣店もある。其又小賣店の中にも大小がある。大商店になれば、お客の應對は店員に任せて置いても濟む事で、必らずしも女が店頭に出て居なければならぬと云ふ譯もないでありませう。また地位を望み、奥樣と尊敬されたければ先づ自ら大に働いて、良人を補け、資産を作ると云ふ事に心を用ゐて行かねばなりませぬ。然うして行きさへすれば、自然と地位も得られて、他人から尊敬されるやうになられるではありますまいか。

女子が徒らに虚榮心に驅られて、其本分を忘れると云ふ風になつては、社會の爲めに大に憂ふべき事であります。私共教育の任に當る者は、此點に就いて最も注意せねばなりませぬ。

女子の本分は、今更申すまでもなく、人の妻となり、一家の主婦となつて、家事一切の責任を負ふて、家庭の平和を保ち、家庭の幸福を增進すべく努めるにある事で、即ち家庭の整理者となり、慰藉者となるが、女子の本分であります。處で家事を掌り、家政を整理するには、第一經濟思想が無くてはなりませぬ。また良人の職業に對して、齊しく趣味を有つと云ふ事が必要であります。殊に商家に在つては、妻たる者も商業上

の智識を有つて、良人を補けて行くと云ふ必要があります。

女子商業學校は、即ち其必要に應じて設立されましたもので、女子をして穩健なる經濟思想、圓滿なる常識を啓發達せしむる爲めに、適切なる商業教育を施し、家庭の整理者經營者として、其本分を完うせしむると云ふのが、本校の目的です。生徒は皆な所謂前掛主義ですから、卒業の暁には、獨立の商業に從事して、先づ小商ひから行ると云つて、今から夫れを樂しみにして居る者もあれば、差當り會社其他大商店の店員となつて、尚ほ一層商業上の智識を得たいと云ふ希望の者もありますし、また自家の商業の手助けをすると云ふ者もあります。斯う云ふ風ですから、私なども、毎朝授業の始まるまでと、午後授業時間が終つてからは、前掛姿になつて、商家でもある様な態度に、用をすると云ふ風にして居ります。從つて寄宿の生徒達も、私と同様前掛姿で、夫々何彼と用を達し、セツセと働くと云ふ有様になつて居ります。

近來會社などでも、女子の雇員を入れる様になりまして、而かも漸次に需要が増加してまゐりました。横濱の火災保險會社や日本郵船會社、或は、煙草專賣局などいろ〳〵あります。會社で女子の執る職務は、何う云ふ方面の仕事であるかと申しまするに、タイプライター、帳簿係りなどでありまして、女子には全く斯う云ふ仕事が最も適して居るやうです。而して何の位ゐの報酬であるかと聞いて見まするに、普通科の卒業生は十三圓からですが、高等科の卒業生となると、十五圓以上だと云ふ事です。

女子教育に對する 家庭の注意

江原素六

一例をいへば暑中休暇で歸鄕して居る女學生の中には、家に歸つた翌日から、甲斐〳〵しく立働いて、洗濯から臺所の手傳をし、學校で習つた料理法や、新案の洗濯法を實地に行つて居るのもあるが、これに反して、朝は八九時頃迄で床に入つて居て、兩親が食事の濟んだ頃に、起きて、不仕埒な姿をして、新聞の三面に目を晒し、それが濟むと一二時間も掛つて化粧をして、十一時頃に朝飯を濟し、兎角する内に同じ様な朋友の二三人が訪ねて來ると、やれ菓子を買つて來い、茶を持つて來いと、妹や下女を追ひ廻して、恐にも

付かぬ話に日を送ると云ふ有様、家庭では娘が歸省して來ない前は、歸つて來たなら弟や妹の世話でもし兩親の手傳もして呉れるであらうと、思つて居ると此の始末、一人の娘が歸つて來たばかりで、家内中多忙を極めると云ふやうなのもある、今この兩方の女學生に就て見るに學校に在る時は、成績に於ては双方別段の相違は無いのである、して見ると學校の成績といふものは悉く當になるものではない。

善良なる家庭、規律ある家庭に養育せられた娘は、家庭に在る時でも、學校に居る時でも、同一の心掛けを以て居るから、始終同一の習慣が身に付き纏ふて、如何なる場合でも、其の習慣を破らないのである、又不良なる家庭、不規律なる家庭に養育せられた娘は、學校に居る時丈け、朋友の手前、教師の思惑を考へて、規律を守つて居るから、外見には一寸分らないが、家庭に歸ると、雲泥の差があるのである、人前のみ繕つて居る娘は、家庭に歸ると、直ぐ地金を顯はして、其の不良なる家庭の習慣に馴染で了ふのであります。

△父兄の注意

自分の娘を完全なる婦人にしやうとするには、女子教育を學校に於て授けるよりも、家庭の習慣、家庭の教育が、大に力があるそれ故父母は家庭に於て受けた惡習慣を學校で矯正するのであるから、學校で折角直した惡習慣を家庭に於て、再び引き戻すやうな事の無いやうに注意して頂き度いと思ひます、若し是れが出來ないとすれば、其の父兄の意志の極めて薄弱な人であると云ふの外はありません、若し又父兄が學校と同意見を持つて居ても、其の子女が是に從はないと云はるゝ方もあらうが、其れは甚だ間違つて居る考へで學校に於て學科を習ふ能力の有る子女であつたならば、家庭に歸つて善良なる習慣に親む事が出來無いと云ふ道理はありません、如何に口を酸くして、教師が教場のみの成績を主として、賢母良妻を説き聞かし、理想とせしめても、家庭に於て父母が充分の注意をして居らなければ何の役にも立たないのである。

△教育の大欠點

特に今日一番に欠けて居るのは、裁縫である、多くの學校卒業生を見まするに、裁縫を巧者に遣る婦人は殆ど無いと云つても可い位である、偶々巧みな婦人もあるがそれは、卒業後裁縫學校なり、職業學校なりに通學して、裁縫を專攻した婦人である。是れは家庭に於て其の子女に、裁縫の道を敎へず、學校任せにして置くのと、又主婦が家族の衣類迄でも他所に出すから其の家庭に育つた子女は、家庭に於て針を持つ事さへ敎へられない。故に私は家庭に於て、其の子女を養育する一の科目として、裁縫の道を敎へるやうにして貰ひ度いと思ひます、家族の衣類を他に依賴せずして、主婦自身か針を運ぶやうにすれば、其の子女も母親に見習つて、自然裁縫をする習慣が付いて來るのである。

今後學問は益々進歩して、學校に於て生徒が負擔する學科は多くなつて行くのに、裁縫の如きまで、學校に一任すると云ふやうな有樣では、決して良結果を得る事は出來ません、是れは是非とも、家庭に於て其の子女に敎へて、小學校を卒業する頃には、普通衣類が縫へるやうにさせねばなりません。然るに其等の事には日今の父母は、一向注意を拂はずして、放擲して置くやうでありますが其結果として、人の妻となり、母となりたる時に於て、其の子女が、衣類を他人に依賴して縫つて貰ふと云ふやうな事になる、斯くては第一金錢の不經濟のみならず、今後の家庭敎育上にも、大なる缺點を見るやうになるのである。飜つて或種の女學生を見るに、未だ學校を卒業せざるに、卒業せし婦人に勝る裁縫の技藝を持つて居ります、斯う云ふ女子の家庭に就て見ると、其の母親が「針を持つのは女の道である」と云つて未だ小學校に通つて居る時分から、雜巾を刺す事や、足袋前掛などの縫ひ方を敎へて居るのである。是れを先の放擲主義の家庭と比較すれば、將來に於て其の技藝に、大なる懸隔が生ずるのである。

△學校の成績は世帶の用を爲さず

現今の家庭を見ますに、槪して學校の成績さへ優等

であればよいと云ふやうな意見を持つて居るやうですが、成程學校に於て成績が優等であれば、生徒自身の名譽には相違ないが、將來の爲めには餘りに善良な方法ではない、蓋し學校の成績丈けを標準として、世帶を持つて行く事が出來るものではありません、次に注意すべきは、家庭に於ける子女の起居動作であります。此頃私は箱根鎌倉大磯等の外人避暑地の教會に、說教に行きましたが、其時に私は數多の女學生が避暑をして居る狀態を觀察して大に驚いたのであります。先づ涼しい朝の中は、八九時頃まで床に就いて居て、日がヂリ〳〵照るやうになつて、やうやく床を離れ、寢亂れ髮を搔き上げもせずに、横になつて足を踏み伸して、新聞の三面を限なく讀むと、新聞は其儘疊みもせずに、二枚なり三枚なりを擴げたなりにして、寢衣を脫ぎ捨てゝ海水を浴びると云ふ有樣ですから、六疊や、八疊の座敷は、二三人の避暑女學生の爲めに、足の踏み入れる餘地も無いまでに亂雜になつて居ると云ふ始末である。血氣盛んな靑年女子が、避暑をするのでさへ贅澤であるのに、此の有樣は何事であらう、それも避暑をして、智を磨き健康を增し、德を進むると云ふのならば格別だが、此の樣な有樣では避暑に行くのでは無くして、自分の不仕附落を恣にし、自分勝手の我儘をする爲めに避暑に行くのであります、斯う云ふ女學生は、皆家庭に於て平素起居動作に就て、父母が、嚴重に仕込まない結果で、若し平常に於て、父母の監督が行き屆いて居つたならば、決して、如斯言語に絕えた行動は無い筈であります。で今後自分の子女を完全に敎育し、事實良妻賢母としやうとするには學校敎育よりも家庭の敎育に、重きを置かねばなりません。今の女學生は、口には良妻賢母を唱へ、高位高爵の人の夫人たらん事を理想として居るが、斯んな有樣では到底、唱へて居る事も、理想として居る事も、宛で痴人が夢を見て居るのと、何等の撰ぶ處はありません。

（完）



家事の整理法

黒澤逸子

逸子夫人は横濱共立女學校出身にして銀座の貿易器具商店主黒澤貞次郎氏の夫人なり、貞次郎氏は八年間米國に滯在し文明的商業經營法を學び、歸來新設備と新方法を以て商店を經營しつゝある人にして夫人内助の功多く所謂夫婦共稼ぎの好模範たり。

私共は誠に趣味の淺い方でムいまして家庭の娯樂などゝ申しても格別申し上ぐる程のものはありませんが、只だ夫婦とも讀書が好きで御座いまして、良人は暇さへあれば、それに耽つて居ります、ですから新刊の書物、雜誌其他日々の新聞なども大分取り揃へて居ります、私も亦た讀む種類は、良人とは違ひますが、一と通り女學雜誌には、目を通して居ります、讀書以外家庭の娯樂としては、稀に樂器を弄ぶ位のもので、交際の爲めに芝居や寄席へ、參ることも御座います、又た一年に二度宛、旅行して名勝舊蹟を探ることに定めて置きますが、是れは娯樂と申して、宜しいか何うでせうか、で其外にはマア大抵日曜日に好な事をして暮すといふ樣なわけです。

▲日曜日の生活法

大層な事を申すやうですが私共家憲の第一條に規定して居るのは質朴の精神です、これは奢侈をせぬ、

金錢を濫費せぬと云ふ事ばかりでなく、總てのものを經濟的に切り盛りして行くと云ふ精神ですから、貴重なことは金錢にも勝る時間の節約で、時間の經濟の爲めには、家の仕事を、一週間に割ッて、主人でも此の日課を故なく變更することは、出來ぬことになッて居ります、夫れで先づ日曜日の仕事から申し上げると、此の日は安息日故、銘々勝手な事をして遊びます、で女中三人には、一週間の勞に酬ゆる爲め、随意なり、放縦なり、自分の好きな事をして遊ばせまする規定でムいます、夫れから又た私は毎日曜必ず、子供（五歳）を連れて、教會に參ります、午前の説教が終ますと、夫婦に子供三人連れて、食道樂の探險に出掛けます、ホヽ探險など申してはおかしうムいますが、其の色々雜誌や新聞などで、どこそこの料理は好いとか、珍らしいとか云ふ、記事を見て置きまして、實地に夫れを食べに行くのでムいますが、之れが私共の娛樂の第一となつて居ります、此の食道樂の探險は、大抵晝餐を食べに行くのでムいますが、是れは晝餐を家で認めますと、勢ひ女中達を煩はさなければ、ならぬことになりまして、折角の安息日も、有名無實になるですから、そこで探險から、歸宅致しますと、大抵四時頃になります、すると女中達は最早や、夕飯の準備を致して、置きますので其處で一同樂しく食卓につくと云ふ、鹽梅に致して居るので御座います、若し主人が商用で旅行でもして、留守の時は、私は大抵友人を訪問して、談話に趣味と利益を得ると云ふ方針を取つて居ります。

▲月曜日の仕事

月曜日は洗濯日と定めて置きますから、朝飯が濟むと、女中達は直ぐに其の準備に取り懸ります、爰に少し洗濯のことを申し上げますが、足袋とか肌着とか、襯衣の類は、總て消毒を兼ねて、火に懸けて煮ることに致して居ります、で其の煮る釜は亞鉛製の器で、私の考案で普通の釜に改良を施したもので、曹達と石鹼で煮るので御座いますが、白い物などは、心持の善く

なる程清潔になります、私の家では、衛生の爲めに襯衣でも肌着でも、總て白布を用ゐますが、殊に襁褓は白い晒しメンチルを用ゐることに、定めて置きます、總じて襁褓などは、一見人をして、不快の感を起さしむるものですから、殊に清潔にして置く必要があります、夫れで釜なども其の第一の目的は、襁褓を清潔にして不快の感を起さしめぬ爲めです、まア失禮な申分ですが私の家の、襁褓は顔を拭いても、差支ないやうに、清潔にしてありますよ。……次ぎに洗濯が終りますと上の便所と廊下の間にある戸を悉く掃除させます、



以上が月曜日の日課で御座いますが、順序よく手分をして、行りますと、大概午前中に仕事が濟みます、若し此の日が雨天でありますと、洗濯丈けは見合せて、臨機應變に、仕事を繰り換へるので厶います。

▲火水木金土の仕事

火水木金土と順を追ふて仕事のプログラムを定めて居ります、まづ、火曜日には玻璃障子、洗面場、家屋の周圍格子戸の雜巾掛け、及び掃除で御座います、夫れから水曜日が疊拭きと、戸の棧の掃除です、疊の汚れ目は、割合に目立ちませんが、其實拭いて見ると、塵埃の多

いのに驚かれます、戸の棧も夫れと同じこと、埃の溜り易いもので、戸を開閉致します時、よく指の先きなどに附着する者で御座いますから、假りに其の手で食物など扱つたら、宛で塵を喰べるやうなものですから、特に注意して、最初拂子を懸け、其の後に雜巾を掛けるやうに致して居ります、次は木曜日ですが此日は、上便所下便所夫れから廊下の掃除と定めて置きます、金曜日には食物を入れて置く棚の掃除で、特に此日は、飯炊きの女中を、京橋まで乾物買ひに遣ることに定めて置きます、御飯炊きの女中は、他の女中より、外出する機會が少う御座いますので、隨つて耳目の樂みや戸外の運動に缺乏して居りますから、斯う云ふ機會を利用して、其の缺乏を補はさせるのです、最後の土曜日は、一番忙しい大掃除ですから、女中達は一生懸命です、大概午前中に、仕事が片付きます、夫れから午後は私の面會日にして置きます、私は時々尾張町の店の方を見廻らなければなりませんので、兎角留守勝で、來客に失禮することが多いからです、マア大體一週間の仕事のプログラムは、斯様で御座います、次ぎに今度は、女中雇入れについての鑑定法や、使ひ方について、申上ませう。

▲女中の鑑定法

女中の使ひ方は、何處の奥さん方も、一番頭腦を惱ませらるゝ問題で、又た一番困難せられて居るやうに考へます、私は多年の經驗から考へまするに、最初雇ひ入れる時に、選擇を上手に遣つて、適當の者を選んだならば、決して手を燒くやうなことは、なからうと思ひます、それは何う云ふ鑑定法かと申すに、先づ桂庵か連れて參つた女中を、勝手口から通し、座敷へ上げる前に、下駄を見るのです、元來服裝と下駄は、釣合ねばならぬ筈のものであるのに、服裝より馬鹿に良い下駄を穿いたり、又た服裝は左程見苦しくなくも、下駄が馬鹿に惡いとか云ふ總て不釣合の體裁を仕たり片寄つたおしやれをしたり、又た身分不相應の風をして居る者は、座敷へは通しませんで直ぐ還して了ひま

す、夫れから又た泥塗れの下駄や、片減りのした下駄、歯の缺けた下駄、跛の下駄を穿いて居るやうな、身嗜みのない女中は、矢張り不合格です、殊に片減りのした下駄や、跛に減つた下駄などを穿いて居る女中は、乾度片意地で剛情のやうです、兎に角十錢の下駄でも好う御座いますが、好く自分に相應して、不釣合でなく又馬鹿に汚たり、片減りなどして居なければ、先合格です、下駄で及第すれば始て座敷へ通すのです、座敷へ通しますれば、今度は衣物の着方、頭髪の結ひ方を吟味致します、衣物の着方のキチンとして居らぬ者は、無論不合格です、夫れから頭髪ですが、日本風の髪を結ひながら、ハイカラ風の櫛や簪を差したりして、一見生意氣さうなのや、又たゴムに金を着せた櫛を差して、心の鍍金を廣告して居るのなどは、折角下駄で及第しても御斷りしてしまひます、次に人相の惡い女中、即ち眼光の惡く光る女中などは無論落第です、



總じて人は其の目で、其の人と爲りが分るものです、其の外此方で聞きもせぬことを、無暗に喋る女中や、前の主人の惡口を好んで言ふ女中などは、矢張り落第で御座います、偖て斯う申しますれば、合格者は誠に

少う御座いますが、茲が一家の主婦たる者の一番苦心の存する所だらうと思ひますが私は、今申した方針で、選擇をして來ました所、頗る好成績を得て居ります。

▲女中の使ひ方

偖て女中の使ひ方で御座いますが、第一の方針は、女中を下女として又は雇人として、取扱はずに、家族の一人として取り扱ふので御座います、私が女中の選擇を非常に吟味致しますのも、一つは、女中を家族の一人として、家庭の圓滿を助け、團欒を謀りたいからで御座います、で女中を家族の一員として、家庭の圓滿を助けるには、第一女中に奉公人根性があつては、何にもなりませんから、私は常にそれを敎育して居ります、單に口ばかりでなく眞實女中の爲めを謀つて、遣るので御座います、況して他人の娘を預つて置くのですから、相當の敎訓を施すのは、雇主の義務だらうと考へますので、女中達の品性を善くする爲めに、月に三四回は、敎會の牧師を頼み、色々道德上有益のお話しをして戴きます、夫れから又た他日家庭を持つた時の心得の爲めに、裁縫は勿論、帳面の付け方や、當人の希望に依りまして一通りの學問、英語までも、私自身敎えて遣るので御座います、で裁縫や、其他の仕事を習ふ時間として、夕飯後十時頃まで、與へて置きまして、此の時間には、成る丈け家の用は言ひ付けぬやうにして居ります、夫れで只今の處、仕事の割り當ては、米國などのやうに、規律的には參りませんが、大體役割りが定つて居ります、又た女中の休暇は、矢張り米國のやうに、毎週休ませる譯には行きませんが月に二度宛は、休暇を遣ります、尤も仕事の都合で、二人一度に休む譯には、行きませんから、お互に用事を繰合せて、出懸けるやうにしてあります。

▲女中の買物帳

經濟は私が預つて居りますが金錢の出納は、[illegible]に記けた積りでも、兎角記け落ちがあつて困るものです其處で自宅の經濟をお話し致しますと、臺所用の買物

は、女中に三圓位宛渡して置き、私が居りませんでも、入用の野菜とか乾物類は見計つて買ふやうにさせます女中に金錢を預ける事が出來ますと、旅行の時など、安心して滯在が出來ます、又た主婦が病氣にでもなつた時は、誠に都合が好う御座います、で其の買物は、綿密に帳面へ記入して主婦に見せるやうに申して置きますが、之れは女中達が嫁入りした時、餘程參考にもなるだらうと思ひます、尤とも女中に金錢を預けることは第一女中に不正の心があつては、何にもなりませんし、夫に自分が、品物の相塲、品質の善惡、及分量などは決して僞りを申さぬ丈けに心得て居りませんと、無功ですそれから女中の買物帳は、再び元帳に記入しますので毎日の經濟は、必ず晩餐後取調べ、帳合ひ濟せるのが、一つの日課としてあります。



▲子供の教育

日曜每に私しが子供を敎會へ連れて參りますのは、敎會には、日曜學校の設けがありますので、子供相當の敎訓を與へられるばかりでなく、又た子供の時から宗敎の感化を與へて置きますのは、將來世に立つ上に於いても、餘程益することがあるだらうとの、考がへからで

すが、今ではもう遅れて參らないのでも自分から迫む位です、しかし幼い子供にいろ〳〵智識を詰め込むのは却つて害になりますから、何も教えないやうにして居りますが、子供をお持ちの方は十分御承知でせうが湯へ參つた時、子供と云ふものは、湯に浸つて居ることが嫌ひで、物の三分間も、湯槽の中に居らぬと云ふ鹽梅で誠に困る者です、ですから此時を利用して、私は色々桶とか、石鹸とか、何でも搆ひませんから、色色傍に在る者の説明を聞かせまするのです、すると其の話しが面白いので、湯の中に浸りながらじつと辛棒して聞いて居ります、是れは一擧兩得で、一方に於ては、入浴の目的を遂し、他方に於ては、智識を得られますから、私は何時も此の方法を慣用して居ります、夫れから、又た英語の發音ですが、是れは是非子供の時から、舌を練習させる必要がありますので、日常用ゐる言葉も、パパ、ママ、グードバイと云ふ風に教えて居りますが、是れは誠に成績が好う御座います。

清潔法のすゝめ

棚橋絢子

▲子女の習慣

身體を清潔にして衛生に注意するのは何人も心得て居られる事だが私の申す清潔といふは今少し廣い意味に亘つて家庭内外の掃除は勿論、子女の慣習から精神の清め方まで含めて御話を致します、最も手近な例は子供と室内整理の關係です。兎角に子供は、玩具なぞを部屋中一杯に取散らして、それを片附もせずに放擲らかして置きたがるものですが、それは幼い時分から親が注意して、子供が取出した物は必ず元の通りに子供が仕末するといふ風に教へておかなければ、癖は直らぬものである。

次には食事を奇麗にさせると云ふ事は大切なとで、子供によつてはそこら中御飯だらけにして、お菓を手掴みにする、味噌しるを溢す、魚の骨を散ける、誠に

狼藉極るのを見受けますが、恁那のは母親なり乳母なりが充分に敎へ諭さないと、家に居る間はそれで可いとしても、他へ連れて行く場合に、急に其不行儀が矯るものではないから、平常家に在る時に、十分敎へて自分に仕末をする樣に習慣をつけねばならぬ。

斯樣に小供の惡癖を直すには、唯だ頭から飯をこぼしてはいけない、玩具を散らす奴は馬鹿だ等叱りつけても容易に肯くものではない。

それから衣服や書籍の如な物でも、一度取出して用が濟んだら、直ぐ元の處へ仕舞つて置くやうにすれば、四邊を取散らす事もなく凡て秩序正しく參るのですが、それが無精だと、讀めば讀みつ放し、ぬげば脫ぎつぱなしで、一寸折釘かなんかに引掛けたまゝ、三日も四日も放抛つておくといふ有樣。第一見苦しいばかりでなく、それに塵埃がかゝるから自然汚れもし損みもする。そこで出した物は必ず元の鞘に納めて、例へ紙屑の落ちこぼれでも見當り次第方づけると云ふ風に、小兒の時から敎育すると成人の後にも、萬事規律正しい者になりますが、どうも子供の事だから仕方が



ないと申す工合に放任して置いては中年になつてからは容易に矯められぬ。

▲不精者の戒め

室内の整理は行屆いたと致しても、邸内や庭園が荒て、居ては、決して美しい感じが爲ませんから、夏分などは猶更のこと、縦へ三坪程の庭でも、朝夕に手を入れて、箒目の痕淸らかに、打水の涼しげなのに對すれば、精神が晴々とします。ツマリ外部の淸潔は心の淸潔を促すもので、羽織袴の嚴めしい禮服を着た時と寢衣か何かだらしなく着流した時と、氣の持方が違ふと同じ様に、陋ぐるしい裏店に居る時と、端麗な座敷にすわつた時と、自ら人の感想が異ひます。

精神を深くして後に外部の物を整理するのも一方法ですが、先づ外部を美しくして徐ろに内部の心を正すのも肝腎だらうと思ひます。殊に婦人は外界の事物に感化され易いもので、恰度靑い葉に宿つた虫類が漸次靑い色に化すると同じ道理でせう。そこで婢僕を使ふにしても、其家の主婦が締りのない人ですと必ず下女下男までが無精者になります。けれども奥さんが器用に立働いて、臺所の隅々までも掃除すると云ふ風になると、勢ひ雇人の方でも懶けて居られぬ樣な譯です。

▲裝飾上の注意

毎日湯に這入つて化粧をして、美い衣服を着て、身の廻りを奇麗にしても、サテ臺所へ行つて見ると、流しの下から蚯蚓が這出すといふ有樣では、これ又眞の淸潔とは申されません、一事は萬事で凡てのものが不規律になつて參ります。次に又座敷の裝飾物に就いても、花瓶や花臺を配置するに、眞直に正しくおけば何處か整然と品よく見えますが、それが横になつたり曲つたりして居ては、同じ物でも誠に見苦しい。

又家には日常必要品の外に、一切飾物は要らぬといふ主義で、床の間に一輪の花さへ挿さぬ人もあるけれど、それでは餘り沒趣味に流れて、精神の融和を缺く譯ですから、矢張裝飾の必要はあらうと考へます。そこで盆栽の如きでも花のある方を此方へ向けて、正面に見えるやうにするのが本統ですのに、不注意の人は

花の咲いた方を横に向けたり背向にしたりして、無意識して居ますが、一寸したとでも綿密な人と爾うでない人とは、一見して解ります。

▲物の配置方

强ち裝飾物に限らず、煙草盆や机の如きものでも、埃をよく拂ふて眞直に正しく置けば大層居心地も好く座る氣にもなるけれど、それが汚れたり亂れたりして居ると、何うも身の姿勢まで崩れる樣に思はれます。約めて申せば、物の置やう一つに依て平生の心懸けが解るものですから、一家の主婦は、最も注意しなければなりません。母が綿密で淸淨好であると、子供も亦それを見習つて、精神まで淸く正しく育ちますが、爾うでない人の子供は性質まで曲り迂つて居るやうです。

又平素能く物を整理して置けば、必要の際に探し廻つたり、慌てたりせずとも濟むわけで、何の函の何番目にあるといふ事さへ判つて居れば、容易に引出すことが出來て、時間の經濟や便利な點は申すまでもありますまい。

▲淸潔の意義

淸潔と否とは人の仕事をする上に大なる影響があります、四邊が靜かで淸潔の時は、心が暢々として、氣持よく仕事が出來るけれど、周圍が不潔亂雜であると何となく氣がむしやついて思ふやうに捗取りません、畢竟家庭の内外を淸淨にするのは、心の中を洗濯すると同じわけで、古人が『靜以て心を養ふ』と申された如く、靜肅な處で、四方を淸潔にして、始めて心が正しくなると謂ふに外ならぬのであります。

英國婦人の長所

天野誠齋

▲世界一の良妻

世界各國の婦人に就いて、各々長所を調べて見たら、夫れ〳〵異彩を認めませうが、玆に特に英國の婦人を擇んだのは、其の長所が比較的我國婦人の參考に資す

る所が多からうとの考へからであります。

見識の高い事は英國婦人の尤も長所とする處です。それであり乍ら些も親しみ惡い風も無く、愛嬌はあるし、十分優しい氣質も見えて、交際するにも何等親疎が無いに至つては實に敬服の外ありません。曾て或る佛國人が『世界一の良妻を望むなら、宜しく英國婦人を娶れ』と言つたのは洵に至言と思ひます。

自己に見識があるから、輕々しく他人の說を信じないと共に、彼等の說く所は何時も明瞭な主義を有つてゐる。從つて假令ば政治上の問題が起つても、宗教上の問題が囂しくなつても、或は社會問題が沸騰しても、決して之れに雷同するやうな事はなく、孰れの問題に對しても必ず確乎たる見解の立つて居るのは驚くべきである。

英國婦人が斯る見識を備へて居るのは、畢竟高尙なる敎育の下に人と爲り、常に讀書力に依つて新智識を貯え、そして種々の人間や、社會の實際に就て色々注意深き觀察を試みつゝあるからで、彼等が如何なる問題に逢着つても、考へが深遠で、明晰なる解釋を與へることの出來るのは決して偶然ではありません。

▲廣汎なる趣味

英國婦人は啻に見識の高い許りでなく、談話の上にも誠に趣味が深いので、旅行の話が出れば自分の旅行したときに斯る愉快なことがあつたとか或は何々の研究をしたら何うであつたとか、必ず咄しの材料を持つて居ます。夫れに獨逸語なり、佛蘭西語なり、外國語の一ッや二ッは大抵の者は修めて居ます尤も婦人の地位にも依れば、語學の研修にも日本語と英語程の懸隔は無く、自然容易く出來ませうが、兎に角克く熟達して居るには感心します。其他內外の形勢、人情風俗などに就ても出來得る限り智識を得ることに心懸けて居るから、趣味は非常に多方面に渡つて居ります。

▲配偶者の撰擇

彼等は斯の如く趣味も廣く見識も高いから結婚をする場合などには、配偶者の人物如何等に就ては自ら觀察を下して決して他人を煩はす事はありません。亦國

の慣習では女子は廿一歳以上になれば兩親の權利をもつて結婚に干渉する事は出來ませんが、こは詰り婦人が此の年齢に達すれば一廉の見識を有つので兩親が干涉を試みずとも、將來の方向を誤るやうな事は無いと認定されるがらであります。左れば彼等は萬一氣に染ぬ主人を、親達から無理往生に勸められたときには、『私は最早廿一歳を過ぎました、不見識な結婚はお斷り致します』と斷然拒絶する權利を有つて居ります。之れが教育も無く、見識も無くて世上人事を觀察する眼の無い婦人であつたならば實に危險な話であるが、ソコは流石に英國婦人だけあつて、遺憾なく美點を發揮して居るのです。

繪さがしの(1)



結婚前には男女の間に、夫婦となるべき約束が成立ちます。爾うして約束が結ばれると其の證據として、男の方から女の許へ指輪を贈り、贈られた女は之れを受けて左の藥指に嵌める丁度日本で行ふ結納の儀式に似たものです。夫れ故藥指に指輪を嵌めた婦人は必ず許嫁の男があるので、假令又其の男と相携へて公園を散歩しやうとも、書狀の往

復を致さうとも、決して友人や知己から假是非難される事は無く、所謂天下晴れて男女交際の出來る間柄となるのです。

▲婚約當時の決心

此の約束を取結ぶのは男女互に意氣投合し、終身の苦樂を誓つたものに限ります。夫れ故親の干渉した爲め厭々乍ら夫婦になつたものとは違つて、僅なる感情の衝突から離縁沙汰を見るやうな事は至つて尠ないのみならず、當人同士も離婚する事を非常に德義上の恥辱と考へ人生の最大苦痛と思つて居ります。去れば勿論輕卒なる約束は成立たぬと共に、一旦成立つた以上は眞の約束は却々固いもので、或は生活問題等の爲に結婚式を擧ぐる迄に非常の長日月を費すとも之を破棄すると云ふ事は滅多にありません。

折角意氣相投じて夫婦となるからには、結婚後生活上の困難を來さぬ樣、貧賤なる暮し向きを仕無い樣にと、許嫁の間に男女互に能く此事を打明けて談合します。故に男は若し財産も無く微力であれば一生懸命で働いて、財産を作り、充分收入のある地位迄漕付けて、先づ之れならば生活上の困難は無いと云ふ、認定が付いた上でなければ、大禮を擧げません。此間婦人の方は何うして居るかと云ふに、矢張自分も勤儉力行して、結婚の時節を樂しみに待つて居るのです。例へば三ケ年かゝらうが、乃至は五年十年とかゝらうが、必ず氣を永くして待つてゐるので、其間に、男女孰れに於ても先の約束を反古にするやうな薄弱な考へは決して持ちません。

▲紳士淑女の教養

斯る氣品の高い婦人が、妻となり母となるのであるから、兒童に對する家庭教育の如きは實に間然する處がありません。即ち男兒を産ぐれば將來紳士として恥かしからぬ樣、女子を産れば淑女の品性を保たしむる樣、苟且の事にも油斷なく教育します。英國の學生は學校時代から、紳士として恥かしからぬ、人格の修養に勉めると言ふが、其の根元に溯つて考へれば、即ち家庭に於ける教育からして此の典型に則るのです。否

更に遡つて胎兒の頃から母親は此の觀念を抱いて、家庭敎育の責任を全うする事に苦心するのです。

▲慈愛と嚴肅

然れば子女に對する母親の敎育法は非常に嚴肅なものであるが、而かも其の嚴肅たるや我國などゝは餘程趣が異つて居ます例へば子供の遊戯の如きは非常なる弊害のない限り、大概の惡戯は何とも叱言を云はずに爲が儘にして置くから、日本の小兒と比較したら英國の小兒は如何にも惡戯が烈しいので、我々が見ると一種異樣な感を懐きます。

繪さがしの(2)



日本では小兒が木登りでもすると、直に親が飛出して叱言を謂ひます。で漸く木から下りて來ると、親は子供を側に呼付けて『木登りをして若し落ちでも仕たら何うします、斯んな危い惡戯を爲てはなりません』と先づ高き木に登る事の危險を訓め尚言葉を繼で『夫れに着物を木の枝へ引懸けでもしたら着物は台なしになるぢやないか』と衣服の裂切ることまで申聞けるのが通例のやうに見受けます。

然るに英國の子供はいくら、木登りを爲たところで、別段親は咎めもせず、却て時々は我が子供等に木登り

の競爭をさせ、巧に早く豫定の場所に逹した者には、賞誉を與るなどして、之を奬勵して居ます。幷んな場合には隨分頬の邊を小枝で拂はれて赤く血染むやうな子供も無いとは限らないが、之れを見ても親逹は別段「痛からう」と慰めもせず、又子供の方でも「痛い」とも何んとも言はないので、これで泣くなどは大なる恥辱と思つて居ます。そして斯の如く顔面へ輕傷でも負ふ程に競爭の烈しかつた子供は、最上の賞を得るが、若し一傷の痛さの爲に泣きでも仕たら折角競爭に勝つても反對に一週間位の懲罰を附せられる。先づ木登り丈に就て言つて見ても英國の母親は子供の膽力を養成する事に力を盡してゐるので、日本とは大分趣きを異にしてゐることが分るでせう。

▲人情の差違

尙ほ家庭教育に就いて日本と英國とを比較すると、日本では一般に子供を愛し過ぎる傾きが見え、泣けば直ぐに機嫌を取つて、菓子などを與へ、玩具を買つて遣るにも無闇に小兒の欲するに任せて、親が充分吟味し、撰定して遣るやうな事は稀である。然るに英國婦人は之れは姑息の愛だと、言つて斯かる場合には十分吟味する事を怠りません。蓋し尤もな話であらう併し其の代り英國では我子が成人して、一家を作つた曉には、最早親逹は我子の家庭に容喙するやうな事は決して致さない。從て親子の愛情は次第に薄らぎはせぬかと思はれるかで此點は或は英國家庭の欠點であるかも知れぬが、其他に於ては英國婦人の爲す所は洵に立派なもので、且つ其の信ずる主義によりて、飽までも進行する決心の強い所は歐米婦人社會に於いて、優に一頭地を拔いて居ります。

芋掘り

京城　山口妙子

そよ〳〵と吹き來る秋風は野の七草をなびかしてゐます、父上が熊手を肩にして行かれると私が草狩り籠を背負つて付て行く父上は芋畑の側で熊手を下されました、さて鍬を取て畑中の芋を掘り初めると勇ましく飛び出すのもあればぐづ〳〵してゐるものもあり、やうやく籠に満ちましたので又背負つて歸らうとしますと例の勇ましいのが籠から飛び出しました拾つて入れると又飛び出す、又拾つて入れる、この樣にして暫らくたつと又飛出したりして大へん面白いので、私は我家の仕事の中で最も面白きは芋掘りであると感じました。

庖廚

世界各國 食卓の嗜好

麻軒子

所變れば品かはる、國が異へば食卓の嗜好もちがふ料理のさま〴〵、喰べ比べて見ると其邦邦の特徴が分ります。たとへば同じ酒類にしても、英國人は『ウヰスキー』を好み、佛蘭西人は葡萄酒を嗜み、獨逸人は『ビール』を呷り、露西亞人は『オーツカ』を傾けるといふ樣に、食べる物に對しても、夫々嗜好が異ふのですから、此等國々の異なる風味のいろ〳〵を味つて見ることは、餘程面白いことであります。而して又その調味鹽梅に依つて、自然其國々の趣味も分り、好尙も分り、また風俗人情の一端をも窺ひ知ることが出來るのであります。

繪さがしの(3)



▲佛蘭西　は衣服に於て流行の中心點となつて居る如く、食物に於ても好尙の源泉となつて居ります、此邦の食品は上品で、鹽梅の妙を極めて、西洋料理の粹を盡して居りますから、巴里の御馳走を喰べたにあらずんば、

未だ以て本統の事は話せないのであります。重なる食物は麵包、肉類、野菜類でありますが、材料の善いのを使つて、それで料理人の手が利いて居りますから、美味いことは歐洲第一であります。佛蘭西の麵包は日本で拵えるものよりも遙かに旨い。而して格好は圓いのもある、四角なのもある、また長麵包になると五六尺もありませうか、食卓の丈にも餘る樣な見事なものです。佛蘭西では通例麵包を喰べるとバタを着けないで、他の副食物をお菜にして食するのが一般の風習のやうです肉類は重に牛と羊を使ひますが、豚肉、兎肉、鳥肉、魚肉なども度々食卓に上ります。而も此等の肉類が一たび巴里の料理人の手にかゝると、宛で別物の如く旨味しくなるのです。野菜は大根、胡蘿蔔、ジヤガ芋を首め、大抵な物は何でもあります。果物も澤山に出來て、其味も他國の產よりは數段口上等です。斯樣に肉類にしろ野菜類にしろ、天產物が潤澤な國柄であるから、庖廚を賑はす材料の多いことは、確かに佛國料理が他に優つて發達した一因であらうと思ひます。また葡萄酒は此邦の特產でありますから、丁度日本で正宗を好むやうな鹽梅に、一般に愛用して居ります。尙ほ飲料として麥酒、茶、珈琲なども用ひて居ります。食事は大抵日に三度で、食時には家族が一つの食卓を圍んで、一緒に喰べることになつて居ります。それで食事中は可成的談話を交換して、賑やかなのを喜ぶといふ風です。

佛國の料理は隨分金がかゝつて居りますけれど、是は單に巴里其他二三の大都會に於ける贅澤な社會を喜ばすに止つたもので、佛國全體からいふと、一般に節儉で、質素で、庖廚の經濟といふ事には最も意を用ひ猥りに食料を浪費する樣な無駄は少しも致さないのであります。殊に地方人の生活は極めて儉約なもので、稀に肉食をする位なもの、平生は褐色の麵包、林檎の汁豚の脂肪等を以て無上の御馳走として粗食に甘んじて居るのであります。

▲獨逸

の人は他の文明國のやうに口が奢つて居りません、隨つて料理割烹といふやうな事には餘り心を用ひない、何方かといふと冷

淡な方です。一般の食料としては矢張他國と同じく、麵包、牛、豚、魚、鳥、牛乳、牛酪、野菜等を用ひますけれど、材料が潤澤でありませんから、選擇其他に餘程不便を感ずるのです。それで料理法が極拙て、鹽が辛いと來てゐるから、佛蘭西の料理に馴れた口には一寸喰べられません。獨逸の中流社會の食卓は那麼ものかといふと、朝飯は大抵八時から九時までの間に、珈琲、牛乳、麵包、牛酪などで喰べ、晝飯は一時乃至二時の間で、スープ、魚類肉類、菓子、果物、珈琲なども喫しますが、此時が一日中で一番の御馳走であります。晩食は七時から八時の間で、ハム、冷肉、乾酪などの冷めたいものを多く用ひます。

繪さがしの(4)



また飲料には此邦特產の麥酒を用ひますが、丁度我邦で御茶を喫むやうな鹽梅に、三食每に呷るのであります。以上は先づ上等の部で、下等社會になると、食卓に上るものは黑麵包、野菜、又は甘藷位なもので、極く稀に豚や牛肉の一片を喰べて滿足して居ります。其代り麥酒を飲

むことは非常なもので、一ヶ年間に消費する麥酒の額は十五億圓に達し、而して其量は平均一人前が六斗六升餘に當ると申します。獨逸で麥酒を飲むのは男ばかりかと思ふに、左うでありません、婦人も、子供も、下女子守に至るまで皆な一樣に麥酒の洋盃を手にし、之を飲むは當然で、飲まなきや人間でないと思つて居るやうな風が見えます。

▲英吉利

は料理では佛蘭西に及びませんが、獨逸よりは上等です。英國の麺包は概ね切パンで、佛國の麭包のやうに美味しくはありません。また獨逸流の黑麺麭も用ひますが。是は英國の方が喰べられます。副食物としては重に獸肉、鳥肉、魚肉を用ひ、野菜、菓物も食卓に上ります。料理の仕方、調味の鹽梅は到底佛國にかなひませんが、併し英國には又英國特有の長所がありますので、却て英國料理の方を賞美する者もあります。飲料は重に「ウヰスキー」と「ブランデー」を用ひ、麥酒は最下等のものとしてあります。「ウヰスキー」は精酒分の多い、隨分強い酒であるが、英國人は甚く之を好んで、勞働社會の者の如きは殊に多量に飲みますゆゑ、其が爲め健康を害ふものが多いといふことです。

▲露西亞

では都會は相應に贅澤にも暮し、豪奢な風も見えますが、田舍へ這入つて見ると其は甚い貧乏で、世界に露西亞の農民程憐れな境遇にあるものはありません。まづ彼等の常食と申したら、裸麥で拵えた黑麺麭で、副食物といつても瓜の漬物、鹽魚、乾茸位なもので、肉類は一週の中に一二度しか用ひません。尤も南方露西亞の方では土地が肥えて、產物も豐かですから、黑パンの外に白パンをも用ひ、肉を喰べることも多いのですが、北部は實に氣の毒な程麁食であります。露西亞では飲料に茶を用ひる所から、どんな貧乏人でも必ず眞鍮の茶釜丈は備へ付けてあります。此茶釜の事を露西亞語で「サモアル」といひますが、此邦の人は家庭に「サモアル」が無ければ、一家の團欒がないものとして寂寞を感ずるさうです。露國で用ひる茶は紅茶と磚茶の二種ですが、

紅茶の方は重に上流社會に需用され、磚茶の方は下等社會に飲用されます。いづれも原産地は支那でありますが、近頃は日本からも行きます。併し茶の喫み方は日本とは違つて、湯に浸し、之に珈琲或は砂糖、橙の酢などを加へて飲むのです。だから本統の茶の風味はなくなつて了ふ譯です。それから茶丈では迚も烈寒が凌げないといふ譯から、『ウオツカ』と申す熱烈い酒を一般に呷るのです。又菓物類は、冬季ストーブで室内を暖むる時分に逆上を治す所の消涼劑といふので、冬の寒い頃は殊に賞用するのであります。菓子にも亦特別なものがあります。露

繪さがしの(5)



國の食事は午前十時に朝飯を喫べ、午後二時に晝食を認め、八時に晩飯を喫べるのが普通でありますが、優等な人になると朝は十一時に起きて、先づ茶なしたゝか飲み、午後二時に始めて朝飯を認め、四時に再び茶を飲み八時に晩餐を喫し十時頃三度目の茶を飲んで、十二時に成つて夜食をするものも珍らしくはない、隨分不ン氣なものです。

▲米國

は新開地で、何によらず澤山によく出來る土地ですから、庖厨に供給さるゝ食料は豐富であります。或學者の話に、米國の臺所で毎日捨てる所の殘物で以て支那人を

使ふ時は、優に五六千萬人を養へるといふたのを見ても、食料がフンダンにあることが分ります。米國人の常食は肉、麵麭、牛乳、野菜でありますが、殊に肉類は廉價ですから、之を用ゆる量も多く、平均一人の肉消費高は、英人の二倍、獨逸人の四倍に及ぶといふことです。實に米國は世界に於ける肉食國の親玉として、其國民は一番餘計に肉を喰べる所の人民であります。

▲印度

人種からいふと印度人は西洋人種と其系統を同じうするのであるが、食物は東洋的であります。印度人の常食は日本人や支那人と同じく穀物で、專ら米を食し、小豆、豆、稗などをも喰べます、だが印度のやり方は日本の樣に炊いて喰べるのでなくて、大抵團子の形にして口に入れるのです。ですから臼と杵とは戶每に必ず備へてあります此國は御承知の通り宗敎の制裁が嚴しいのと、最う一つは氣候が暑いとの爲めに、肉類を喰べることが少い殊に彼の波羅門種族にあつては生れてから死ぬまで一度も肉を喰べないで了ひます。飲料は重に茶と牛乳を用ひます。酒は宗敎で嚴禁してありますから、食卓に持出すやうなことはありません。食事は一般に午前と夕景との二度で、身分の良いものは諸種の副食物を添えますが、下々の者は唯だ粗末な飯を數椀お代りする位なものです。而して印度人の食事の仕方が面白い、歐米各國では「ナイフ」と「ホーク」を用ひ、日本と支那とは箸を用ひるのに、印度と土耳古とは五本の指を用ひるのです。赤ン坊ではあるまいし、御飯の手摑は隨分不體裁な話、蠻風と譏られても仕方がありません。

▲支那

は廣大な國でありますから、食卓の趣も土地に依つて大層な相異があります。まづ日常の食物を申せば、北方の滿洲では高粱を粉にして團子に丸めたのを常食と致して居ります。而して之に味を付ける爲に豚の脂を塗つて焙つたり、又は蒸し溫めて喰べます。だが南方支那では日本と同じく米を炊いて喰べます。尤も下等の農民になる

と、高粱、豆、粟等の雜穀、及び蕃薯の類を常食にして居ります。副食物は獸肉と野菜とでして、海岸地方は魚肉を多く用ひます。支那人の習慣は一般に二食で、十時朝飯の四時晩飯といふのが規則です。併し中流以上の家では點心と云つて、朝の八時と午後の二時頃に茶を飲みながら菓物、菓子の類を喫べます。謂はゞ日本の間食です。それから料理法の事を申しますと、支那人は一般に脂肪濃い物を好きます。中でも豚は殆ど常食品に成つて居りまして、日本で鰹節を用ひる樣な場合には、乾度豚の脂肪で味を付けるのです。だから何を喫べても脂肪濃い筈です。また冷いものや生のものを嫌ふ風習ですから、どんな貧民でも生水を飲むことはありません。而して獻立料理は甚だ巧みなもので、廉價な數種の材料で、夥多の食菜を作り殆ど少しの廢物も無いやうに使ひます。中流以上の家の食卓を見ると、いつも七八種の品が並ぶのでして、一汁一菜といふ樣な麁末な膳部ではないのです。殊に宴會などの際になると山海の珍味を數十種も陳列するのが普通の有樣です。だが下等社會ではそんな贅澤は出來ませんから、矢張一汁一菜に滿足して居ります。又料理の種類には北京料理、南京料理、廣東料理など云ふのがあつて

繪さがし(6)



夫々特色があります。その中でも廣東料理は餘程西洋料理を折衷して居りますから、吾々の口には一番是が適します。

▲朝鮮

は貧弱未開の土地ではあれど、食卓は割合に能く進歩して居ります。殊に香の物は日本よりも衛生的で、旨く喰べられます。朝鮮では矢張米を常食とし、農民は米の補として粟や稗を交せて用ひます。副食物は肉と野菜で、肉は豚、牛、犬、魚肉を多く用ひ、獸肉は漬物又は脯肉として貯へて置き、必要の時出して食べるのです。朝鮮人は食物に韮や蒜を混せ、胡椒で味を付ける風習です。此等の物は可なり旨くも喰べられますが、只だ料理法の不潔なのには驚きます。野菜は瓜、薤の樣な物は生で喰べたり、漬物にしたり致します。それから飲料としては多く米の煮汁を用ひますが、少し身分の良い處では蜜や茶を飲みます。朝鮮で出來る酒は、味が酸い上に可厭な臭氣がして、迚も吾々の咽喉には通りません。是は釀造法が幼稚な爲めでせう。

藥になる菓物

舟人

西洋人は食後に必ず菓物を喰べますが、是は良い習慣だと思ひます。菓物は總じて藥に均しい効驗のあるものですから、夫の餡粉と砂糖で固めた甘つたるい御菓子なんぞを食上るよりは、天然の妙味を含有てゐる清新の木の實を喫べた方が、餘ッ程體の爲には良いのです。仍て茲に人體の藥になる菓實に就て御話し致しませう。

尤も滋養分に富む菓物も古く成つて腐敗致しては、良藥却て毒藥になり、健康を損ふ所か、大患を致すやうな事もありますから、御注意までに良否を見分ける方法をも併せて説明致しませう。

○梅の子　は大層滋養分を有つて居りますから、梅干に致して蓄へ置けば、風邪を引いて熱がある時などには甘露にも優る効能があります。又た夏の暑い最中、一粒の梅干を辨當箱なり、飯櫃なりの隅に入れて置き

ますと、御飯の腐敗を防止ます。それから酒に浸けて梅酒に致せば夏日の飲料として最上等のものになります。夏の日盛り、梅酒の一滴を洋盃の冷水に落して飲んで御覧じろ、口中が清涼しく成つて熱汗も何處かへ去つて了ひます。

○青梅の子を卸し、裏漉しにして他の器に其の汁液を移し、之を四五日天日に當てゝ乾しますと、段々に凝固つて終には煉藥の樣になりますが、是は暑中流行の日射病、眼病其他の諸病に効驗があるさうです。▲癜風やタムシには松脂の細末と糯米の粉とを等分に交せ、梅干の肉で煉り合して、患部に塗附けると、立ろに治るさうです。

繪さがしの(7)



（注意）梅子は腐敗すると、外皮が破れて水液が出ます。這麼のを喰べると中毒ります。

○柿の實も喰べて旨い許りでなく、又藥になります。▲蝮蛇に嚙まれた時は、柿の澁を塗り付けると毒を消します。若し又た澁が無かつた場合には、澁柿を潰して其汁を用ひても宜しい。▲疣は、柿の蔕を煎じて服むと直ぐ止ります。▲餅を喰べ過ぎて胸の焦ける樣な場合には串柿を食べるに限ります。また酒の酔ひをも醒します。

（注意）柿は斷ると酸くなり、加之に酒氣を發しま

す。

○梨子　は風邪の時分の熱の出たのを治します。

（注意）外皮に黒色の斑點の發生たのは、腐敗した證據です。

○葡萄と林檎　は多くの滋養を人體に與へますが、別して結核病には適藥であります。

（注意）林檎は蒂の處に水氣の泌出してゐるのは腐敗つた爲めです。●葡萄は蒂の處から水液が吹出ても腐敗つた譯ではない。酒氣を放つやうに成つたのは腐敗つた徵です。

○柑橘類　▲風邪には橙子の酢に白砂糖を加へ、熱湯を注して飮むと宜しい。▲疼には柚子の皮を搗潰し、酒に浸して、其汁を塗付けると、効驗が見えます。▲男子方の疝氣には蜜柑の核子を炒つて細末に致したのを、溫酒と一緒に服用すると、痛みが去ります。

（注意）すべて柑橘類の外皮に靑色の黴を發生したのは腐敗つたものですからお氣を付なさい。

○楊桃　の半熟のものを鹽漬にし、毎日少々づゝ喰べて居れば、痰を去ります。また脚氣にも特効があります。

（注意）楊桃は外部爛れて漿液が出るやうなのは腐敗つたもの、又酒氣を放つのも良くない徵です。

○鳳梨　は胃病の適藥です。此果物は漿液に富んで居りますから、熱病患者には至極適當の食物ださうです。

○枇杷　は▲吐逆を止め、體熱をさまします、▲葉を煎出したもの、所謂枇杷葉湯は暑氣拂ひの効ある外に肺胃の病を治します。

（注意）淺黑色の斑點を呈はすやうに成つた枇杷は腐敗つたのです。

○桃　▲桃仁は皮膚の凝聚を解き、血の循環を好くし月經の通じをも適順に致します。▲汗疹には桃の葉を煎じて數回洗ふと治ります。又た桃の葉の湯で腰湯を使つても効目があります。

（注意）桃は成熟すると紅くなりますが、之が次第に黑くなり、指で押してみて水液の出るやうなれ

ば、腐敗つてゐるのですから口に入れては不可ません。

○李　は痼疾を去り、其他諸病に効能があります。

（注意）肉に茶褐色の斑點を生じた李は、已に腐敗りかけて居のですから、御注意あれ。

○栗と杏　は外傷に特効あり、▲刺を立てた場合には栗の實を搗卸し、之に甘草と飯を加へて能く煉つて塗り付けると、抜けて治ります。▲釘、針などを立てた折には、杏仁を搗潰して、胡麻の油で溶いて、塗り付けて御覧なさい。

○櫻桃　は脾氣を益して顔の色澤を好くします。

○無花果　も亦た不思議の効能を有つてをります。▲無花果の葉を搗き潰し、其汁を水蟲に塗付けると直に驗が見えます。▲痔病患者は無花果の實を食べてもよく、又た葉を煎じて風呂に沸し、其湯で沐浴すれば驗も痛も治ります。

（注意）無花果の外側が黒くなり、皮が破れて水液の出るやうなのは、腐敗つたのです。

○榧　も矢張水蟲に宜しい。其の用法は榧の葉を蒸燒とし、其上に水蟲を病む手を翳すこと、四五度にも及べば奇妙に治癒るものです又榧の子は痔の藥です

○銀杏　小便が近い時は、銀杏を毎夜寢しなに燒いて喰べるが宜しい。寢小便癖のある子供には此法を實行

繪さがしの（8）



さすべきです。

○胡桃　子供には能く壁土を喰べたがる病のあるものですが、是には青胡桃の皮を日光に晒して粉末々々にしたのを、毎日白湯で服ませれば治ります。また章魚に中てられたのには、胡桃の樹の皮を煎じて服用するに限ります。

○柘榴　▲其實は清涼解熱の効あるもの故、その漿液を搾つて舎利別に製して貯へて置くが宜しい。▲又葉の乾したのは凍傷の藥になります。▲絛蟲には、柘榴の根を掘り、清水で能く洗つて後、其外皮と甘皮を削げて、熱湯に煎じ出して服むと良いさうです。

（注意すべき事共）十分よく成熟した果物は以上の如き藥効がありますけれど、未熟の果物には恐ろしい毒分を含んで居るのもありますから、子供達に與へる時分には十分注意せぬと不可ません。例へば梅の實の如き、成熟したものは甘味があれど、まだ若い頃は鹽酸酒石酸を含んで居るので、生梅を噛つて中毒られたといふ話は、よく聞くことです。總じて不熟の果物の種子には、酸化水素と青酸とを含んで居りますから、少しにても此の毒を飲まうものなら、忽ちにして劇い毒に中てられます。だが、よく成熟したのになると、實の中にある種子が堅硬くなつて居ますゆゑ、子供が口に入れても咬み砕く恐れがありませんから、中毒するやうな心配はありません。果物の喰べ時は朝が一番滋養になります、其次は晝で、晩に成つては効能が薄いのです。

　朝喰べる木の實は金よ、晝は銀、
　晩は鉛の値打だもなし。

簡易 西洋料理

龜井まき子

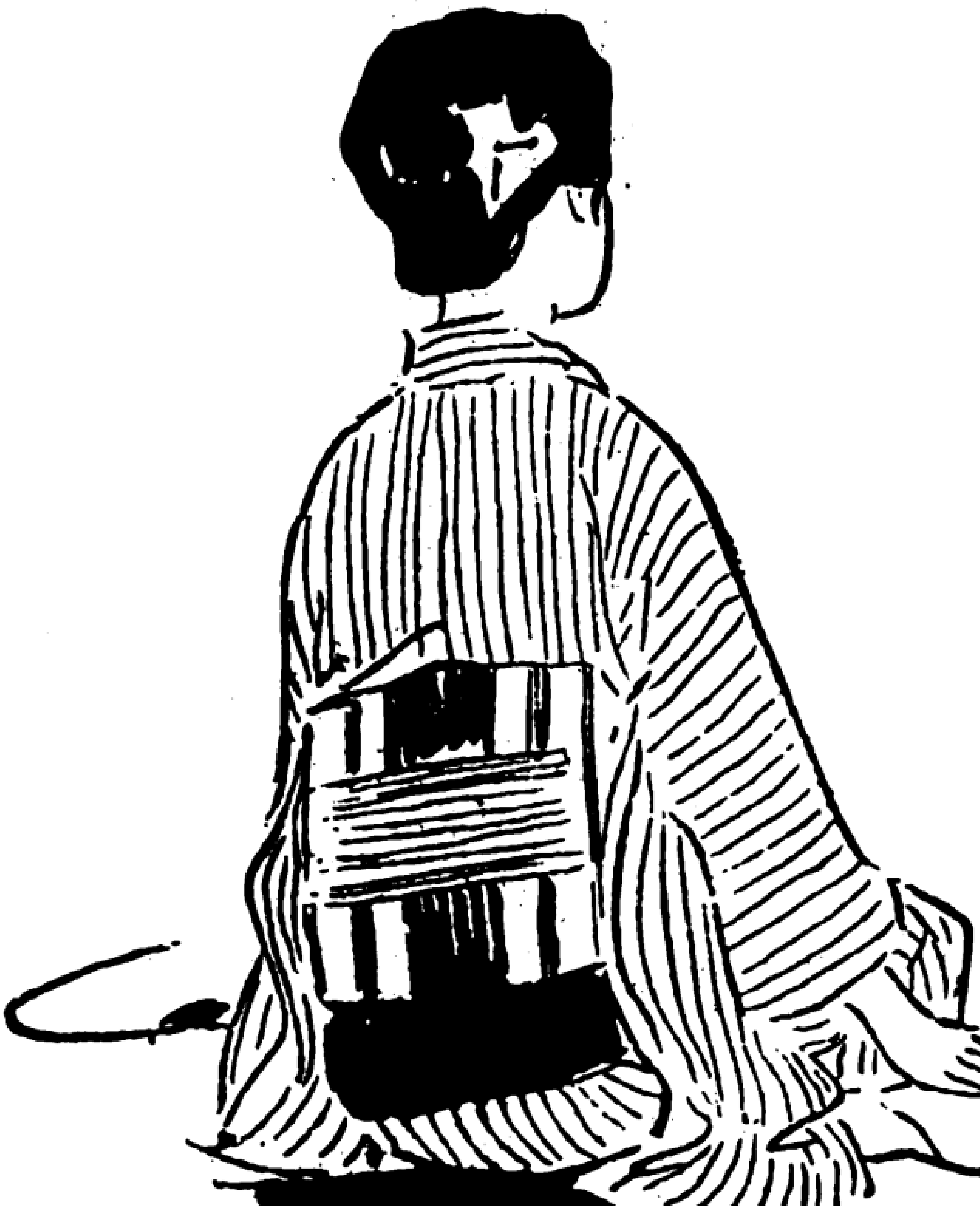
此季節に應じ一寸した晩食に用ゐる西洋料理を一寸申上ませう。

献立

一　スープ

一ボイルドフヰッシ
一チキンチヤップ
一マカロニベーキ
一ロースト・ビーフ
一菓子ジプローマン

△スープ　スープ肉を二百目位に水一升二三合と玉葱五個西洋人參六本馬鈴薯七個鹽大匙に一杯入れて共に三時間も文火にかけて汁を半分位に煮込むべし、煮上りたらば裏漉にて此汁を漉しよく冷して後卵子の白味二個を入れよく攪拌して火にかけ、絶へず箸か金杓子にて廻し居るべし、追々煮立つにつれて灰はうき上りて中の汁は澄むなり然る時に鍋を火より下ろして此汁をフランネルの布帛を掛け置たる鉢の中へうつすべし、この汁より出たる灰は殘らずフランネルの布帛の上に止りて鉢の中には澄みたる汁即肉汁がうつされあると知るべし、夫より此肉汁を別の鍋に入れ、食鹽を前の分量(即五合位)ならば茶匙一杯胡椒少々をふり煮立て肉汁皿にもり出すべし、又此肉汁の中へマカロニ一本位あらひ鹽ゆでとしたるを一分位にきりてこれを十個も入れ出すべし。



繪さがしの(9)

△ボイルドフヰッシ　當節(九月頃)ならば鮭か生鮭の鱗をとり鰓腸をぬき鹽をふり置き、一時間も經たる時水洗ひして蒸すべし此魚をむすといふは誠にむづかしき事にて、湯の魚の上にあがらぬやうよく火の通るやうに蒸すなり、蒸し上りたらば皿にとり、ゴールソースをかける

べし、又此ゴールソースの製法はバタを食匙一杯丈鍋に入れ、溶たらばメリケン粉食匙二杯入れ牛乳一合を追々入れ後ソップ一合鹽茶匙に一杯卵子の黄味三個を入れかき廻しながら文火にて二十分も煮込むべし、煮上りたらば胡椒を入れ冷めたらば蒸したる魚の上へかけて出すべし。

△チキンチャップ　鷄の雛を毛焼をなし筋をぬき翼をきり足をきり皮をむき兩腿をとり兩肩の肉(さゝみ)をとり骨附のまゝ肉の兩面を庖刀にてよくたゝき鹽胡椒を兩面にふりて又たゝきて後皿にのせ一時間も置たる後ヘットをフライ鍋に溶かして前の骨附の雛肉をよく煎り附け、狐色になりたらば皿へ盛るべし、附け合せとしてマハシポテとパセリを盛るべし、マハシポテの製法は馬鈴薯の皮をむき鹽少々と共に鍋に入れ、水から二十五分も煮るべし、よく軟かくなりたらば水をこぼして芋の入りたる鍋を火にかけから〳〵に粉のふく迄煎りて鍋から芋をうつし、裏漉しにかけ鹽、胡椒牛乳少々を入れてよく捏ね合せよき程にまるめ形をこしらへつけ合せとすパセリはあしき所をとり二三本つけるべし。(雛一羽にて四人前の分量なり)

△マカロニベーキ　マカロニ四半斤位をよく水洗ひし鹽を少々入れて煠で軟らかくなりたらば笊にあげ置く、鍋にバタ茶匙に一杯位入れとけたらばメリケン粉茶匙に二杯入れてとかし、ソップ五勺位と赤茄子一個を茹でゝうらごしゝたる汁(凡食匙に四杯位)と鹽を茶匙に軽く一杯位入れ十分間も煮たる後、鍋をおろし牛乳食匙二杯位入れたる汁を茹たるマカロニをパイ皿(パイ皿がなくば丼にて應用すべし)に入れたる上にかけ、パセリを少々細く刻みたるとバタを少々載て此パイ皿を天火に入焼べし三十分も經たらば取出すべし。

△ロースト ビーフ　牛肉二百目位大塊のまゝ鹽胡椒をふりサラダ油と西洋酢少々をかけ置一時間もへたる時天皿(天火の中にある皿なり)に此肉をのせ生脂かヘットを入れて二時間位焼くべし、焼け上りたらば二分位にきり天皿にもりて此肉より出たる汁を此肉の上にかけ出すべし、又此肉をやく時に馬鈴薯の皮をむきて

天皿の上即ち肉の廻りにならべ共にやくべし、此芋を前のやきたる肉の附け合せとすべし。(二百目の牛肉は八人前位の分量と知るべし)

△菓子ジブローマン

鍋に水を入れてよく煮たゝせ



繪さがしの(10)

又ゼラチン六枚を水に二時間もつけをく前の鍋の水がよく沸騰したる時別の鍋(前の鍋より小なる鍋なり)に牛乳二合と白砂糖五十目位と卵子五個(但し黄味丈け)を入れて鍋ごと沸騰したる湯の中へ入れ、中の牛乳を絶へずかきまはし居るべし、卵子砂糖がとけたる時水につけたるゼリ天を水をよくきりて入れ、よく／＼かきまはし溶かすべし、溶けてどろ／＼になりたらば、鍋を出しレモン油少々を入れ、よく冷すべし、冷へたらば前にとりおける白味を泡立てよくかきまはしゼリー型(ゼリー型がなくばブリキの鑵などへ入れるべし)に入れ氷にてひやし固めるべし、一時間も經たらばよく塊るなり是をゼリー型ならば湯に底を一寸つけて皿にうつむけ置きてたゝく時は塊りたるもの自然と皿へ出るなり、是に食匙をつけて客に出すべし。(爰にいへる分量は凡八人前位の分量なり)

將校婦人會の新案服

近來諸種の婦人會の盛行に伴れて婦人が服裝を競ふの風を生じたるは嘆はしき次第なるが、陸海軍將校婦人會にては此に顧みる所あり、且つは會員をして明に服裝に表示せしめて瑣細なる行爲に於ても世の模範たらしめむとの目的を以て、頃日會長大山侯爵夫人の發意に依り、幇助員高橋宗雄氏をして質素なる會員制服を考案せしめたり。

之を一見するに品は上品なる紺のカシミヤにて若き婦人にも老婦人にて適せしめ、襟は吾妻コートと同樣に刳り取て返す樣にし之を打紐にて前方に結び、袖は在來の衣服と同じきも婦人衣服の贅澤の現はるる八ツ口をホックにて止めて下の衣服を隱す樣にし、腰より下は幾重にも襞襀を取りて捌きの能き樣に作りたり。其の襞襀の取り方は普通の袴に倣ひて見苦しからぬを旨とせりと雖も之を多く橫腹に取りて歩行の便を考へたるは稍々趣を異にす。胴は前後とも同じ巾にて背に帶を取り付け前に於て結ぶやうになせり。胸は一ヶ所ホックにて止め其處へ小さき記章を挿す樣にし、其の下は四ヶ所の隱し釦鈕にて止め前膝も同じく襞襀の陰に四個の釦鈕を有し之にて止める樣に拵へたり。

袖口の止、袂、袖の返りの三ヶ所内側には各一個宛の鳩目を附し、之れに二條の細紐を入違へに通しあり。用事の時には此の紐を引きて袖を絞り左右より結びて肩に掛くれば恰かも襷を掛けたる如くに甲斐甲斐しき扮裝となるなり。胸と背の寛やかに膨らむ場所には内側にヒア色の組紐あり、之を絞りて襟中にて結ぶ時は能く引締りて格好を良くする樣に工夫せり。而して左の胸の外側には共色の片地にて作りたる記章を附する裝置ありて是れ將た一の裝飾となり居るなど一々周到なる注意を加へられたり。殊に深く意を用ゐられたるは唯一枚にて夏冬に兼用せしむる爲め下に着する衣服の多少に應じて胴の伸縮を自在ならしめたる事にて、上に述べたる組紐に依りて八寸位の伸縮をも爲し得べしといふ。

此の衣服は高橋氏が最初帶を用ゐざる樣考案したるを後大山夫人の注意に依りて帶を附したるものにて、之に依て餘程胸の締を良くしたりとなり。尚は此の考案に對し胸の打紐は存すべきや否や、襞襀は眞直にすべきや下廣にすべきや、其他色合等に就ても樣々の意見があるよしにて未だ確定の運には至らざるも、大體に於て成効したるものにて大抵は之に變更を加へざるべしと

衣服改良の事は多年の宿題にて難事中の難事なるが、高橋氏が能く此の和洋折衷の新案を出して日本服に釣合はしめたるの勞は大に多とすべし。袖裏に紐を通して襷に代へしめ、或は胴の内側に紐を通して伸縮を計るなどは、餘りに拵え過ぎて稍々實用に遠ざかるかと思はるれど、兎に角に斯る改良案の出來たるは記者の最も喜ぶ所なり。

（口繪參照）



廂髪流行の根元

西洋婦人の理髪法

巴里コワッフーズ夫人談

エム、エス生筆記

一、婦人の髪の結び方
△流行によるべし
△髪の性質によるべし
△顔のかたちによるべし
二、流行の束髪法は如何
△「カメリ十巻」
△「高廂 即ち「千八百九十五年式」
△「丸 廂」
△「平 廂」
三、高貴方の結び方
△「分け髪」「第二帝國式」「フイリップ式」
△各國妃等
△英后、露后、獨后、等
△大統領夫人等
四、女優の髪は如何
五、女學生の髪は如何
六、小兒の髪は如何
七、巴里の理髪師と其の理髪賃

婦人の髪の結び方

○第一は當時の流行に隨ッて結ばなければならぬ、諺にも「流行は理髪術を制す」と云つて有ります、佛國にても他の各國に於けると同じく、古來種々の流行を經過して今日に至ッたわけであるが、古代ローマ國の盛んな頃には處女の髪はすべて長く肩の上に乘らした相だが既婚の婦人は之と反對に全く髪を頭の上に小さく丸め、其上を布片で包んでしまつて見えないやうに

したものであつた、今日では既婚と未婚とを髪の結び様で區別すると云ふやうな事は文明國にない風俗です併し「今日の日本」と云ふ書物を見るとまだ日本には其風俗が殘つて居ると書いてあるやうです、さて十七世紀の頃(記者曰く我が德川時代の始めより元祿頃迄)佛國では前髪を一つまみ切り下げたり、茶褐色の染粉を練つて附けたりする事が流行しました、それは御國(日本)などの如く黑い髪を珍重して居るのとは反對な考ですが、すべて佛國では黑い髪の婦人は其煉粉を附けて茶褐色の髪のやうに見せました次第です、ルイ十四世、十五世、十六世頃(今より百年以前で我が天明の頃)には髪を高く八九寸より一尺位まで持ち上げて頭の上に大きな建築物を戴いたやうな風俗もありました、是等は今から見れば、ほんとうに馬鹿らしくて評しやうも有りません、強ち日本の丸髷や高島田などが西洋人におかしいとて笑はれません、兎に角萬事其通りで髪の結びやうなどは、専ら流行を追ふたものであります。

○第二は毛の性質によつて結ばなければなりません、日本では我々西洋人を紅毛とか赤髯とか云つて、すべて毛は赤く且つ縮れて居る者と思ふて居るやうですが我々西洋人、殊に佛國人などは赤い毛が五分、黑い毛が五分で、また縮れ毛が五分、縮れない毛が五分です、色も黑く縮れもせずに、全く日本人と同一の髪を持つて居る者も少なくは有りません、概して歐米に於きましては髪の色は「ブロンドの髪」と申しまして、茶褐色の色を帶びたものを最も美しいと稱して居ます、其他髪の色によつて、附ける油や、入れる假髪を異にしなければなりません、又髪のあまり細かに縮れたものは、それを少し延ばしてそして少しも縮れて居ない者は、燒き棒(鐵で作つたものです)で縮らかしますそれから髪の毛の大小と硬柔と多少とによつて、髪の結びやうが似合のと似合はぬのとが有りますから、高く結び上げたり、平たく押しつぶしたり、うしろの方に結んだり、わきの方にふくらしたりする心得が肝要であります、縮れない髪をわざ／＼縮れさせるのは、

四百年以來の佛國の風俗で、今日も盛にやります。
○第三は顔の形によつて結ばなければならぬ、顔には丸顔あり、面長あり、又額の廣い人あり狹い人あり、又生へ際の長い人あり短い人あり、ですから額が廣く生際が長く、顔の長い人が、髮を後の方に引き上げて高く結ぶやうな事は髮結ひの方式に背いて居ります、其他髮の結ひやうは職業にもより年齢にもよつて斟酌しなければならぬ。

流行の束髪法

○今日西洋、殊に巴里の交際場裡で婦人方の結つて居られる束髪の種類を大別すれば三四種になります、更に之を細別すれば又十二三種にもなります。
○第一は「カメリヤ」巻と名くる結ひ上げの髮です、カメリヤとは椿の類を云ひます、其髮の結ひやうが椿の花の開いたやうに見えるので此名が付けられました、又一名「メジシス式」とも云ひます、メジシスは昔の貴婦人の名です、此髮の結びやうは英國皇后陛下の御髮の如くに髮を輕く柔かく前頭を波狀に縮らせて置きます、そして後の髱はかきあげて櫛でとめて置きます、併し髮の多い人は、オーストリヤ皇后陛下のそれの如くに髱をあげずに餘つた髮を頸窩の上にたぐねて置きます、又前頭の所は大きく波よせて居るもあり小さく縮れさせて居るもありますが額の上に架け出さないのが此「カメリヤ巻」の特色で中年の方は大抵「カメリヤ」巻を御好みになります。
○第二は「リウーズ」巻と名くる架出し髮であります、



繪さがしの（11）

御國の流行語で云ふ「廂髪」と云ふ者を總稱して「リウーズ巻」と云ひます、「リウーズ巻」とは風流洒落の意味です、當時日本で大流行の「ひさし髪」と云ふ結び方は大抵額の上にふくらかし且つ高く結ひあげる様ですが之は我が佛國では「千八百九十五年式」と申しまして、今より十二三年前に流行した結び方ですーハ、ア二百〇三高地式とは數字を以て數へる點が、よく千八百九十五年式と云ふに似て居ます、他の「リウーズ巻」の一種は丸く額の上に架出したものです、此の丸い「リウーズ巻」を日本の女學生さんなど好んで結ふ方もあるやうだと聞きました、高廂よりは丸廂の方がよくはありませんか、さて又他の「リウーズ巻」の一種は平たく額の上及び兩側に架け出したものですこれはシャッポを冠ぶる佛國の若い人たちに好まれて居ます、尙ほ毛の多い人は額に充分に架け出した上に大きな結び玉を頭の上に置く者も見えます、高廂、丸廂、平廂ともに、概して若い方が御結ひになります。

○第三は「分け髪」です、髪の分けやうに又二種ありまして、一つは分けた髪を額の兩側或は顔の兩側にふさふさと膨らかして置くもので之を「第二帝國式」と名けますホルテンス女王及び西班牙の名優オテロ嬢の髪の如きはこれです、今一つは分けた髪を後ろに持つて行つて結び止めるもので、之を「ルイ、フイリップ式」と名けます、昔のジュアン、ダルクの髪、クローチルド女王の髪等はこの「ルイ、フイリップ式」に結つてあります、「分け髪」は老若ともに御採用になります。

○其他に「高結び」「撫であげ髪」「さげ髪」「額の切り下げ」（大山大將夫人のは切下を縮らせたのです）等いろ／＼有りますが「撫であげ髪」は毛の少い年寄りの方が結びます、「さげ髪」は若い方がいたします「額の切り下げ」は若い人の結ひ方ですが近年流行が殆どすたれました。

高貴方の髪は如何

○后妃の方々とても我々人民の髪の結ひやうと違ふべ

き譯がありませんから、全くそれ〴〵の御好み次第ですが、其好みも時々變化して一定はして居ません、こゝには其好みの一端を御話申します次第です。

○第一に「カメリヤ卷」を好ませられるは英國皇后陛下露國皇后陛下、英皇太子妃殿下、英エヂンブルグ女王殿下、西班牙皇太后陛下、イタリヤ皇后陛下、獨逸皇后陛下、デンマルク皇太后陛下、墺國皇后陛下、ポルチユガル皇后陛下、等であらせられる英國皇室の御束髪は皆よく似て居る結ひやうと拜見いたします、ポルチユガル及びイタリヤ兩皇后陛下は餘りに髪を高く結び上げて居られドイツ皇后陛下デンマルク皇太后陛下は後頭部に結んで居られ、墺后陛下はぼんの凹の上に結んで居られます。

○第二に「分け髪」を好ませられるは、ジユアン、ナポレオン女公殿下、フアリエール大統領夫人、モンテチグロ妃殿下、サキソン、ルイズ殿下、瑞典皇后陛下アビシニヤ皇后陛下、及び羅馬法皇の御妹等です、フアリエール大統領夫人、スエーデン皇后陛下、ローマ法皇御妹の方々の御髪は分けた髪をうしろの方に引きしめて居られます、モンテチグロ妃殿下の御髪は同じくうしろの方に引きまとめて大きな結び玉を作つて置かれます。

○第三に日本風の高廂を好まれるは獨逸皇太子妃セシル殿下、ローゼヴエルト大統領夫人等で丸廂を好まれるは西班牙新皇后陛下、オランダ女王殿下等です。

○第四に撫で上げ髪を好ませられるはペルシユム皇后陛下、ギリシヤ皇后陛下等、但しローマ法皇御妹君、瑞典皇后陛下等の御髪は中央より左右に分けて居られるけれども大體撫上げの風に入るべきでありませう。

○政治家、外交家、豪農商其他紳士の奥さん方の髪も大抵若い方は「廂」が多く、中年以上の方は「カメリヤ」が多くあります、分け髪も少はあります。

女優の髪は如何に結ばるゝか

○流行の本元なる女役者の髪は如何に結ばれるかと申ますと是も各人の好みによつて結はれてありますが併

し一々區別して申上げるも御一興と存じまして、

○「カメリヤ卷」に屬するは佛國女優の首たるサラベルナル女史、米國女優の首たるマキシム、エリオツト女史、フランダツ女史、メリー、マンナリング女史、

○「廂」では「オペラ」座のルーヴイエー孃、ヤーヌ孃、チエテール孃、ド、ヴイエー孃、ビエラー孃、等でルーヴエー孃、は前髮を少し切り下げ、チエテール孃は結び玉を高く頂きの上に立てゝ居ます、ラヴアリエール孃の「平廂」は巴里下等社會が好んで結ふ所のものです。

○「分け髮」では美貌世界一と聞えた西班牙のオテロ孃、英國第一流の女優パトリツク、キヤメル夫人、米國で名を賣り出したるアンナ、ヘルド孃、巴里有名の歌妓グレロ孃、米國女優エドナ、メー孃、美髮世界一と聞えたる白耳義生れの女優クレオ、ド、メロド女史等皆少しづゝ流儀は違つて居ますが併し皆「分け髮」の部です。

女學生の髮は如何

○極若い女學生は多く髮をうしろに下げて中頃をリボンで結んで置きます、其リボンで結んだ下をたゞ下げておくもあり又支那人の髮のやうに組んで下げて居るもあります、又下へさげずに頸の所にたごめて置くもあります。

○少し年うへの女學生になりますと額の上に「廂」に出しまして殘りの髮をうしろに垂れるもあり、頸の所にたごめて置くのもあります。

○「分け髮」をして居る女學生も少しは見えます、

○十七八以上になりますと「丸廂」「平廂」または「高廂」等いろ〳〵好みによつて結びます。

子供の髮は如何

○多くは分けて左右の肩の上に垂れるか又は後の方へ結び下げます、下げ髮は多くは燒き棒で手入をして奇麗に捲かせて置きます。

婦人理髮師と其賃錢

○歷史に於て有名なるベリー女公主の理髪師は男子でありましたが今でも男子で婦人の理髪を業とするものも、少なくありません。

○巴里で有名な婦人理髪師はオペラ附近でカプシヌ街七番地のノアラー舖、それからラポアジエー街のデフオッセー夫婦、それからプテシャン街のジユリアツク屋等で、かもじ師と髷師とを兼ねて居ますそして立派な繪入定價表を備へて置きます

○婦人の髪結ひ賃は普通一フランより三フラン以上(四十五錢より八十錢、及び一圓以上です、)いろ〳〵あります。

繪さがしの(12)



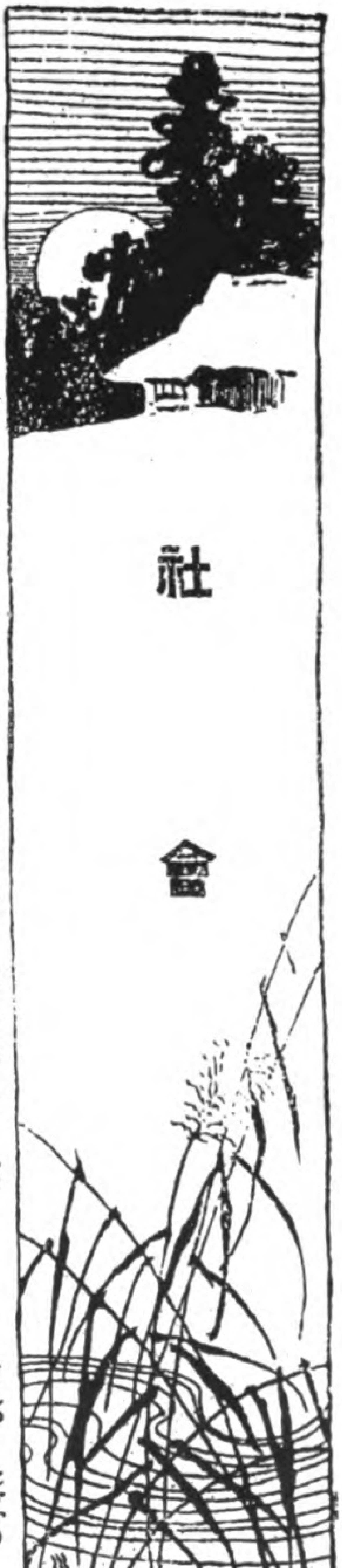
この繪の中に蝶が幾羽居ますか

▲婦人の勞働と乳兒の死亡率　佛蘭西のパリーでは乳兒の死亡數が非常に多い、甚しきは生れた子供の中の六割が一年未滿の中に死でしまふ年がある。歐洲の各都市では平均して百人の乳兒中三十人はどんな市でも死んでしまふ。何故コンナに死亡するかとダン〳〵研究して見ると、子供が生れても親が自分の乳で養ふ事か出來ないからである、母親は自分の亭主と一緒に服さなければならぬ產後二三週間は未だ子宮が全く收縮して居ないので立働きを許されぬ時であるが、パンの爲めに働かなければならぬ、ソレデ仕事に出る時は子供を預り所に預けて出て行く、子供には番號を付けて置いて歸りに番號札と引換へに引取て來る、まるで下足の樣だ。然らざれば近所の子供に守りを賴むで行くので、殆ど子供を據ふことが出來ぬ、食料には牛乳を飲ませる、(日本では非常に高いが獨逸などでは五合五勺の牛乳が七錢五厘位で買へる)處が其乳が甚だ不良である、消毒しても不充分其れが爲め消化器を損じ下痢症を起して骨と皮になつて死んでしまふ。

衰亡の活畫圖

（韓山特殊の史劇）

有磯逸郎

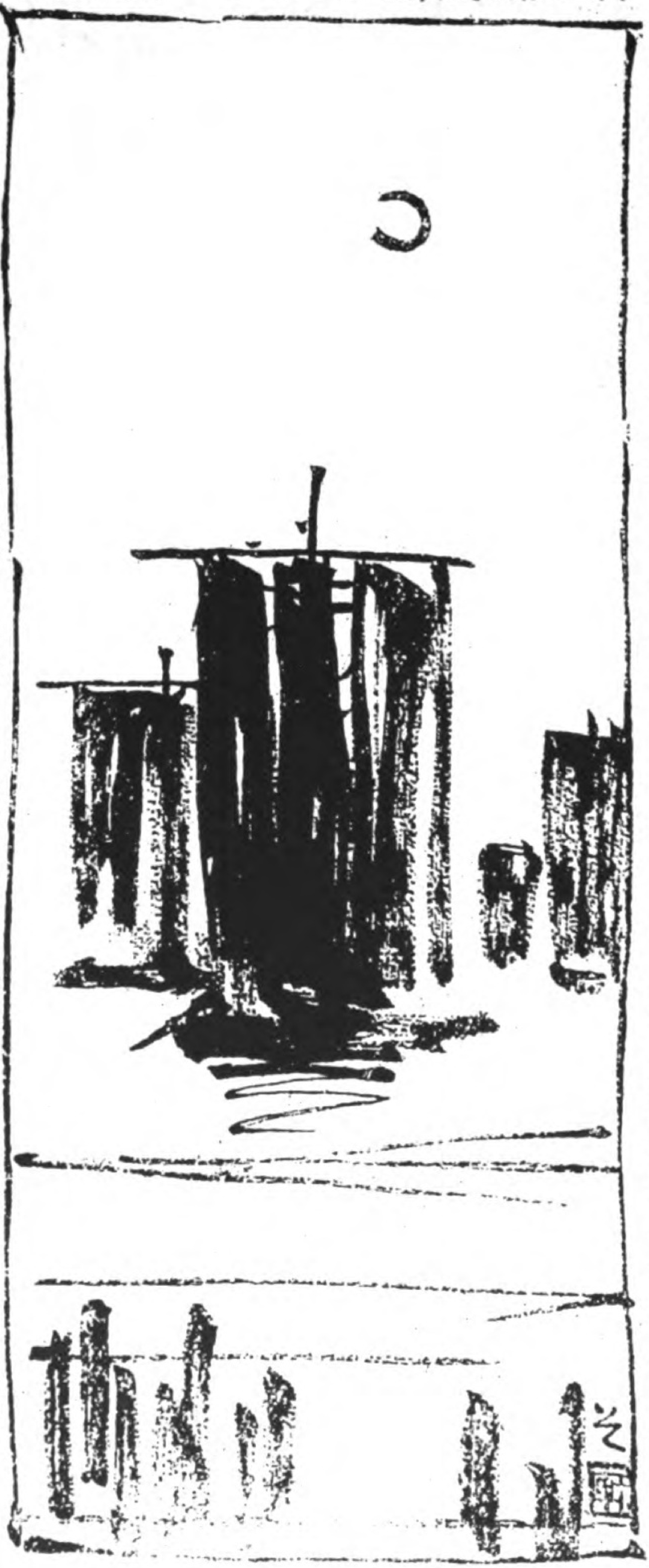


○朝鮮の騒擾も、如何やら一ト先段落が着いたらしい。自分は新聞紙の報道で。想望してゐる丈けで、實情は瞭然しないが、二三朝鮮通の所説を參考として、昨今の朝鮮を見れば、幕末當時の江戸城、或は豐臣氏沒落の大阪城に輪を掛けたやうな亡國の一大史劇、古今東西有らゆる亡國の歷史を目前で見るやうで、謂ふべからざる趣味を覺ゆる。で、同情の眼を以て見れば、慘たる一大悲劇で、太皇帝の如き、嚴妃の如き、若くは朴泳孝、李道宰等、皆それ〴〵特種の事情と、性格とを備へて、黑雲密々として、慶運宮の彼方を封じ、史劇家に無限の材料を供へて、哀愁を帶びてゐる。特に史劇の主人公たる前皇帝の人物が、朝鮮人の粹を鍾めて、日本人にも支那人にも將た露國人にも見るべからざる一種特別の性格である丈け其れ丈け、此の大史劇に一層の悲慘が加はる。併しながら局外に身を置き、日本人といふをも暫らく忘れて、今度の騒擾を見ると事々物々滑稽の色を帶びて、皇帝の讓位も、李總理等の苦諫も、朴泳孝等の態度も、侍衞隊の暴動も、喜劇の材料と爲つて、余輩の前に現はれてくる。

悲劇か、喜劇か、看者の見る所に委て、聊か余輩の聞る所を擧て、讀者と共に、韓國衰亡の活畫圖を見やう。

○

『朝鮮の宮廷は陰謀の府』、とは世人の稱してゐる所だ。――一體專制君主國の宮廷は啻に朝鮮ばかりでなく、何れの國に於ても陰謀を以て充滿するのは古今の慣例、特に朝鮮の如く強國の間に挾つて、他國の機嫌氣褄を取る國柄では、表裏反覆は唯一の生命で、陰謀は國家を維持する唯一の武器だ若し朝鮮人より朝鮮官吏より、朝鮮皇帝より、朝鮮宮廷より、表裏反覆の精神と、陰謀の武器を奪ふと、朝鮮の國家は、空零と爲て仕舞ふ。



外部を密閉して、內部に温突を焚いてゐる朝鮮の家屋は、能く朝鮮人を現はしてゐる。すつと往返を通つた丈けでは、朝鮮の家屋は平々凡々である。けれども、温突の火氣は生暖かく、醞釀してゐる、醱酵してゐる。

朝鮮皇帝の住み給へる慶運宮を見ると、一層興味あり、規模の大小は兎も角も、構造が待合風に出來て、北よ

り東に掛けて、露國、米國、英國の領事館あり、西は壁一重隔てゝ佛蘭西の領事館と接近し、中和殿と侍衛隊の、石垣で挾まれた隘路は、崇明外門に通ずる道筋で、くねり〳〵て惇德殿あり。崇明外門より内門に入ると、粗末な西洋風の建築物が見ゆる。陰謀でなく、表面の政治を聞こし召さるゝ重明殿で、後方に廊下續きの、軒の低い、亞鉛引の家屋が、太皇帝及新皇帝等の御座所である、女官部屋は、九尺二間の長屋風に、御座所に續いてゐる。

歷代の系圖寶物の納まつてゐる欽文閣に隣り合つてゐる建物は、閔妃の靈を祭つてある景孝殿で、西北にぼんやり立つてゐるのは章成門で、雜輩は此處より出入して、太皇帝や嚴妃の御機嫌を窺ふのだ。露國の領事館は徑路を隔てゝ直ぐ其處に建つてゐる。――朝鮮の宮殿は、概略と斯んな風に出來てゐる。若し日本人にして、突然と、此の建築を見ると、宮殿といふよりも、むしろ待合の構造を連想するで有らう。秘密を喜び、闇黑を喜ぶ朝鮮の宮殿としては、極めて簡易に、極めて巧妙に出來てゐる。廷内はどんよりとして、薄暗い。

表面の重明殿には、或は伊藤統監の勢力が普及してなかつたらうが亞鉛屋根の、廊下續きの宮廷にては、統監の勢力も、日本國の勢力もなく、太皇帝を中心として、神師（巫女）と雜輩の間に圍まれながら、杲日の如く輝やいてゐるのは嚴妃の勢力である。

○

天に二日あり――朝鮮では何時も二ツの勢力が駢んでゐる、政治の上では、統監の勢力と皇帝の勢力とが駢んでゐる、亞鉛引の宮廷では、表面の勢力は太皇帝で、内部の實勢力は嚴貴人の手に握られてゐる。

駢して嚴妃の左右には、幾多の勢力が圍繞してゐる、嚴柱翌、嚴相燾の二兒は、最も親近たるものであるが、元老株では、趙秉式、閔炳漢等が、隨一等。その他幾多の智惠袋は、嚴妃を取り捲いてゐる。で、嚴妃の寵愛は其腹に出來た英親王で、最も惡んでゐるのは、純和宮と伊藤統監である。――一體嚴妃といふ婦人は、十

年前に沒く爲つた閔妃のやうな女傑では無い、若し民間に在ると、男子の意を攬くに一種の巧慧を有する、才はちけの婦人といふ位のものであらう、けれども幸か不幸か、此の婦人は宮嬪の髪結から立身して内人と爲り、尚宮に進み、英親王を產み參らして氏なくして玉の輿、遂に國母とまで仰がれんとする果報芽出度き身上と爲つたのである。卑賤より身を起こした婦人であるから、經歷に幾多の浮沈があるのは、新聞紙の報道を待たずして判つてゐるが、廷外に身を出だして政治に嘴を入れるやうな女傑でなく、宮廷の婦人としては、むしろ平凡に近い婦人である、が、英親王を產んで步一步、位置が進むと共に、朝鮮の運命と喜憂を同ふ



するに至つたので、眼の上の瘤とせる義和宮に對して屢次怪腕を揮つたのは、境遇より來つた自然の成行で韓國の如き國柄では、蓋し已むを得ない次第で有らう。

●●●義和宮といへば、伊藤統監と相前後して、東京と京城とを往來してゐる、一種悲慘の境遇に立てる貴公子であるが、普通平凡の嚴貴人も、此の義和宮に對しては、空恐ろしき猜嫉となる。で、この弱點を知つてゐる雜輩等は、之を好機會にして、金儲の材料に遣ふから堪らない。嚴妃は何んでも此の義和宮の爲に、遣つた金員は莫大なものだ。

讀者は義和宮が米國に遊學して、その中途、幾度か日本に歸つたのを知つてゐるであらう。之は嚴妃の此の弱點を材料に金儲けせんとする有象無象の策略で、日本に義和宮を招いて、嚴妃より運動資金を絞らんとする苦肉の計略であつたのだ。といふのは、義和宮の日本に在るのを以て自身の運命に非常の影響あるものと嚴妃は鬼胎を懷いて居らるゝのだ。玄英運の妻の彼の貞夫人などは著しきもので、伊藤侯をおとうさんと呼ぶ口前で、嚴妃に取り入り、義和宮を材料に、數萬の金額を掠めたと聞いてゐる。啻に玄英運ばかりでなく、志士で御座いと綺麗な口を利いてゐる連中で、嚴妃のお手許金をせしめ取つたものは、余輩の知つてゐる丈けでも二三人では無い。その半生に幾多の苦楚を甞め來つた嚴妃も、愛子の爲には盲目同然、虎の子のやうに大事にせる資金を湯水のやうに遣つたのである。

加之、英親王を世に出だす爲に、資金を民間に廻はして、殖利に意を向けられたのも、ちよと注目に値する。

こゝに矛盾した性格ではあるが朝鮮人は貨殖に就ては却々拔目は無い中に就て最も拔目の無いのが、太皇帝で、內帑は何時も窮乏を訴へてゐるが、獨り太皇帝自身は、腰邊にちやら／＼した金庫の鍵と共に、何時も有福で入らせられる。若し太皇帝の胸中に入つて言へば、朝鮮皇帝の榮冠も欲しいが、金貨の千萬圓も目

前に積んだ方が、内心愉快とせらるゝに相違ない。のみならず一面からいふと全く子孫安全な謀で、今こそ自分は一天萬乘の君であるけれども何時大國の爲めに亡され、流浪せぬとも限らぬから、今の内成可く財產を造つて子孫の計をして置かねばならぬといふわけである一天萬乘の皇帝でさへ斯うであるから、鰻上りに、卑賤より身を持ち上げた嚴貴人が、貨殖に意を向けらるゝのも無理はない。――斯くて愛子を世に出だす異日の爲に、窃と資金を民間に出だして地所に換へ、或は高利に廻はされるといふ風評さへあり。



惟ふ見てくると、嚴貴人は一種の事業家であるが暫らく嚴尙宮の身と爲つて考へると、之も已むを得ない事共であらう。

なほ嚴妃には一ツの秘密が有る、それは皇太子（現皇帝）に對する嫌厭の情である。太皇帝の子煩惱であることは、新聞紙の記事にも見へてゐる。三十幾歳の皇太子を三歳の兒童のやうに激愛せられたといふのも事實である。併しながら、嚴妃に取つては、皇太子（現皇帝）は、義和宮と共に、眼の上の瘤である。いや、内心を探ぐると、義和宮以上に一種憎惡の念を持つて居られたかも知れない。……それかあらぬか、今より十一二年前、奥深き宮廷の溫突の隙間より、一種の風評が傳はり傳はつて、余輩の耳朶を打つた。――讀者よ、新聞紙は現皇帝が身體が不健全だといふことを報じてゐる。併しながら、這は或種類の手に依つて、特種の藥餌を用ゐられた結果だと噂せられてゐるのは、奇怪千萬ながらも、皇太子（現皇帝）側の者は、此の奇怪の風評を是認してゐるを見ると、余輩には一種の意味を以て迎へられる。

○

斯くて日露戰爭と爲り、日韓協約と爲り、統監府の設置と爲り、一進會の内閣と爲り、太皇帝側も、嚴妃側も、手を空うして成行を眺めてゐると、棚から牡丹餅のやうに落ちて來たのは、海牙の平和會議である。

而して爰に驟然として現はれたのは、米人ハプアードだ、多年朝鮮で鍛へた怪腕を揮つて、朝鮮の宮廷に現はれ、平和會議の、此の千載一遇の大時機を逸すべからざることを說いたのは、恰も太皇帝の灸所に箝つたので、太皇帝側に立つて言へば、正に時機の宜しきを得たものと言ふべきであらう。太皇帝とハプアードの間に、二三の雜輩が加はつてゐたのは、言ふ迄もない。

斯くて密使を海牙に送ると共に、機智機才の太皇帝は、第二の秘策を廻らされた。それは毒を以て毒を制するの筆法で、日本黨の名ある朴泳孝を特赦して、李完用等の日本黨を抑へんとする、例の太皇帝特有の策略である。――二十年間日本に流浪してゐた朴泳孝が故國の舞臺に現はれたのは、斯うした順序だといふ。

○

朴泳孝ー

朴泳孝といへば、我國では久しい名である、彼が初めて日本に逃れて來た時は、非常の人氣を以て迎へられたのは今に余輩の記臆に新らしい然かも日清戦争より日露戦役を過ぎ、日本の勢力が朝鮮の天地に彌蔓して、一進會員は袖を列ね、内閣に立つてゐる今日。彼は不思議にも、日本黨に脊を向けて、非日本黨の



先頭に立つて、暴動の首魁を以て呼ばるゝやうに爲つたのは、不思議といへば、不思議の運命である。けれ共、之は朝鮮人を以て良心より、主義ある者とする根底の誤謬で、日本黨、露國黨、亞米利加黨乃至佛蘭西黨と謂ても、上は太皇帝より、現内閣總理李完用を初めとして、章成門より潜入する雜輩に至る迄、一人と

して主義といふ贅澤な、超自然的のもの丶有る筈は無い。朴泳孝といへども、朝鮮の血筋を惹いた一人で、比較的に眞正直な、涙脆るい男であるといふ丈け、朝鮮人には變りがない。――今、十二年振りに故國に歸つた朴泳孝の眼には、故國の風色は、如何見えたらう？

皇帝は感激して、朴泳孝の歸來を喜ばれる、錦陵尉の待遇を復爵せられる。……爾して臺閣に時めく連中を見ると、何等の門閥なく位置なき一書生の徒、朴泳孝自身に取つては、不快の感に打たれたのも、無理でないやうな氣もする。――讀者よ、我維新當時にも、私恩私恨の爲に、陰謀を企てた實例は、隨分と多い。

斯くて昔日日本黨の首魁たる朴泳孝は、頑冥不靈の名ある李道宰等と一種の惡戯を描く歷史上の滑稽者と爲つたのである。

○

七月十九日、朝鮮皇室に於て、最も記憶すべき日が到來した、林外務大臣の着京を知つて、讓位を發表された日である。

唯見る、慶雲宮内は鼎の沸くが如く上を下と騷いでゐる、一種の憤怒と一種の恐怖を懷ける精神の那處歟に、例の朝鮮的冷情を挾んで、史劇の大主人公たる太皇帝は、狼狽して居らる丶、當年九歳の英親王を抱いて、一方は皇帝に、一方は神師に、泣きくづれながら、嚴妃は何か訴へて居らる丶、彰成門よりドタバタ入ッて來たのは、雑鞭で、統監府の狀態や、林外務大臣到着の旨を明細に陳奏して、言葉の終りに、李完用宋秉畯等の惡口を駢べてゐる。

當時慶運宮内で、花役者の位置に立つてゐたのは、朴泳孝で、錦陵尉の冠に赤心を現はして皇帝の意を迎へたので、此の數日來は、朝鮮皇室の大黑柱は、朴泳孝一人にト丶メを指し、機智機才に富める太皇帝も、我を折つて一切萬事朴泳孝に打ち明けらる丶といふ無上の御信任。――上を下へと騷いでゐる時に、イの一番に駈け付けたのは矢張朴泳孝で、茫然の態であつた太皇帝は、滿顏の笑を湛へて朴泳孝を迎へられたのも、

啻に林外務大臣の來韓に驚かれた恐怖の念ばかりでも有るまい。嗟、此の騒擾の眞最中に、何時も肝癪發を振り立てる趙秉式が、人に助けられて參朝しながら、案外平然としてゐたのは、如何したものだらう。皇太子(現皇帝)は、例に依つて、ニヤリ〳〵笑つて居らるゝ。

讀者よ、七月十五日夜、海牙密使の陰謀露見に及んで、十六、十七、十八の此の三日間は、韓國内閣の李完用・宋秉畯等の苦心憂慮は、尋常でなかつたが、漢皇自身の胸中の苦悶といつたら、殆んど言語に絶へたのである。大臣暗殺の計畫も立てられた、某國領事館逃亡の計畫も成立つた。その間に幾度か神師が呼び寄せられて、禍福を祈られたが、刻、一刻、焦眉の急に迫つてゐるにも拘らは、神師の言は何時も樂天的に出てゐるので、李完用等の陳奏も、何やら戯言のやうにも思はれるのだ。眞面目なる朴泳孝、思案ありげなる李道宰、南廷哲、勇氣充ちてゐる李熙斗等を見ると、讓位などは思ひも寄らない。

咄、叱、不忠不臣の宋秉畯奴等と立腹が先に立つてとつおいつ思案に暮れて居らるゝ其の途端に、林外務大臣が着京したのである。林外務の渡韓は、李完用等の陳奏で、已に數日前より御承知であるのに、凝耳に水と、此時初めて韓國が薄氷の上に立つてゐるのを廓然と、眼が覺めたやうに意識されたのだ。機才湧くが如き太皇帝には不似會の話談だが、古來亡國の歴史は、氣が利いて間が拔けてゐる多智多才の人に依つて大團圓を告ぐるのを例とするから、獨り韓國太皇帝に於て不思議とするに足らない。

斯くの如くにして讓位と爲り、侍衛隊の暴動と爲り朴泳孝の捕縛と爲り、韓國宮廷の一切の秘密は、日韓新協約の光明に姿を隱くして、伊藤統監は、揚々として本國に歸朝するに至つたのである。(伊藤統監着京の日、記之)

土耳古の風俗

在君士坦丁堡　中村しげ子

本誌第七卷第七號の松村理學博士の英國の家庭觀察は大層面白く且つ有益なことゝ拜見しました故妾は玆に當土耳古の風俗に就て聊か目擊した事を御紹介致さふと思ひます。

モト〳〵土耳古と申す國は皆さんの御承知の如く土地は歐亞の兩洲に跨つて水陸交通の便宜な商業地である事と建國の古い爲め幾多著名の名勝舊蹟とを有する事と又國内天然の勝景に富む事等が世界各國人を集める媒介となつたのでありませふが、歐亞兩土耳古の地域内は如何なる僻地に於ても土耳古人以外の者の三々五々一部落を成して住まぬ所はなく殊に妾の只今居ります君士坦丁堡などは、さすが首府丈けに常住外國人の多い事は驚く許りで、當市の人口百十萬と申す其の中にグリーキ、アルメニアの人が殆んど其の四分の一を占めて居ります。

左れば其の風習の如きも自然多岐多樣でなければならぬ譯で一々之を詳細に研究したら頗る面白い事であらふと日常考へて居るのであります。それから當國はマホメット宗の國柄でありますので他國では餘り見受けられぬ特種の風習があるので是等は皆當地へお足踏みになれば第一にお眼に止まる事かと思ひます。

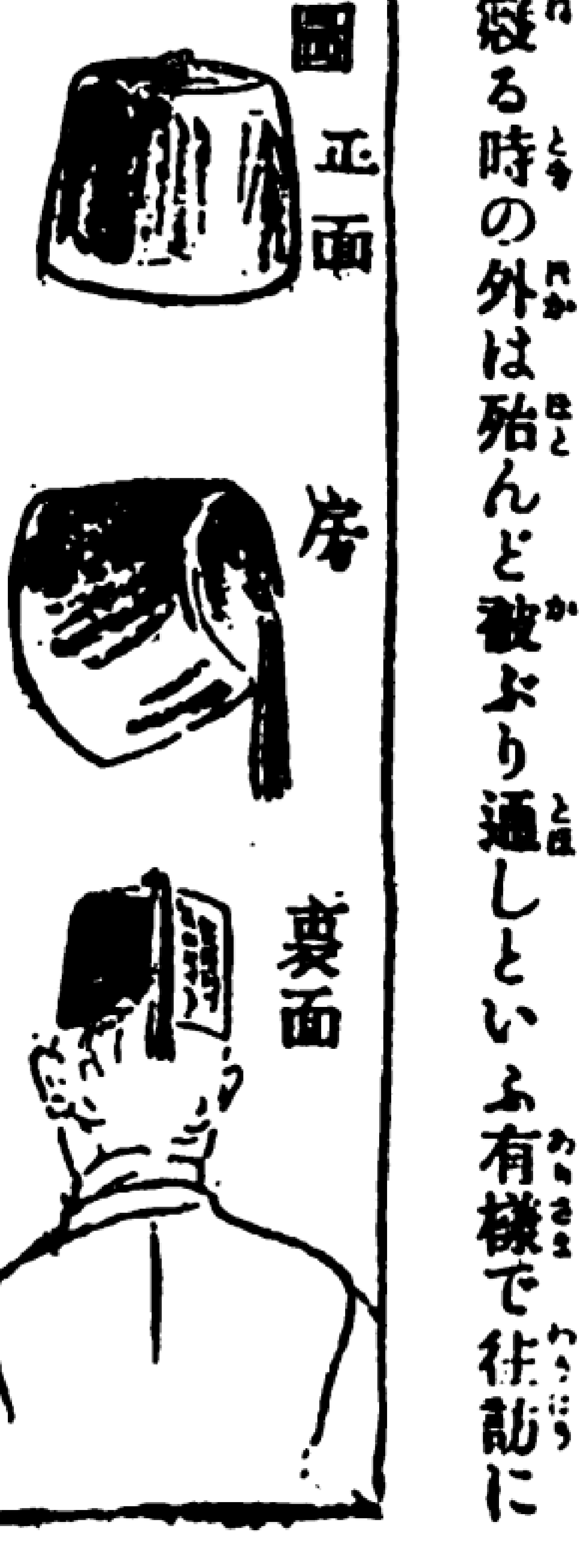
第一　土耳古の時間

初めに土耳古の時間の事を申して置きますが是れは妾共の用ゐて居る佛蘭西法とは全く反對で毎日の日沒を標準に其時を零時として計算するのでありますから慣れない妾共には鳥渡異樣の感が致します土耳古人には是非其れでなければならぬといふ風で官邊の公事より下々一般皆是れを使用して居るのでありますが其が銀行とか會社とか停車場とか、内外人の入込む處では土耳古、フランス兩樣の時計を備へて置きます故聊か不都合はありませんけれども其等以外では何にでも土耳古時間のみ用ゐるので屢〻不便を感ずる事がありますから大抵の内外人は土式、佛式二タ樣の懷中時計を

要する有様、左れば土耳古人に對し時間の約束をする場合には一々其のドチラの時計でと聞く事が必要であります、さなければ大變な間違ひを來す事がありますので現に妾も昨年の初夏でありましたか是れに就て失敗をやッた事があります、ソレは良人の友人で或る土耳古人から一食を差上たいから何日の四時御揃ひで來て呉れとの招待を受けました其頃は妾共當地に着きましてマダ日の淺い時分でありましたから時間に就ては何の思慮もなく妾共の時計で午後四時の招待と心得全く晩餐會の列席とハヤ飲み込みで出掛けました處が先きでは專ら土耳古の時間であッたといふ譯で丁度晝餐と晩餐の相違が出來て笑ッた事がありましたコンナ具合でありますから時間に關する事は鳥渡念押して掛らなければなりませんので共通一致して居らないのは斯程の事でも却々厄介なものであります。

第二　男女服裝上の奇習

支那では男子は辮髮して婦人は纏足するのは慥かに奇異な風習でありますが是れに好一對と申しては或は當らないかも知れませんけれども土耳古にも土耳古特種の奇風と申してよいのは男子として頂かねばならぬ土耳古赤帽子とソレから婦人として纏はねばならぬ眼隱し式の服裝であります赤帽子といふのは第一圖の樣な日差も何もないメンロリした赤羅紗製の立壺形の帽子で上天の中央に黑絲の房を結び付け後ろに垂れて居るのであります、ソシテ此の赤帽子は貧富貴賤の差別なく上、皇帝より下乞食に至るまで官吏となく軍人となく町人となく皆一樣に家の内外を問はす四季の別なく寢る時の外は殆んど被ぶり通しといふ有樣で往訪に



一圖

も來訪にも主客共室中是れを頂いて、スマシきッたものであります、羅紗製の上に形ちが形故冬は暖かいか

も知れませんが盛夏の季節にはサゾ暑いことだらうと常々思つて居ります、それかあらぬか此の赤帽子を常用する人の頭髪は其の脱剝は非常なものだといふ事であります。

婦人の眼匿式服裝とは妾の勝手に命名した假りの稱號で甚だ不穩當でありますが他に適應する名稱を思ひ付きません土耳古の原語では是れをチャール、チャツフと申しますが是れを譯しての命名といふのではありません故御承知置きを願ひます。

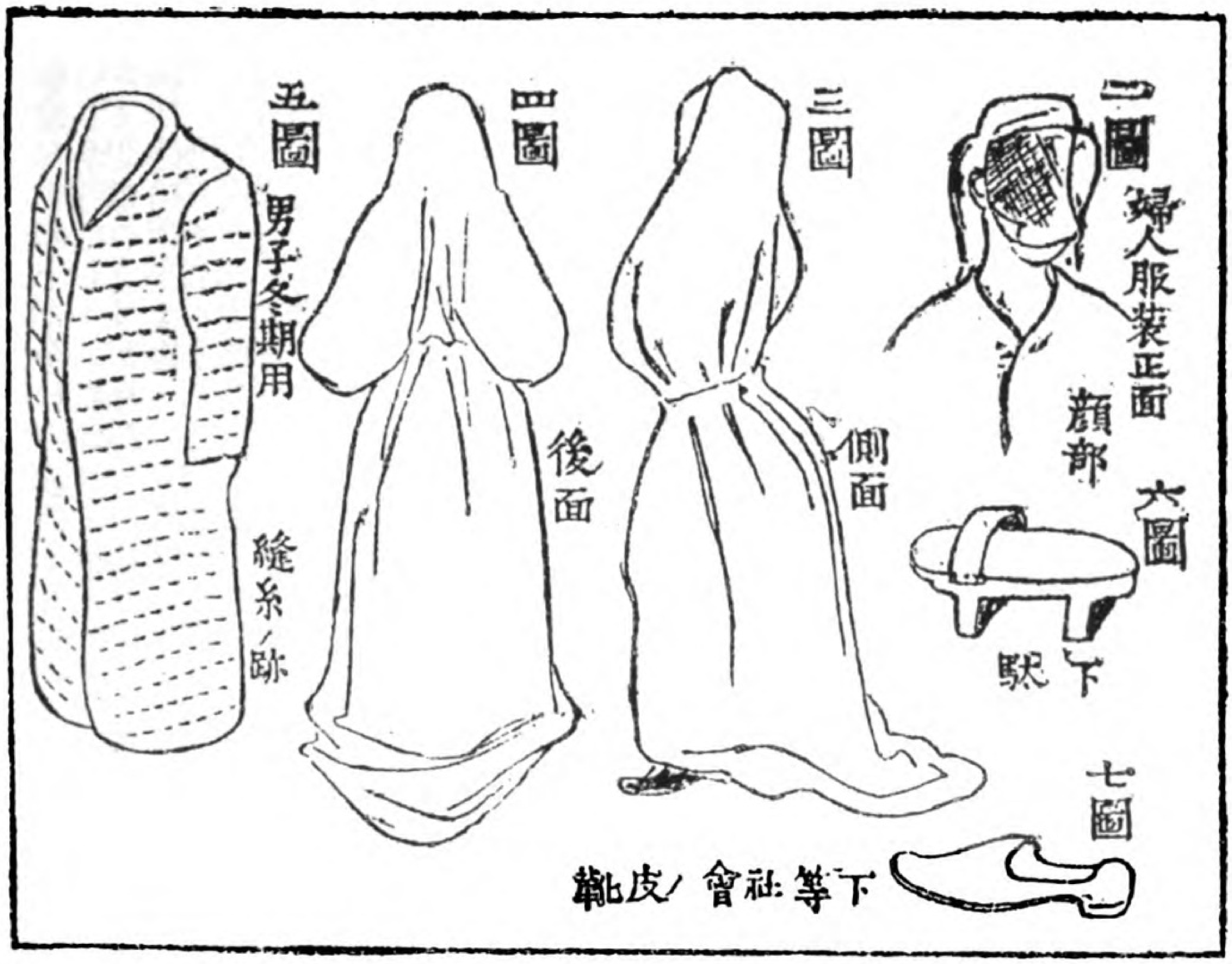
サテ其のチャールチャツフなる婦人服は如何なものかと申しますと矢張り西洋婦人服の樣に上、下に別れて居りまして下の袴は大體の形式に於て西洋婦人服のものと大差はありませんが只其の上部の仕立て方は却却滑稽でありますツマリ帽子と上衣とを一緒にした作り方で最初是れを頭に引ッ被ると肩の部分は小形マンチルの樣に出來て居るので兩翼は兩手首の所迄垂れ肩及び手を覆ひまして其れから終りの端は丁度下袴の上部即腰の周圍に當ります故其所をピンを以て留るのでありますから上衣と申すのは全く帽子を兼ねたものといふて差支はありませんソシテ顔に當る所には紗織の樣な黒布を下顎の所迄垂れて顔を匿して居ります此の仕立て方にも年々の流行がありましてマンテル形の兩翼を或は長くし或は短く致しますが概して壯老の婦人は長く妙齢の婦人は短い樣であります是れを作る織物は固より貴賤貧富に依つて同一ではありませんけれども中流以上の一般は十中九分通り皆地厚い紋繻子の樣な絹織物であります、ソシテ四季共に變りはないので夏などは隨分鬱陶敷い事だらふと考へられます仕立て方は大體此の通りでありますから風を孕んだ後ろ姿などは見慣れぬ中は、ドーシテも滑稽に感じましたが近來は其樣にも思はなくなりました。

以上陳べました男子の赤帽子と婦人の服裝とは土耳古人は誰でも是非此の通り裝はねばならぬので是等は皆宗敎上から來た國の風習であるそうです。婦人外出の際には例の服裝をして顔面を覆ふといふのは申す迄もなく男女風紀の潰亂を未發に防禦するといふ主旨

に相違ないので、今日の時世より觀れば餘り淺墓な方策かと思はれますが今茲では彼是申す必用はありません只、所變れば品替ると御記臆を願へば充分なのであります、男子の赤帽子に就てはマダ其の因る所を知らぬけれども或は昔はマホメット宗徒の唯一の徽章であッたのかも知れません然かし當今では該宗徒以外の好奇の外國人即クリスチヤンでも佛敎徒でも其他何人にても勝手に戴用するのですから全く譯が分りません

次に男子の服裝に就て言へば六分の土耳古男子は全く歐羅巴式を裝ひ殘り四分は土耳古從來の服裝であると申して差支はなからうと思ひます。是等は皆多數入り込み居る歐洲人に久しき以前より接近してゐた爲めでありませう。其の土耳古服と申すのは二種類ありまして是亦奇妙な仕立て方であります。其の一ッは上と下と別れてゐるもので他は烏渡筒袖の日本服に似て前の至ッて狹い仕立であります。前者の下部は日本のモンペの俣をダブ〳〵させて臀部から膝の邊まで幾條となく襞をとり丁度乳羊の乳房の樣にダブ〳〵とした奇異の外觀あるモンペを穿き上部はシャツ樣の肌衣の上に毛織の地の厚き袖無しを着るのであります。ソシテ其の袖無しには金糸や絹絲で色々の飾り縫を所々に施してあるので形式の下卑なるに拘らず却々贅澤に出來て居ります。此の服裝を爲す者は皆腰部に赤無地又は赤靑黄など段織にした地厚の帶を八寸か壹尺位に廣く卷くので形ちといひ色合といひ隨分目立ちて奇異なものであります。

ソレカラ筒袖の日本服に似て前の狹ひ仕立て方の男子服と申すのは重にキャラコか或は綿ネル樣の織物で更紗形か縞形付のソレは却々派手で奇麗な布で作りまして冬期の用には日本の綿入の如く只綿の代りに多くは粗末な羊毛を入れて其の上を一寸五分程の間を置いて斜に細糸にて縫ひ、中にある毛の位置を保たしめるのであります。要するに日本の綿入には眞綿を以て中綿のチ切れを防ぐのと同樣の意味でありますがヤタラに布面に縫糸を表はすので何だか襁褓のやうな觀がありまして折角の見榮を傷けるのは惜い心地が致します



前にも述べました通り此の着物は餘程日本服に似て居りますが土耳古人は是れを裝ふに帶を用ゐません皆釦か或は細緒で前の所々を留めるので妾共の眼には何となく物足らぬ樣に感じます。

是等の外、土耳古の男子は毛皮の外套樣のものを非常に賞用致しますが是等は皆地厚の布を表にして毛を中に仕立てゝ着るので形ちなどは迚も物になッて居りませんが防寒の一點から言ふと誠に重寶なものでムいます。

序に履物に就て少々申上げませう。一體土耳古從來の履物は不細工な木彫り二枚厚齒の高さ二寸か二寸五分程の下駄で、緒は其の先の方三分一許りの所に幅一寸位の獸皮を横に打ち付けたもので、ソコに足を突ッ掛けて歩くので、雨天用のものは別に日本の足駄のやうなものでモット背高に拵へたものを穿き、遠足なり或は仕事をするとかと云ふ塲合には足の平大の獸皮に麻緒を編みてヒモにした丁度日本の草鞋樣のものを用ゐるのでありますが、當今では是等の凡ては殆と田舍

の一部に其の形骸を遺すに止まり日常の履物は上下男女を通じて皆普通の革靴となりました。然かし勞働者或は下層社會に常用するものは皮靴ながら第七圖の樣な形で鐵板かと思はるゝ程堅く重い牛皮作りのもので之を踏み鳴らして歩くとは各國に於ける是等社會に等しく見る所かと思ひます。

妾は只今コヽで土耳古人の服裝に就て筆を擱きますが其れと同時に思ひ起すのは十五世紀の昔土耳古人の祖先の雲霞の如き一團が決河倒山の勢を以て襲來し周圍の連邦を併せ終に東羅馬を亡してイスタンブルを奪ひ都城を此地に築くに至つた當時の勇悍なる面影であります。此の勇悍であつた土耳古人はどんな服裝でありましたか。歴史は妾等に告げて居ります、下にモンペーを付け、上には短褐、足に前記の皮サラヂを穿ちて五尺の手槍は如何に輕快勇壯に擧動はれしかを。去れば今日歐羅巴風の土耳古の天を覆ふて居るのを見ましては寧ろ昔のセンペーが慕はしい心地が致してなりません。

第三　居宅及家庭

土耳古人の居住家屋の構造を約言しますればまづ木造の西洋造りであります。タマには西洋風の石材、コンクリ、或は煉瓦造りのものもありますが是等はホンの僅かで擧げて數ふ迄もないのであります。木造でコソあれ西洋風でありますから窓及戸口等の構造は些とも西洋造りに變らぬけれども家屋の高サは西洋の夫れの樣に五階も六階も高くはありません。三階以上のものは甚だ稀であります。ソシテ室内の體裁は如何かと申ますと日本の床の無い所へ疊を敷いた樣なもので、蒲葉で作つた呉座に[illegible]樣の裏を合せたものを室内一面に敷いてあるので、上流の家では猶は其の上に所謂土耳古敷物を敷いておきます。其處に上るには無論戸外靴の儘では致しませんで必ず上靴を特に突ッ掛けるか或は戸外靴を脱ぐか兎に角戸外其の儘の靴では上りませんソレ故に土耳古人の多くは晴雨に不拘普通靴の上に革製の踵あるスレッパ樣の上靴を穿いて戸外を歩きます。

室内の裝飾等は大分西洋風に致して居るものもありまして是等は安樂椅子も供へ、ストーブを準備致して居りますが、併し五分通りは未だ純粹の土耳古式で遣つて居ります。此の土耳古式と申すは日本人の樣に膝を屈めて坐るので椅子は用ゐません。其故に室内も自然其の坐るに適した設備を要する譯で、即ち座蒲團もあれば火鉢もあるといふ具合で、其れを例の吳座の上に置き我々と同樣に坐るのであります。火鉢は大低一樣の形ちで然かも皆唐銅か眞鍮製の却々大きいものであります。夫れに灰を盛り炭火を入れて各室の一隅に一ツ或は二ツ位ツ、据へ、室、全體を暖むる仕組みであります。此の火鉢の形は日本でもよく見受ける所から考へれば矢張り支那邊から傳來したものかも知れません。


八圖　火鉢

サテ土耳古人の居宅で特色と申すべきものは三ツあります。即ち窓といふ窓には普通硝子戸の外其の外側に細木の編戸を設けてある事と、家族中の男女の室を嚴重に區劃しある事と、モ一ツは出入門の必ず二ッある事であります。細木の編戸と申すのは第九圖の樣なもので普通硝子戸の硝子の代りに此の編木を嵌めた位のもので然かも極めて密に編んであるので其の目は丁度五厘銅貨大に過ぎません。


九圖　細木編戸

其れを室の窓毎に普通硝子戸の外、箝めますから土耳古人の居室は概して薄暗く鬱陶敷て何となく陰氣であります。何故應んな物を箝めるかと申せばツマリ室内の婦人の顔が戸外より見えるのを防ぐといふ目的だそうであります。ソレから家族中の男女の室を嚴重に區劃してあるのは矢張り男女間の風紀を取締るといふ主意で、一族と雖も必ずしも血緣者のみではないから例へば兄弟の妻と兄弟との間に不都合な事のないとも限られぬといふ大層な曰くから斯樣な窮屈で不自然なる戸屏が成立

たとの事であります。左れば日々の食事の如きも婦人は婦人連れ男子は男子連れといふ風で、一族ながら決して男女一時に同一食卓を圍むといふ事はないのであります。尤も是れはソコの家族中に他家から緣付いたもの丶如き其の血族以外の者の同棲する場合の𛀁で、其の事のないホンノ親子兄弟姉妹丈けの小家族には是れ程の面倒はありませんが。其間の遠慮は慥かに深いやうであります。即ち土耳古の家庭にはセラムリックとハレムといふ二ツのクラスが一家の中に劃然と設けられてあるので、セラムリックといふは先きに申した男子部用の室ハレムは婦人部用の室の稱號であります。



今之を圖解しますれば丁度第十圖の如くになるので毎家に必ず二ツの出入門があるといふのはつまり此のセラムリック及びハレムの兩クラスに關聯したもので一ツは男子用の門で一ツは婦人用の門であります。ソレで鳥渡自分の庭園を散歩致すにも男子が既にソコにあつて逍遙して居れば婦人は見合せ、婦人があれば男子は引ッ込むと云ふ有樣で、相携へて涼を容れ藹々の樂園に戯れ遊ぶなどいふ事は夢にもありません、家族中でさへも既に此通りでありますから他は推して知られませう、一體土耳古人は男女の關係を如何に考へて居るのかと思ふて妾は每度土耳古婦人に對して大に同情を表して居るのでありますが、然し見まする所では土耳古婦人は其れには一向無頓着で至ッて平和泰平の樣でありますから先結構といふ外はありません。（未完）

訪問

坪井博士夫人の家政談

芙蓉

記者は月の下旬人類學の大家坪井博士の御宅へ伺ひました砌を通じて通されましたのは八疊ばかりの至つて靜かなお客座敷で、丁度前のお庭の植込みで遊んで居らした十一二ばかりのお下げ髮の可愛い令孃が一寸振り返つて莞爾々々なさりながら丁寧にお頭をお下げになりました、其容子が何とも云へず淑やかで斯いふ風に御敎育なさる夫人はとお目にかゝらぬ先からお慕はしい樣に思ひました、床の間には幾冊も金緣のブックや世界風俗寫眞帖等が重ねて在つて燒物の白馬の置物二面立てかけて有りました、お琴の袋に付いて居る緋縮緬の紐が下つて居るのが何んだか美しく可愛らしく直ぐにあのお行儀の好い令孃のおたしなみだらうと床しく感じられました。

やがて夫人は靜かに入つて來らつしやいました、中形のお浴衣がけに博多の帶といふ質素なお裝で、何處となく優しそうなお目のぱちりとした誠に謙遜なお方で御座いますが、記者の問に對して次の事を語られました。

△敎育

私は一躰幼少の頃から餘り丈夫では御座いませんでしたから長く學校へ參つた譯でも御座いません。ですから自分の意見と云つても何も申上げられませんけれども何しろ幼さい間は唯だもう體が一番大事だと思つて居ります。で平常子供の體に就きましては唐澤先生に御相談を願つて居ります。女の子二人はお茶の水の小學校へ通はせて御座います。學校以外に家庭敎師を呼んで敎へるとか、又は他へ稽古に遣る等といふ事はまだ無理かと存じます。彼麼いふ事も斯いふ事もと常々心には思つて居ますが餘りつめてさせますのもよくないと思ひますので漸と大きい方の娘だけをつい近頃からお琴の稽古を始めさせる事に致しました。先生は山

登さんで御座います。はい私も少しは習ひました。ビアノで御座いますか、學校に居る間ほんの少少遣りました。夫れでまア子供の教育上に就きましては學校の遣方に疑ひを生じたり或は自分の意見に合はないやうな事が御座いましたら先生へ御相談に參る考へで居ります。

△語學

の素養に就いては此後の人は婦人でも奈うしても必用だらうと存じます。私なども學校で致しましたきり夫れなりになつて居りますけれども、始終困つて居ります。



はい學校では神田先生やミス、プリンスといふ方々にお世話になりました。其時分同級で有つた某博士の夫人などは夫れからも引き續いて御勉強なすつたので現今ではよほど最うよくお出來になりまして他の人にも教へる事が十分お出來なさるそうで御座います、で私も子供にだけは語學は十分遣らせて見度いと思つて居ります、併し奈ういふ事になりますかまア何にしても却々思ふやうになるものでは御座いません。

△交際

は只今私は餘り致して居りません。決して嫌ひと云ふ譯では御座いませんけれども私のやうな境遇では只だ最う家事にばかり追はれて居りまして却々皆樣方のやうに交際社會に出て奈うの斯うといふ事は出來ないので御座います。尤も隨分方々の會員にはなつて居りますけれども會の時だけは失禮してごく關係の深い會の外はお斷りをして居ります。私も後に子供でも大きくなり、隙が出來ましたらば御なかまにいれていたゞきたいとは思つて居ります。夫れは隨分自分が社會に出て働くのはけつこうでございますが、まあ一には其人人の境遇にもよりますし性質にもよりませうし又お子樣方が最う皆大きくなつて居らつしやるとか、母堂が在らして一から十迄お世話をなさるやうでそしてお暇の有る方ならば宜しう御座いませうけれども私共のやうな者は何から何まで悉皆自分で致さなければ成りませんし着物の世話も一度は自分が目を通してから仕立させるなり私が縫ふなり致さなければなりませんから夫れや是れや致して居ると却々交際處では御座いません。

△お臺所

記者がお臺所を拜見したいと申しますと夫人は笑ひながら汚う御座いますけれども何卒ぞと先へ立つて行らつしやるお背の高いすらりとしたお姿で誠に博士の令夫人として立派なお方だと思ひました。若い女中が三四人程立ち働いて居りました。夫人は草履を揃へて下すつて一々記者に説明して下さいました。

以前は下で物を拵へたり俎板で種々な物を切つたりいたして居まりしたが奈うも不潔がついたりして思ふやうで御座いませんので此節では斯うみな臺の上で致す事に定めました。而ういたしますと何かゞ致しよくつて其上誠に奇麗で心地がよう御座います、はい今までは薪で御飯などを焚きましたけれども只今では皆瓦斯を用ひて居ります。夫れから此西洋料理器で私がいたづらを爲るので御座いますよ。はいロース燒やシュークリーム等はこれで拵へます。始終失敗ばかり致して

居りますけれども、子供達は他で買つてやりました物よりも宅で拵へてやりますと大層喜びますから下手では御座いますが私が致します。手數をかけて拵へるよりも買ふ方がわけなしですけれども宅で造りますと同じ費用でも品を撰ぶ事も出來ますし其上上等物を用ひる事が出來ます。ですが私は割烹が非常に好きで面白くつて耐らないなどゝいふのでは御座いません、自分の好きな事と申せばまア讀書でも致して居る方が幾程いゝか知れませんけれども夫れよりは家庭でつまらぬものでもこしらえますとみなが滿足して喜んでくれますからその方がよろしいと存じます。

岩崎海軍少將夫人の教育談

濱子

麻布霞町一番地の角に、和洋折衷の建物、冠木門を入りますと、ズット玄關迄花崗の短冊石で、硝子戸を開けて十八九の女中に來意を述べますと、直ぐに少將夫人が出て來られまして、莞爾やかに先に立つて、涼しさうな葭戸と、奇麗に片付いたお部屋を左に見て、少し疊廊下を行くと、一寸右に入つた處の洋風の應接間に通されました、東南に窓が啓いて居りまして、中央に圓卓子が、其周圍には眞白な被布を蔽つた椅子が六脚。入りますと衝き當りの隅に、大英百科全書が備へて有つて、其上に御主人が軍服で二十人許りと撮された寫眞や剝製の雉子や、外に飾物が置いて御座います百科全書に向つた東の隅にも洋書が三段にギッシリ詰つた本箱、其上にも矢張り剝製の鳥が御座います、壁には東郷大將の額が掛つて、恰度夫人が入口に近く腰かけて居られる後ろの邊りには、寫眞ブックや、畫葉書帖や、上には人形や押畫が飾つて有る臺が御座いまして、窓の外には八ッ手の葉と、百日紅らしい木が見えます、葉櫻からは始終涼しい風が、レースの窓掛を動かして居りまして誠に閑靜なお住居で御座ります。お年は存じませんが、御見上げ申した處は、四十六七でゝも被入いませうか、小造りな瘦せ削すの御方で

樣になさつて、細かい縞の御着物に帶の狹いのをキチンとしめて被入いました、『何か家庭について參考になるやうな事を話せと仰在いますが、何しろ私などは眞んの舊式な女學校を出ましたので何もお話致すやうな事も御座いませんし、夫れに只今孫が病う御座いまして看護婦も付き切りに致して有りますし、妾なぞも一寸も手を離されませんが、否、何少しの間ならお話を致しませう』と、優しく仰



在り乍ら椅子を少しく引寄せて夫人はお話しになりました。

近頃女の方でも盛んに學問をなさるので、其結果女の方が無暗と生涯獨身で通す等と云ふ考へを持つ方も有るやうに見受けますか、夫れは女の方の考へが間違つて居るのぢやア御座いますまいか、私共は女の方が獨立なさると云ふ事は不賛成で御座います、女の方は體の上から申しましても男の方の

やうに鐵砲を昇いだり何かする譯にも參りませんから、矢張り女の方は女らしく家庭をよく修めて、夫をして後顧の憂のないやうに、よく修めて行く方が眞實だらうと存じます。

田舍の人なぞは唯娘を東京へ出して學問をさへさせれば宜いやうに思つて居る人も御座いませうが、其樣して上京させた處で無暗と氣位許し高くなつて家庭と云ふ事に重きを置かない。まア申して見れば東京の空氣が濁つて居るのを知らずに、清い娘をわざ〱濁つた空氣の中へ入れるやうなもので御座いますから、餘程考へなければならない事と存じます、私共も女の子許り四人持ちましたが、總領をもう嫁に參りまして、只今は三人で、上の二人は學習院女子部に通學致して居ります、子供と云ふ者は凡て母親の眞似を致すもので御座いまして、子供は一度申した事は決つして忘れませんからよく〱注意しなければなりません。

日本ではよく子供が惡戯をすると、ソレ巡査が來るのお化けのと申しますが、良人が先年歐羅巴へ參りました時に或る相應な家庭へ止宿致して居りまして、感心致したのは、決して那麼お化けの何のと云つておどすやうな事は致しませんさうで、而して子供には決して嘘言を云つては不可ない、と云ふ事を堅く云ひ付けて深く頭に染み込ませて置くさうで御座います。

それから人間には同情と云ふ事が尤も必用で御座いまして譬へ其人が幾等豪らいにしても同情と云ふとがなければ人間の資格は無いと存じます、ですから娘達にも少さい時から憐れみと云ふ心を充分に持たせたいと思いますので始終之を忘れないやうに申付けて御座います、然れども自分も困るのに何も強いて惠まなくつてもいゝでせうから自分も困らず、而して哀れな人が有つたらば其人に同情せよ、と云ふ風に云つて聞きます。

又女は謙遜と云ふ事を忘れてはだめで御座います。少し學問の出來る人は直ぐに學問を鼻にかけて威張る人が御座いますが、私共は然う云ふ方を見ますと實際堪りません。謙遜と云ふ事は婦人に取つて最も大切な事

で御座いますから之を忘れて了つては困つて了ひます宗教で御座いますか、夫れはもつと盛んにしなければなりますまい。世の中には宗教と云ふものは何うしても必要だと思ひます。宅では只今は宗旨は別に之と云つて極つて居りません、從て娘達が佛教を信ずると云へば止めませんし、又耶蘇教を信仰すると云つても宥します、つまり日本で種々の宗教を許します通りに宅でも自由に致して居ります。



左様で御座います、音樂も肝腎なもので御座いまして其國の文明如何を見るには音樂に依つて分ると申しますから。日本でももつと音樂思想を高めなければならないと存じます、ハイ。宅の娘も上のは學校のピヤノの先生に付いて居りますし、妹の方はもう五六年前から琴を習はして御座います、彈ひて皆んなを樂しませ、又自分の慰みにもならうと存じて習はせました。

規則正しくすると云ふ事は家庭について最も必要だと存じます、よく晩の御飯の時分に被入つて、十一時頃になるお客がありますが實際其宅の人は迷惑だらうと存じます、西洋ではちやんと朝は何時から、晝は何時迄と云ふやうにして御座いますからとう〳〵人樣の食事時間なぞには、(呼ばれて被入る方より外には)被入る方は無いそうで御座います。日本には未だそう云ふ規則立つた事は御座いませんから、自分一人で規則正しくして居りましても外の方がそうで無い以上は、致方がありませんが、まア〳〵出來得る丈は其樣云ふとに致して居る心算で御座います。

何しろ突然で御座いますから、何の考へも御座いませんが大體昔の武士の家庭を土台にしてそれに當時の文明を幾分か加味致したいと思つて居るので御座います

夫人は話半ばで御孫さんの御病氣が御氣懸りと仰在つて御立ちになりましたが夫れ迄一緒に御話して居らした御主人が代りに御出で下さいました。

御主人は白の帷子に絹緞の兵兒帶で、金の指輪の光る左の手に扇子を持つて、折々パチリ〳〵とやり乍ら落着いた、穩かな調子で語られました、記者が伺つて居た應接間は恰度直ぐ二階へ上る階下に御座いましたが御孫さんの御病氣の爲でもありませう、お孃樣方が上り降りを遊す優しい絹擦の音が大變御忙はしさうに聞えましたから又御目にかゝるとにして歸りました。

夏の田舍（歸省日記）

ゆかり女

久しく寄宿舍生活になれし身の自づと規律のつきて、今朝は暑中休みのやさしきたらちねの許なれば心のまゝに眠らんものをと思ひ居たれどやはりと板戸白みし頃には早や目さめぬ。

一つ蚊帳にふし給ひし母上は早や臺所にて下女を相手の御こゑ聞こえ奥庭の方には父上のそゞろあるきなし給ふけはいあり。横と縦とに羅もなう寢たる小さき妹等のかたえを夢やぶりせじとそとぬけ出で先づ朝の氣吸はなんと庭の枝折戸より裏に出でぬ。さても心地よきあけぼののながめや青疊しきたらん樣なる稻の葉のあけぼのゝ清き光りにいよ〳〵色そへて見ゆるに心のちりも拂へとばかり吹く朝嵐さゝこそ稻の香ふ

くみたるもうれし。朝風の唱歌など口すさみつゝ來ぬるともなく二丁三丁。

あつさ

人家まれなる片田舍とは云へ木陰もあらぬ日ざかりの氣にや黒金もとろけやすらんとさえ思はるゝに庭の木立前の小山などより聞こゆる蝉の聲の焼き付くやうにも思はれて文讀むさえ物うく見るともなく垣根ごしに目をうつせばあなたにはとんぼつる村の子の傘さしかざしてかけあるくを此方にはまた蝉など取るならん紙袋かつぎたる十二三歳の子の小さき子あまたしたがへてあぜ道通る様などなか〳〵におかし。ふと庭の彼方を見ればいみり草の花白赤黄などとり〴〵にまばゆきばかりに日の光りにいよゝ色添えてさけるあたり二人の妹の裾引きからげて土いぢりなし居るによく見れば小聲に何かゝたりつゝこわれし土瓶の水にて土をこねまろめて花を上に置きたるなどなか〳〵立派なお菓子屋さんなれどこの暑さにと思はずまゆをよせぬ。折からトントンと履物の音あゝ母上は此暑さにと思ひまつれば涼しき部屋ゐらみて机により獨樂しとかこつ身のそらおそろしく思はれて母上のお手傳ひにもとひもときしまゞの文とじぬ。

夕立

庭の松葉のかげ數讀るゝまであざやかに照りつけし夏の日のまだ暮るゝには間もあるに次第に淡れ行くと見れば隣村の石臼のれかと思はれし鳴る神の一度〳〵と近づき來りぬ、庭の芭蕉の雨蛙のけたゝましく鳴き出すこえに又夕立かなど母上のゝたまふ、干物取り込まんと下女のおり立ちしと云ふ間に早や大粒の雨、物置の屋根に音立てゝ降り來ぬスハヤと云ふ間に實にや盆をくつがへす如く南北、座敷居間のへだてなく降り込むに總立となりて板戸たつれば室内は時ならぬ眞の暗、折々戸のすき間よりさしこむ電光に固くなりて坐れる妹の顔白く青く見らる、さえ物すごきに鳴る神はいよ〳〵烈しく鳴りはためき或は衣さくが如く或は百千のたいこを一時にうちならすが如く今にも頭上に落ち來らんやう思はれて氣も心も身に添はずかや取り出さんなど思ひ居ればはや神は東へ〳〵と渡り行く様なるにもうお終ひかと父上の笑ひ給ふやう〳〵胸なでおろし戸おしあくればさしもの雨も今はかぞへる程になり、空打ちあふげば大きなる雲のちぎれ鳴る神のあとおひて急ぎはしる其の早やさなか〳〵におかし、やがて青空の見えし所に清水より引き揚げしかとさえ思はるゝばかりの夕日うつくしくあらはるれば卷き忘れしよしすだれに夕立の名殘り玉とかゞやきぬ。

夏の海邊

湯あみの後の衣かろく妹をつれて、久しく遠ざかり居し故郷の海邊やいかにと出で立ちぬ、途すがら妹のかはる〳〵語るを聞けば「姉さんがまだ學校に入らつしやらない時までは毎年おべんとうをして貝掘りに行つたでしよう、あの時毛布を敷いておべんとう食べてた所ね今はだめになつちやつたの」との事に何故と問へば「だつて人が所を取つてしまたのよ」と小さき妹は早口にこたへぬ「彼處はれ去年からきたない家がたくさん出來たのよそして毛布を敷いた所にはむしろを敷て小さいゑびが何時でも干して在るんですもの、今年の春にはおべんとうはやめになつてしまつてよ」と姉だけに良子はこま〳〵と語りぬ。

サツと袂をひろがへす風の磯の香ふくみたるに「もう來てよ」と云へば妹等は何か小聲にしめし合ひ一散にかけ出しぬ。こゝは早や堤の上

にて兩側に繁りたる丈より高きすゝきの亂れるあたり妹の言ふまたなき家ならん漁人の住み家のまばらに立てるひまより夕日に黄金色したる海面の見えたる樣は繪にもかゝまほしう覺えつ、飯かしぐならん白き煙りの二筋三すぢ立ち昇れるもなかなかに風情あり磯くさき干魚のよこをぬくれば心ざせるまさごぢに出でぬ。

晝間の暑さの名殘見へて
ほのふぞもえ立つ夕の雲に
紅染めなす入る日のかげ
波間に落つるや沖も暮れぬ
燒けたる眞砂地いつか冷えて
汐風涼しく渡る磯を
裳の裾かゝげて一人行けば
よせ來る白波足をおそう
涼みに來し甲斐ありて海の
波にたわむれ月にうたひ
更け行く夜半さえ忘れはてゝ
遊ぶは樂しき夏の海邊

歌そのまゝの景色かな、淡墨にてゑがきたらん如き中國の山々のあたりまで心通ふかとばかりうつとりとたゝずみ居れば突然キヽと笑ふこゑきこえぬ、こゑの方見やれば干潟にうち揚げられし空舟の中に黑きかげの入りしけはいに近づき見れば景色に見とれて忘れ居し妹のとまの中に頭のみ蔵し入れ身をこらしてかくれ居る樣のおかしともおかし、よほど前よりかくれ居しも我のさがさんともせぬに力ぬけ餘儀せしにやと笑まれつ、

とび廻る妹を兩手に引きて寄せてはかへす波打ちぎわにて汚れし足をきよめなどしつ。

しづけさ

歸り見れば座敷には父上母上の御姿見えず庭の離れよりうたひの聲の聞こゆるにさらばとて庭に下り立ちぬ欠けたる月の光り淡く木立の下の道危ぶきを案内がほなる芭蕉のかげ小山の下なるとうらうにたどりたどり一きわ繁れる木立を廻ればパットさすあかりとゝもに父上のみこゑきわ立ちて高く耳に入りぬ。

明けはなちたる縁に腰かくれば「あんな海がおもしろいのかれ」と母上の笑ひ給ふ、父上もうたひ止め給ひて學校の事どもきかせ給ふ校舍の大きさ運動會のたのしさ、さては土曜會の餘興の樣などほらなども打ちまじえつゝお耳に入れぬ。

「良ちやん、あれを姉さんに持つて來ておあげ」と母上、「なあに」と我が問ふ間に良子は早や馳れたるにや暗き庭を一さんに馳せ行きぬ、と思ふ間に早また踏石を傳ふ下駄の音と共に良子は來ぬ、後より來し下女の見事なる梨四ッ五ッのせたる盆を持ちたるに「まあ、おいしそうです事」と云へば父上は「イヤ、今年は取わけよく出來たよ」とほこり給ふ、實にや露したゝらんばかりなるにおもはず五きれ六きれと味ひつゝ四方の話しの何時つくべくも覺えず、忽ちしづけさをやぶりてアーと長く紡績會社の笛、「オヤもう十二時だよ」と云はるゝにおどろき立ちあがりぬ。

ひろまのつかれにや何時の間にか小さき妹は母上の膝によりて眠り居つ、折角梨の大きなるをあたえしにと見ればあはれ、いつの間にか種ばかりなり。

監内出生 可憐なる看護婦の手翰

進藤隆子

監獄と言へば誰しも恐ろしい罪人のみ這入て居る處の様に考へられますが、罪人以外に清淨無垢の人間が常に百と二百と居ると云はゞ文明の今日罪も咎もないものが入監する筈はない、其は何か間違であらうと反問する人もあるか知りませんが不幸にしてそれは事實である誰あらう母親の入監に依りて一定の年齢に達する迄、特に乳養を許された可憐の乳兒即ちそれであるあゝ世には隨分不幸な人や薄命な人も澤山あるが凡そ罪なくして入監せる乳兒ほど可哀想なものはないと思ひます況して鐵窓裡に產聲を揚げた兒は其男たると女たるとを問はず生涯如何に、辛い悲しい思をするでありませうか其筋の調に依れば此可憐兒が過去三十年間に男女併て實に七千餘人の多數に上つて居る何と哀れにも亦驚き入つた話ではありませんか。

思ふに此一萬近い可憐兒中には人並に成長し人並の教育を受けたものが果して幾人ありませうか恐くは百中九十九迄は家庭なく保護者なしといふ有様で、其憐む可き境遇が大方邪惡の人たる可く餘儀なくされたであらう、若しも個人々々に就て其經歷を詳にする事が出來たならば、假令其法網に觸れ社會の害虫たりし惡人と雖も毛頭憎む可き處ではない寧ろ大に同情に禁へぬ點があらうと思ひます蓋し彼等も亦人の子である救護其宜きを得たならば、乾度人らしき人となり教育次第では隨分學者も政治家も出來又所謂良妻賢母も輩出せぬとは限らぬ現に私の師たる某篤志家に依りて立派に救はれた一人の婦人があります。

扨同女は十歳の春、師が淸國漫遊中に偶然救護されたのでありますが其生立殊に其境遇柄性質頗る偏屈で

強情な兒であつたらしい然るに親切にして義侠に富み慈愛深き師の丹精は何時の間にか之を矯正して到頭女らしい女に育て上げたのであります而して小學校卒業後は當人の志望もありて赤十字社に入り看護婦となりましたが日露の大戰爭にはわれ今師恩の萬分一に酬ひ謙ねて亡母生前の罪障を滅ぼすは此秋に在りといふ決心を以て從軍し滿洲方面の野戰病院附となりて一年餘りも其職に盡瘁されました處が今回異數にも名譽の勳章並に年金を賜はつたので當人は殆ど狂せんばかりに打ち喜び、日夕師の恩を感謝しつつ現に某病院の看護婦長として働いて居ります。



左に掲ぐるは同女が出征の際聊か報謝の印迄にとて、其悲慘なる境遇を記述し恩人に贈りたる手翰の一部分である之を公にするは誠に忍びざる處なれ共、世の血あり涙ある諸姉の爲に特に其許諾を得て本誌の餘白を籍りた次第であります、大方の諸姉幸に一片の同情を寄せらるれば、獨り私の本懐のみではありません。

(前略)今この懐舊談を書き綴り候に當り唯々胸一杯にて筆鈍り眼濕ひ思ふ十の一をも盡しかね候まゝ左なきだに廻らぬ筆の一入文意の通せざる節多かる可く存じたてまつり候間其段は何卒〳〵御判じ讀み願上候(中略)

●出生地は監獄　さて御耻しき限りには御座候へども私は全く牢舍の生れに御座候この一事に依りて悲慘きはまる私の境遇をば何人も推察いたし下され候ことゝ存じ候母なる人が相當の資産あり身分ある家庭に生長し相應の敎育をも受けたるにもかゝはらず宿業の恐ろしくも罪を得て苦役の身と相成り候處當時姙娠五ヶ月とかに候ひし由(中略)

牢舍のことなれば勿論産婆などのあらう筈もなく殊に二た昔も以前のことゆゑ諸般のお手當も恐くは今日の樣には行屆かざりしことゝ察せられ候に就ても因果應報とは申しながら當時愚母の胸中如何に切なるものありしか之を想ふ毎に實に斷腸の思ひに御座候

●母は離縁子は無籍　本來ならば初孫が出來たとて年寄どもにも可愛がられ一家ます〳〵和親を重ね家門愈愈繁榮に赴く可き筈の處情けなや母なる人が世にも恐ろしき大罪を犯したるがために出産の時既に離縁となり居り候へば一應は女子分娩の旨父にも通知いたし候由なれどもさる惡人の胎内に宿り候兒は吾が子に非ず勝手に處分せよと斷はられ誰一人慶び與れ候ものもこれなき有樣につき事實父なる人の存在せるにもかゝはらず哀れ戸籍上は冷かなる私生兒として取扱はれ候よし物覺え候てより承り及び候ことに御座候あゝ無心の子に何の罪あるか父の冷酷思へば今なほ情けなき限りに御座候

●一層の事一と思ひに　牢舍のことなればイクラ泣いても誰ありて賺し呉れ候人のある筈もなければ寒暑の凌ぎも儘ならざりしは申すまでもこれなく候へども何よりも先づ困難せしは子持の身なるに拘らず始終他と同一の苛役に服したること就役中は殆ど哺乳の自由を與へられざりしこと及び同房囚よりは子持が五月蠅しとて痛く忌み嫌らはれたること等にて活かして苦

を見せんよりは一層の事一と思ひにこの世を先きだゝせなば却てこの兒の爲めにも功德なる可しと恐ろしくも斯く覺悟をきめたること曾に一再に止まらざりし旨これも後年母の述懷に候ひしやう朧げに記臆いたし居り候

●監獄さんが來た

愈々滿三歲に達せるとき御規則に依り母の里なる伯父に引渡され此にはじめて青天白日の身と相成り候處此時實父の家は皆亡くなりて廢絕し賴るは唯母方の伯父一人あるのみなりしが其後數年は實に伯父の厄介に相成り候（中略）たしか七歲の時分と覺え候伯父伯母がならぬ中を都合して從妹のものと共に村の小學校に入れて呉れ申し候處かねてより私をば穢多非人視し居り候近所の子供等が先鋒となりて異口同音にヤレ監獄さんが來た監獄さんが來た監獄さんまで學校に來たなどゝ口をきはめて侮辱し嘲笑し誰一人近づき候ものもこれなきのみならず爲めに從妹のものまでに惡口憎言せられ剩へ歸途毆打せらるゝが如く辛き目に遭ひ候ため先生達も色々心配の上保護を加へ呉れ候へども從妹に對しては氣の毒なり子供心の口惜しくも氣苦しさに堪へず通學三日にして終に退校いたし候この時の無念さ死んで



も忘れられぬと思ひ申し候

●一場の悲劇母子の對面　恰も退校當日なりき突然母は歸宅いたし候子供心にも放免までには未だ一年半もありこの後如何にしてこの辛き生活をつゞけ得可きやあゝこんなに苦しい思ひをするならば寧ろ罪人となりて牢舍に入るがましなり左らば却て戀しの母にも早く對面が出來如何に嬉しからん火放け泥棒などすれば牢舍に連れて行かるゝと聞けり左れど泥棒して萬一見付かつたらば打たれ打たれては痛いから一層火放けをしやう今夜伯父の厩にでもと思ひつめ候ことは幾何返なりしやも知れずあゝ母が早く御免になればよいあゝ早く母に會ひたいものだと唯一心にこれのみ日夜神佛に祈り居り候處に圖らずも心願相叶ひ戀しくも懐しきわが母が改悛の狀顯著なりとありて難有も期に先ち歸宅對面いたし候その刹那母子兩人の感慨は到底言語筆紙のよく盡し得る限りにこれなく當時一場の悲劇偏に御高察被下たく候（後略）

以上は僅に手輸の前半を抄錄したに過ぎませんが、獄中なる母を戀ひ慕ふ處及び其朋輩に苛らるゝ一節の如きは、殆ど卒讀に堪へん位であります而して其後半を大略紹介せんに母の假出獄後は寧ろ異常なる大慈愛に浴せるも、夢の間にも圖ずも生活問題の爲めに餘儀なくせられ近村なる某商家に子守奉公の身となりしが（此時九歲）越へて翌春母は病死したるがため愁傷落膽一方ならず一時は殆ど失神の狀態に陷りました偶々旅商人體の男に釣られて主家を逃亡し在神戸極惡無道なる支那人に賣渡されたる末南淸の或る地點に密輸送せられ一大魔窟に收容中危くも生膽を拔かれんとしたること前後幾回なるやを知らず主家逃亡の罪の今更空恐ろしくも泌み〴〵と身の行末が悲しくなり所詮なき命ならばと幼な心にも覺悟する處あり一夜意を決して運よくも其魔窟を脫し、爾後乞食の群に入りて處々浮浪中不思議の機會に依りて、師の救護する處となり（此時十歲）遂に其恩愛撫育の下に成人したのであります。



閑人閑話

孱顔子

（四）

如何なる人間でも多少世の中に、爲し有の人ならば必らず己れを吹聽するものです、己れを吹聽するのは世渡りの第一手段であるから、己れを吹聽する事の上手なものは隨つて世渡りも巧者であるが、てんから吹聽する事の出來ないものは大抵無爲無能の徒に過ぎないけれども其の吹聽するもの丶中にもいろ〳〵あつて手段の巧妙なのと拙なのと、露骨にやるのと廻り遠くやるのと、殺風景にやるのと、奥床しくやるのと、又それを大袈裟にやるのと、扣へ目にやるのと、上品にやるのと、下品にやるのと、十人十種いろ〳〵にやり方はあるが、其中でも世間一種の人には實力に不相應な吹聽は、や丶もすれば法螺吹と蔑侮れる、それを勿體ぶつて上手にやると如何にも抱負が大きい樣にも思はれる、當世無一文から、紳士の仲間入をした人、政事家にせよ實業家にせよ、官吏でも商人でも水平以上に頭を持上げて、多少世間に名聞のあるほどの人物も大抵此の妙術に達して居て、一寸一坐をして居る間に其人の話を聞いても、却々感服する事がある、井戸端會議に出るお神でも、自己を吹聽する事にかけては却却人には讓らぬものだ、況して自家に金庫の一つもあり、二萬と三萬の財産を持つたものが溫泉場などへ出掛て行つては所詮、己れを吹聽せずには置かない、內に五千圓ほどの財産を持つて居ても、一寸贅澤にして居るものは家族や何かの前で常々十萬圓位の取引をして居る樣な事を人に向つて話すから滅多にそんな人の傍へは寄れない、うつかり傍へ寄ると、まづその煌々しい金時計か何かを出して見せられる、革鞄の中から株劵や公債證書が出る、紳士紳商の名前がならべられる、日頃交際して居る人々の地位や勝手向が話されるそれから正の物の話になると無暗に千とか、萬とかい

ふ癖が口を衝いて出る、我輩も毎度こういふ人物に取つかれて困まらされたが、斯る人の傍らに一時間もじつとして居ると身體中が黄色くなりはすまいかと危ぶまれる、それから見るとこの富澤老人などはまづ奥床しい方で噂に聞くと二十萬圓以上の財産家で、三十人近い奉公人を使ふて居るといふ事であるが、深く藏めて虚の如くする良賈の德を守つて他人の前で滅多に金の話や世帶の事などは話されないけれども人間は隱すほど顯はるゝもの、何處でか自分の秘密を人に語る性質を持つたもので、沈默の裡に自然と自己を吹聽して居る、これも即ち其の一例で、先刻妙な親孝行の話聞されたが、其の植木屋に一種變つて頼もしい處があると云ふのに就てどんな話があるかと兩人は耳を澄ませて聞いて居ると、時に兩君、世の俚諺に性質の惡い女房を持つた者は六十年の不作じやと申すが、家風に合はない、女房ならばサッサと逐ひ出して仕舞つて跡を奇麗にする法もあるが、其女房が家付であるとか又は大摑な持參金を持つて來て居るとかいふと、そうはならないから、六十年の不作と信じながらみす〳〵我慢をしなければならない、而かも其女房が不身持で戸外に情夫でもあるとすれば猶々始末に行かない、何と兩君若し世間にこういふ女房を持つたものがあるとすれば、どうでせうな、エッ、それは六百年の不作だらうと、ところが私に、一人その妻があります、(兩子は此の時呆れた顏して倩々富澤老人の顏を見る、老人は平氣で笑ひながら)さて其の妻は家付ではないが大枚な持參金を持つて來た女で、加旃も今いふ通り多淫で、外にも内にも内證で樂しまふといふ情夫がある、その上意地が惡くて、オヤケに大變な肝癪持で始終外へ出たがつて居るから俺しもこれには實以て大閉口、そこで俺しは此の妻を密室へ押込て、嚴重な看護人を付けて置くのですが、毎日二三度は是非出して人にも遣はせねばならぬから、そう〳〵嚴重な取締も出來ない、時によると看護して居ながら、情を通ずる事もあつて是まで度々其の失敗をやられて度々追ひ出した例があるから、俺の内で妻の看護人は一つの難問題です、多

姪で、疳持で外出をしたがる病人を十分看護して行くものは、世間に却々見當らない、才智のある人物では元より安心が出來ない、そうかといつてあまり柔順なものでは鼻藥を飼はれて情夫と相曳をされる、男振がよくては失敗の基、ですからそこの鍵を預かる者は何でも强情で、昔氣質なしつかりした人物でなくては安心がならないとおもふたから、丁度其の親孝行の植木屋を見込んで、疳癪女房の看護人にしたのです。何が扨て、常々親のいふ事を聞わけて居るから、俺の申付をよく守つて手落なく看護して行く樣ですから俺もまづ大安心をしたわけです。



何と兩君如何でせうなと言はれて、自分はまだこの話が十分熟煮ないとおもつたから、默然として居ると、竹蔭先生は不思議な面色で、貴君も隨分譫言をいふ方だ、此度御同伴で入らした妻君にも兩三度御目に懸りましたが、失禮ながら左樣な御病氣などお在なさる方とも思はれないが、それともお宅にもう一人別な妻君でも在らつしやるのですかと眞面になつて尋ねると富澤老人、イヤ世間を渡つた貴老にも御似合はない、只今其の女房といつたのは、外ではない、アの金の事、金庫の番人の事ですよ、これは大きに御無禮と天井を仰いでドつと大笑をした。

〔五〕

富澤さんのお話は罪がなくて面白い、どうか私共にもそんな色氣狂な女房が一人位欲しいものですな、成程金を發狂者にお喩へになつたのは近頃新らしい如何にも歴毅とした亭主のありながら兎角外へ出たがつて何人にでも附着したがる、近頃はこの女を取扱ふに密室といふものが出來たので大分要慎もよくなりましたが何分にも其番人を撰ぶのにむづかしい、貴所が親孝行の植木屋をお見立になつたのは果して適當がドウカは知らないが、兎に角御考案には感服した、併し貴所のお話には何か深い意味でもありそうな前提でしたから私共兩人謹んで拜聽してゐると中途からズドンと突き落されたやうな心持がしてお噺ぶりの手際には恐入りましたが、肝要な話の主意といふものが煙に成つて仕舞ふて、植木屋もそれ切りになつたのは一向つまりませんな。

どうでせう、人の身の上に就ていろ〳〵秘密な事があるぢやありませんかと自分の話が糸口を曳くと竹陰道人は仔細らしく口を開いて。

イヤ唯今の密室といふ事で思ひ當りました、拙者の話は正直正銘で、富澤さん見たやうに機關を仕掛て置いて間際になつて、ズドンと落して仕舞ふやうな狡猾な事は致しません、扨て拙者が一昨年關西地方へ遊歴致した時其地方で田地が二百町もあらうといふ頗るの大家で拙者も半月餘り此家へ滯留致して骨董物を拜見したり、軸物の整理を致したりして居りましたが、此家の主人は三十餘りの隨分進歩的な頭を持つた人物ではあつたが、爰に大の不思議といふは、この主人の外に今一人異の主人といふのがあるのです、それは主人の親か、親にあらず、祖父か祖父にあらず、然らば何人、これ實に不思議である、天に二日なし、一家に二主人あること前代未聞の沙汰なりと一時は拙者も不審を打ちましたが、段々と譯を聞くに及んで成程と了解を致したのであります。

併し乍ら主人の外の別の主人と云は一體如何なる人物で、其名を何と言ひ、日頃如何なる事を爲て居られ

るのか、拙者は此家に半月以上も居ましたけれども一度も面會した事もなければあれが別の主人だといふその影も形も見た事がない、然らばこれ所謂眞田の七人男などいふ影武者の類であるかといふのに、そうでもない、まづ大體、戸籍上の事、即ち財産其他一切世間へ對する名義は勿論實在の主人の名で通り萬事萬般、責任の地に立つて居るのであるが、それで家の内の實權はといふと矢張り其の隱れた方の主人が握つて居られる故に家政上の大事件を決するには必らず其人の判斷を乞はねばならぬ、斯く申すと諸君は一笑して、何それは文句をならべるまでもない、男女兩權が實行されてゐる家の主婦であらう、何だ、たわいもない事に辯を費やしたものだなあと仰せられるでせうが、却



却そんな淺薄なる觀念を拙者は骨折つて申上るではない、からまアゆつくりと御聽き下さい。

竹蔭道人は大氣焔である。

それから家の出入者抔が何か面倒な事でも持込んで來るとか、山林を買ふとか、田地を質に取るとか、公債を賣拂ふとか、又政黨に加入するとか、或は此次の總選擧には何人に味方しやうとか、又は子供に嫁を取るとか娘を嫁づけるとか、すべて一家の上に重大な事件があれば、必ず、この蔭の主人に相談をせねばならぬ、するとこの蔭の主人は何事にも干渉し、容喙をして、これは善いあれは惡いと萬事の指示をする、其の權力は却々大したもので、如何なる事でも逆らつてはならぬ、其れに逆つては家が破滅するといふほどで

ある、實に此家の眞の實權者である、がこの主人は一體何處に居るか田舍の財產家の事であるから屋敷の內は却々廣い、離れ座敷のやうな所が四五ヶ所もある、母屋でも別座敷が幾間もあつて土藏の二階にも疊が敷けて床の間のある位だから何處に如何なる間があつて其人の住居になつてゐるかわからない、それにしても拙者の滯在半ヶ月以上、隨分隅々造作を見て廻りましたが、別にそんな人にも見懸らない、何とあれほど噂に高い蔭の主人は何所に居られるのか、あまり不思議でどうやら少々氣味が惡くなつて來ました。所がチト怪談めきますが、ひよこんと他から妙な事を聞き出しました、兩君決して嘘と思召すな。

〔十八〕

竹蔭道人は自分の見聞し來つた事實の如何にも大珍事であるかの如く、一段と眞面目になつて言つた、さて私もこゝへ二十日足らず逗留して、いろ〳〵お世話にあづかつてお暇乞を致しましたが、とう〳〵眞成の家の主人といふものに面會せずに仕舞ました、如何に私も不思議な事と思ひましたなれど、別段自分の身に關係した事でもありませんから、不思議は只通り一遍の事として、其儘出立を致しましたが、翌日其次の驛まで參つて、只ある旅宿に泊りました私も藥袋な事とは存じながらも、一旦不思議と思ひ込んだ事柄は、其儘にして置く事の出來ない性分ですから、亭主に會ふて、其の疑ひの廉々を開糺して見ると、亭主は別段の考へもないらしく、倩々話して聞かせました、イヤ彼家も段々勝手がよくなるばかりですよ、此の節では一萬五千俵の小作米を揚げるといふのですから大した富限でムいます、けれども旦那の厄介も隨分夥しいといふ評判ですから扶持の要る事も大抵ではありますまい、それには毎年娘の貰ひ手もあるやうでね、乾度三百俵づゝ持參がつくさうですから相當な顏の中から貰ひ手は澤山あるでせう、ハイ何と申しても彼家の旦那は當今で五代つゞいてゐます、元はたつた三反ばかりの畑があつたばかりのを旦那の働らきから今あんなに大きくなりました、近來は毎年定まつて五六町づゝ

質の流れ込みがあつて身代は自然に殖へる事になつて居ます、それで現金は何程あるか、支配人も知らんといふ評判、まあそれほど家の爲めになる旦那ですから大切にして行かねばなりませんが、此の度の主人と申すのは大の旦那を信仰する人で彼の人の代になつてから屋敷内へ天下晴れて旦那の御普請が出來ました、貴客も御覧でしたらうが、當村の鎮守樣よりも遙かに立派な普請で厶います、それから主人は毎朝盥嗽をして直ぐ旦那の處へ御機嫌伺ひに參られる朝の御膳も旦那の召上らぬ内は決して自分達箸を把らない



といふ定め、それから年中漁師や小作人共が持つて參る魚類、野菜物類、菓物、何でも珍らしい物は必ず旦那に捧げて其跡で主人を始め家内の者が戴く事になつて居るさうです、その樣にしても時々旦那の御機嫌に障る事があるさうで其時の主人の心配といふものは却々一と通りでない、今にも大火事が起つて家が丸焼になるか又は此の大身代が一朝にして消滅でもしは仕まいかと、其の心配の時は乾度家族共を呼び集めて内評議がある、どうぢや此の頃はちと旦那の御機嫌が損じた樣ぢやがおぬし達何か旦那に對して不

興になる樣な事致しはせなんだか、前夜は門の外で大層あの外道(狗の事)が吠えた樣ぢやが、あれは何家の外道ぢや、知らぬ、あゝ近頃はどうした事ぢやか、油揚をあまり召上らぬ樣ぢや、お赤飯でも炊いて、燒鼠でもして差上げて見ずばなるまい、どうも彼樣屋敷の廻りで外道が吠へてはいかん、旦那樣の不機嫌も大方あの聲でがなあらう。

などゝ全く神佛にでも仕へてゐる樣な工合です、と語る亭主の口振りで大抵推了は出來ましたが、何と兩君斯樣な不思議が今時あつたものでせうか、併し拙者は二人の主人が家にあつた事を現在認めたのでありまするぞ。

(なはり)

實驗長壽法

福島市船場町に高橋匡甫といへるは當年八十六歳の高齢なるが、翁が實驗せる長壽法なりとて報知新聞に見へたり(曰く長壽に小長壽あり大長壽あり、小長壽は五愼を守るべし、先づ小長壽法より說かん。

第一愼　他の萬事に應じて自己の心氣を發動時靜に鎭定て考ふべし、發動急遽く騒がしければ心氣上りて百病是れより生ず(養生百術千法ありと雖も心を保護するに靜を以てすること萬法の基本たり)

第二愼　三度の食椀數を定むべし、腹は飽かしむべからず飢ゑしむるも亦た不可し、鐘と撞木の間を可とす、酒は飲まぬを可とす若し斷難き日也とも晩酌一二合に限る可し。

時々口中を絞り唾液を生ぜしめて之を飲むべし、能く食物の消化を助けて健胃に効あり。

第三愼　金銭一切の貨慾を節すべし、貪慾深き時は精神を勞し多病になりて長壽すること能はず。

第四愼　壯年と雖も男女の房慾を過ごすべからず、四十歳以上之を減ぜよ、五十歳以上は益大に減ぜよ、六十歳以上は全く斷つ可し。

第五愼　高燥にして新鮮なる空氣の地を擇みて住み早起して吐納すべし、吐は息を吹く也、納は息を吸ふ也、然して餘暇には運動し血氣を流暢し飲食を消化せしむべし。



秋郊千里

今や秋高うして馬肥ゆ、氣澄みて心爽やかなり、諸學校にては秋季運動會の催しとり〴〵にて、茸狩の興も此の頃よりぞ初まりぬ。朝夕の冷氣、身にしみて、初袷肌に快く、こゝかしこ碪の聲しきりなり。

白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる明月を賞して芋魁に舌鼓うつもあり。蘆花淺水の邊に舟を浮け綸を垂れて秋の日の漸く短きをかこち、森の蔭、田の畔に鳥を獵りて獲物の多きを誇るもありけり。

秋の花

皇室の御紋章として、めでたき菊の花。白菊の氣品高きは、いふまでもなく、黄、赤、淡紅さま〴〵の花の香を吐き、艶を競ふは實に秋芳の王といふべし。否。春の櫻と並びて日の本の名花、世界萬國に比類なかるべし。十里香とも百里香ともいはるゝ桂花は、花の形こそ小さけれ、香は春の梅にも劣らず。秋海棠の露帶びてにこやかなるは春のそれの如くに婀娜めけるところはなけれど、清艶の姿、またなく愛すべし。萩は菊に次げる秋の花にて其の枝振りの白露もこぼさぬまでにうねりたる。其の花の愛らしくて嬌羞を含めるが如くなるは、春の花の咲き誇りて我は顏なるに似ず、いと優しき風情あり。名さへなまめかしき女郎花の風になよ〳〵として、露けき野邊に咲ける。撫子の淡臙脂つけて綠の袴穿きたる、木槿花の飾りげなき色して灑

の中に咲きまじれる、野菊の世を捨て顔に田の畔に立てるなど、皆とり〴〵に愛すべく、葉の辛き蓼も花はしほらしく、姿のほうけたる蘆も、花は雪の如しとてめでらる。紫色なるは桔梗、藤袴、龍膽。青きは露草、赤きは藍の花、白粉の花、眞紅なるは雞頭の花、五彩爛然として野を彩る。龍田姫はかくても尚ほ春の美に劣りやせんとて、野山の木の葉さへ染め盡して錦繡を織り出す。かゝる美はしき秋色は、外つ國にまたあるべしとも思はれず。



白露もこぼさぬ萩のうねりかな　　芭蕉
ほつ〳〵と花になるなり萩の露　　月居
萩の花咲くといふ日は亂れけり　　禹洗

あたりへもよられぬ萩の盛り哉　　序志
白はぎや露一升に花一升　　蓼太
ひよろ〳〵と猶露けしや女郞花　　芭蕉
身の上をたゞしほれけり女郞花　　涼克
井の名も野の名も知らず女郞花　　昔虹
何事のかぶり〳〵ぞをみなへし　　一茶
身を耻ぢよくれるとあれば女郞花　　秋色
わがものに手折れば淋し女郞花　　蓼太
原中にひとり暮るゝか女郞花　　秋瓜
一籠のこき紫や桔梗賣　　丁規
咲くまではむつと閉ぢたる桔梗哉　　五洲

人の見ることやくるしき女郞花あきぎりにのみたちかくるらむ　　忠岑
綠なるひとつぐさとぞ春は見し秋はいろ〳〵の草にぞありける

秋の郊外

龍田姫は今方に秋の粧に忙はしく、銀杏樹を染め、櫨を染め、蔦を染め、楓を染め、名もなき木の葉さへも染め盡し、なほ飽きたらでや、柿蜜柑を色づけ、淡黄濃紅爛として、山野はさながら錦を曝したるが如き中に、蕎麥の花のみきはだちて白し。秋郊の眺はいかで春に劣るべきかは。田の面には垂穂の稲、充ち滿ちて黄雲凝りて散せず。案山子に慣れ鳴子に驚かぬ群雀も、烟を噴きて轟々と馳せ來る汽車の響には、驚きて飛びたつめり。神嘗祭の前後、重陽の頃、なべて天氣うららかなれば、蝗取らんとて郊外に遊ぶ兒女多し。鎭守の森には赤き白き幟、風に翻りて太鼓の音ゆたかに響く。野翁は村酒に醉ひて、千鳥足覺束なく家路に歸り、少女はよき衣着て嬉しげに宮へと急ぐ。

稲の穗に尾花かさなる山路かな　桃雨

祭禮に招く

文もて申上候當年はことの外稲穗の實りよく一村大喜びに御座候、されば來る何日の鎭守例祭には例年踊とやらんを催さんとて用意とりどりに御座候これとて御目にとまり候ほどの者にはあるまじく御もてなしとては例の田舍料理のみに候へども見渡す限り黄はみたる稲田の中に鳴子の音に驚きて飛びたつ群雀こゝの森かしこの籬を彩りたる紅葉の錦秋の野の景色は都の御方には御目新しう候はむこれを御馳走と思召し御子供樣方召し連れ遊ばしてせひ御越し下されたく皆々御待申居候かしこ

秋の暮

後の月も見果て、一年一度の大祝日とて萬民の祝ひことほぐ天長節も過ぎ、雁おりそろふ頃となれば、秋雨もの淋しく、秋は將に暮れんとす。窓前の芭蕉は裏打したきまでに破れ、梧葉落ち盡して月影あらはなり。垣根の雁來紅も日に日に色褪せ、腸に秋のしみたる熟柿の二つ三つ枝上に殘るさまあはれなれど、さすがに菊のみは秋知らぬ顏に咲き誇る。

稻は刈り盡されて田の面餓に瘦せ、案山子はこゝかしこにあはれなる遺骸を暴らす。枯枝に晩鴉のとまりたるはいはずもがな、枯尾花の風に靡きて起き伏しする、烏瓜の枯れはてたる蔓を命に垂れ下れる、見るとして斷腸の媒ならぬはなし。奥山には紅葉ふみわけて啼く鹿の音さぞや悲しからん。

唯此時に千村萬落、籾磨する音の夜更くれども燈光戸外に漏れ、こゝかしこに聞ゆるこそ、昇平の象も見えていと喜ばしけれ。



秋もやゝ朧おりそろふ寒さかな　野坡
はらわたに秋のしみたる熟柿哉　支考
行秋のなほたのもしや青蜜柑　芭蕉
なき人のあらば尋ねん秋の暮　去來
行く秋や紅葉の中の一軒家　凡兆

秋の暮我が身の上に風ぞ吹く　素堂
枯枝に鴉のとまりけり秋の暮　芭蕉
籾すりの月になるまで音すなり　碧梧桐

うつらなく眞野の入江のはま風に尾花なみよる秋の夕暮

俊成

むらさめの露もまだ干ぬ槇の葉に霧たちのぼる秋の夕暮

みやまより落ち來る水のいろ見てぞ秋はかぎりと思ひ知りぬる

興風

ゆふ月夜おぐらの山に啼く鹿の聲の中にや秋は暮るらむ

年ごとに紅葉ば流す龍田川みなとや秋のとまりなるらむ

貫之

茸狩り

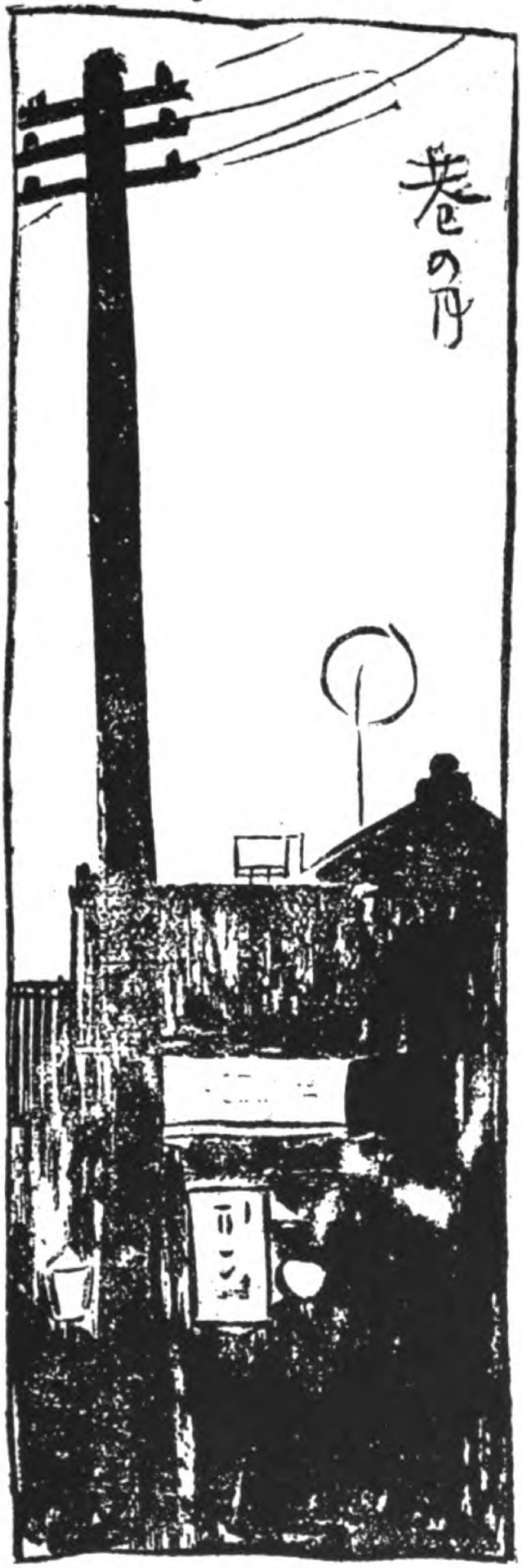
ことし學校の催しにて始めて茸狩にゆきぬ。いと興味多きものなりき。

午前六時の發車といふに後れじと急ぎて某停車場へはせつきけるに、まだ早かり。やがて人數も皆揃ひたれば借切りの汽車にて出で立つ。車窓より見渡す秋郊の景色畫の如し。何時何十分といふに某停車場に着く。こゝより十町餘り歩めば、はや目ざす山の麓なり。案內者に誘はれて山を登るにさまでに險しからねば、難なくとある山頂に設けたる休息所に達し、辨當信玄袋などおろして暫し休息す。

師の君、今より思ひ〳〵に山路に分け入りて籃に餘るほど茸とることそよけれ、さはいへ餘りに遠くな行きそ、時を見はからひて集合の合圖すべければとて、竹籃一つづゝ渡したまふにぞ、いざとて三百餘名の生徒は蜘蛛の子を散らすが如くに山に分け入りぬ。われこそ逸早く見出し多く取らんと思ふ心は皆一つなれば、優しき處女も、けふは脫兎の勢にて、落葉踏みしだきうばらかき分けて進むに、はや、かしこにも此處にも、見付けしよ取りしよと叫ぶ聲の聞ゆるに、わが籃はまだ空し。かくてはならじと、あせりながら進むほどに嬉しや十二三本も一かたまりに生ひ出でたるを認めて思はず聲揚げたれば、皆々馳せ來て、またゝくひまに取り盡し、發見者のわれは僅に三本を獲たるのみ。されどこれにて松茸はかゝる處にこそ生ふれとよき經驗を得たれば、尙ほもこゝかしこをあさり、三十分たつまじと思ふ間に籃は既に滿ちぬ。物入れん袂とてなければハンカチーフ取り出して包むに、やがてそれにも滿ちぬ。今はさまではと思ひたれば、小高き處に休ら

ひて谷々を見渡すに、二人して一つを見つけて先後を爭ふもあり。足元にありとも知らず進みゆき、後より來る者に手柄せらるゝもあり。笑ふ聲、叫ぶ聲こだまに響き、リボンの影、袴の裾、木の間草むらに隱現して、秋の山は時ならぬ百花に飾られたり。折しも合圖の鐘はるかに響きければ、皆々休息所へ集まれるに、荊棘に手傷けたるもあり、袴かき裂きたるもあり、髮亂れてリボン失ひたるもあり。おの／＼獲物の多少を爭ふさま、凱旋の將士、軍功を語るにさも似たり。

時方に正午に近かりければ、いざ食事をとの許を得て、三々五々うち集ひて辨當開に、美味えもいはれず。今さらに分量の少かりしを悔ゆるもいとをかし。此處はまた見晴しことに佳く、萬頃の稻田、黃雲凝りて散ぜざる中に、唯一筋光りて見ゆる秋の川こゝかしこを點綴せる茅舍竹籬蜈蚣の這ふやうに見ゆる汽車など、皆一目の中に集る。日ごろ塵たち迷ふ衢に住む身の今此の景に對しては壽命の延びたらん心地しぬ。暫し此處に遊び戯れて後、人員を點檢し、そろそろと山を下り、彼の停車場よりまた汽車に乘りて歸途に就き、何時に某停車場に着きぬ。かくて家に歸り



て父上母上に獲物を見せまゐらしゝは、たそがれ近き頃なりき。

秋の遊の中に、月見て歌よまんは、清き樂みなれど、夜更けては身體にも惡しく明日の課業にもさはりあり。菊見紅葉狩はた樂しからぬにはあらねど、餘りに陰氣にてひき立たず。唯春の遊びにもまして、賑はしく興味多きは茸狩にこそ。

松茸を贈る

けふは學校の催しにて某山へ茸狩にまゐり候始めての事とて如何あらんと思ひの外、持ち餘るほどの獲物にて只今歸宅皆々に披露致し初陣の手柄を誇り居候よろづ事缺かせたまはぬ御厨には御珍らしうはあるまじと存じ候へども五六本持たせ上候間私が自ら取り來しをめでたまひて御納め下されたく若し御晩餐の御獻立の一はしとも相成候はゞいと嬉しう存じ候かしこ

螢がり

螢狩はむかしよりある遊びにして歌又は文に見へたるも甚だ古し古來螢の名所として數へらるゝは山城の宇治川、近江の石山寺大和の佐保川等なり、されど宇治は却て少くて、近江守山、今宿邊の者之を捕へ集めて螢問屋に出し、問屋にては籾殻の籠に入れてこれを賣り、遠く東京に送り或は宮中に奉るもありといふ。

近時名高くなりしは山城の保津川、武藏の大宮公園、江戸川、越後の阿賀川等にて大小無數の螢飛交へて戰ふが如く一所に團まりて數百の火塊の如く、碎けては數萬の小火となるなど、壯觀奇態を極むる所ろ少からず、この發光は一分間殆んど數十回に及び、熱帶地方にて螢の無數に集りて光る時は、恰も電光の閃くがごとしといふ、我國の源氏螢のごときも又同樣なり、毎夜螢の光り始むるは大抵八時頃よりにして、十一時頃には最も盛んなれば、螢狩の行はるゝは即ちこの時なり。

飛ぶ螢はかなき露と見へながら
何故きえぬおもひなるらん　　春海

夏川のみくまがくれのみたれ藻に
よる咲く花は螢なりけり　　景樹

草むらの螢よいかに咲く花の
秋をばまたず習ひそめけん　　千蔭

出むかふて扇にうつす螢かな　　閑更

我まゝに飛んで靜かな螢かな　　梅室

盃の上へに吹かるゝ螢かな　　曉臺

螢は甲虫類にして臀部に發光器を具へ晝は淡綠色にして夜は鮮かに青綠色の光を放つ、卵生にして完全に變體を經過す、種類頗る多く形狀も又隨つて異り、我國に多く產するは源氏螢、平家螢なり、卵は芥子粒ほどにして黃色なり、この卵既に微光を有し、水邊の草根等に產附られ一ケ月程過ぐれば孵化して蛆虫となる、體の兩側に叉狀の防禦器を具へ、物に犯さるゝ時は忽ち左右に突出して松脂の如き臭氣を發し、害敵を辟易せしむ、五月頃脫皮して蛹となり、それより凡そ二週間を經て初めて地上に飛ぶなり、この蛹の時代には成虫よりも却つてうるはしき光を放つ、琉球にあるものは全身黃茶色にて、臺灣、呂宋、支那の南部にあるものは茶褐色なり、メキシコの產は長さ一寸餘、黑色にして二種の發光器を有し、非常に大なる光輝を發す、土人之を用ひて提灯に代へ、婦人は往々首飾品に用ふ、又キユーバ島にては砂糖黍畠に棲み砂糖の汁を吸ひて生息す、故に土人砂糖を以て飼養すといふ、螢の甘味を好むものなるは、螢狩に呼ぶ俚謠に甘き水てふにても知らるべし。

近頃螢の發光に就て渡瀨博士の研究されたるものあり、其說頗る明細なるが、要するに其の發光機關は無數の細胞より成り、其細胞の周圍に數多の氣管支ありてこれにまとひつき、氣管より來れる空氣中の酸素に細胞內の可燃質が觸れて酸化しこゝに發光するものならんと、而してこの細胞內なる可燃質は燐にはあらで一種の脂肪ならんといふ。

女代診（十三）

糸左近

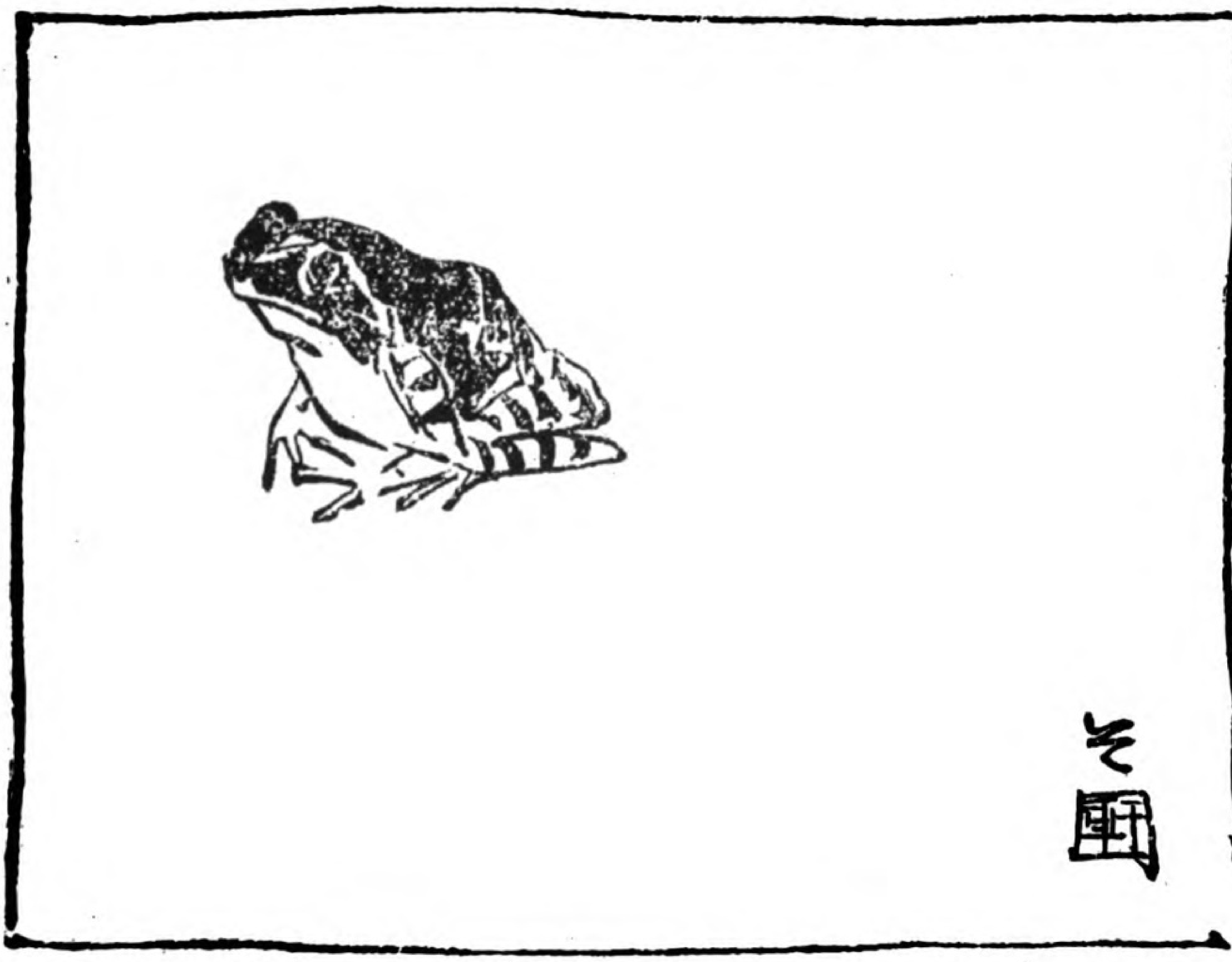
醫學上より見たる 怠惰者

題の説明――普通に怠惰者と稱ふるを大別すれば二種ある、一は爲さねばならぬを爲さ無いで爲さずとも可い事に耽る者例へば女學生ならば學問を一心に勉强すれば宜いのに其の學問を其方退にして芝居とか小説とかに一心不亂なるが如きを云ひ、一は爲す可き業務も爲さず、さりとて爲さずとも可い事にも熱心ならぬ者例へば女學生ならば學問もせず又他の遊藝も敢て好まず、唯ブランチヤランと日を送る者を云ふ、乃で余が今論せんとするのは前者で無くて後者である。前者は倫理上の病的で迚も「女代診」如きの容喙す可き事では無いが後者は醫學上の病的即ちストリユムペル氏の所謂 Habitueller Kopfschmerz（常習頭痛と譯す）が主なるもので倫理上からは寧ろ憐れまねばならぬ譯であらう、然るに療治も爲せないで斷えず『此の怠惰者めッ』と叱りつけるに至つては無智の致す所とは言ひ、實に殘酷な話だ、然れば今回之に就いて御話申さうといふのである。

怠惰の原因――人に依て違ふ、貧血なるの爲もあれば、多血なる爲もある、或は神經性即ち神經衰弱歇私的里等の原因もあれば亞爾箇保兒ニコチン鉛などの中毒もある。又慢性胃病常習便秘耳鼻咽喉等の疾病が媒介となるもあれば遺傳より來るのもある。一般に女子は男子よりも多く之に罹るものである。彼の身體薄弱なる學者が靜養を敢て省みず寢食を忘れて眞理を叩き、或は平常に左程で無い學生が試驗前になつて徹夜的に一時勉强するなども勿論本病の誘因となる。

怠惰の狀態――針仕事を爲ようとか或は書物でも讀まうとすれば何と無く鈍い頭痛がして義理にも我にも一時間と續かぬ固より是非善惡の道理を心得てるのであるから、怠けることの惡く勉强することの善い位

は師匠や親などの意見を聴かざるまでも承知の上なれど頭痛がして苦しくなるを如何せんやだ、其故冬ならば火鉢の灰を掻きならすとか夏ならば唯頤杖ついて茫然天を眺めてるとか、兎角之といふ仕事は出來ぬ、さア之ではならぬ、我も今年は幾つになる、何時まで斯うしてノンベングラリンと日を送る譯にも行かぬ腿に錐を立てながらも勉强せねばならぬと又もや仕事に取り掛る取り掛れど矢張同じく倦怠の心に堪へぬ、乃で何某樣の樣に芝居でも見て氣を晴し、それから又勉强した方が可からう、さうちや〳〵と思



ひ切つて芝居を見る、二幕か三幕は面白く無いでも無いが、四幕五幕になると又候頭痛は始まる欠伸は出る薄ら眠くなる、已むを得ず伴の友逹には氣の毒なれど先に歸るやうになる、啻に芝居のみならず歌留多をしても碁を打つても他人の如く元氣に行れぬ、勝つても負けても嬉しくも無れば悲しくも無い、斯くて夜床に入ると今が今まで眠かつたにも拘らず眼は冴々として萬感胸に浮び我ながら晝の中に怠つたことの悲しくなり、「明日ありと思ふ心はあだ櫻、宵に嵐が吹かぬものかは」と慨いては見るものゝ、矢張

明日からこそと責てもの慰藉として先づ其晩は眠る、偖明日になつて愈々勇氣が出るかと云ふに根が病氣なのであるから、病氣の治らぬ以上は益々頭痛を加ふるのみだ、斯樣に旦復旦と續き數月或は數年にも亘り遂には何等の仕事も爲さぬのに頭痛は間無しに感ずるやうになる或は前額或は後頭或は頭部全體或は顏面にも影響し、甚しきは鎖るが如く裂くが如く破るゝが如く、揉んだり呻つたり悶へ苦しむものだ、若し斯の如くに苦しまざるまでも頭は壓へつけられるやうに重く仕事を爲るなどは到底不可能である、從つて心も激し易く鬱し易く嘗て本誌の「血の道病」で述べた通り、嫉妬はする、變心はする、慮言を吐く、見え坊になる、無性になる、實に憐れむ可き狀態に陷る、それでも尙病は加速度の勢を以て進み、食慾は減り惡心はする時には嘔く、眩暈はする、其の結果次第に瘦せ衰へて却々容易に全快す可からざるに至るものである。

豫防法療法――原因の章に述べたる事柄を避けねばならぬ。一般に快活なる精神を懷くやうにするが當に本病のみならず、萬病に對しての豫防法である、其他運動睡眠等の事は前號バセドー氏病で述べた通りなれば敢て贅せず。又娘時代の人であるならば琴三味線活花抹茶等の藝事は一つ宛稽古し一度に何も彼も學ぶといふことを呉々も避けられたい、一藝でさへ過度の熱心は本病を惹起するものなるに孱弱の身を以て男子も及ばぬ過重の神經刺戟は實に生命を削る所の刃である。次に療法も同じく原因を除くやうにするが肝要だ、例へば貧血なる爲に本病を惹起したとすれば貧血の治療を爲しニコチンの爲ならば喫煙を禁ずるやうなものだ。之れに就いて本病者中の最も不幸なるは多血の原因である、多血なるが爲に顏色も赤く、筋肉も肥え太つてるものであるから素人には無病強壯なるかの如く見え、「仕事に取り掛ると頭痛がして堪りませぬ」と告げても「此の怠惰者めッ寐轉ばしておきさへすれア御機嫌だらうが、それでは天罰が當るぞッ、人並勝れた健康體を有ちながら實にまア呆れた人間だ」と撥ね付けられるに相違無い、又本人も病氣故とは知らず苦痛

を忍んで多少の仕事をする、故に病は益々進むのであるから、斯の如き人は餘り滋養の食物を取ら無いで而も普通人よりはより多く運動して血液の新陳代謝を盛んにし、且つ便通の少き折は相當の藥用を取り、腦に充血せぬやう取計らねばならぬ。次に冷水療法温浴療法旅行療法も是非々々實行するが急務だ、早朝に起き出でゝ十分時間程冷水に浴び、終つて食事をなし、三十分時間乃至一時間休んでから草鞋を穿き山水の區を尋ね、時には「これは〳〵の吉野山」にも至る可し、時には「松島や嗚呼松島や」と叫ぶ可し、時には肩摩轂撃の巷時には人跡絶無の山間珍らしき禽鳥の聲見慣れぬ異郷の風俗一々心を樂しましむるに足る、斯くて旅宿に就き、入浴して晩餐を終へ、手帳を出して今日の日記を附け、午後九時夢路に入ると枕に就くが宜い、之を氣の合へる友達と共に一二ヶ月も續ければ規則立つたる運動をなす上に其の娯樂に變化があつて病



氣は何時の間にか逃げて了ふものだ、之より家に歸つても矢張冷水浴や溫浴は何處〳〵までも續け、過度の勉强を爲さぬやう、仕事も一步々々に進ませ、心身を勞せしめぬを何よりの療法となす。藥用としては安知必林・安知歇貌林・歇那設珍・規尼涅・撒里矢爾酸曹達・規羅謨加僧謨・亞砒酸エルゴチン等である、尙處方を示せば左の如し。

安知必林三・〇　白糖適宜
　右分三包一日三回一包宛

安知歇貌林一・〇　白糖適宜
　右分三包一日三回一包宛

歇那設珍　二・〇　乳糖適宜
　右分三包一日三回一包宛

鹽酸規尼涅〇・六　甘草末適宜
　右爲十丸朝夕五丸宛

撒里矢爾酸曹達四・〇　薄荷油一滴　單舍八・〇　水一〇〇・〇
　右一日三回分服

貌羅謨加僧謨三・〇　苦丁二・〇　單舍八・〇　水一〇〇・〇
　右一日三回分服

還元鐵〇・二　亞砒酸〇・〇〇一五　甘草末適宜
　右爲三丸一日三回食後一丸宛（漸次增量すべし）

エルゴチン〇・二　甘草末適宜
　右爲三丸一日三回一丸宛

併し是等の藥品は固より醫師の指揮を待たねばならぬ。尙頭痛劇しき時の應急の手當は頸部に芥子泥を貼り足を溫湯中に入れて居れば大いに其の發作の緩らぐものである、何人も覺えておかねばならぬ。又名醫に就きて俺氣療法を受くることも甚だ肝要である。

（終）

季節衛生

殘暑堪へ難く候處などゝ手紙の文句には書くけれど、先月に比ぶれば朝夕の氣候は大いに涼しくなり從つて

身體も凌ぎ易く、從つて食欲も次第に增し、色々の初物が出るに任せて七十五日命が伸びるなど〻情慾を逞うすれば氣候の變換と共に消化器を害し、殊に薄弱な人や小兒は盛夏よりも却つて下痢或は胃腸加太兒を惹起し易く爲に七十五日以上にも命が縮まるかも知れぬ凡て氣候の變換は衞生上の最も注意す可き時である、夏の暑い時は之に應じたる處置をして來たから比較的病はずに濟んだれど、今や氣候の變化を來したるにも拘らず、薄着して夜深しをしたりすると所謂感冒に罹り、感冒は又胃腸の障害を來すのである、故に縱ひ早く寢所に入つても十分に身を温包して之を防がねばならぬ、活潑なる小兒の如きは晝間の運動に疲れて夜は七顚八倒夜具を跳ね飛ばすものなれば豫めフランネル若しく紀州ネルの如き寢衣を十分に着せておかねばなりませぬ、斯く注意してゐても、

▲感冒に罹つたら何うする——感冒にも固より輕重が有つて輕きは噴嚏が出て水鼻汁が漏れる位に過ぎねども重きは三十八度以上の熱を發し處置が惡いと小兒などは氣管支加太兒肺炎乃至は窒扶斯等を續發するものである、乃で輕きは例の温脚浴をなし身を温包して發汗せしむれば大抵はそれで治るけれど重きは却々其位では治らぬから早く醫師に就き相當の治療を受けねばなりませぬ。

▲胃腸加太兒は如何——これ亦勿論輕重有つて輕きは胸がムカ〳〵して惡心を催し、一二回の下痢を起すに止れど、重きは數回の嘔吐をなし、粘滑樣の糞便を下し、裏急後重になつて、揚句の果には血便を洩すものさへある、而已ならず熱發して或は腸窒扶斯或は赤痢などを誘ふこともある。又胃は左程の障害無れど偏へに腸ばかりを侵すこともあれば又腸は少しの變化も無れば胃加太兒のみに苦しむこともある、兎に角之に侵されたら十分に腹部を温包し、流動體の食物より外は取らぬこと〻し、特に葛湯は下手な藥よりも腸の加太兒を緩和するものである、斯の如く二三日も攝生して居れば輕きはそれで治つて了ふ、然れど攝生もせず又重き症なるにも拘らず、素人療治や姑息の手段

を講じてゐると他病を起さゞる事までも慢性になつて數月の間苦しむか或は衰弱して遂に黄泉の客となることもある、倘胃加太兒に對しての應急藥品は重曹三、〇を水一、〇〇〇に溶かし適宜に少し宛服むが宜い、膓加太兒或は下痢にはビスミット大人ならば一回一瓦小兒ならば〇・一〇・五を一日數回試む可し。若し治



つても數日の間は固形食物を取らぬが肝要である、序でに膓加太兒症に似たる赤痢病に就いて説明しておかねばならぬ此の病は春夏秋冬何れの時節にもあるけれど、其の中八月から十月までへかけて九月が最も多く流行するであるから日本では九月を殊けて本病の注意時といつても可い本病の流行地は九州四國が第一番で

間々大いなる死亡數を來すこと少くない。其の他の地方にも時々猛烈をきはむることがある。東京などは豫防法の行き屆くため、さほどのことはない内に消えて了ふ。「原因」即ち本病の傳播をなすものは、直接或は間接に糞便である、さうして其の糞便中の病毒は、近年まで確かでなかつたけれど、今は一種の赤痢黴菌であるといふことが醫者社會の輿論となつたのである。其の病毒は食物又は飲料又は食物に出て體内に達するので、空氣から來るといふことは稀である。誘因となるものは感冒、不良の飲食衆人の集合などである、蔓延の媒介をなすものは、便所衣服の交換井水、河水などである。「病状」は胃加太兒や腸加太兒を以て初まることもあるし、或はさうでなくて初めより腹痛に續いて便意を感じ厠にゆくと、血液に粘液を混せた塊り樣の物を洩し、其の惡臭紛々として鼻をつく、或は又夜間惡寒に續いて熱が出で次に腹痛便意を感じ、どつと下るだらうと厠に走て行くと、こはそも如何甚だ少量の粘液或は血便を潰す。もはや濟んだと思つて寢床に歸る。間も無く便意を感す、又走る又同じく尠ない。斯くの如く反覆すること二十四時間に二十回乃至七十回にも及ぶ、さうして其の粘液血液を洩すときの苦しさは恰も肛門を切るが如く灼くが如く、地獄の責もかくやと思はる。これに引きかへ小便は甚だ少くなる。舌は白苔を帶びて渇きを催ほす、其の熱のある人は食物を嫌ふけれど、熱のない人は少しも食慾を損せぬがある。斯樣に苦しむことが三四日又は二週間にも亘ると、厠にゆく數が次第に減り、大便は大抵段々黑色に變じ次に木の葉色に移り、血液がなくなり、粘液が止み、何時の間にか、小便が多くなり、遂に平癒して了ふ。この時に食慾進み平日厭ひな物も旨くなる、されど此の時に至つては食慾を愼しまないと、忽ち元の默阿彌になるものである、又養生及び治療法がわるいと、右のやうな工合に全快しないで重症に變するものである。「攝生法」は余の經驗に依ると本病に罹つたら直ちに二日間の絶食をなし、それから絶食と共に半身浴を行なはねばならぬ、半身浴は攝氏四十五度位な温湯に

十分間程づゝ、一日五六回乃至七八回行ひ、さうしてくれは二日位でなく全快するまで今日も、明日もと續くるが可い、この絶食と半身浴との療法は餘り他醫の言はぬことで唯余の經驗である。三日間からは流動體の食物ばかり即ち生卵三個牛乳一合半位より漸次增し四個五個六個二合四合五合に到つて止め其の他極めて軟らかき米粥甚だ少量を食ふのである。又フランチルの腹卷は大必要である。全快後と雖も、尚二週間位は止めてはならぬ、又全快後は前にも述べた通り、食事に注意し、冷水氷水酒類及び果物などは勿論すべて消



化のしにくい物は一切避けねばならぬ。それから病中は必ず運動せぬやう極めて靜臥して居らねばならぬ、厠に行くとも可成避けて虎子(便器)にてする方がよい藥用の事は勿論素人療治の出來るものでは無い。話變つて方々の海水浴場に長らく逗留の紳士淑女達は一陣の金風と共に夫々歸宅の途に就かれたる可し、然れば此の方々にも一寸御注意を申さねばなりますまい。

▲海水浴場より――我が家に歸れば今が今まで齷齪たる生活を逃れ仙人的に暮してゐたのであるから、當分の中は何事も五月蠅く、爲に無性になり易いもの

だ、無性になり易いと共に朝の冷水浴も怠り勝になるは自然の勢、されど斯くては折角衛生の爲になしたる海水浴も却つて仇となる、故に此際尚更冷水洗拭を實行して來年の海水浴まで續けられたいものだ、若し之が行はれぬ時には西洋の諺にもある通り「人は死するに非ずして自殺するなり」と味ある哉言や。

衛生顧問

内科の部

肋膜炎に就いて　問　昨年の十二月頃風邪より肋膜炎に變じ今年五月頃粗全快して六月醫士の進めに依り湘南の温泉場へ轉地療養し心地宜く相成り候へ共少し歩けば呼吸切致し動氣は高ぶり困り居り候何卒其の養生法及療法御知らせ下され度。（横濱市 廿一歳女）

答　肋膜炎は全快しても約三年の間は病者なりと心得心身を安靜にし滋養強壯の食物を取り、激しき寒風を呼吸せぬやうにし、新鮮の空氣温暖の氣候以て身體を回復せねばならぬ、然るに普通人の如く劇しき運動をしたり、繁忙なる職務に從事したりすると、又々再發するものである、再發すれば以前よりも一層の重症に陷るものなることを忘れてはなりませぬ、此の養生は即ち療法なりと知らる可し。

問　十八歳の女昨年肋膜炎に罹り殆んど全治致し候へ共、胸部の中央に時として甚だしき疼痛を感ず最も此の痛みは二三年前より有るので、醫士は神經痛たりと申され候、何の爲に候や御返事を乞ふ。（京都の 香風女）

問　御地の醫士の云はるゝ如く肋間神經痛の爲でせう兎に角前者に答へたる通りの養生法を守られたし。

小兒の氣管支加太兒　問　本年七歳になる女兒體格は宜敷一見壯健の樣に有之候へ共生來風邪に襲はれ易く、少し北風が吹けば直ちに咳嗽出で藥用すれば二三週間にて全快致し、又少し寒き日あれば又同じく繰り返す有樣に候、何卒其の豫防法併に手當法等御教示賜はりたし。（淸國上海有恒路 の燒野の雉子）

答　小兒の氣管は固より狹きもので爲に加太兒を起し

易きのみならず、大人に在りては敢て恐るゝに足らぬ輕症でも小兒は甚しく熱發し激烈なる咳嗽と共に危險なる狀態に至ることもある。豫防法は一般に榮養に注意し、頸部を常に冷水に浸せる手拭にて摩擦し、大氣日光に觸れて運動せしめ、而して朝夕の冷風には餘り觸れしめぬやうにし、それでも尚頻回侵される場合には空氣の溫暖淸淨なる海濱に移り、本病に罹り易き身體を一新するが何よりの肝要である。次に發病して熱出で咳嗽の甚しき時の手當は冷布纏絡法を施さねばならぬ。



冷布纏絡法――とはフランネル又はモンパを患者の胸脊共に纏ふ可き大さに切り之を冷水に浸し輕く絞つて全胸に纏ひ、更に亞麻仁油紙を以て之を包み、又其上を綿を以て被ふのである、若し熱度甚だ高き場合には氷水に浸し三十分時間乃至一時間每に交換し、熱高く無い時は二時間乃至三時間每に取り換へれば可い此法は啻に熱を取るに宜いばかりで無く咳嗽も亦大いに緩ぐものだ、然るに可愛さうだ冷たからうなどと躊躇すれば病勢愈々高まるものである、「小人の子を愛するは惡むなり」とは實に名言だ。

其他藥用の事に就いては醫士が臨機應變の妙計に依賴せらる可し。

（神經衰弱の治療法）問　私の夫三十八歳は土木受負業兼燐寸軸木製造工場主兼本屋に候爾來健全なりしが昨年九月頃より頭痛不眠、物に飽き易く、怒り易く、食慾減じ背部にも幾分の疼痛を感じ、加ふるに常習便秘と相成り、地方三四の醫士は皆神經衰弱症との事何卒其の養生法等御教示を受け度候。（奥州の木羽取女）

答　「女代診」の章に述たる療法を參考し、殊に旅行療法を是非々々實行せられたいものだ、藥用等の事は御地の醫士に就て十分服んで居られようから敢て申す必要もありますまい。因に申しますが御良人は三業を兼ね居らるゝことなれば精神を刺戟すること多く、爲に本病の主因となつたかも知れぬ、貞淑なる貴女よ御如才も有りますまいが、御身も亦其の劇務の半を分擔し良人をして精神の刺戟を輕からしむるやう計られたい之れ何よりの慰藉である。前半は母に在り後半は妻に」在り——といふ語は實に千歳不磨の名言である、呱々の聲を擧げてから十年以上になるまでは父の御陰も固より大なれば、慈愛に充てる母の感化が惡かつたならば決して立派な人間にはなれぬ、斯くて一人前の男になり、妻を娶つてから其妻にして貞淑の德に欠くる所あれば如何に英傑の夫でも事業を完成出來難きものである、嗚呼本誌の愛讀者よ賢母良妻とは是れ之を言ふのである。

話は大いに岐路に入つたが、余は衞生顧問の書狀を見る毎に何時も自己本位の問か多くて小兒や夫に就いての質問甚だ少きを慨嘆するの餘り茲に聊か贅言を述べたのであります、多罪々々（野州の心痛生）（三重縣の黑尾角子）（廿六の氷婚女）（芝區赤羽根百代子）に答ふ——病狀に多少の相違はあれど何れも今回の「女代診」を熟讀せられ豫防法や療法を實行して下さい、必ず健康爽快の御婦人となららるゝこと受合である。

（消化不良の療法）問　私事從來小食なりしが昨年分娩致し候てより授乳の爲め空腹を感じ間食を致し候處此頃は下腹部張り便秘し頭痛耳鳴食慾進まず手足

だるく折々痔の如き物も出で候併し相變らず間食致し度候之が療法等御知らせ下され度如何なる事も守り申す可く候。（羅井縣　貧軍人の家内）

答　御手紙に依て判斷すれば間食の原因よりして消化不良症を惹起したるものならん、果して然らば（一）煎餅一枚たりとも間食せぬ事。（二）三食の間は六時間を隔つ可き事（三）運動を勵行す可き事（四）毎日入浴する事（五）消化し易き食物を取る事（六）干物鹽藏物は食せぬ事。（七）精神を面白く有



つ事。（八）便通を整ふる事。（九）茶及び酒は成可飲まぬ事。（十）藥用する事。藥用としては

含糖百弗聖　三・〇
タカヂアスターゼ
〇・三
乳糖　適宜
右分三包一日三回
食後一包宛

便通を整ふる藥は色々あるが胃病の便通藥には

人工加兒々斯泉鹽
五・〇　水一〇〇・〇
右一日三回　食前分服

（慢性腸加太兒の療法）問 慢性腸加太兒にて一日三四回も下痢し胃には何か閊へてゐるやうに感じられ精神常に鬱々として早く死にたい樣な氣になります、如何なる療治をなせば治りませうか。（出雲平田 文子）

答 （一）流動性の食物を取る事。（二）腹部は常に溫包する事。（三）下半身浴を毎日欠かさぬ事。（四）脂肪類酸味の物は必ず飮食せぬ事。（五）腹部を輕く按摩する事。（六）海邊の暖地に移轉する事。（七）心身を安靜にす可き事。（八）日光浴は大いに可なる事。（九）家の內外及び衣服を淸潔にす可き事。（十）藥用す可き事。之には硝蒼單寧、撒里矢爾酸蒼鉛、格倫僕、阿片、ナフタリン、鉛糖、阿仙藥、護謨漿等の藥物は有れど、其の用法は是亦診察の上にて臨機應變の策を取らねばならぬ

（靜岡市在 困離女）に答ふ＝脊髓に關する病ならんと思はるれど診察の上ならでは確答し難し。

（淡路島 一少女）に答ふ＝本誌七月の「女代診」肺病七療法を參考せられよ。

雜問一束

問 音聲の惡しきを直す法有りませうか。（御面倒 厭女）（信州 南海女學生）

答 聲帶及び氣管等に故障あるためなら治療の見込あれど、其他は醫療上の範圍外である。

問 無病で痩せる人ありませうか。（播磨の 石老女）

答 老年、飮食の不足であるが、併し之も日ならず病的になる。

問 肺病の初期には必ず運動を禁せねばなりませぬか（越中の 疑問女）（高知の リヨン女）

答 然らず。

問 醫師の監督を離れて單獨に亞砒酸を服藥する方法無きか。（北海道の 黑髮女）

答 死を覺悟せねばなりませぬ、又藥店は素人の方に賣却しませぬ。

問 カーチレーチ商會の長身器は有効なりや。（野賀 たけ子）

答 從來の生活法即ち坐る事から飮食物等を大いに

改良し、運動專門に行ふ積りとなり、之を利用せば或は多少の効果あらん。

問 赤鼻を治する藥を問ふ。（寶珠花の逆み女）

答 毎日蛭に吸はせて然る後イヒチオールを酒精に溶かして塗けられよ。

（今月の少きは來月埋め合せ致します）

暑氣と腦病

東京腦病院長 後藤省吾氏談

暑氣は、腦病患者や精神病患者の大敵で、極暑の候となると、病勢の募るものでありまして、精神病患者に就いて見るも、冬季間は靜かで居るものも、暑中になると騷ぎ出すと云ふ有樣で、暑熱は非常に病氣に障るものです。

發病も亦極暑の候に多いです。現に當病院で調べた所に據つて見ても、夫れを確かに證據立てゝ居ります今夫れを委しくお話し申すと、年中で發病者の一番多い月は、春陽氣のポカ〱して來る三月時分で、其次ぎは八月です。八月と云へば、申す迄もなく、暑熱の最も酷しい時期で、健康體の者でも隨分弱るのですから、况して腦病氣のある者と來ては堪りません。

それから九月と四月、六月と七月とは、患者が稍少なく、次は一月、其次は二月、十月、十一月と云ふ順で冬季は最も尠ないです。

▲腦病の原因如何

腦病の原因に就いて、最近當院で調べた所によると男女の患者一千六百三十八人の内で、斯う云ふ原因を示して居ります。

勉學の結果(百七十一人)、損失の失望(十九人)、異性關係(五人)、業務失敗(四十七人)、不幸(三十二人)、感動(十八人)、家政(四十四人)、他の疾病(百六十七人)、不攝生(二十六人)、酒と莨(五十四人)、過勞(五十九人)、不和(七十人)、分娩(八人)、梅毒(三十八人)生殖器病(四人)、藥用中毒(一人)、敎育不良(一人)心配(二十九人)、其他(四十七人)。

當病院の腦病患者で、最も多數を占めて居るのは

學生でありまして、右勉學の結果と云ふのが、即ち學生の腦病の原因なのです。患者の職業別から云ふと、學生に次いで多數なのは商人、農家、無職、官吏、雜業、勞働者、軍人、會社員、教師、醫師及び辯護士、僧侶、製造業、金貸業、文學者及び美術家と云ふ順になつて居りますこゝに農業の多いのは總體の數が多いからでせう。

精神病の原因も、右申しました腦病の原因と大抵同じもので、要するに頭腦を過度に使ふのが、主に原因となるので日露の戰爭以來、精神病患者は、餘程增加した樣に思はれます。軍人で發病したのは、戰地で過度の勞力を使ひ、過度に腦を使つたのが原因となつて居るし、また出征者の家族は、心配の餘りに精神病を起し、戰死者の遺族は、悲歎のあまりに發病したと云ふのが、實際尠なくない樣です。

また精神病患者を年齡別にして云ふと、男女共に發病の最も多いのは、二十歲以上三十歲位迄の間です。次ぎは十五六歲から二十歲位迄の間で、之れは重に勉學の結果に出るのです。三十歲から四十歲迄の間は、比較的尠なく、四十歲以上五十歲までの間となると、發病者が稍や多くなる。之れは思ふに心身漸く衰へて物事に堪へなくなつた結果でありませう。

▲精神病の種類

精神病にも種々あつて、おとなしいのもあれば、騷ぎ立てるのもある。鬱ぎ込むのもある。其種類を云ふと、總てゞ二十種程ありまして、躁狂と稱するのは、騷いだり暴れたりする精神病、鬱狂と云ふのは沈鬱で之れは死期が近いと云ふ危險があります。痲痺狂と稱するは、梅毒から起るもので、身體が不自由になる。早發痴狂と云ふのは、主に遺傳でありまして、十五六歲の時分から起るものです。之れは感覺が鈍くなつて漸次に無感覺と云ふ風になりますが、早く手當をすれば、治癒ります。夫れから偏執狂、中酒狂、此中酒狂と云ふのは、酒精中毒から起る精神病で、西洋では不治の病氣として居るが、日本人の患者は、早く手當をすれば、大抵治癒る樣です。夫れから老耄狂と云ふに

は、沈鬱なのと、何でも誇大な事を云ふのと二種あります。またヒステリーと云ふは、婦人に能くある一種の精神病です。

▲婦人の精神病

ヒステリーは、昔時漢法では臟躁と稱へたもので、經症のは俗に血の道です。ヒステリーなどは、家庭教育の不良から起るのが能くある。家庭教育の不良と云へば、父母たる者が所謂猫可愛がりをする事で、餘り甘くする處から、子供は夫れに馴れて、段々と我儘になり、遂に其我儘が病的となつて、自分で自分の心を抑制することが出來なくなるのです



夫れから婦人には、家内の不和合を苦にして發病するのも多くありますし、また縁談を苦にしたり、嫉妬の餘りなどからして發病するのも能くあります。前にお話し申した發病原因中の、異性の關係とあるのは、即ち斯う云ふ樣なのを指したものです。

▲酒と煙草の害

酒と煙草とは、衛生上に大害のあるものと云ふ事は、今更申すまでもない、ですが、當病院の調べに依ると飲酒家の子には、精神病患者や癲癇病患者が澤山ある事を證據立てゝ居ります。其調べ方は、五百十九人の患者の中で、父母共に

二合以上の酒を飲むと云ふのを擧げて見ましたので、夫れが六十七人ありました。即ち三分の一以上で、之れに依つて見ても、酒は自身に害を與へるのみならず子供に迄も害を與へるものである。

▲癲癇病と子守

癲癇と云ふ病氣は、子供が小さい時分に、頭を甚く打つとか、或ひは驚愕からも起り、または腦膜炎の爲めに發病するのが多くあるです。處で、世間には子守女を雇つて、之れに大切な子供を預けて居る者が澤山あります。子守女と云ふ者は實に危險で、赤ン坊の事よりも自分の遊びの方に氣を取られて居ると云ふ風だから、如何な拍子で子供の頭を物に打附けさせないとも限らないし、また如何な事で甚く驚かせないとも云へないです。而して夏の炎天に傘も翳さないで、子供の頭を天日干にして居るなどは、實際珍らしくない。斯んな事からして、子供の腦膜炎に罹るのが能くあるのです。

子供を有つて居る方々は、是等の事に十分注意し、また酒や莨を愼んで、子孫にまでも害毒を遺さぬ樣にせねばなりません。

△乾胡蝶　村山烏徑著

短篇小說數種を集めたるものなり中には一寸觀察の奇警なるものもあれど大體に於て修練の作少きは惜むべし價五十五錢祐文館發行

△大農附り豐公醍醐花見の場　佐野天聲、山田桂華著

都新聞にて募りたる懸賞脚本の秀逸を集めたるものなり、大農は飜案なれば事件も人物も共に現時の生活には聊か不調和の氣味なきにもあられど脚本としては近頃出色のものなるべし猶本脚本は九月本鄕座に於て實演せらるべしと云ふ價五十錢文淵堂發行

△淀殿　塚原澁柿著

歷史小說家の圜一人澁柿翁の作中尤も婦人受のするはこの淀殿ならん。殺生關白秀次の殘暴なる擧動、ヒステリー性の女傑淀君の愛情心につよき有樣などいづれもよく描かれてさながら其の時代を見るがごとし價七十五錢隆文館發行

△岩窟穽　水谷不倒著

心理を描くを主とする小說の兎角に事件少くして一部の讀者を除きてはあまりに飽氣なきものたるにこれは又事件を主として事柄の入組みたる處ろにおもしろ味を持たせたる小說なり、何處と取り立てゝよき處ろはなきも讀み行きて興味淺からず價四十五錢文淵堂發行

漫錄

新婦日記

中

小波

八月十二日　曇

昨夜は何だか心淋しく、氣味が惡く、その上少し蒸暑かつたので、おち〳〵寐られなかつたが、今朝方に成つてトロ〳〵としたと思ふと、何だか氣に成る夢を見た。……何でも松の澤山生へた、濱邊の景色の好い所を、若い男と女とが、浴衣掛で散歩しながら、さも睦まじさうに話して居る。好事に二人の顏を見やうと思ふのに、何うしても見られない。……その中に、その女の方が、何だか自分である樣にも思へたが、又さうでも無い樣で……やがて濱から船に乘る所を見ると、その女は全く別の人になつて、自分は此方の岩の上に殘されて居る。

それ許りならよいが、その相手の男が、初めは誰とも付かなかつたのが、其時見たら自分の良人。其自分の良人が、何所の者だか知れない女と、而も奇麗な女と、現在私の見て居る前で、船に乘つて海へ遊びに出る。あんまりだと思ふから、私は聲を出して、

『郎君！』

と呼ばうとするのに、咽喉が引ついた樣で少しも呼べない。

その中にはその船が、二人を乘せたまゝ沖へ出て行く。その癖誰も漕ぎはしない。二人は中の間の所に、肩を摺り合はして、……背から手をまはす樣にして、何だか頻りに話して居る。

私はもう一度呼ばうとしたが、まだ聲が出ないで、段々胸が苦しくなつた。とう〳〵私は泣き出した。そしてまるで子供の樣に、身を投げ伏してだゝけると、その彈みで忽ち岩から轉げ落ちてしまつた。

夢はそれで覺めたが、身體中は汗ピッショリ！　時計は四時を打つて、戸外では牛乳配達の車の音がした。

馬鹿な夢をとは思つたが、朝方の夢は正夢だと、一外誰かに聞いた樣にも思ふので、何だか氣に成つて氣に成つてならない。

正午まではぼんやりして、仕事が何をしても手に付かない。

一體良人は何所へ行つたんだらう？――會社の用事で千葉……それは知つて居る。けれども昨夜は何所で泊まつたんだらう？……ほんとに千葉で泊まつたのか知ら？

千葉の手前には稻毛と云ふ所がある。一昨年兄さんや何かと行つたが、さうだ……丁度昨夜の夢の樣な所だ。

若しや良人が、千葉まで行つた序に、歸りに稻毛へでも寄つて、誰かと一緒に成つて、私には內證で、一日遊んで居るのでは無からうか？

良人は堅い人だと云ふ事だ。けれども男だもの、あてには成らない。自家の兄さんだつて、世間では品行方正だと云つて、大層評判の好い方だ。それで居て、ちよく／＼家を明ける事もあつた。女の所から手紙が來たのを、私が見つけて默つて居てくれと賴まれた事もあつた。それだもの、良人だつてあてには成らない。

など〻疑は疑を生み、邪推は邪推を呼んで、何うやら昨夜見た夢が、其儘事實である樣に思はれて成らない。――悲しく成つて、悔しく成つて、正午の御飯もろくに通らなかつた。

きよが昨夜も妙な事を云つたが、今日もまた冷評す樣な事を云ふ。

「お一人だと何も上らないんで御座いますねェ。……現金で御座いますこと！」

私は返事するのもいやで、顏を見られるのも氣がさす樣に思つた。

二時頃になるときよが又出て來て、

「一寸電話かけて參りましやうか？」

と云ふ。

「何所へだエ？」

と聞くと、

「會社へ掛けて見やうぢや御座いませんか。今日旦那樣は、出て居らつしやるか、居らつしやらないか？……」

「餘計な事お仕で無いよ！」

「でも……氣に成るぢや御座いませんか。」

「大丈夫だよ。御用の都合でまだ千葉に居らつしやるのかも知れないし……」

「だから伺つて見やうと申すんで御座います。」

「いゝよ。そんな事聞かないでもいゝよ。」

「聞いたつても宜しいで御座いませう。」

「いゝッたら。お止しよ！」

きよも熱心に云つたが、私もむきに成つて止めた。それほどの大問題でも無いのだが、何だか私には氣が咎めて、きよの忠義立を採上げる事は出來なかつた。―きよはふくれて部屋へ行つてしまふ。

途端に新山が郵便を持つて來た。その中に私宛の葉書が一枚。千葉からのだ、良人からのだ。

「用事の都合にて、今晩終列車に間に合はず、明朝歸京直ちに出勤可致、いつもの時刻には歸宅致し候、かしこ。」

とある。消印は正に千葉。――今朝方の夢も少しあてに成らなく成つた。

私は直ぐにきよを呼んで、その葉書の旨を話して、夕御飯のお下物を見せに、魚屋まで走らせた。

少し形付けて置かうと思つて、何の氣無しに机の邊の古新聞を見たら、四五日前の挿畫に、若い男と女と、海邊を散歩して居る所があつた。――それは自分も見覺のある小說の畫。――何だ！ 今朝の夢は是が原因であつたかと、知れたらさつぱり胸が晴れて、今日半日いやな心地をして居たのは、まるで別の人の樣に思はれてしまつた。

それにしても、たとひ怪我でも麁匆でも、良人を疑がつたり、恨んだりしたのが、窃に恥しく、面目無く會つたら何と云つて詫びやうかなどゝ、そんな口上まで考へて見たが、……何も面と向つて云つたのでは無いから、また改めて詫びるにも當らない事だ。

しかし私はさう思つた。――もう是からは、決して妬氣らしい心は起すまい。なまじそんな氣が出ると、根も無い事に苦勞して、半日でもいやな顏をして居なければ成らない。ほんとに納らない話だと思つた。

夕方良人は歸つて來た。例時より機嫌よく。

『昨夜はさぞ淋しかつたらう。よく鼠に引かれずに居てくれたナ。』

などゝ冗談さへ云つてくれる。

それに付け込んで、きよが又妙な事を云はうとするから、急いで用を云ひつけて、臺所へ遣てしまつた。ほんとによく間に合ふ女だが、どうも口の過ぎるのが疵だ。

同十三日　晴

義子さんからまた葉書が來た。是非二人で入らつしやいと書いてある、それ許りならいゝが、水彩で妙な人物が書いてある。よく見れば男と女、私達二人のつもりなのだ。――冷かしたつもりだらうが、別に惡い心地もしない。

夜に成つてから、良人にそれを出して見せたら、義子さんの事は私に聞いて、よく氣心も知つて居るので、

『よし、そんなら此方からも書いてやれ！』と、負けない氣に成つて、頓狂な葉書に、いろ〱冗談を書いて、私にも何か書けと云ふから、思切つた事を書いてやつた。

漸く出來上つたが、それを新山やきよに出しにやつては、文句を見られて宜しくないからと、良人は自分で行かうと云ふ。そんなら私もと云ふので、とう〱散歩に成つてしまつた。帶も髮も平生の儘で。

同十四日　晴

後から出來て來る筈の紋付の事で、何うしても一寸母に會ふ用が出來たから、（此間來た時にも一寸話が出たが、）良人が出勤した後で、支度をして實家へ行つた。此間到來したビスケットが一罐あつたので、それは正吉（弟の名）への土產にした。

母はまだ臺所の世話を燒いて居たが、正吉は椽側に遊んで居たので、直ぐ飛び付いて來て、

『姉さま〳〵！』

と、珍らしいから大層もてる。

ビスケットの罐を渡すと、嬉しさうに抱へて、直ぐ母の所へ見せに行つた。

母も用事を半端けにして出て來たが、私の來たのを大層喜んで、直ぐに氷を取りにやつてくれ、私が殘して來た古い浴衣の、然しちやんと糊の付いたのを出して來て、

『これと着更へて、ゆつくりしてお出で！』と云ふ。



親の家だから遠慮は無いと云ふ氣で、私は直ぐにそれと着更へて、縁に近い一番涼しい所に陣取つて、氷水も早速一杯平げると、母は自分の分までも食べてお仕舞ひと云ふ。

その母はまだ鬢から汗を垂らしながら、團扇で私を煽いでくれて居る。

『兄さんは？』と聞くと、『奥だよと』云ふ

正吉は直ぐ馳けて行つて、奥の書齋から兄を引張つて來た。

「ヨウ、奥樣のお出でか？」

と、兄は直ぐと冷かす。

「御無沙汰しました。」

わざと丁寧に辭儀をすると、

「何うだ忙しいか？」

「さうでもありませんが……何ですか毎日マゴ〳〵してるんです。」

「マゴ〳〵ぢやアあるまい、ニコ〳〵してるんだらう。」

「アラ……――兄さん覺えていらつしやいよ。」

「家へ行つて云付けるからか？」

「知りませんよ。」

私がツンとして見せると、母は團扇を口に當てゝ、

「ホヽヽ、ホヽヽ、又兄さんにやられるんだよ。何かお土産でも持て來るとよかつたのに……」

「さうでしたねエ、氣が付きませんでしたねエ。」

正吉は聞き咬つて、

「僕アお土産貰つたア……兄さまア！これ姉さまのお土産！」

と、誇り顔に例の雛を見せつける、

兄は好い加減にそれをあしらひながら、

「時に毎日御出勤か！」

「えゝ！」

「ちと話しに行かうと思ふが、夕方にやア歸へるのかイ？」

「えゝ、夜分は居りますから、遊びに入らつしやいな。」

「夜も大抵居ないつて云ふ事だぜ。」

「えゝ、……たまにやア交際で遲くなる事もありますけども……」

「その事ぢやア無い……何時も夜になると、二人で緖に散歩に出るツて、専ら評判だ。然し結構な事だ。」

「アラ、誰がそんな事を云ひました？」

「云はなくツても、ちやんと會つた者があるんだ。」

「そりやア一緖に參つた事もありますワ。此間銀座まで行つて、お目に掛つた方がありましたから、屹度そ

の方が話したんでせう。』

『その方だかどの方だか知らないが、それぢやア矢張り事實なのか？』

『アラ、鎌を掛けられたの？　酷い兄さんだ！』私はもう口を利くまいと思つて、わざと正吉を側へ呼んで、一緒に遊んでやらうとすると、兄はまた眞面目に成つて、

『時に今日は丁度好い時に來てくれた。お前に一つ相談があるんだぜ。』

『また擲んぢやありませんか。』



『いゝえ、今度こそ眞面目だ。ねエ、阿母さん！』

母も側に居て、

『ウン、眞實だよ。お前に聞いたら解るだらうッて、昨夜もさう云つてた所なんだ。』

『さう何なの？』

『お前のお友達に、たしか義子さんてエのがあつたねエ。』

『えゝ、ありますよ。江谷義子さん。』

『江谷？　そんならいよいよ然うだ。』

『それが何うしたの？』

『阿母さん！まア貴女から話して下さい！』
『他でも無いんだが、昨日ある人が來て、矢張り兄さんのお嫁さんの事でネ……いろ／＼聞いて來てくれた中に、その義子さんと云ふのがあるんだよ。』
『まア、不思議ですこと！義子さんならほんとに好い方よ。私一番仲好しだつたワ。……先時分よく遊びに入らしつたワ。兄さんだつて會つた事あるでしやう。』
『寫眞を見ると、見た事もある樣だが……僕アしかし口も利いた事ア無いから、一向何樣な人か覺えない。』
『どんな人つて、あんな面白い人無い事よ。私ほんとに大好きですワ。兄さんほんとにお貰ひなさいな！容貌だつて好ッて程ぢや無いけども、愛くるしい、男好きのする方だワ。ねエ阿母さん！兄さんのお嫁さんにやア、丁度好う御座んすわねエ。』
『私もさう思つてるんだが、兄さんはまた氣むづかしやなんだから……』
『兄さんの皮肉屋は私だつて知つてますけども、義子さんなら屹度氣に入りますよ。私ほんとに保證するワ。』
と、私は熱心に成つて勸めた。母も大いに心が進んで來た。兄も流石に動かぬでも無いらしい。
其所へ客が來たので、兄は座敷の方へ行つてしまつた。
その後で、此方は肝腎の用件に移る。紋付と云ふのは袷の事で、母は淡色を主張するのに、私は黒が一枚あれば、あとは縞お召にしたいと云ふ。縞お召の紋付なんて、何だか藝妓染やしないかと云ふから、いゝえ立派な奥さん方が、みんなさうして召して居らつしやると、證據に女學世界の口畫を見せたり、三越の時好を出したりして、やつとの事で母を說き伏せた。
その中に正午に成つたので、久し振で兄や正吉と一緒に、同じ食臺で御飯を食べた。兄さんと私には、別にあらひが付いて居たが、私のは半分正吉に分けてやつた。
御飯が濟んだら一ト寢入して、お出でと云はれて、暫らく横に成つても見たが、さてズウ／＼しく寢られも

しない。大方は正吉のお相手で、畑に出來た水蜜桃を食べながら、皆で他愛も無く笑ひ暮らして、四時が鳴る前に急いで歸つた。

歸つてから、良人に今日の話をしたら、良人も兄と義子との事は、大きに贊成してくれた。

今日は不思議に氣持の好い日だつた。

同十五日　晴

十五日だから赤の御飯を炊いた。良人はこんな事は知らなかつたと見えて、

「お前の誕生日か？」

と聞く。

「お三日ぢやありませんか。」

と云つても解らない。

「お三日たア何の事だッ。」

「お朔日と十五日と二十八日を、お三日ッて云ふぢやありませんか。」

「かゝゝ、然うか！なか〳〵舊弊の事を知つてるねエ。」

と、笑ひながらも食べて居た。私は何だか極りの惡い想をした。

考へて見れば、神棚一つ無い新世帶、お三日の赤飯も少し不似合ではある。今度限でもう止さうかと思つた。

けれども魚を付ける事は止めないで、女中や書生には鯵、良人には鯛を一匹買つて、汐煮やあらひや照燒などにした。汐煮は昆布だしにする方が好いのだが、生憎良いだし昆布が無いので、普通のだしにしたら、何だか腥さくておいしくなかつた。何とか云はれるだらうと思つたら、でも默つて食べてくれた。この方が口に合ふのか知らん？

昨日實家で貰つて來た水蜜桃が、まだある筈だと思つて居たら、きよが小聲で、

「鼠が引いてしまひましたヨ。」

と、云つてそつと玄關の方を指した。新山もなか〳〵油斷が成らない。

△衛生的家屋の模型（口繪參照）

本號口繪に揭げたる日本家屋の模型は大日本私立衞生會より本年九月中旬開催の第十四回萬國衞生及「デモグラフヰー」會議衞生品展覽會へ出品せるものにして現時本邦に於る紳士の住宅を標準として之を模型に製作せんが爲め考案したるものにして其建坪百廿五坪五合內二階家四十一坪五合平家七十八坪五合土藏五坪五合とす。

本家屋各室の配置構造は大體に於て光線射入の平等、空氣流通の自由、鼠族棲息の防止等衞生上一定の需要に適應するを以て目的と爲せり其工事仕樣の大概を列記すれば左の如し

光線の射入に關しては座敷、書齋、客室等主もなる居室は其位置を東南方に面せしめ且中庭を設けて側面若くは背部の採光に便にし以て其平等を期せり空氣の流通に關しては前記光線射入の構造に伴ひ之を自由にし得べしと雖も尚ほ椽側通長押上鴨居の外發廊下の部分其他各室にも同樣の窓を設け以て換氣の十分ならんことを期せり

鼠族の棲息に關しては建物周圍の地形に「コンクリート」を用ひ其上に割石を据へ床下は總て「叩き」となし其周邊に多數の換氣孔を設けて之に金網を張り且板戸を附し以て其防止を期せり此板戸は夏季には之を開放し冬季には之を閉鎖すべき者とす又床下に入口を設け掃除の便に供せり是等の構造は獨り防鼠に適するのみならず床下の防濕及清潔を保持する上に於て多大の利益ありとす。

尚萬一鼠族の天井裏に侵入したるとき之が捕獲に便ぜん爲め天井の一部に上り口、屋上に明り取兼空氣拔窓を設け、臺所必要の部分は亞鉛板を以て被包し其窓には金網を張り汚水排出土管口には鐵製の網を嵌入し以て防鼠に遺憾なからしめたり

其他書齋、應接室及客間の一半は之を化粧床板張とし椅子等を配置するに便にし以て日常起臥の快適を計れり

屋根は總瓦葺（椽側廻りは銅板葺）表見附入母屋造立聞は式臺附とし本邦固有建物の風趣を存し土藏は[illegible]とし本邦耐火建物の構造を示したり。

設計技師佐藤興次郎、製造受負人[illegible]、製作人吉原吉次郎

◇婦人繪畫研究會　本郷區駒込林町二番地なる（熊谷直彦氏方）同會は婦人に、畫道を獎勵する爲に明治三十四年八月小杉齊好女史が主となり帝室技藝員熊谷直彦其他數氏の贊助に依りて創設したるものなるが、爾來七星霜を經て會は益々振興の氣運に向ひしにより、今や更に會則を改めて廣く會員を募り一層斯道の奬勵に力むべしと云ふ。婦人は年齡を問はず入會することを得、研究期間は約三ヶ年にして每土曜日を會日と定め、又臨時に大會を開くとあり。會費は一ヶ月金五拾錢

觀察

柔性觀

吉野臥城

▲女を譬ふれば、玻璃器です、透明なのもあり、乳色なのもあり、彩色を施したのもあり、まあ何て清いでせう、奇麗でせう玻璃器の美に魅せられたものは、永久の生命があるやうに思つて歎稱します。が、美しいものは皆脆くあります。玻璃器は陶器よりも、何よりも脆くあります、激しい打撃に堪へぬのは勿論ですが、冷熱にすら堪へないではありませんか。強い寒さに遇ひますと、自ら慄いて破れます。熱湯を注がれると苦しみに堪へずして、美しい胸を壞つて了ひます。あゝ何て脆いでせう。

▲玻璃器は、女の感情です。玻璃器の脆きが如く、女の感情は脆いものです。男の理性が冷たい水を注ぐと女の玻璃器は絶望の顫へを帶びて破れます。男の感情が溫かい酒を盛ると、女の玻璃器は溫かい夢を見て溫かさに微笑みます。熱すれば、美しい胸の破るゝまで熱します。女の感情は奔放です。何物を以ても繋ぎ止めることは容易ではありません。女の感情は女の生命です。涙と微笑とのない女は死物です。感情の美しい時は、女の最も美しい時です。

▲玻璃器を破つて了ふのは甚だ容易です、女の生命を葬つて了ふのも左程難くはありません。併し乍ら破つて了へば夫れ迄です。玻璃器も親切に、鄭寧に取扱へば、何時までも美しい形を保つて居ます。女も同情を以て遇して行けば、圓滿ならしめることが出來ます。玻璃器に一石を投ずれば、がちや〳〵と厭な音がして美しい形を葬つて了ふやうに、女の頰に激怒の氷雨を降らすと、感情の花は黑くなつて了ひます。女の花が黑くなつたら、家庭の生命の終です。

▲玻璃器でも、陶器でも、一度熱湯で煮てから用ゐますと、餘程丈夫になります。冷熱に遇つても容易く破れなくなります。古くなるに從つて益々丈夫になりま

す。女も幾多の試錬を經て、修養を積んで來ると、餘程強くなつて來ます。經驗を積めば積む程丈夫になります。

▲家庭の平和は、夫婦の愛によつて保たれます。愛のない家庭は、花のない燒野原です。綠蔭のない砂漠です、性慾の烈しい靑春の時代には、性慾その物を愛と心得て居ますが、愛は、より以上に微妙なものです。愛は、花に譬へたら蜜でせう。夫婦を繫ぎ、子孫を慈むのは、全くその甘い美しさです。蜜のない花の萎れて色なきが如く、愛のない家庭は慘憺たるものです。

▲敎育は愛の理屈を敎へます。戀の正に成立する所以を敎へます。理屈の愛、所以の戀は、何時まで永續するものでせう。赤色を吸收させた白い花のやうに、遂に寂しい影が宿つて居ます。その影を見た時に、その花が可厭になるやうに、可厭になつて了ひます。理屈によつて愛するものは不幸です。敎育的に戀を成立させやうとするものは不幸です。鼻眼鏡の下から、愛の影を捉へやうとして煩悶するなどは、愚の極です。愛は眞情です。僞の埃を止めない美しい花です。理屈と所以とを去らねば、眞の愛の蜜を吸ふことは出來ません。強ひて求めた結婚の涙は、暫時の美しさを虹に止めて消えて了ひます。

▲女の美しい感情を躊躇なく破つて了ふのは、虚榮です。虚榮を夢みて居る女の夢は、とこしへに不安です。戀するにさへ思ひ煩ひます。彼の人は黃金を持つて居る。彼の人は爵位の貴きがある。彼の人は學士である。彼の人は美男子である。が併し敎育が足りない。彼の人は色が黒いが將校である、金鵄勳章を有つて居る。彼の人は人格が低いが會社の重役であるから、可愛がつて、美い着物を澤山買つて呉れるだらう。人に賴つて虚榮の夢を滿足せんとするものは、勢ひ打算的でなければなりません。打算的の戀愛は墮落です、滅亡です。とこしへの緣は那麼ことで繫がれるものではありません。若し強ひて繫がうとするなら、表面上の孤獨を守りて、密かに幾人の手を握るのです。不安の快樂はそこにあるでせう。

▲虚榮に醉うて居る女は、體を勞することを賤みます。良人は良い人だから、結局自分を保護し、可愛がり、衣食させ、安樂させべきものと心得て居ます。子は成る可く産みたくないが、生れたら止むを得ないから乳母を雇つて夫れに任せる色の衰へるのは愛の衰へる所以だと云つて、化粧に浮身を窶します。何のことはない、雛棚のお雛樣が、位置を換へて座蒲團に坐り給ふたやうなものです。這麼ことで一家が治まるものでせうか。今日の教育を受けた婦女に、この傾向のあるのは歎はしいことです。頻りに良人を鞭つて、良人の精力を減殺して、疲勞さして了ふのはこの種の婦女に多いのです。



▲女に儀式の節操を强ゆるのは、石油を振り掛けて美しい花を枯らして了ふやうなものです。唯形骸の存在を認めて、生命を奪つて了ふのです女に吹きこむべきは、宗教上の眞面目なる信仰です。眞面目なる信仰と云ふのは、今日のやうな不眞面目なる形式的なる、信仰に對して云ふのです。宗教上と限るのが狹いと云ふ

なら、廣い意味の信仰でも可いのです。唯眞面目なる信仰です。この信仰で以て女は始めて強いものとなりとこしへの生命の上に慰安を求め、活動して行くことが出來るのである。

▲信仰と共に、文藝の趣味を解させよと云ふことも必要です。文藝の趣味を解すると云ふのが、必ずしも嫁入支度として、なにがし大人に就て和歌の作法を學びそれがし宗匠に就て俳句を拈くることを云ふのではありません。解すると云ふのは、作らなくても、味ふことが出來れば可いのです。お嬢さん達が皆閨秀作家になつたら、夫れこそ良人を尻に敷島の道どころか、天地が動いて溜つたものぢやなからうと思ひます。さらでも、地震の多い我が邦ですもの……。

▲天地は兎も角もとして、近來は電車を動かさうとして困ります。以前は男に席を讓られて、男の暖みを懐しみて腰を下したものであつたが、今は暖みを慕ふ寒梅のやうに、強ひて男を立たして其の暖みを占領するのです。或日のこと、廂髪の姫達が二人這入つて來ました。誰も席を讓らない。眞白な腕もあらはに提革を握りながら、姫達は、「教育のない田舎者はいけ好かないわ、席を讓ることすら知らないのね。」など仰せられるのが、微かに聞えました。恁うなつては、公德も下り坂です。公德は女から請求する權利のあるものではありません。何て恐ろしい女子教育の進歩でせう。

▲女の嫉妬を象徴したものは、蛇です。蛇となつて、美しい心を食ひ傷る時の女は凄じいものです。花の匂ひも、匂の香も、自分の鬼氣で打消して行きます。そこに光明がありません、愛がありません。唯闇黑があるはかりです、怨恨があるばかりです。靈性を没して魔性を極端まで現はします。世に女の嫉妬ほど恐るべきものはありません、家庭の光明を悉く咒つて了ひます。

雌雄　下總　山本千代子

軒の日覆に、棕の木に仰くしいがチユーと鳴けば下のもチユーと鳴く、頭を捻つて頂に探がす様子、其の内ひら！と下のが前栽の竹の枝に飛び移ると上のも續いて同じ枝に移つた。兩方が、横足で身を近寄せ、チユ……く鳴くかと見るまに接吻をした。

過渡期の下女

久良岐

◎自分が家庭を組織して、爰に十年、一番閉口するのは、下女問題で、過渡期に於ける新舊思想の衝突は、獨り姑と花嫁との間のみでなく、尤適切に變化の甚しく、尤家庭に日常關係の深い下女の下等になつたのは、物質的文明の餘弊とは云へ、不愉快の甚しいものである。

◎「女學世界」でも讀まうと云ふ令孃諸君は、未來の理想に夢中で、下婢問題に耳を貸す餘裕もあるまいけれど、上流の家庭はいざ知らず、我々中流の家庭では、一番難義をするのが下女問題である。

◎昔しは下女と云へば、三月から翌年の三月まで、丸一ヶ年の契約で、それ迄は下女の方でも、主人の方でも大抵の不都合は我慢し合つて、契約の年限を果して出代ることになる、これを出代りと云つて、俳句や川柳に多く咏まれてゐる。

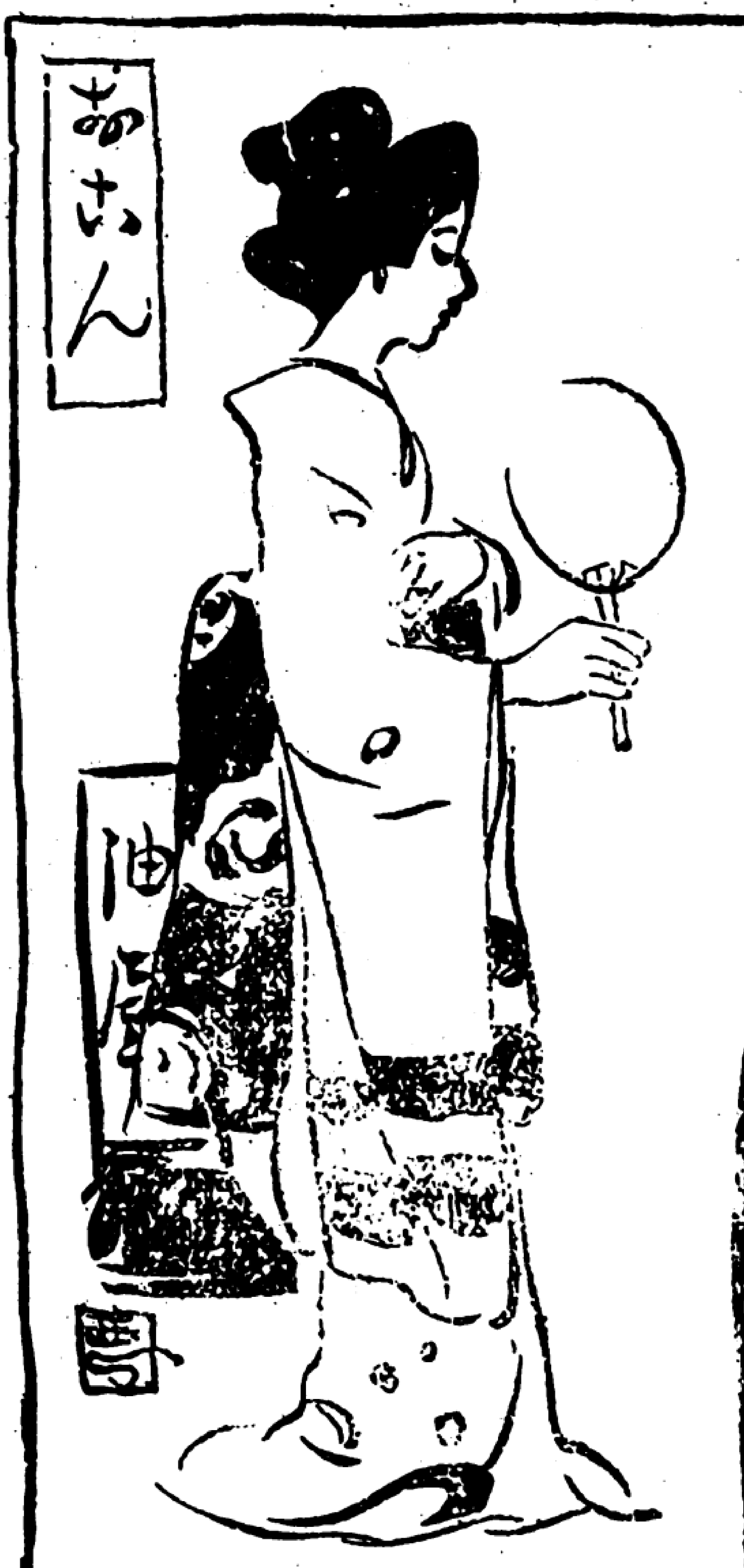
出代りの涙にしてはこぼし過ぎ
出代りで娘の戀の橋が落ち
曇つても先づ出代の藪理はすみ

など多く川柳に咏まれてゐる、ソコで忠義者などの下女は、十年廿年五十年の長日月を殆ど獻身的に奉公した下女や乳母などは少なくなつた。

◎兎に角自分が幼時に薄ッすら覺えてゐる、仙と云ふ下女なぞは、誠に忠實な者で、能く母や姉に仕へて、未だに一つ話しになつてゐる、所が段々自分が生長するに從つて、下女も忠實心が失せて來たが、まだ夫れ程では無かつた。

◎所が、自分が明治卅年頃から、新たに家庭を組織してから、工女の盛んになるにつれ、下女はますく拂底で、代るのもく殆どロクなのはない、況して子供などが出來てからは、皆子供のある所を嫌つて、目見えの方が多くて居付くのは少ない、偶まにあるのは皆深山幽谷の蠻態或なので、殆どお座敷向なのは稀れである。

◎海軍でも、下士が年々減少するので、將校中でも心配してゐらるゝ方がある、ソレは實際海戰の大戰爭でも、いかに浪が高く艦が動搖する時でも、將校連は多く役に立たないで、實際下士が尤振つて、發砲は勿論全艦の活躍する精神は、下士の力を待つ事偉大なものであるそうな、ソレで待遇が下士はいつ迄も下士で、將校になれぬので、皆下士になるよりは將校になるから、下士はます〳〵缺乏するとの話、自分が明治廿四年の頭敦賀丸で、朝鮮へ行つた時、廿四時間の暴風雨に出逢つた、丁度義兄が事務長であつたので、其事務長室に同居してゐたが、下手に立つてゐると投げ出された位の動搖でも、水火夫が一番に奔走して風波と鬪つてゐる、新らしい事務員などは皆へト〳〵になつて事務室内に弱り込んでゐると云ふ有樣、實地の役に立つのは水火夫斗りであるからして、海軍の實力は下士にあり、陸軍の實力は特務曹長にあるのだが、扠待遇が惡るし給料は安しといふので、年々に減少する譯であらう。



◎近頃自分の持家へ移轉して來た輸出商がある、此人は通譯から身を起し、日露戰爭に際し、大に活動して卅萬圓許の身代になつた人だが其人の話にも、これからの學校出の俊才は、成る程頭があるであらう、才能があるであらうが、商賣の掛引

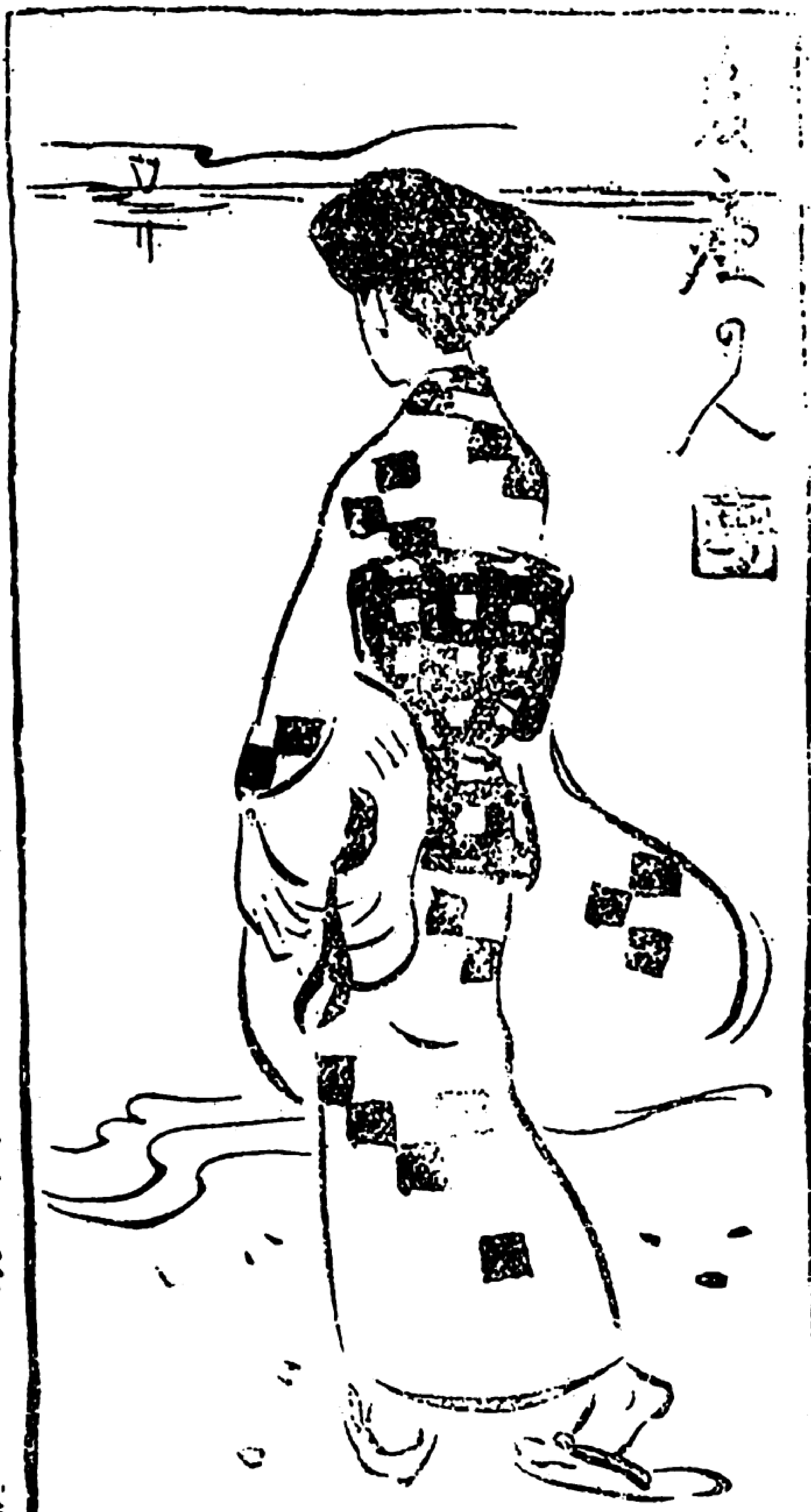
と云ふとは、學校では教へられぬ、ソレと陸軍の特務曹長、海軍の下士なども、皆實地練習の結果に得るので、細君の臺所の支配も、同じく教科書に依つて學び得らるゝものでない、自分は實業界の特務曹長だとの話。

◎つまり下女問題は、此下士や特務曹長や旅店の手代問題と同じく、大に細君たる者の一考も二考もせねばならぬ點である。

◎此下女操縱問題は、中々細君に取つて困難の仕事で、分けて子供でもある婦人は、相當の苦心を要するのである、近來の下女は少しの骨惜みをのみするから、目見えの中に子供が二三人あるとスグ引下がつて仕舞ふそれで居付くのは、先づ山出しで、其山出しも昔のやうに木訥仁に近しと云ふのはよいけれど、近來の下女は次第〳〵に都ずれて來ると横着に成り出す、馬鹿と鋏は使ひやうで切れると云ふけれど、此少々ぬけてゐる下女を使ふのも中々厄介なもの。

◎今なる下女は、十八許りで石川縣能登の者で、漁師の娘であらう、取次一つ滿足に出來ない、時々取次の滑稽をやらかす、一度伊藤銀月君が來訪せられた時にナグシヤの伊藤さんが來られたと云ふから出て見れば銀月君なので、成る程根岸に住はれてゐるから、ネギシの伊藤と云はれたのである、總じて此地方では、發音が餘程妙である、お差合があつたら御免蒙るが、御無沙汰と云ふのを、コボサタと云ふ、萬事此發音をやられるので、腹の皮をよることが度々ある、或る日下女が來て、奥さんがポンペイクラベを貸して下さいと云ふから、何の事だか分らぬから、再應尋ねさしてヤット分かつた、「文藝倶樂部」のことであつた、それから藤澤學士が來られて、「私は藤澤でござい升」と云はれたら、鸚鵡返しに、ハイ私、藤澤でござい升とヤッたので、少なからず度膽を拔かれたとの話であつた、又自分が不在にして出先も分かつてゐるのに、旦那樣は一寸其所迄お出かけになりましたと、二里も先へ往つてゐるのに、イ、加減なことを云ふのはマダしも、歸ッて來て誰れか留守中に尋ねて來られたかと云ふと、イ、エ誰

れもお出でに成りませんと云ふ、ソレで程經ッてから誰か來たと云ふやうな始末、又來客の方はゾンザイに呼び、自宅の子供も叛逆的に呼び乍ら、植木屋さんがお出でに成りましたとか、車屋さんが、疊屋さんが抔と尊稱を付けてゐる、餘程妙な那斗り、そして此言を云ふとスグ膨れて、時にはフイと飛出して、四五時間歸つて來ぬ時もある、此間も家内が此話を聖の母にしてゐたのを蔭で聞いてゐて夜中に大聲を擧げて、奥さんはひどい、自分は病氣だ



と云ッて看護婦なんか付けて、こつちに忙がしい思ひをさせて惡口を云ふと、オイ／＼ツイ／＼泣く、丸で十一二の子供も同前で手にをへぬと夥しいが、こんなのでなくては、居ないのである。

ニソレと云ふのが自宅の近所富士見町から牛込小石川へ掛けて支那の留學生が多いので、留學生の妾となるのが多く、又櫻庵が少し泄皮の剝けた下女だと、勸誘して伴れて行つてしまふ、何でも一ヶ月十二圓の給料で、川に二圓づゝ、

桂庵の手に入るのだから、桂庵は力めて此方に力を入れる、又田舍出の下女も、支那人の妾はお白粉をぬつて、柔か物を着て、何にもしないで遊んでゐるのを見ると羨ましくなるので、少し浮氣な下女は多く此方面に墮落するので、善良な家庭に於ける下女は頗る拂底である。

◎又此頃來た下女は、地の者で出戻りだと云ふので、イヤに奥樣然として、三日に揚げず、用事があると云ッで宿へ行く、それから半月程で出て行つたが、これは他へ行く迄の腰掛に來てゐたので、地方の下女でも東京見物の腰掛中奉公するものが澤山ある。

◎かう云ふ工合で、乳母に至ッては僻論外の奴が多い、自分も毎々手古摺てしまつた、昨年ゐた乳母は、小金井の者で、其兄が來て時々東京見物に誘ひ出すので、今年の一月十八日馬鹿に寒い日に、末の男の子をお負つて、端書を出しにやつた所、一日遊んで歸ッてきたの爲め、とう〳〵子供を肺炎にして死くしてしまッたので、ゐたゝまれずに歸村してしまッた。

◎何しろかう云ふ下女や、乳母に罹ッては隨分無形有形とも損害を受くること夥しく、茶碗などは常に毀損され完全なものは一ッもない、臺所の掃除も不行届なのは勿論、竈の下の不潔なのは時々細君や我々が下を下して掃除せねばならぬのである、又洗濯をさせると、白地が鼠鼠になッて反ッてキタナクなる、ソコで細君も近來どうか下女洗濯教授の學校が欲しいと云ッてコボしてゐた。

◎今一人の下女が同じ石川縣から來てゐる、これは少しお白粉などをぬるので、近所で支那人の妾と誤解されてゐる、ソレが來たではコッチでも遠慮してゐたが、除り不潔だから椽側のゴミを取ッて、椽側を拭かした所、もう拭く所が多いからヒマを貰らひたいと云ッてゐる、そして使に斗り出たがッてゐる

◎どうしても下女制御法研究の必要は勿論、これからの中流の家庭では細君進んで臺所整理の任につかねばならぬ。

◎ソレが若い細君だと、下女の怨みを買ふを恐れて、

可成干渉しないことにしてゐるので、付け上がッて段々横着になる、野菜其他の物も多く買込んで、腐らせる杯は常のことである。

◎年寄に聞いて見ると、下女は目見えの時、ウンとやかましくして置いて、そしてする丈の責任を十分教へて置く、そうすれば後から來た女中も、先の女中のシキタリに負かぬ樣になるとの事であるが、子供などか多いと、つい〱遠慮して使ふもの故に、段々と横着になる。

◎此頃聞けば米國では、下女の情夫は兵隊と巡査に極まつてゐるので、下女部屋は主家より距離されるか、鍵で仕切ッて入口を全く別にせねと下女に成り手がないと云ふ、日本でも追々こうなるかも知れぬ、さてさて困まつたものである。

▷櫻井女塾の新設備◁

本郷區弓町二番地なる同塾は櫻井ちか子女史の經營にかゝり從來女子に須要なる高等普通の學科を授け又地方より來る女子學生の爲には特に家庭的の寄宿舍を設けて英語を授け或は自由に他の學校に通學せしめ其の薫陶監督に盡瘁されつゝありし事は何人も知る所なるが這度更に塾舍を増築し内部の設備を改め教授に就ては野口夫人等も大に盡力せらるゝこととなりて以前に較ぶれば殆んど面目を一新せり。其の新設備の重なる目的は結婚を後に控へて凡ゆる新學は兎角實際と遠かる嫌あれば成るべく家庭社交等の實際に接觸せしめつゝ新學を練習せしめんとするに在りて、之れが爲に臺所を初め食堂、寢室、客室等に至る迄一々米國の中流家庭に模したるものを造りて、臺所に立ち働く間に或は客室に應對する間に於いて實用的の英語を話すの便に供し又外國婦人にして特に希望する者には宿泊を許して塾生をして社交の事に慣れしめんとする等用意周到に取り爲されたり。之れ蓋し女史が先般北米各地を觀察されたる結果にして、其の熱心と實行的なることは何時も乍ら敬服の外なし女史曰く「私の家庭は老爺さんも老婆さんも、嫁も孫も、犬の子も猫の子も居るので、家庭として誠に申分がありませんから斯う云ふ處で何うか十分若い御方の御世話を申したいと思ひます」と。因に云ふ同女塾の修業年限は豫科一ヶ年、本科二ヶ年、高等科一ヶ年にして豫科は高等小學卒業の實力ある者は無試驗にて、本科は第三リーダー、高等科は第五リーダーの試驗を以て入學せしめ、月謝は豫科及び本科は金一圓五十錢、高等科は金二圓五十錢、若し寄宿舍に入る時は毎月塾費として金二圓及び食料として金六圓六十錢を納むべしとなり。

狂句に現はれたる女性（下）

菊雨

胸に手をといつ紲れつ後家の髪

柿三年桃栗八年後家半年

無い事をいふ世の中と後家は言ひ

鰥貫は一生後家に恨みられ

断る可きか断らざる可きかと思ひ切りの悪い後家の髪、ヽヽマアモウ少し、今少し、せめては亡夫の靈魂棟に殘るといふ、四十九日が濟むまでは、私計りも以前の儘でと、ツイ断り後れた髪が其の儘、遺子がソラ覺ゐので、桃栗八年、柿三年と歌ひ囃すをソラ違ふ、桃栗は三年、柿は八年經たねば實らぬと、敎ふる積りはいひ聞かせても、我が身の半年何とか對へん、五月蠅は世間、何にも知らぬ、無い事云ふと取消して、是れに就けても先き立つた人の唯モウ戀しく懐かしく憎くて成らぬは彼の鰥貫り、と一生是れが恨みられる。

お妾の榮華も二十前後なり

かくしても痲疹で妾年がしれ

花は半開を見頃として、妾は十九か二十一二が全盛時、紅白粉で塗りかくして、幾歳か年齢の知れなかつたのも、生命取りといふ痲疹に罹つて、やう〳〵に未だ十七といふ、悲しい話しが知れ渡つた。

親にさへ逢はれぬ程の運のよさ

側室は産まれた家を穢がり

氏なくして乘る玉の輿、いづれは女の容貌美いのを望まれて莫太の仕度金の、外、衣裳、調度も遣はされては、仕度の必要別になくて、女房が手柄、亭主が自慢、互に勝手な事を言ひつゝ、前々からして朝からの酒盛、酒屋の勘定も拂ふたであらう、仕立卸しの初袷、何十年振りかで着て見たであらう、是れより當分は、天秤棒も擔がで濟むと、夫がいへば、妻ち云た、私ものにして俄分限、娘は又是れより綾羅に包まれて、是れから洗ひ張り、賃仕事は止めにすると、娘を喰ひ腹掛け出の父親、半襟懸けた母親は側にも寄られぬ其の境遇、運がよいやら悪いのやらさりとては此の成

り上がりの、我が身の產まれた實家を穢がるとは、榮耀に馴れての爲か、殊に甚しきに到つては、家計りか兩親をさへ、穢がるのがあるといふ。

獻立に節をつけては子を寢かせ
お添乳に寢たり緞子の夜具蒲團
金箔のつくはお乳母のそさう也
勇を奮つて乳母も飮む菖蒲酒
琴爪を乳母も小指へすげて見る
不景氣なお子だと乳母は木戸を出る

赤の飯に魚添えてと、獻立唄の節面白く、添乳すればこそ寢られもする、立派な緞子の夜具蒲團、つまりは大事の和子樣お預り申したからであるに、轉むで額に擦り疵、よし金箔を是れに貼付れば、痕も留めず治するとはいへ、役目を粗匆にした乳母の咎、固より免れ可きではなく、男子育つる乳母は、飮めないことでも菖蒲酒、女子に附添ふ乳母は又、孃樣の琴爪、マアお可愛らしいと小指にも箝めて見て、御寵愛の上にも御寵愛、大切の上にも大切に御育て申して居る中にも我が身の欲は抑え難くて、手近い話しは芝居見物、今興に入つてる最中に、いやだと嚙悶る其の泣き聲に乳母や外でも見せておゐでと、否むに難き主婦の言ひ聞け、ハイと答ふる聲も脹いて、やをら横抱の粗暴な振舞本當に意地の惡いといつて、思いやりの無いにも程かある、このマア泣きしほ垂れた不景氣な顏付は、成長なつても、迚も碌なものには成れるものか、エイ憎らしいと尻の邊りを一抓り。何にをいふにも生さぬ中、乳母と名付けど他人は是れ。

後添はこわ〳〵一ッ縫ひ直し

來てから漸と一年に成るや成らずの間にも、家内の樣子は一切知ッて、先妻が遺した櫛、笄、指環も疾に我が掌に握れど、衣裳は何うも氣が差して、今日まで我慢は仕て居たもの丶、又考ふれば自分の外には、又着るものは亡き人の、是れも片身と貰ひ受くれば、大い功德に成る譯と、勝手な理由を其れに付けて、取つて一枚縫ひ直す、其の針の山、血の池地獄、ハッと思ふて其の手を止めれば、不思議や目前に動き出す片袖、

恐やと其の場に打伏せは、慌て丶下婢の飛むで來て、またしても玉めが惡戲、御覽遊ばせ、折角の袂を、此樣に致して仕舞ひましてと、他人は案外落付いて居れど、着て出てからも氣に懸つて成らぬ。

繼母の罪は戸棚で毛を生し

繼子のこがし碗黄のある附木

貰ひ物の箱やら籠やら、何でもかでも戸棚の中へ積み重ねて、母ア樣何にか頂戴ナと、可愛く強請を、、、、チロリと睨付、御飯も喰べずによく間の物計り欲がつて何にも上るものはありませむよと殘酷らしくいつて退けて黴が生いるまで與へはせず又或る時は麥こがし、是れを匕にと用ゐさする附木の、我が產みの子には碗黄を取つてやりながら、態と一人には其れがある儀、さうも隔てのあるものにや。



燒つぎのお出入の出來下女不首尾

叱られて下女膳立の賑かさ

皿の音亭主座敷で目をふさぎ

居眠りの下女疊へむぐるやう

粗暴は下女の持ち前かや、皿や小鉢の壊れる事頻に、燒つぎ屋の御用漸く多くして奥向の首尾甚しく惡く、氣をお附けよの幾度か繰り返へされながら、今日も秘藏の古高麗の菓子鉢、落して割つて叱られたを、却て恨むで膳立の荒々しさ、裝つた儘の皿轉倒した其の音に、主人は座敷で目を塞ぎ、重ねて言つて聞かす術なさ、斯て眠さへあれば、カン／＼に油を燃きながら、額を疊のへめり込ませて、居眠り處を剃まするが無理かも知れず。か轉寢する。



聞からに秘密の事も下女しやべり

花鰹葉櫻ほどに下女はかき

下女大根五種三本ほどに打ち

立聞きするは惡性の下女なり、默つておゐでと口止めする丈け、內處だよと吹聽する、所詮は其の名のはしたないもの、花鰹を葉櫻ほどの大さに掻き、千六百本といふ細に大根

馬鹿な下女吸膏薬を鼻へ貼

燭臺の毛抜が無いと下女はいひ

其れ迄には髭止めで、鼻の頭を挾むで寝た夜も幾度なりしか怎うすれば若しや効能があらうと、鼻梁に貼り付けた吸ひ出し膏薬、部屋に籠つて音立てぬ時には燭臺用の心切りで、鼻毛でも抜いて居るのか、さても恐しき大きな鼻の穴かな。

かんざしでかきやと山出叱られる

笑はれる度に田舎の垢がぬけ

山出しは笑つてやるが指南也

立ちながらポリ／＼と、いつも兩手で掻く其の油髪、洗ふでもなく直に菜こしらひに懸つて、食ふものも飲むものも穢らしい其の臭、簪でお掻きなさいと窘めるは未だしも、事毎に笑つてやるが彼れ等に取つてよい指南で、田舎の垢も抜けるといふもの。

段々と葛籠の孕むかたい下女

しほらしや出代る下女が味噌の世話

子を抱いて笑はれに來る元主人

初手は粗雜で笑はれもし、粗匆で小言も言はれたであらうが、腹も立てずに忠實々々しく働けば、主人も大いに目を懸けて、一季半季の奉公人とは思はず盆暮の被物も多ければ、次第に葛籠の荷嵩も殖えて、嫁にも當家で世話してやらうと、有難き程の思召しも、實は親と／＼の許嫁が御座いましてと、しほらしや暇貰ふて下る時にも代りの、下女に糠味噌の世話までして行く心意氣、されば嫁いた後に成つても、奉公人へのよい手本にされて、其の後も始終御機嫌窺に、いつか赤子を抱て來れば、昔時の話も繰り反へされて、ホン、に彼の時のお前がマア、と、笑はれるも嬉しや、坊つ樣、孃樣の行丈け詰つた夏物、冬着、は大風呂敷に包まれて俥で家へ送られる。

流行の女履物

流行子

婦人方の履物は下駄、雪踏、草履の三種類で、其他に靴などもあります。で茲に此等の斬新なものを取揃へて、今回の流行案内として御覧に供しませう。

△流行下駄の種類

單に下駄と申しましても駒下駄、日和下駄、足駄、中下駄、東下駄、跡歯等色々あるが、御婦人向の主なるものは相變らず駒下駄です。一時東下駄が勢力があつたが、今日の所では之れは専ら花柳界向となり、普通の家庭には餘り歓迎致しません、此駒下駄には表附と表なし塗下駄の二種あれど塗下駄は多く年少の嬢様向きで、一般の嗜好には適さない。夫から跡歯は老婦人以外には殆んど用ゐず、殆んど廢つたと云つても克いのです。

△表の種類と塗色

駒下駄の表は夏季は脂肪で表が穢れますから、多く籐表を用ゐますが、日暮蟬の忙しく啼き、朝夕に冷氣を加へてお羽織でも召す、初秋となれば駒下駄の表も籐表の需用は減じて疊表と變ります。疊表には、南部表、新町表、棕梠表の種類あり、南部表は上流向きの最上等品である。平民的には先づ新町表と棕梠表などが向きませうが、新町表も今日は意匠が大に進歩して、俗に新町南部と云つて本南部を凌ぐやうな、上等ものが出來るやうになりました。棕梠表となると安値下駄に附けるものと相場がきまつてゐるやうだが、體裁のよいのと比較的永耐するので歓迎されて居る。次に下駄の塗色は以前の溜塗と黒塗が最も持囃され、一時流行したオリブや紫塗はすつかり廢りました。つまり流行は元へ逆戻りをしたのであります。だが高尚向きは塗つた臺、意氣向は木地の臺と云ふのが動かぬ所で御座いませう。

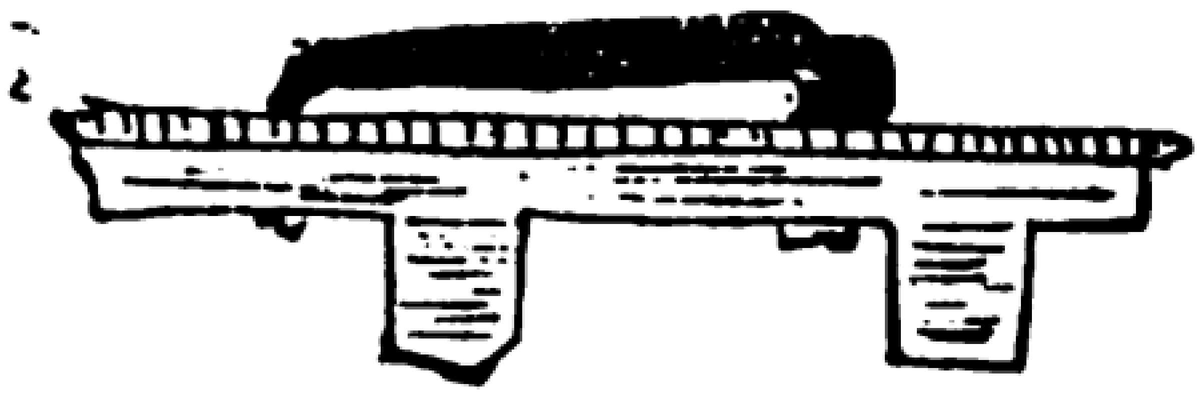
(一)　薩摩形



△流行は刳形にあり

駒下駄の流行形と云つても矢張り在來の形なので他に工夫を凝す範圍がない、縦令あつた所で突飛なものは實用に適さない、然ば下駄の流行形と言へば其の臺の刳形如何にある、其の刳形の名稱は下駄屋に依つて色々時世に投じた名を附けるのです。最近の流行は大和刳、半月刳、薩摩形等を初めとし、其他櫟形、利久形、二段小町、二段中折、日光形の類等稱々あるが刳形の名稱は要するに小名に屬して居るので、大體は兩刳、小町、跡丸形の三種に過ないのです、之を種々に變造し何形—何刳と命名し、新流行で賣出すのであります。流行は刳形の如何にあるとは右の如くであるが下駄の齒の高低も幾分か關係がある昨今は極めて低くなつて、一寸三四分から七分位迄の高さのものが最も流行してゐる。併し今日下駄の木質は桐の木地臺で上等が糸柾、之に次ぐのが、荒柾、下等品が板目であるが、此原料の桐材は南部産のものは

（二）両刳り



品拂底の爲に此頃は往々支那桐や朝鮮桐を南部代用として使つて居るが、臺が漸々と低くなつたのはつまり桐材の騰貴に伴はつて、勢ひ原料を吝むからであるさうな、去れば上流社會の令嬢や若夫人向は、依然二寸二分以上の高い臺を嗜好するのであります。

△流行の鼻緒

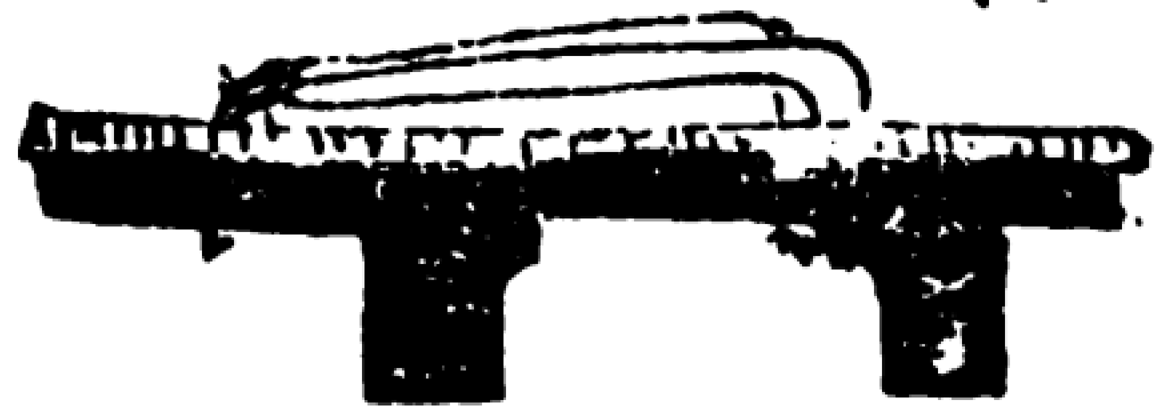
鼻緒も原料品の騰貴の爲に太い鼻緒は貴婦人向に用ひられるのみで、普通婦人向は中太と云ふ六七分の所が大流行です其の地質は擢被絨、縫潰し、斜子、縮珍、風通お召、博多、本天、絹ブラシ、など等物ではフラシ天、絹天の類である。去れど天鵞絨以外のものは地質が硬いから足袋と鼻緒とが摩擦て、足袋も鼻緒も切ると云ふので、御婦人方は地質の硬い鼻緒は儀式履の外は用ゐず、而うかと云つて本天も面白からずと云ふので今日尤も婦人間に歡迎されて居るのは、畏天の鼻緒であるさうだが、畏天とは毛切らす天鵞絨の事で、毛を切らぬから

（三）雲井穿き



織出しが、罠になつて居るので此名あり、罠天は博多織の如く高尚で體裁も良いから、何人も之を好みます。其染色は藍鼠や牛壁色のやうな藍がちの燻んだ色合に共色で淡白と模樣を織出した物が最も多く用ゐられるが、令嬢向きは相變らず赤地の繻珍です。繻珍は帶地

(四) 大和刳り

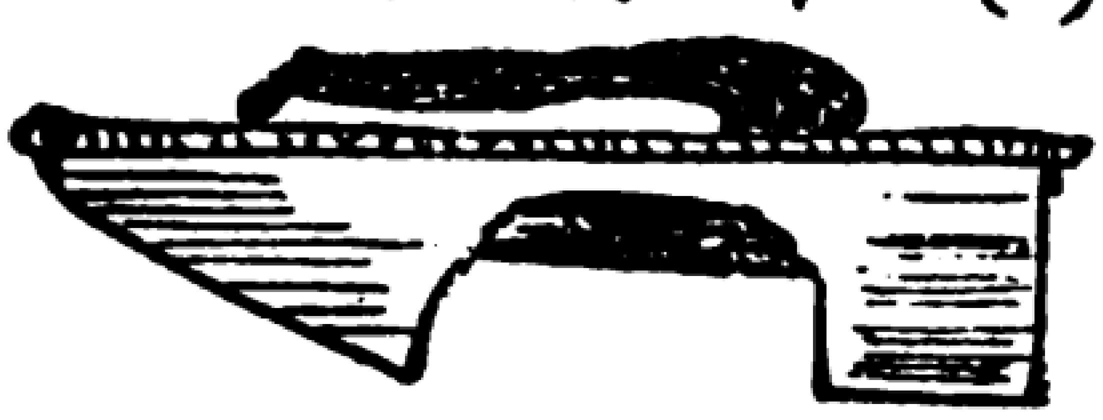


八九十圓の代物を鼻緒に潰すとすれば、一足の代が彼是れ二圓内外掛かるでせう。斯樣に上等の原料で調製したら一足の下駄も大した金が掛らうが、贅澤好みをしないなら、一足の代價が二圓内外で、立派に履れるものがあるさうな、尚ほ一層平民的に棕梠表か何かで我慢をすれば、一圓内外でも出來ると云ふ。

△草履代用の履物

一時は雪踏が流行したが、婦人の雪踏履きはチヤラチヤラと音がして、何所となく厭くなるので、縫護裂や象皮張と改良し、名義も千代田草履、東草履、雲井草履などの、高尚な名を附して賣出すやうになりました、其の表には天鵞絨、マナマ、罠天等が張つてあるが、此頃は各嗜好が一變して、下駄と草履の兼用とも云ふべき履物が流行して來た、之は近來交通の便が開けて徒歩の必要が少くなつたから專ら電車の乘降に、輕便なやうに製造したのであるさうな、挿畫に掲げた雲井履は其一例で、製造元は例の香取屋で御座います、夫から普通の重ね草履は華族方や女學生間に相變らず歡迎されて居るが、草履が濕ると重くなつて不便な上に代價も一足上等物一圓七八十錢と云ふので却安くは無いから今後は改良草履の方が自然流行界を占めることになりませう。

(五) 半月形





詞藻

塚越停春選

(天) 朝顔 高崎 池野たま子

白露のひぬまばかりをいのちとも
　知らでさくらむあさかほの花

着想は新ならざれども、命とも知らでの語下し得て妙ならす。調暢に、格高し。

(地) 和歌 静田 鶴岡とく子

嶺までも見ゆるばかりに雲はれて
　ひれふる山にかゝる月かな

千古を俯仰し、感慨限りなきの概あり。

(人) なでしこ 八王子 金山秀子

宵の間の天津星くつ此處に落ちて
　花とやさきし河原なでしこ

着想の奇を取る。

秀逸

○○○失題 福井 島萬路子

白百合は姉に似る花紅百合は妹に似る花いづれきるべき

着想奇警。

○○失題 甲斐 さゝ舟

生ひ出でゝなにないのちぞ薬草の岩がねつたひしろき花さく

面白し

○○失題 神奈川 吉川常子

おさな馬子のうまひきかへる並木路を夕日なゝめに照しきりなく

實景見るが如し

○○橋 越後 坪井わか子

人みなの世渡るみちにくらふれば木色のかけはし危ふげもなし。

好敵調歌。

○○初秋 備後 立神[illegible]子

とりわきていふべき趣はなけれ共秋の初のすゞしさぞよき

他の奇なきか如くなれども、能く取情を得たる歌なり。

、○○立秋　　四坂島　渡邊梅子

松風の音せぬ日にも岩かげの水には通ふ秋のありけり

岩下水に先づ秋を知りしもの歟。

○○朝顔　　竹原　草酾幸子

はかなしと誰かいひけん朝顔の花に宿かる露もありけり

朝顔の花に宿かる露と云へば、其はかなさ知るべきのみ。

○○蟬　　栃木　松村隆子

なく蟬はわが聲をば誇りがにみらかき命うたい聲すよ

人亦蟬に似たるものなり。

、○○立秋　　岡山　田上濱子

野も山も青葉ながらに秋や立つ萩の葉風のふきかはりつゝ

青葉ながらの將、萩の葉風の外、皆夏の光景なるを示す。立秋の意明か也。

○○折にふれて　　桑名　しげ子

夕月夜萩みだれ咲く野を行けばすだく蟲の音ふむ思ひかな

蟲の音踏む思とは、奇語と謂ふべし。

、○○逸題　　美濃　山田愛子

石榴咲く石屋がかどの石の園に誰がなき後の名をきざむらむ

思ひも寄らぬ所に詩境を見出したるものかな。

、○○題しらず　　下總　岩淵不二野

さびしくもなるこ引く音の聞ゆなりしづが門田の秋の夕ぐれ

實景。

、○○殘暑　　上總　宮倉いれ子

萩の葉に秋のたよりをきゝながらなほ捨がたきやれ扇かな

殘暑の意、歌ひ得て遺憾なし。

、○○夕顔　　伊勢　佐々木らく子

一枝は君がみ胸に一枝はかざしに折りぬなでしこの花

、○○嵐　　河内　竹内敬子

三日月を木間にかけて物すごく嵐吹きまく大比叡の山

冬の光景ならむ歟。

、○○初秋　　越前　藤元津代子

秋風のふきそめてより荻の葉もおりしりがほにうちなびくなり

○○　　大分　加納豐子

夏衣またぬさはてぬ籬垣にはころび初めし秋萩の花

、○○初秋風　　名古屋　清水みさを

くれてゆく夏を惜になくく蟬のこゑに殘して秋かぜぞ吹く

○○夏月　　佐賀　吉岡小芳

螢火は風に消されて小簾の内に光もれ入る夏の夜の月

凉味可掬

○○題知らず　　長野　西條梅子

犬によべど答はあらず廣き野の名なし小草に似たる我が身よ

懸賞		
〆切十五日	和歌	一人一首　寄書の事
題隨意		
賞品圖書		
天一人	壹圓	
地二人	七十錢	
人五人	五十錢	

佳　調

○　神戸　能利國貴

ともする〻笹の葉越しの月澄みて思ひ出多き古郷の家

草擬　本郷　鶴　子

浪の上にとぶ千鳥とも見ゆるまで沖あひ遠くみふれ出てけり

○　神戸　ゆ　き　子

太洋の波はしづかにゆく船の艫前にゆらく夏の夜の月

浦月　滋賀　幸　子

ふたくみもみ峰やおきてながむらん志賀の浦はの秋のよの月

○　大阪　鎌田琴子

さびしみの胸のとせまろこきざみに翠保と獣す秋の夜の雨

大風　常陸　菊地鐵子

波の上にうかぶ帆の影夢に似て三日月淡し遠の海原

○　岩代國　岸野常子

ほほづきの青き戸口に美しき少女涼とる夕顔の家

海邊月　前橋　宮内りき子

海樓に吹く風涼し鎌倉の山の端出ろ夏の夜の月

しづか家のけぶり　赤坂　平井節子

朝夕にほそき煙のなびくかな松の木かげに見ゆるしづが家

暮夏感　岡山　晴　子

夏くれてとしの中はたちにけりおもふ中の事をなしえで

○　姫路　柳田白百合

風渡る小庭に月の影ちりてま萩亂る〻鈴虫の聲

次の許へ　肥前　錦野金子

とく來ませ汝命の泉愛の川流れつきせぬきよきみそのに

山家　筑前　北澤ちさ子

誰れに見せ誰れにきかさん山の庵のさどの松原門の水音

月下の松　筑前　高松秀代

十六夜の月はか〻れる銀鼓うつ龍の宮居の松が枝にして

○　岡山　駒井友子

いれのかの清き未明のそゞろあるき田家はなつぞすみよかりける

あさがほ　津の國　濱　花　子

このま〻におかばほどなくしなれなんゆるせ一枝おし花にせむ

○　周防　貞弘八千代

すだれ越にさし込む月に枕して河鹿き〻つ〻夜をふかすかな

折にふれて　青森　三浦あや子

夕月夜庭の芙蓉のさゆらぎに露に匂ひし月の影ちる

三日月　常陸　堤　い　く　子

夏霞かる入江の波のさ〻立ちて糸と亂る〻三日月のかげ

○　美濃　飯島　歌子

なはしろの種の名かきし板札にあきつとまりぬ雨はれし朝

餘　東京　馬場不二子

亡き妹のかたみの小瓶とりすゑて活けても見たり庭の山茶花

○　牛込　遠藤　滋子

橘の花散る里なほと〻ぎすなちかへりなく五月雨の空

○　姫路　柳田　白百合子

さやかにもきぬたの音のきよふけて月すむ里の初雁の聲

夏の朝　尾張　小田けい子

雲なき天の岩戸に聲ありて現世のまくは開けゆくなり

○ 撫順 森の人

家島はいま雨晴れて新緑の姿も清う繪と浮び出ぬ

光陰如矢 大阪 武内信子

ぬれましと待ちしは不覺夕立の晴るれば已に日は暮れんとす

萩 芝 新野谷枝子

朝露のまゝをうつさんと筆とればほろ／＼こぼる白萩の花

○ 豐後 菅原芳子

うらぶれて夕べ戸による若き子の涙ふくなり初秋の風

旅の立秋 奈良 田原冬子

旅も今結び初むらん草枕旅籠の床に秋立にけり

擣衣 同人

秋風のさむきにつれて山里のきぬたの音のしげくなりけり

○ 筑後 後藤藤枝

夏姫かけはひの水か白百合の花の笑まひよりこぼるゝ露散

○ 群馬 塚越たか子

さしのぼる朝日の光あびながら露にきらめく朝顔の花

夏草 京都 渡邊ふさ子

虫やみてかる人もなきなつくさのあれしかきれにしげりゆくかな

○ 横濱 宮川白濤

うらだきの香の烟も淡くなりて蚊帳に涼し夏の夕月

○ 神戸 桐盛幸惠子

月なよう御髪に白きかんざしや師によく似る人なつかしむ

磯邊 神田 松木さかえ

磯づたひ貝殻ふみて吹く笛のたえま／＼を潮の遠鳴る

かゞり火 芝 高木きん子

夕日かげしづかにおちて波の上に三つ四つ五つかゞり火の見ゆ

立秋の日に 尾張 けい子

白露のめぐみに咲ける秋の花けふ秋立ちしゝるしなるらん

朝顔 本郷 岡本鈴子

朝顔の花くらべせん友垣にわれ劣らじと起き立ちにけり

○ 臺灣 大園眞雪

夕立は彼なく晴て吹く風の音新しき磯の松原

亡き人の形見なる染繪物を見て 岩代 横山楢子

秘めおきしかたみの繪卷とり出でゝ又涙ぐむ白百合の窓

銘香 桐生 梅清子

彼の山も河も昔のまゝなれど老いの波そふ親の面影

名所の月 紀伊 佐田柳子

おりし世の式部をこゝぞしのぶかな石山寺の秋の夜の月

○ 岐阜 白梅子

春はうし夏もいとうしあゝされど秋こそ慕ふ淋しさの身は

晩涼風 中垣太代

蝉の聲もしぐれて吹風のすゞしくなりぬ水無月の空

○ 相模 文子

おそろしや裾野二百里日はくれて大鷲近うとぶにあひけり

○ 印南 愛子

野菊さく野邊見るごとに思ふかな共にむつみし古郷の江な

夏月 東京 神山文子

夕立のなごりのつゆにかげうつる光りも涼しなつの夜の月

○ 北多摩 淑子

情あらば我が思ふ事のせ行けよ君住む方に馳する白雲

垣夕顔 富山みつ子

白露の光もそひてゆふがほのゑめる垣根のなつかしきかな

白百合　大阪　三宅菊子

やり水の露にぬれつゝ夜もすがら物をこそおもへ白百合の花

○　佐倉　平田鶴々子

蚊遣火のいつとはなしに消え果てゝゆきにし人の思ひ出多し

○　麹町　森子

故郷の母やいかにとものおもふ小窓にほそき春の雨ふる

眞夏　京城　原野みきえ

桑陰に蟬啼しきる眞夏日を垣の蔓かほ花やせて咲く

旅はくの心　神戸　網實子

月見よの心と思へば磯波の音をくだくもうれしかりけり

○　遠州　寺岡靜子

磯寺の鐘の音細く黄昏れて離れ小島に潮流れよる

○　駿河　菊地武子

朝風をせなに受けつゝのぼり行く富士の山路の心持よきかな

○　栃木　齋藤そめ

入道の黒雲消えて京城の空美しき夕栄の雲

○　京都　砂川禮子

巻きあげし小簾の緋房の風にゆれて月影すゞし高殿の夜半

松風忘夏　安房　和田きん子

吹きかへす袖も扇子の濱松に夏の暑さも忘られにけり

ほとゝぎす　神戸　今西操子

聲あらん限り血に鳴け郭公我また汝におとるべきかは

山路月　越後　中野好

吹き拂ふ峯の嵐に雲消えて山路をてらす秋の夜の月

夕立晴　岡山　小野晴子

夕立の過ぎにし後に旅人のしばし息らふ野路のみ社

夏の朝　大阪　森枝はる子

ちりふかき都なれどもとく起きし夏のあしたは心地よきかな

○　筑前　天の花

森の木の一葉一葉に宿して月影淡き夏の夜半かな

祝進水式　東京　玉子

すめらぎの御軍舟の数まさる今日のよき日を祝へもろ人

不二山　尾張　井口豐子

さみだれの狩りのむかしおもふかなふれどもくちぬふじにそがの名

○　東京　細川とき子

一つ二つ鼓のともしび影消えてふけゆく月に雁がねのなく

初夏の歌の中に　佐賀　力安千代子

月をあびていさゝ小川に米洗ふ袂に匂ふ夕顔の花

夏の漁村　長崎　磯見みさを

返しては又打ちよするしらなみの音ぞすゞしき夏の漁村

懸賞

ものはづくし

〆切は本月十五日

投稿は端書に限る

題

こまつたものは

秀逸三名を限り賞品贈呈す

短文

◎印は入賞

◎可憐のポチ

越後　小島琴子

今朝とく起出でゝ、夏草茂き小徑ふみわけて、例の花園へ歩み入りぬ。紅白のなでしこ、姫百合、あふひ、芥子、月見草等目も綾に咲亂れ、愛らしの花びらに眞珠のやうな露を宿してきら〱と輝くなど言はんかたなく美し。

暫し吾を忘れて眺むる程に今まで、庭の敷石に眠りしポチは遙かに妾を見つけ、鈴音勇ましう、跳ね來りて、さも嬉しげに、妾が裾に、袂に、戯れ居りしが、何思ひけん、一入艶に、咲き匂ふ姫百合に、手をかくるよと見れば、あな無慚！、眞珠に似たる白露ハラ〱と、こぼれて花びらは地にくづれぬ。餘りの事に「しつ」と許りにポチを叱れば、ポチは氣色の只ならぬを見てか何處にか影を隱しぬ。

流石に哀れに覺えて、ポチよポチよと、やさしく呼べば。彼方の靑草の影に聲へはあれど、いつもの如くに、出來らざりけり。

可憐のポチよ。

◎夕がほの花

江東露女

縁は七夕様のお仕度に紅と銀の紙を持つてお隣へ駈けて行つて仕舞つた、仄暗い庭には京の姉さんのいつち好な夕顔の花が繪々と一輪動いて居る、京の姉さんは昨夜から急病なのでお母さんは居ない、私は一人でしよんぼり竹椽に腰をかけて居ると枝折戸がギイと開いて着物の白い行雄さんが這入つて來た、行雄さんは姉さんが京へ行つてから大學を止して旅行許りするので全く日に燒けて夜目には顔が明瞭しない、行雄さんは私が呼ぶのに默つて突立つて居る、暫くして行雄さんは彼れは何アにつて夕顔の方を見る、近眼だと見える、お隣で妹と玉ちやんが、今朝秋風の立ち初めて……を謳つて居る、大きな桐の葉と少さな竹の葉がざわざわと動いて冷たい夜風がすツと浴衣の袖口から胸を通り抜けて行く、夕顔はゆれる、行雄さんは不意に聲を出して女の魂の如うだと云ひながら夕顔から眼を放す、そして天の河を見上げたが直ぐと亦大きな眼を閉ぢて仕舞つた、何うしたのでせう。

◎小猫

牛込　撫子

かサッ、かサッ、ト音がするので、讀みさしの本を、机の上にのせて、椽へ出て見ると、十日許り前に、家の玉の生んだ、黒が、昨日縫つてやつた赤い首掛を邪魔さうに掛けながら、風に振られてゐる岐阜提灯の影に、戯れて居る。今役所から歸つて入らしつた、兄さんがそつと、提灯を、おはずしなさると、可愛らしい、丸い目を、みはつて、不思議さうに、あちこち見回して居る。此の時、今迄、土藏の前で寢て居た玉が、むつくりと起きて、頻りに背伸びをする。黒は目敏く之を見つけて、ころころと、轉びながら走けて行つて、「ニヤー」と甘へながら、腹の下へ、むぐり込んだ。まあ可愛い事！。

◎清水

佐賀　力安千代子

靑葉が茂りあつてる間をさゝやく様に流るゝ谷川の清水を兩手にむす

ぱんとすれば何處より流れて來たか桐の一葉は可愛ゆい蛙二つをのせて浮いてゐる。そつと葉と共に取らうとすると蛙は二つ共にちやぽんと水へ飛び込むだ。あゝこの二疋はどこ迄も離れぬと見える。

◎朝顔

大分 加納豊子

初秋の露白きあした、朝な夕なに心を附けて培ひしまがきの朝顔一輪愛らしうも咲き出でぬ。眞紅の色の燃ゆらむ許りに果敢なきを、友なる白露のいたくも心置きそへて一きわあざやかなる又なう憐れなり。あはれ此花！、此草！こを此儘に敢なくも我手に散らさん事のいと〳〵わかぬ心地はすれど、我永久の文机の友とせんにはやがて來るべき運命の色褪せぬ間にこそと縫衣の片袖そとまくりてなつかしの花の面影を露ながら摘みとりぬ。

◎秋の夕暮

竹原 堂面幸子

森の上葉をさら〳〵と音づる風に何を報しとてか既に起る蟲の聲々、己がじゝ時を得顔に歌ひ競ひぬ、傍の花園には蜻蛉一ッ、定の宿の花蔭てか羽重げに彼方此方と徘徊ふ、姿又なく哀れなり。美しく空を彩色れる夕日はいつか西山に傘きぬれど、檜の蟬は鳴き止まんともせず。あはれ名殘の惜まれてならん、入日の月は高く澄み渡り、あたりはいと靜にて、一入增る蟲の聲、あゝ様々の景ならずや。

風の色

愛知 小栗幸子

春の野に菫摘むときそよ〳〵とびんの毛二三本戰ぐ暖い風は紫色で、ゆあみして軒先に出た折新綠の薫れる中を風と吹き來る涼しい風は青い色、雨とたゝかつて木々の葉を吹き落す亂暴な風は黄色、そして冬の夜白く氷つた野山をゴー〳〵吹き荒み北窓を打つて障子の破れ目からヒユーと鳴り込で來る冷い風は白いことよ。

百合と胡蝶

石狩 尾崎雪子

垣根のほとりに咲き殘りし山百合の一輪、其の花の上を何處から飛び來りしか白い胡蝶の行きつ戻つして宿らんゆるしをもとむるにさも似たり。美しい百合の花はさゝやきぬ、嬉しき胡蝶は舞ひ降りぬ、嗚呼其の刹那の二つの姿、いかに淸らかに美しく香醉々しかりしよ。

寢顔

萩 吉岡房子

叔母さん負ぶして頂戴。と云つたのにつひ忙しいものだからしらぬ顔して居たら其儘寢れてしまつた、あらいたわしやこの可愛寢顔……あゝ今頃姉さんは何にして居らつしやるだらう、何をなさるにもこの可愛太あちやんのことばかり思つて居らしやるだらう、あら笑つてよ、何んの夢見たのだらう、姉さんの事ではあるまいか。

海邊の暮色

芝 高木きん子

くれゆく海の景色ながめんと小草ふみつゝ濱に出でぬ。見渡せば潮聲遠くひゞきて島影次第にくらく磯邊の松は綠をたゝへて涼風秋を掃ふ汀濱ちどりないて海面漸く淡し。

くれなゐ

牛込　平塚白百合

ほそやかにふる春雨にたきこめたる香の得ならずにほひて、そとゆれたる簾のほとり近ふみ寸玉の、おやめ菊など花々しく、垂うたれたる五色の房にとりわけて赤き糸のめだちたる床しきものにこそ、さるを村祭とや彼方に太皷の音して〆引わたしたる笹の旗の間に見えつゞくなびたすらに汗になりて急ぎゆく村をとめの惜しや小鼻のあたり白き物よりてはへぎは目のふちくろう見えたるいそげばぞとう〳〵とすこしれびたる髯のけだし出したるあやなくもかう〳〵しくなむ。

秋の庭

鹿兒島　原木のぶゑ

庭の千草生ひ茂り垂優しの萩の花女郎花さてはゆかりの色流さ桔梗尾花が末をなびかせて渡り来る風も冷やかに黄金とまがふま垣の菊の玉露もあはれほろ〳〵と朝風に亂れ散り木々の梢よりもれ出づるさやけき月影に美しく聲ふり立て鳴くよ鈴蟲䗲蛬やの床に。

たのしき朝

茨城　小野あさ子

やう〳〵東雲白む頃起き出でゝ暑く成らぬ内にと父上は草花の手入母上は裏の小川に洗濯わらはゝ室内掃除中學より歸つて居る弟二人は庭の草引掃除、女中は朝飯の調理にせわしい。各々職務を終つて食膳に向ふ時皆たのしき色が面にあふれて居る八膳に上りし物は裏の畑に作りし物〻庭の面を眺めれば朝顔がすつかり咲きそろつて、葉末の露は、眞珠をちりばめた樣にきら〳〵と朝日に輝く、アヽこのたのしみ二頭立の馬車いかめしく都大路を行きかふ貴女紳士の喜び得らるゝとであらうか。

南瓜の花

芝　新野壽枝

何のために生きて居りますやらとしみ〴〵言ひ居りし友の遂に常なき風に誘はれて去る日冷たき石の下に安らかに眠りしを友のたれかれ誘ひ合ひて今日其奥城を訪ひし途すがら名も知らぬ可愛き小草の一本二本摘みつゝ行く後より里の子供の追ひ来りて目ばかり光らせつ、姉さんたちそんなけな草とらぬがよゝだおらが今いゝ花とつてやると言ひつゝ持ち来りしを見れば大きな〳〵南瓜の花。

懸賞		
〆切 本月十五日	短文	一人一題 葉書に限る
題	隨意	
賞品圖書		
甲	一人	壹圓
乙	二人	五十錢
丙	三人	三十錢

惡戲

神戸　水野輝代

夕方植木に水をやつているとと幹チヤンが走て來て姉さんこれ上げましよう〳〵と白紙に包んだものをくれた何だろーと開けて見ればアヽ驚いた石コロ二ツと私の大きらいなタモ三匹ゾロ〳〵とはいだしたアラいやア。

私の世界

長崎　井上ふ佐子

今年は夏の作物がよく出來たと父様はにこ〳〵顔。お庭の李や棗は枝もたわゝに實つて居る。裏の畑には西瓜や瓜がごろごろところがつてゐるので私もにこ〳〵してゐる。私の大好な大きい兄様は學校を卒業して御歸りなさるし、姉様は御嫁様になつて宮山さんへ居らした。私をからかつてはいぢめてゐた小兄様は東京の學校へ行つてしまつた。母様は言れる信子や今年はお前の世界ですよ。

夏の夕

栃木　齋藤そめ子

昨日にます今日の暑さ、何を爲やうとしても思ふ樣に出來ず、懸賞の歌もわらふに靈感鋭としやれて見たけれど暑くては却々に練られず、やがて夕方近くになりぬ。今宵は風呂より上つて涼臺に上らんとする所。サラ〳〵と稲の葉末を渡り來て我の頭を撫て行く風の涼しさに晝の暑さも打忘れて身は神境に入る思ひなり。

△妹が鈴虫

茨城　稲田浦月

妹の美ちやんが、「兄さん、あの鈴虫れ、實可愛想でならないわ」、其の夕べ、妹が御祭壇で奇麗なハミガキ箱に入れられて萩の小影に葬むられた。今朝、萩の朝露を帯びて其れにうなだれて居る其の影に可愛らしい石碑が朝露に包まれて淋しく立つて居る。あゝ妹が大事の鈴虫、今頃は何と思つてゐるだらう。

△散歩

横濱　坂本婦美子

暑中休暇で都から歸省した翌日、妹と野邊に散歩に行きましたら、遥か彼方に四五人の娘達、田の草を取りながら、節面白く唄ふ歌のもれて來るので、思はず近より聞いて居ると、其中の娘、赤い帶に赤い襷、年しも十六七、一番若いのが、何事かふと立つた刹那、此方を見てあら静ちやんと云ふて顔を赤くしました、あゝ、本年の四月同じ學校を卒業した君子さん、斯くも大人になつたのでありました。

秋の野

神戸　荒木こと子

花咲き亂れし彌生の春も早過ぎ緑深き夏草の名殘はつきずさるに早秋は風の音に知られさやけく照る月に光を磨く露、己が時ぞとなき出づる蟲の聲々皆それ〴〵樂を奏せば小川の流も又劣らじと聲を出すもをかしく、露もいろある萩原のこゝかしこに匂ふ藤袴名さへやさしき女郎花紅深き撫子や葛葉の桔梗さては香もなき尾花等處せまきまで咲きそめし千草の中にふみ入ればつめたき露の玉はら〳〵と三つ四つもすそにかゝりぬ。

父様と母様

東京　とき子

四歳になる鈴子さんに、お母様と、お父様とは、如何して違ふの??と聞ふと

鈴子さんは、
お鬚髯の有る人がお父樣――
お衣物を縫ふ人がお母樣よ、

菊

伊勢　三好瀧子

軒傾き壁崩れたる賤が蓬屋の竹垣にそひて心なきなく、亂菊の咲匂ふそが下に破れ蓆を敷きて老嫗のいと古びたる糸車を繰りて糸紡ぎつゝ眺めては、微笑めるは花の笑顔に老を養ふにや。

秋

青山　遠藤良

秋に至ればそよ吹く風に木葉は凋れ七草は野邊に咲きみだれ樹間に映る月影はすみ渡りて細き蟲の音いとあはれなり。やがて茸狩紅葉狩に友の二三と一日を遊ぶも興深し。今日此頃は堪え難かりし暑さもすぎて萩桔梗女郎花等のさきみだれたるいとおかし。明らけき窓の下に清き机により書をひもとけば其の樂しさも一層にていさゝかもうむとなし。げに秋は學びする身には最もよき季節なりけり。

マア惡らしい

岡山市　安田せむ子

タンとご馳走を拵へて驚かさうと專心に臺所で調理して居ると、何時の間にか傍に來て笑つて居らしやる。
眞人、男の來る所でありませんよ、早く彼方へ往て居らつしやい。はゝは、宮やさん、これ―これ!!　水瓜の腹を、ポン〳〵打つて居らつしやるアラ惡らしい。

初秋の感

仙臺市　加藤明子

秋も未だ名のみにて暑さは夏よりもいみじうまさりて思ふゝに折々のうつり變りこそげにしるかりけるや朝顔の花やゝほそり撫子の色あせゆくも綠の色はかはらぬ桐の葉落たる。又夜は蟲の聲々きこゆる町僻のしげく草葉にすがるなど皆秋のしるしなりけり忍が岡のゑせ法師が取り集たる哀は秋のみぞ多かるといへるも理にて秋深うなれば蟲の聲さへかれ肌寒く覺ゆるは心細しやまして木葉のはら〳〵と落つる草葉の枯て色なくなれる風の音すさまじく聞ゆるも秋にこそあれ此頃の空未だ淋しくもなき夏なれど思はゞ今年も半過てつもれば人のといひけん月かげを限なき頃にも近きぬらして

◎海邊の月

越後　小島琴子

涼しき夏の夕ぐれ、いでや海邊の月を觀んと幼なき妹と連立ち夏草茂き小徑をふみ分けて、海岸へ辿り行く程に、いつしか波打際に出ぬ。今しがたまで燦々と輝き居たりし太陽は、水や空なる、彼の青海原の遙か彼方

に沈み、四邊の景色、徐に、寂寞として、濱邊の青き並樹松も、長き白き一帶の眞砂も、さては沖行く船の眞帆白帆まで、すべて蒼茫と薄暗く彩られ、濃き海面は、以前の陽氣なるに引かへ、如何にも哀れげなる、景色と變り行く。程なく淸き夏の月はほの〴〵と匂ふ、彼方の山の端を離れて、玉の如き玲瓏たる光を海に投ぬ。妹が砂の中より、美はしの櫻貝、簾貝等の貝何かを拾ひて、さつと許りに投ずれば砕くる水に寫る月影きら〳〵と散りて、金波銀波の花の波餘りの艶麗さ、神々しさに、暫し陶然と吾を忘れて眺むる折しもあはれ月をかすめて、雲井邊に飛び行く、山ほとゝぎすの一聲……。

佛濱に立ちて

佐原　小澤てふ子

磯にひゞく波の音、礒に散りしく潮の花、今はいつしかたそがれて夕霞せまる浦の色、妾は志保子の君とたゞ二人恍惚として片割貝を踏みしめてとある巖頭に佇めるなり、仰げば夕霞は紫に黄にはた紅に變り行き、躍れるが如くひゞきし白濱の音はやがてたからかに轟き渡りて潮の花より立ち昇る霧りいと高し。

あゝ海なる哉、松の茂れる彼方の丘には燈臺の光り明けく見ゆ。

朝顔の花を送られし返し

大阪　松井はつ

只今は御使をもて朝露まだ消えやらぬ笑るはしの朝顔賜はり、いと〳〵うれしくたゞちに文机の上にある彼の懸け花生へ未熟ながらも取り生け候處莖夏に大なる一輪莖もたわゝに咲いたる風情いとなつかしく存じ候、御使の手をわづらはすはむなきわざには候へ共、日頃愛せし此白百合ひともと又やさしの御状の材料にもと存じ御目に懸け候まゝ何卒御受下され度先は一筆お禮までかしこ

姉の初産を祝す

淡路　集堂千代

あの坊やが生れたつて、そして姉さんも丈夫だつて、まお嬉しい事、御兩親樣は申までもなく義兄さんも大悦でせう、「おゝ姉さんも母さんになつたのですね」、私今度の日曜にきつと參りますから抱かして頂戴よ、名は何と命けるの、

懸賞		
小說		
枚數二十枚乃至三十枚傍訓つき		
〆切本月三十日		
賞金		
一等　拾五圓	二等　拾圓	三等　五圓

暑中休暇

埼玉　宮倉いね子

桃さくら、さけるころより、たのしみて、待ちにまちたる、夏休み、今や來れり、いざや友、しばしわかれん、師の君よ、まさきくいませ、妾は今、行李とゝのへ、いで立ん、發車時間の、待久し、妾が故鄕の、秋父れは、山はみどりに水淸し、いとし父母、まちまさん、妹や弟は、ほちとたまと、つれて門邊に、迎ふらん、春の歸省に、うゑてむきし、豆のくさ〴〵、おのがじし、赤きむらさき、競ふらん、ひよこは早も、とき告げん、池の金魚はうかびけん、あゝ待久し、發車時間の。

さまよひ

東多摩　小森花蝶

鳥の聲に眼醒めて置時計を見ると早六時驚き床を出た、夏早起して冷たい水で顔洗ふ程愉快な事は有りません、つるべのなわに手をかけるとギー静に音がして白蝶がつるべを離れて舞ひ出すと雀が愛らしくチウチウ然の舞に合せて歌ひ出した、喉愉快胡蝶の舞に雀のはやし自然の消美を感じると共にたのしひ光は胸に滿たので歩むともなく庭の隅をさまよふてふと見る眼に優しくうつった小女椿の一枝靜るも嫌な程マア毛蟲の子の一塊、花の色香に迷ひ青春の戀の焰に胸を焼き舞ひ狂ひ戯れ遊び〳〵胡蝶の吾が子の姿の斯くも淺ましく成ろうとは……。初風吾が袂をもてあそぶ折から椿の檜近く白蝶の群來て此處に雀と胡蝶のブトーが始つた。

夏

下野　和歌子

日陰涼しき夏木立、緑の色ぞいや涼し、己がつとめとなく蟬の、明日の命も知らなくに、露のひぬ間に夜明より、金をも溶かす炎の中、餌食をはこぶ蟻の群、西に東に行きかふて、沸きかへりたる水田に、照りつく光背に浴びて、田の草取るも愛やつらや、稲葉をなびく風なくも、玉なす汗に身はぬれて、氷り賣るとは面白や、朝に生き夕に死すとも之も又いづれ浮世の五十年、長い短いなんのその、いそしむ業ぞ實なれ。

◎哀調一曲

本鄕　村澤紀子

こゝ藝術の泉の湧り出づると云はれし、孤が岡の葉櫻がくれ、茶褐色にぬられたる洋館もるゝ妙なる音の、初夏の木立を通してひゞく時、燃ゆる眼を包みてけん、瀟洒なる「スュート」の色よきをそよ風にひるがへしつゝも急ぐ「レディー」の幾群、薔薇を胸に紳士の幾群

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「プログラム」を操れば合唱「常盤。」演奏臺上には一むれの生徒「ヘイドリヒ」教授は「ピアノ」によりぬ「ウンケル」氏は指揮杖をとりぬ幾千の來賓は靜まりぬ、その瞬間高く上げられたる指揮杖の尖は電氣を傳へしかの如くピリ〳〵と動きぬ低く低く歌ひ出されたる哀調一曲

ふゞきすろ、比叡おろし。」笠やぶれ、身は氷る。」乳をさぐる、みどり子も、呱々さけぶ

これぞ後年、三軍叱咤の聲。」

心急けど、氣は下折れ。とぼ〳〵と、たどりゆくなろうしろかげ、

うづむ雪、千里、あゝ、

沈み勝ちなる合唱はよくうづむ雪路をたどる常盤の切なる心情を寫して、聞く者をして覺えず涙の滸額、悲哀なる暗愁に袖をうるおるしむこの間玲瓏たる「ヘイドリヒ」教授の「ピアノ」はより多くその表情を强からしめぬ。

あゝ藝術はながく命短かき人の世に樂こそ力なり。

花と花

神戸　船戸ゆき

糊き流れを隔てゝ萩と桔梗は深く思ひ思はつゝ、されどかたみに寄ひ寄らむ術も無くて過ぎぬ、一夜野分けの烈しかりし朝桔梗のやさしき姿見えずなりぬ、萩の恨みやいかに。またの朝あはれなる萩をたづねけるに誰か情にや同じ様なる桔梗のもと咲けるあたりに植ゑられてありき、

(比喩絶妙)

滑稽 一口噺

◎印は入賞

△ 名古屋 山田 秋子

父「坊は其雑誌を寫して何にする
子「他の雑誌に投書するの
父「何で人の文を投書するのだ
子「それでも他人の善い所を取るがよいと先生が言ひましたから

◎ 同 上

奥様「此れぎはへんな香がする子ー
下女「まだしますか
奥様「どーかしたのかえ
下女「いやな臭ひがしましたから一寸香水を掛て置きました

◎汽車賃 京都 富島 一枝

田舎者「此四歳の小供の東京迄の汽車賃は幾許だかれ
ステーション員「四歳の小兒に何處迄も無賃です
田舎者「夫れでは私は乗るのをやめるから此小兒を東京のオツアさんの處迄無賃でやつて下さい

△ 伊豫 石川 松子

孫「をぢさん書讀するのに何故目鏡を除けないの？」
伯父「目鏡をかけて居ると數が多きく見えるからさ」

△舌きりすゞめ 群馬 直子

一人「あなたお火鉢で煮て居らつしやるものは何ですか御馳走ですか」
他の一人「はい御馳走ですから召し上れ」と牛煮の鍋をさし示した
一人「いやですよそれを嘗めると舌を切られますから

△桃太郎 東京 とき子

鈴子さんはお母様に大きな桃をお子ぞりして、大喜びで二つに割つて、不思議そうに、「アラ……桃太郎は這入つて居ないよ」

△敵き討 東京 小池 千子

妹「アノ姉さん敵を討つには百年かゝらなければ討てないものでしようか
姉「なぜさ
妹「でもねー お目にかゝるが百年目と云ひますもの

△乞食の解答 美濃 山田 愛子

東京市街を散歩する二人の女學生
ヘナ子「此處から尾張と駿河とどちらが遠いでしよう」
ツチ子「尾張の方でしよう」
ヘナ子「イヤ駿河の方でしよう」
論旨未だ盡さず彼方より一人の乞食が來る、ツチ子君忽ち一策を案じ、彼の乞食によりてこれが解答を得んことを提議す、ヘナ子君贊成即ち一錢を與へて曰くお前は何と思ふぞと
乞食曰く「ヘイおありがとなうございます」

◎下女 青森 三浦 あや子

新參の下女と奥様いろ／＼話しの後
奥様「ぢやお前は先に居た奥様にお氣に入りだつたんだね」
下女「えゝさうで御座いましたとも私がお暇を頂く時にも大層お悦びなさいましたもの」

◎指環のほりなほし 麻布 池田 百合子

女「一寸此指環の裏に彫つて下さいな
「はい／＼なんとほりますか
女「あの木戸郎様へ君子とやつて頂戴、だけど木戸郎だけはごく淺く彫つて下さいよ
「をやなぜです
女「でも私、上げる方がちがうと彫りなほすのだから

◎答書 佐賀 永野 笑子

先生引算の説明をして
皆さん引算は引くものと引かるゝものとが同じでなくては出來ませんよ
筆五本から三錢は引かれないでせう

人三人から馬一匹は取れませんれ
言下に一生徒立ち上り
先生牛一匹から乳が二升取れます
本を三册買つたら二錢引てくれました

△裸で道中　新潟　神山　くに

甲「裸で道中するものがあるか」
乙「ありますく\新聞や雜誌は帶一本で天下を飛廻るではありませんか

◎魚屋の返答　福井　片山　千里

奥樣「魚屋さん昨日の鯛は新らしふございましたが、今日のは少し古いようですれ。」
魚屋「いゝえ奥樣決してそんなとはありませぬこれも昨日のといつしよに買ふて來ましたのですから。」

◎無學の主人　青森　青山智惠子

無學の主人親類よりの手紙を見て、かねて水風呂の事を頼まれてあれば、コレ水風呂をやれと云へり、使の者「エヽ盥も一緒に」と云ひければ、主人「ム、盥は水風呂の隙で一寸見えなかつた

△綿と鐵　松山　新部　球子

先生「綿千斤と鐵千斤とはどちらが重いですか
生徒「鐵の方が重いです

△蝶々　日光　福田　粂子

弟「姉さん日光には町長がゐるれ！」
姉「あゝ東京にも大阪にも町長の大きいのが居升よ」
弟「あゝ黑い大きい地獄蝶々が居るの」

△　京都　藤田　靜枝

妻「アナタは澤山御本をお求めになりますが皆んな御精讀なさいますのですか
夫「イヽナ己れのはツンドクだ

懸賞 滑稽一口噺
題は隨意可笑味ありて頤を解くに足るべきもの
〆切廿日
賞品 秀逸五名を限りて賞品(圖書切符)進呈一題三十錢
投稿は葉書に限る

謎々

◎印は入賞

△朝顏とかけて

◎望扶斯采の用水井と解く、心は釣瓶とられて貰ひ水　京都　藤田　靜枝
◎高砂と解く、心は鶴(靏)が舞ひ上る　東京　池田百合子
電車の割引券と解く、心は朝に限る　長野　瀬澤千代子
雨戸と解く、心は朝早く開く
賣れ殘りの魚と解く、心は晚まではらたぬ　東京　川村[illegible]子

△生命保險とかけて

◎英雄の銅像と解く、心は死後に金となる　長野　瀬澤千代子
漁夫の貯蓄と解く、心は不漁(不慮)の時にそなへる　薩摩　日高　妙子

△水族館とかけて

歸りを待つ妻と解く、心は肴(魚)な買(飼)つてをく　東京　とき子
掏兒と解く、心は懷中(海中)のものを集める　京都　砂川　滑子

△長壽法とかけて

王朝時代の官名と解く、心は攝政が第一、　東京　榎本　鈴子
◎晦日の掃ひと解く、心はのばすのに苦心する　下野　栗原くに子
議員の選擧と解く、心は運動を欠いてはならぬ　京都　藤田　靜枝

懸賞 謎々
海牙の密使とかけて
呉服店の賣出しとかけて
秋風とかけて
〆切十月五日
秀逸五名を限り賞品(圖書切符)を進呈す一題三十錢
投書集書

懸賞 繪さがし十二題

本號飛駒の中に繪さがしが十二題仕組でございますから皆さん當て御覽なさい、十二題共殘らず當つた方には抽籤の方法によつて六十名を限り左の賞品を呈上致します、答案の〆切は九月十五日

一、賞品は博文館發行圖書切符金壹圓づゝ
一、答案はすべて葉書を用ふる事
一、答案調査の上正解者の數若し六十名に滿たざる時は剩餘の賞品を平分して正解者に割り當て贈呈する事

前號繪探し當選披露

（應募總數八千五百七十二名）

前號の懸賞繪探しに就て答案を寄せられたる總數は八千餘通に上り、初一日に接手せし答案丈にて既に六百餘通の大數に上りしほどの景況斯る次第なりしを以て約束の到着順を正しく區別する事能はず、依て最も公平なる方法により御約束の正解者は抽籤を以て三十名を選拔し賞品贈呈する事に致したれば抽籤洩の正解諸子に對しては甚だ御氣の毒の至りに候へ共此儀御承知置願上候

▲當選人名

岩代國喜多方町文新道	寺崎マス
大阪南久太郎町四ノ一〇二	黒松勇藏
愛知縣知多郡龜崎町	大島ひで
橫濱市中村町一三〇四	西山小ゆき
神田一ツ橋通十四吉野呉服店	宮田
八王子町南横町	海老野光子
廣島市横町一四一	横山敬子
神戸山本通四丁目七九ノ七	塩路田樹
備前西大寺今町	岡崎なか子
小石川小日向臺町三ノ二一一	桃井つね子
赤阪區表町四ノ四	藤沼節
本郷區眞砂町三十七	小田切樂子
京都市御幸町三條上ル	三輪信子
本所區小泉町二十	早川瓊子

本郷區森川町二十
攝津豊能郡彩町高納治兵衞方
京都武徳殿丸太町下ル
鹿兒島市中町七七
長野市若松町二十七信州新聞賣捌所
常陸多賀郡大津町
松本市宇大名町
岐阜市賀茂町武山野院

渡邊せい子　大阪市西區西長堀北通一丁目
美　江　本郷區駒込千駄木林町百四十二
河井蓼子　山形縣飽海郡觀音寺村
今津しゆり子　淺草元鳥越廿三
中野文子　函館相生町五〇
小松崎その子　栃木縣下都賀郡部屋村大字新波
淺川厚美　本所區向島須崎町十二
西原した　大和五條町

▲東京の部

△田中イス△原田イク△前野セイ△日仲ヒサ△杉本トク△浄村ロデ△廣澤マサ△關口ウメ△松井嫩△池田ユリ△池田タミ△土井トシ△井上ふみ△上松セイ△近藤ナデシコ△荒澤ヨシ△間瀬つな△名和タカ△星野菜△林ヨシ△杉浦ふみ△清水ヤスエ△馬場トヨイ△豊崎トモ△川内イクヨ△石田ふみゑ△渡邊チヨウ△高橋ユリ△高杉アキラ△統川淺野△淺野カチ△松下ゆき△村松アサ△桑山タニ△森ヨシ△吉田順子△佐藤キヨ△吉野よし△伊藤リン△宮長ヨシ△立花ヒサシ△松野すみ△柴イチ△曾根房子△柴安子△伊藤チエ△佳友ヒデ△田中入重△千賀しげ△長谷川タキ△作山セト△村上ヨシ△臨園梅子△小高ヨ子△高木すゑ△山本綠枝△津田かほる△大橋マツ△片岡タケ△實松しづ△關根千代△松平ヒナ△加藤タマ△内木シヨウ△松村サダ△鈴リウ△野澤ハルエ△岸田リウ△大川コウ△伊藤コウ△小田島幽△山田竹子△三上サワ子△原田藤子△國漑子△伊達藤枝△服部トシ△伊澤のぶ△長尾ノブ△市川ツ子△境フサ△島津ヒカル△尾澤留吉△小出スヨ△渡邊近子△平井シゾ△高瀬ふく△大寺ツエ△岡本ツ子△高橋リカ△上田ヒロ△澤ヨシ△岩崎ハル△秋月ふみ△古浙イマ△石野リキ△杉村ミナ△高田キヨシ△岡野マツ△正田こん子△岡崎マツ△齋藤ヨシ△濱田シノブ△光野ナホ△市村たか△内藤擶子△岩塚ヨシ△梶岡あや△坪井千代△田久とし△五島ふじ△富岡よし△小島きく△大木菜△齋藤よし△吉村菊野△五島せん△上野みわ△堤きく△森たん△鮫島琴子△能谷ます△上條菜△横田よし△西尾しま△後藤つる△森忠子△三浦かれ△赤堀なほ△靜岡ゑきの△梅山梅子△伊藤せい△高木いさな△大田佳子△人見せい△石川しづ△村井さだ△柳川孫三△伊藤ふぢ△永田ヨシ△宮西のり△鹿島龍△相馬千りよ△北村紀子△筒井吉久△松田竹子△岡田あさ

▲各縣の部

△名古屋平松英仙△横濱武田シゾ△信州岩岡ロロ△岡山山田タミ△横濱坂谷キヌ△岡屋崎ミヨ△甲府桑原ヨウ△岡山山田サデ△仙臺大木フサ△横濱井上スサ△武州稲田リウ△函館宮川ミサオ△福島鈴木キヨ△名古屋土屋シゲ△弘前西村トシ△福島小貫トキ△新潟松川ケイ△相州小西コウ△岩代渡邊ツナ△岡池田ミホ△甲府横山ユタ△横濱阿部アヤ△大阪横山フキ△岡山小幡イシ△函館小林コウ△三重増井スミ△小樽小野トシオ△信州小島みちゑ△長野清泉ハル△札幌柴田マツ△長崎河本ウメ△群馬塚越タキ△青森三浦ツル△大阪倉野タマ△和歌山長岡ハナ△名古屋吉田アキ△陸中菊地タニ△埼玉青山シゾ△青森兒玉ツ子△大阪南井タカ△同柳井田クマ△札幌福島キヨ△栃木正野ナヨウ△門司吉川カホル△富山常田マサ△加賀米谷タツ△山口伊藤ヨシ△

中村とく子
山崎隆子
佐藤みのる
鍋木千代子
小川ゆきゑ
飯島けい子
泉ため子
櫻井とく子

越後細野ミユキ△伯耆國道野尾千代△姫路小島タツ△靜岡鈴木キヨ△越後武市ヨシ△小倉松本ヨシ△相州早岡千代蔦△熊本松尾讓△千葉中村シヨン△栃木橋本トヨ△下野日向野ヨ子△埼玉坂本讓△山口原田たけ△廣島船田ウメ△紀伊玉石ヨシ△札幌本間サダ△大阪橋亭ハナ子△空地今渡シヅ△備中中井メツ△廣島野田マス△岡山村田八重△三重尾崎のぶ△小樽澤谷ツ子△兵庫大川リヨウ△越後三和のぶ△岩代田村ヨシ△靜岡大平讓△下野飯谷トク△大阪坂口七重△神戸川崎トキ△石川松見キミ△甲府土屋トモ△山口岡山峰△近江若村イク△名古屋岡田エイ△奈良宮西リエ△甲州河野フキ△福島石崎ヨシ△相州山田ナリ△讃岐河上市蔵△長崎青木ナス同烏谷千代△福岡渡邊メマキ△大阪藤谷てる△長崎中川トヨ△伊勢矢野マツ△横濱吉川ミツ△新潟塚澤ミツ△三河佐々田ハナ△横濱遠藤サツ△伊豫山崎ミサ△京都小林アサ△横濱下村メケ△福井淺倉キヌ△兵庫二見トヨ△近江宮内ウチ△香川野村メツ△甲州寺野イマ△廣島横見ハツ△京都花形サダ△武州倉持セト△同山田トシ△函館横山テイ△相州進マス△釜山昭永フミ△京都松田ヨシ△同清岡ハフ△大阪馬場シヅ△若狹松崎ミ子△長野田中ふじ△愛知柳原アイ△福島小林ヨシ△同松井ミサホ△福岡伊藤ツル△同近松トヨ△同泉いづみ△四日市北村くに△同深津しき△大阪小西菊△同小西儀助△同澤井スガ△同西野キヌ△同尾田しん△同西松千代△長野鈴木ヨシ△埼玉武内とサ△名古屋炭釜キミ△同鈴木トク△京都澤井榮太郎△同治田トシエ△同沈多野マツエ△同高田春枝同山田エン△岐阜富本キヤ△

同桂川好太郎同古池八重同淡桐女史同山田アイ△伊勢山田カ子同磯矢かね△同山川シナ△兵庫齋藤トシオ同大西アイ同梶夏子同北村シゲ△同山田ユト同山本セツ△薩摩日高妙子△同安村清一△相州稲島たけ△埼玉野上ふゆ△千葉伊南ヒデ同平野ヒロ同吉野ヘナ△愛知淑松トオル△秋田柴田ハナ△神奈川引野清子△岩代荒シゲ同白木ヨシ△下館高橋エイ△横濱吉川白菊△山梨内村イサホ同矢崎ミチ△仙臺吉田ナホ△同菊地ツルエ△札幌安部トク△新潟松川嬢△大村長谷川ヒサ△小樽香村サダ△近江佐藤チカ△福岡瀬崎セイ△馬關岡田讓△相州尾崎ウメ同富田クラ△横濱飯田イメ△備中佐々木長子△釜山石川チセ△西條近藤トノ△安藝荒木ツル△岡山安川内ヨ子△横濱馬場セイ同高木もりゑ△横濱加納京一郎△福井石田トモ△近江田中ミチ△富山武内チカ△新潟新井ぶし同中谷ヨシ△青森高屋カヨ△伊勢松井トメ△島根高橋マスエ△越後品川たら子△仙臺渡邊カ子同木村てる△下總佐藤マサエ△岩城栗原讓△前橋鈴木ウメ△三重近藤二三郎△山形佐藤いえ△山梨秋田たみ△丹後愛阪アイ△臺灣三田定榮△臺北一條花子△同峡ます△韓國さゆり△北海道濱野たづ△徳島高井よしゑ△韓國松村讓△佐賀江口よしゑ△富山天野イク△青森田村いう△島根佐田ちか△韓國山内幸△同山口たき子△信州高島屋△秋田上村よし△大阪香川きみ△山口村田幸△北海道村上セイ△香川上代小子△栃木石川さと△兵庫木村きの△大阪日下部きよ△函館龜松みつ△埼玉青山ふさ△福島みさを△山形本田しげ△紀伊小倉マツエ△山形新井歌子△山口朝元きみ△名古屋村井ふみ△

京都藤田しづな△山梨古屋よしな△名古屋村瀬アキ△横濱櫻井リウ△大阪楓香△同沼田四郎△盛岡高堂すみ△羽後泉川菜△鎌倉御園千代△宮城關谷よしの△長野瀧澤千代△富山村本きく△群馬山岡かれ△新潟阿部讓△秋田加藤さん子△滋賀加藤はる△横濱綱島とし△姫路中川四郎△愛知熊本しげる△同森菜△新潟佐藤千代△神奈川小泉アキ△兵庫上野しづ△愛知山根ミヨ△富山舟木キヨ△長野久保田トリ△札幌伊藤ハル△京都原トモエ△近江吉田ナホ△大阪横山ミキ△兵庫小林マス△鳥取槻木スマ△靜岡山中リウ△但馬加藤ソヨ△北海道吉田シヅ△横濱堀ソエ△備後鹽谷コウ△丹後末原ひろ△山口秋山ジツ△佐賀西村シヅ△山口坂谷キン△愛知板倉スエ△滋賀勝部シマ△名古屋近藤ジツ△島根小泉ヨシノ△福島猪松アイ△札幌仁木オリエ△大阪中谷シマ△京都泉谷トク△丹波深澤ハル△京都朝子いし△丹後田原マサオ△神戸西村カヅオ△神奈川松島サワ△大阪岸本ミノル△大磯雨宮タカヨ△横須賀前原ユウ△下總大木トミ△久留米松田フサヨ△釜山西アヤ絹△函館小島シノ△横濱大村クラ△和歌山妻木菜△群馬荒井さく△愛媛佐賀ブサ△三重中川みつ△河内陸山れい△三河高橋菜△美濃馬淵孝吉△新潟吉田種子△京城小川喜美△近江西川眞子△奈良西田かれ△甲斐青柳錦子△靜岡染谷ミエ△龍ヶ崎鈴木その△福井大和田みち△滋賀藤澤さく△青森高木とみ△秋田近江ナエ△宮城丸谷みつ△京都淺野榮子△備後岩崎しげの△京都黑澤みわ△大阪黑松榮吉△大阪黑松たか△大阪黑松讓之輔△山梨田中貫平△横須賀清水清△京都村上はな△埼玉山田久代△

廣島氏水つは△福井玉井松次郎△下野大町いよ△因幡船越みつ△長野青柳秀明△長野池田とめの△小樽村上かん△伊勢松井ふさ△岩代佐藤きよ△横濱遠藤かつ△福島高木千代△仙臺片岡ともゑ△宮城片岡くま△群馬今泉りん△相州今井てい△神奈川熊坂金作△下總酒井百子△岡山和田いくの△因幡入江とき△鳥取青木春子△茨木星野某△山梨近藤さよ△山口河合とし△磐城大澤さみ△京都今津ヤミ△静岡杉本準子△神戸樋口つま△播磨中村よしゑ△前橋所かなへ△大阪松井まさほ△静岡鈴木うめ△静岡松村君代△鹿兒島服元ゑつ△岐阜青木しづ△奈良川路ふみ△静岡住岡むら△滋賀服部すゑの△京都梶村鐵造△伊勢清水篠吉△佐賀神崎つれ△神戸松村春子△名古屋中島ます△高知高橋龜壽△紀伊生馬龜代△山梨岸田友來△大阪奥原チカ△下野澁澤外子△廣島脇永つる△佐賀副島アキ△大阪桑田なつ△信州渡邊千代△和歌山松見ゆき△姫路榊原しむ△大阪多野アキ△佐賀磯井久子△大阪久保田某△新潟田代千枝△相州四方田某△名古屋野村ふじ△京都田村はな△横濱中村ちゑ△岩代菅野廣子△神奈川辻秀子△仙臺清水ゑい△京城中尾つや△近江北村いそ△高知濱田早苗△岡山岡田菊枝△韓國中尾つや△岡山武本操△丹後吉田静枝△京都深谷ぎん△高崎内山元△函館佐藤まさ△岐阜國井延子△岡山小野田きくの△福井四こひさ△廣島村田はる△廣島小川かつ△三河山崎新太郎△横濱高橋うた△兵庫植野某△石見劉ツメ△大阪田中リウ△富山城戸はる△前橋所クリ△埼玉關口まさ△静岡小花部△大阪近藤ひる△大分上田喜美代△横濱安西みや△下野渡邊ひゲ△茨城濱野とみ△群馬澁澤ちよ△山口土屋ます△岩手佐羽ヨ子△相模橋本キク△大阪多能アキ△群馬松宮ヨシ△上野萩野ソデ△埼玉粟原チセ△岩手中西ノブ△神戸林シツ△栃木松平孃△前橋武藤ヒデ△千葉佐藤イソ△横濱瀬尾ハナ△群馬和田アサ△伊豆加藤木しげ△大阪太子南野△福岡山鹿ハル△京都松風すて△備前和氣アヤ△大阪出雲カヨ△同中村ミエ△同加藤ミサホ△同渡邊サク△同尾竹孃△同栗村勇藏△廣島村田吳服店△神戸池田セイ△同澤田タマ△同藤井長兄二△同增田榮二郎△埼玉澤口孃△前橋松本千代△三重稲垣チヨ△同高松シツ△福井谷田ふみ△岩代伊藤きし△川越栗原アイ△長野瀬戸口エイ△同伊藤孃△京都驚見チヨ△大阪松井千賀△神戸梅田エイ(以上當籤沒正解者)

△明治少女節用

麗谷、沼田
竹貫、木村合編

少年節用を兄とすればこの書は即ち其妹ともいふべきものなり、編纂の手、心尤も多趣味にして凡そ現代の少女に必用なる事柄は大概これを網羅し盡して遺憾なし製本の美麗なる口繪其他の精彩なるはいふまでもなく鼇頭と本文との配置もよく調ひ有益にして興味多き節用本なり　價八十五錢博文館發行

△少女の戀

田山花袋著

寶冠の第一顆の金剛石にも勝して有難さは實に少女の涙にあらずや、純潔雪の如き肌に青春火のごとき戀を抱くこれ妙齡少女の世に學ぶべきところならずとせんや、塵俗に遠くして然かも又多恨多情なる少女の戀愛を描くは本作家の獨壇にして又他人の容易に摸倣し難きところなりこの書は數年前の著作にかゝるもの多しと雖も今日猶小說界の遺珠として歡迎さるべきや論なし。定價八十五錢隆文館發行

△耳鼻咽喉の栞

吉岡猛纂

著者は佐賀縣の人にして現に耳鼻科の開業醫なり、この書專ら耳と鼻との衞生を說明して全身に影響する處ろを示したるもの衞生上の智識を普及せしめんとの素志を以て纂したりと云へば其の素志たる誠に賞讃するに足るべし佐賀市精養堂發行

▲人事活斷▼

石龍子

△芝のすみれ女へ――聘すれば妻となり奔れば妾となるの古語は二十世紀の今日と雖も倘眞理たるを失はず左候へは今一度誠を籠めて姉上等と諮り、彼の工科大學卒業生に正式を以て婚を結ばる可し果實正に熟して摘み取る可きの期來れるの卦なれば一刻も早きを可とす。

△都の煩悶女へ――亂れたる絲を處置せんとするが如き卦なり、急に解かんとすれば益々亂る去りとて悠々解かんとすれば時日を要す、故に御身も斷然思ひ諦らめて新らしき絲否他の人と結婚せらるゝを可とす。

△西國より西京へ引越女へ――過つて激流に落ちたるが如き卦なり流れに抵抗して岸に着かんとするは非常の困難、寧ろ流に從うて岸に上るの策を講せざる可からず、故に貴女も兄上の言葉に從ひ歸國の上身の處置を爲さるこそ宜けれ。

△父無き不幸女へ――來年十月末頃にならざれば期熟せざるの卦なり、父上は生存確かなれども不幸打續き萬事思ふ樣に行かぬ所から遂に便りもなさらぬなり、失望するに及ばず。

△山中柳水女へ――元を糺せば他人とは言ひながら一旦約して舅姑夫婦となりし以上は何處々々までも互に赤誠を盡し苦樂を共にす可きが人倫の大道なり、然るに他人の言を用ゐて大道を無視するは凶の凶なるものなり、故に御身も良人も皆々復籍して三方圓滑に纏まる策を御身率先して姑に說き夫に說きて盡力せらる可し之れ孝なり之れ貞なり、之より外に何等の幸運無しと知り給へ。

△うらなひ子へ――衞生顧問糸氏の口吻を使ふやうなれど肺病は初期に適當なる治療をすれば全快して普通の業務を取らるゝものなれど精神をして樂天的に日を送らしむること必要なるものなり故に萬事本人の望む通りに任せ十分保養なさしむるを可とす。

△八十八名女へ――大工が良材を求むるの卦なり、良

材は高山峻峰の頂には無く却つて小高き丘陵に在り然れば貴女も其目的を低くして幸運を求めらる可し、近き中に瑞氣靄々たり。

△太宰府の梅女へ――貴女と良人とは陽と陽なり、是れ相和合せずして而も生兒無き所以なり、然れども貴女より求めて去らんか將來必ず凶なる可し故に貴女は益〻陰德を修め婉柔以て仕へらるれば、良人も亦自ら悔いて素行を改めらるゝこと必せり。

△大阪柳子へ――良人は情の人にして意志の人に非ず貴女は寧ろ意志の人にして情に乏し、故に貴女が良人を慕はれざるに反し良人は心中に於て何處までも貴女を愛し居らるゝことなれば、貴女は熱誠を籠めて投機的の不可にして、汗脂を流したる金錢の貴きを徐ろに說かる可し、(此の本を御目に掛けて)良人は必ず淚を流して從はること受合なり、然れども貴女にして一點良人を捨つるの心あつて諫めらるれば決して其の甲斐無し、嗚呼石龍子をして女たらしめば如何なる夫をも我が思ふ通りの人に感化せんものを……。

△但馬白菊子へ――余は占はざるも直ちに教員の方に嫁せらるゝを勸むるなり、何となれば伯母上の長男は即ち貴女と從兄妹にして而も同年是れ倫理上生理上の禁ずる所、次に現在肺病に惱める人と嫁するは雙方の爲宜しからざればなり、貴女に限らず何人も資產や地位を夫とせずして人を夫とせらるべし、巨萬の富を有ち大博士の學力あり、身體健康、容貌立派な人でも其心にして德義無くんば敢て貴しとするに足らず、寒暑を厭はず原野に出でゝ耕す農夫にして而も容貌醜き人でも其の心にして美麗春の如くならば實に末樂もしき士なり行いて嫁がる可し。

△多淚女へ――世には長男に嫁を取り、爲に長男及び嫁と兩親との感情面白からずなり、且つ小姑即ち長男の姉妹と兄嫁との間柄も圓滿にならざるは十中八九なり、然れども熟〻其の原因を考ふるに各〻其の誠の足らざる爲なり、舅姑は我が長男の嫁なれば娘同樣に可愛がり、嫁は夫の父母なれば我が父母なりと慕ひ、小姑は我が兄の妻なれば我が姉妹なりと相愛し秘めず隔

さず胸襟を開いて語る可し、貴女よ〳〵本誌の着するを待つて晩餐の後高らかに此の一章を讀まれ、然る後他に嫁せらる可し、何の爲にか憂へん何の爲にか泣かん。

△滋賀の蓮女へ――姉上に先き立つて嫁するに忍びず依て之が判斷を乞はるゝ其御心は實に感服の至りなりけれども今一歩進んで考ふれば判斷を乞はるゝまでも無きことなり、貴女の良心以て如何と爲す。

△小河內郡老女へ――最初に約束せられたる方を吉とす、何となれば若し後に申込れ人に嫁せんか何時〳〵までも心に快からざる所あるが故なり。

△東京のなでし子女へ――貴女の理想は明月の如く圓滿なり、然れば其の理想を是非共實行せらる可し、何ぞ躊躇するの必要あらんや。

△羽前浮雲女へ――土中に埋められたる黃金の如く、雲に蔽はれたる月の如し、必ず其の貴き眞價を顯はすの期近きにあるなり、憂ふる勿れ悶ふる勿れ。

△上海の親子へ――名醫の診察を乞はる可し、必ず其の死因を明白に答ふ可し、人事活斷の關する所に非ず即ち御門違なり。

△兵庫の富久女へ――弓に矢をつがへ將に放たんとするの卦なり、力を入れて張れば張る程目的を遂せらる、然れば貴女の說の如く共に渡米して事業を透徹せらる可し、幸運續々順風に帆を擧るが如し。

△秋の風女へ――唯貞此字を味ひ給ふ可し。

△想夫女へ――貴女の思はるゝ如く良人も思ひ居らるるなり、良人の考へらるゝことを貴女も亦考へ居らるるなり、何をか疑はん何をか恐れん。

△南海浪子へ――異鄉の旅路に日を暮したるが如き卦なり、人に依らずして道を求めんか如何なる災禍に遭遇するか圖られず然れば何事も相當の人に依賴して心を煩悶せざるを吉とす、來年秋頃までには幸運來るなり。

△姉思ひの孤兒へ――姉上も亦職業を夫にせんとの心あるが故に緣遠きなり、總理大臣であらうと土百姓であらうと之に頓着無く唯終生相愛するの人を求めらる

可し此心にならるれば數月を出でずして天は良縁を與へ給ふや明かなり。

△豐橋の月に泣く女へ――良人は心中既に先方を厭ひ今は唯貴女のみを愛するなれども、從來の行掛り上假かに其の關係を絶つ譯にも行かず已むを得ず一時を糊塗して居らるゝなり、然るを貴女は之を知らずプリプリして良人に對せんか良人は遂に又先方を愛するに至る、故に貴女は此際赤誠を罄めて良人と共に策を講じ、更に數百圓の手切金を以て良人と先方との關係を絶たしむ可きなり。

△美作の子愛女へ――良人は不正にして貴女は正なるなり、子の有りと無きとを以て彼是情を異にするは東洋の弊風貴女よく〵斷然決す可き時に決せざれば決せざるに勝る耻ありと知らる可し。

△横濱山吹女へ――良人は決斷に乏しき人なれども溫厚愛す可きの風あり、貴女には何等の罪無しと雖も人世の一大事たる婚姻を輕忽に結ばれたるは亦過ち無しとせず、然ば此際大いに德を修めて悠々成行に任せらる可し何事も當方より、求むるは凶の凶なる物なり。

△片田舍の倭子女子へ――萬朶の櫻爛漫と咲亂るゝの姿なり、時を移さず行いて見らる可し否早々師範生と結婚せらる可し、一刻遲るれば一刻の悔あり。

△神戸末女へ――今現在爲し居らるゝ事業は迚も成功の見込なし而して三年の勉强云々は大に吉なり、早く其の方針を取らる可し、此の方針を取らるれば生兒も亦三四人ありて家運長へに目出度し。

△片田舍ほたる女へ――進んで事を爲すは凶にして退いて守れば吉なるの卦あり、然れば北海道旭川の人と正式を以て婚を結ばる可し、是れ退いて守るの道なり。

△みなし子へ――所謂虎に騎れるの勢なり中下せんと欲するも得可からず故に貴女は益々德を修め病を瘉し悠々時を待たる可し、良人必ず其德に感せらるゝの期至るや必せり。

△大阪末婚者へ――鳥の虛空に翔けて今や倦めるが如き象あり、之より高きに上らんとすれば益々疲勞するのみにて何の甲斐も無し、故に貴女も低きに下つて止

る策を講せらる可し、位置の高き人を望む可からず。

△やしま女へ――旱魃打續き草木將に枯れんとするの時黑雲張り來れるの卦なり、故に貴女も日ならずして好運來る可ければ今暫時の旱魃否辛苦は實に憂ふる所に非ず獨立せんなどの考は大いに凶なり。

△東京本所迷女へ――前門に虎あり後門に狼あるの象なり、故に今二年は家に居て災の去るを待たれよ、待ては必ず福運來るなり。

△春野美ゆき女へ――今回のは纏まらず、若し纏めんか必ず凶なるの結果を來す可し、來年の冬には天自ら良緣を與へらるゝの兆あり。

△攝津白百合女へ――御身は眼前の寶を拾はずして遠方をのみ望まるゝの姿なり、男女に拘らず容貌に結婚を彼是言ふは此上無き劣等の心なり、故に御身は父上の心に從ひ否天の與へらるゝ良媒なりと心得早々婚を結ばる可し、祥雲靄々堂に滿つ。

△三河國青海女へ――細き木根に縋つて漸く深淵に陷んとするを支へ居るが如き卦なり、苛れば苛る程危ふし、故に御身も心を靜かにし、同情ある人の救を求めらる可きなり。

△橫濱市木女へ――貴女の心中を明らさまに御両親に話し早々先方へ其由を申込まる可し然らざれば先方は貴女の意を知らずして他方と婚約するの兆あり何事も言ふ可き時に言はざれば百年の悔を殘すものなり。

△紅葉女へ――貴女は求めて憂苦の中に沈むなり、母上は勿論貴女をこよ無き撫子と愛で給ふし、兄上は殷しき心根を以て貴女を愛せらる、故に何事も母上兄上に一任し、聊か憂苦の心を懐かず、無邪氣に日を送られよ、求めずして幸福來るなり。

△浪花不幸女へ――羊腸たる峻坂を越え今や平坦なる陸路に到達せるの卦なり、御身は是より我身を幸なる者なりと喜び聊か慨く心有る可からず、生兒は必ず二人以上ある、嗚呼笑へば福來り泣けば鬼の住家なるものなり。

△しら露へ――緣全たし、生兒一人、將來何事も案ふるに足らず。

△山の手病女へ――糸氏の領分内に立ち入つて講釋するやうなれど、肺病に馬肉を食せよといふ如きは必ず名醫の言に非ず、健康者が食しても其の消化吸收する點に於て牛肉の三分一にも足らずと聞く、斯る人の治療を受けんよりは帝國大學或は堂々たる博士の診療を乞はる可し、病氣は必ず平癒す可きなり。

△上海不幸女へ――良人は魚にして貴女は水なるが如き趣きあり、然るに貴女にして之を疑ふは恰かも水干して魚死するに似たり、故に良人の貴女を末長く愛するも末長く愛せざるも唯貴女の意一つにあるなり、疑ふ可からず〳〵。

△田舎困居女へ――毎度申すことながら、東洋の易道も泰西の豫言法も其の原理は一にして「正なるが吉不正なるが故に凶」此の一語に出でざるなり然れば多病白痴等の理由無き以上は長者相續して幼者家を出づ可きが正道なり、次に血族婚姻は倫理上法律上又は生理上の禁ずる所、何ぞ人事活斷に判を乞ふの必要あらんや、故に御身は悠々時を待つて父上の商業を助くるの養子を得御身も亦其職に甘んぜらる可し。

△水野すみ子へ――生兒二人乃至は四人ある可し、來春の末頃姙娠の兆あり、心を平和にし、更に矍縱する所無れば何等の災難來ることなし、災難は多く他より來るに非ずして自ら求むるなり。

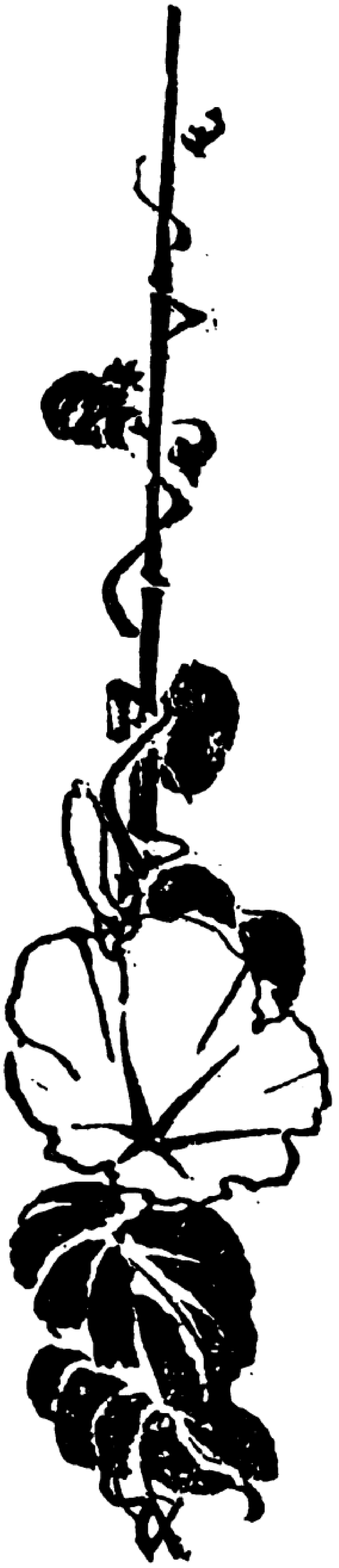
△千枝子へ――目的通りに運ぶ可きも、必ず德を守らる可し、德を守らざれば運ぶ可きの事も破るゝものなり。

△田中きん子へ――船出せんとすれども天候未だ穩かならざるの卦なり、強ひて出んか必ず災あり又心を悶へても何等の効果無し、故に「待てば海路の日和あり」の古語を味ひ、樂しく日を暮さる可し、期せずして良緣來るや疑ひ無し。

△南部在富美子へ――進んで事を爲すを吉とす、然れば三年間上京して大いに奮發勉勵せらる可し、良緣腦運期せずして至るや明かなり。

小說 こゝろの底

靜子



上

姉樣眞個に嫁く氣なの、」と餘り不思議に思はれて、二度も三度も繰り返せば、さも子供の癖に、餘計な世話をと云ふ風に「今さら嫁も嫁かないもないわ、這麼に何も彼も整つてるんぢや、ありませんか、那麼くだらない事を言つてる暇に此處の始末でも爲て頂戴な、斯う散らかして、眞個に仕樣がないわ、此節のごたごたつたら、ありやしない、丸つきり、御祭り騷ぎの樣だわ子ー、露さん、然うぢやなくつて、」と繼ひかけの衣服を疊み込んで取り上ぼせた樣に性急に、散々、當り散らして居るのを、呆れ返つて、見て居ると、やがて床の柱にもたれて、今迄の人とは、別の人かと、思はるゝ迄に、鬱ぎこむんですもの、何だか氣に懸つてなりません、姉樣はひよつとかすると、狂人になるんぢやないかしらん、この二三日と云ふものは今嬉しさうにそわ〱として居るかと思へば、直ぐ又考へ込んで沈むんですもの、斯麼ぢや嫁つても到底幸福に暮せやしなからう、と思へばこそ、二度も三度も、同じ事を尋ねるんです、でもこの樣に心がすさんでる時はいくら言つても駄目ですから其の儘、口を閉ぢて了ひました、「鳥渡掃き出しませうか」つて、箒を取りに立たうと爲ると「露さん、いゝから御坐んなさいよ、」姉樣は、御嫁になるのを、嬉しいと思つてるでせうか、露

さんには、何う見へて?」「そりや姉樣、現然と了解つて居ますわ、姉樣が悦んで、嫁つて呉れる樣だと、私も這麼に心配しやしないんですけど、……姉樣ほんとに新らしい心になつて、嫁らしつて頂戴な、ネー姉樣」と言ふ、私の言葉には、答へもしないで「露さん、父樣等は何とか言つて居らしつて、此度の事を」「父樣?父樣はネ、能くも思ひ代へたものだつて、大變喜んで被居つてよ、」「然う、母樣は?」「母樣は何うせ、どつちにしても善くは被仰らないわ、當世の女は割合に思ひ切がいゝ事、何しろ、文さんは賢つて、父樣は彼の樣な方だし、母樣は察して呉れる樣な人ぢやなし、よしんば察して居ても同情なんて、持つて呉れやしないわ、でもネ姉樣、私丈は、姉樣の心持を、熟う察して居る積りよ、」と解きほどかつた、糸を卷きながら言へば、姉樣は先刻から堪へ切れない涙が膝に落ちるのを、拭こうともしないで賢いつて、然うかもしれないわ、眞個に露さん、私は思ひ切りがいゝのネ健樣も然う思ふかしら、」と捨てる樣な吐息漏らして、涙にうるんだ眼を上げた時、私はつく〲さう思ひました、這麼にやつれて居るのを御嫁にやるのは死にゝやるんぢやなからうか、何だかもう、可哀想で……亡くなられた母樣が、父樣の爲に散々、苦勞をなすつたのを見聞して染々男と云ふものを嫌に思ひ入つた所以でせうか姉樣は御嫁入を大變にきらつて、他家の裁縫でもして、獨身で暮らし度いと降る程の、縁談も皆斷はつて居りました、其でも私は兄樣と云ふものを持つて見度くつてなりませんから「姉樣が獨身で行くなんて、——一體間違つた話だわ第一、姉樣の柄ぢやありませんもの、」つて勸めて見る事も度々でした、すると、或日、二人で裁縫して居る時でした「私はネ、露さん、主義を捨てゝよ、だつて父樣が其れを、許して下さる筈はなし、何うせ、結婚する位ならば露さんなんかの話相手にもなつて、下さるだらうし、世間並みの男と違つて、餘程しつかりして被居るから」つて何だかもう、確然と定まつてる樣な、口調なんですもの、私は驚いて、了つて、姉樣そんならもう、決まつてるの、

誰々」とすりよつて、熱心に聞きますと、「そら叔父様の御國の方だつて、宅にも三四度被來しつた山田様ね、知つてるでせう、」と私の顔をちらと見て、恥かしさうに「彼の方よ」と耳の根迄も赤くしました山田健一様と云へば私も知つてる人ですから「眞個に彼の方ならば立派な御兄様だわ、嬉しい事〳〵、式はいつ？ ネー姉様」と手ずさんで居る、針刺を奪ひ取つて、差覗く様に問ひかけますと「露さんまだ餘り、暇がないで頂戴、式は、この夏健様の御卒業を待つて、その上でと云ふ事になつてるの。露さん、この衣服は、乾度、あなた



によく、うつゝーしてよ、」と話を、他に轉へ様とてか、綻つてる衣服を取り上げて、私の肩にかけて、恍惚と二言、三言、恥ろう、姉様をかまつて後、其の話はそれきりにしましたけれども心の中の嬉しさは、例へ様もなく、早や樂しい未來の影を描いて、姉様の丸髷姿や、露さん〳〵と可愛がつて下さる健様の御樣子が歴然と目前に見て、兄様〳〵と呼んで

さへ、見ました、嗯、早くさうなればいゝ、夏迄の月日が驅けてつて吳れるといゝのに、と手操り寄せる樣に思つて居りました。月見草や紫蘭や撫子がせまい庭に咲亂れて、若楓からは水の垂れさうな、新綠の夜、御遊に御出なされた健樣と姉樣と私と三人、椽側に出て、色々な話の末、小說の批評にうつり、姉樣が、金色夜叉の間には、誰でも同情をよせるけれどもお宮にだつて同情を寄す可き點はあると有仰れば、健樣は、お宮の樣な女が當今の女の標本だつて、散々、氣焔を御吐になるから、私は「そりや健樣、女が一般にさうだとは決して、言へません事よ、今は男の方こそ財產や地位に憧れて、妻は鯛を釣る海老の樣な者と思つて御出になる人が澤山有りますわ、」つて一生懸命に辯解して、その例も二ッ三ッ引き、「ね、姉樣」と御同意を促すと「ホ……露さん、大變な意氣込み子」と言はれて、我ながら餘り熱心だつたのに可笑しくなり、失笑せば健樣も御笑ひなすつて、いつしか又優しい他愛もない話にうつり、月なく晴れたる夜の薄い明るさに浮び出づる影を見交はしながら、ランプも點けないで、十時近く迄語り耽つて、健樣は御歸んなさいました。

其の後は試驗の備へに御忙がしいんでせう鳥渡も御出になりません、唯、折々の繪はがきにも、御忙がしい中に、よく心にかけて下さる、御情の嬉しさよと、姉樣は一しほ、悦んで、感謝して、美はしい華やかな希望に包まれて、被居いました、すると、七月の一日だと思ひます、姉樣が健樣からの御てがみを御見せなすつて「露さん、健樣もいよ〳〵立派に御卒業が出來てよ、嬉しいわ子、直ぐ行かうと思つてたけれども急に要事が出來て、一寸御歸國なさるんだとさ、恰ど淋い時だから結婚式の事等も御母樣と相談して、確然と決めて歸京つて、露さんにもよろしくて、かいてあつてよ、」「だつても姉樣いくら御急ぎの御用だつて、一寸位來られない事はないわ、一體奈何御用なんでせう子」つて不思議がつて居ますと、「乾度今に御國から委しくかいて、來ると思ふわ、そしたら樣子が知れるでせう、」と幾分か心配さうに再び、手がみを繰り返して讀

んで「チー御覧なさい、そんなに心配する樣な事ぢやないらしいわ、」と私に手紙を渡して、「然う思はない事？」。例もの姉樣ならば、やれ何か御心配事が起つたんぢやなかろうか、とか何とかつて、散々氣を揉む筈だのに、今日はそんなでもなく、御よりなさらなかつたに就いて、怨みの一言も吐かないのは、もう姉樣の御心に信と愛とが滿ち〳〵て、何も彼も美はしい輝きの世と見ゆるんでせう、眞個に以前の姉樣とは變りました。

中

初夏の天地は、いつしか極暑の姿に變はつて、水々しかつた黄勝の綠は濃くなり行き庭の眺めも、暑つ苦しく、健樣が御出になつた頃盛りだつた紫蘭も、やうやくあせたる色に咲き出づる頃となりましたのに健樣からは一枚のはがきさへ參りません、御歸京なすつたのやら、まだ御國やら、當地の下宿に問ひ合はすれば、まだ御歸京は御ざいませんとの事に御國の御住處がわからないから手紙を出すわけにも行かず、只どうなすつたんだらうと毎日〳〵案じ切つて居りました、流石な姉樣も果ては少々迷つたらしく「御捨てなさる御つもりか、しら、何うでも斯うでもと無理に附きまとひはしないから嫌になつたらいやになつたと、判然有仰て下さりや、こんなにして苦しめて下さるよりか御慈悲だわ、チー露さん、如何御つもりなのかしら、ひよつとしたら御病氣ぢやなかろうか、」と日毎〳〵繰り返して早や一月は過ぎました、其からと云ふものは、ぐち一ッこぼさず、たのしそうな先頭にかへつて、「露さん私は立派に思ひあきらめました」と、こちらから健樣の話を言ひ出してもさける樣にして、口の端にも出さなくなりました代りに何處となく姉樣の性質が變つて、來た樣に思はれます、口では奈何に立派に言つても、心にさう思へないのは知れきつてる事です、折々は意地も張も投げ捨てゝ「露さん、私は之から、まだ幾年生きて居なけや、ならないんだろうか」つて泣いた事もありました？「一體何に御腹が立つたんでせう、

這麼に優しい姉樣を捨てるなんて、餘り殘酷だわ、どうしても私が健樣を探して御目に懸つて、御心を伺つて見ませう、」と言ひますと、「露さん、其の樣な、事をして御呉れでないよ、いやな者に附き纏はれては、增增、嫌氣を增す計りで鳥渡も甲斐はなくつてよ、その樣な事をしたら私の妹では有ません、ほんとに私の身を思つて呉れるなら、成る儘に任かして置いて頂戴」と申ますの、此度、井原樣へ嫁く氣になつたのも御兩親樣の强ひての御すゝめの爲でもありませうが、全くは自棄なんです、その證據には、その事を聞入るゝ前の夜、何うせ死んだ身體だもの覺官だつて無いんだわ、其ならば井原へ嫁つて、御父樣にも安心させて上げ度い、」と言ひましたもの、でも其からと言ふものは、沈んで見たり、はしやいで見たり、丸つきり今迄の姉樣とは違ひました、私は姉樣の御心を察すれば、嘸辛からう苦しかろうと平常なら、腹が立つ樣な事を言はれても私丈を胸の、悶 のもらし處としてあんなに當るんだろうと思へば烈しい言葉も可哀想に思はれて、默つて聞いて居りますの、明日は愈々御嫁入と云ふ前の夜、床に就いてから色々の考が湧いて、何うしても寢つかれません姉樣は、と思つて、氣を付けて居ると夜具の中で泣歔欷て居る樣です私が「姉樣、まだおきて被居るの、」つてさも、今目が醒めたらしく、問ひますと「まだ眠れないのよ、嬉しくつて、」まあ何處迄、隱す積りでせう、憎らしくなつて來て「姉樣、あなたはこの露を實の妹と思つて被居して？そんならば、何故、泣き度い事を一緒に泣かしちや下さらないの、嬉しくつて眠れないとは、僞でせう、姉樣、姉樣は山田樣に捨てられたからつて、他へ嫁くなんて、氣に何うして、なれ樣つて有仰た位ぢや有ませんか、それに、玆迄決心なすつた御心根は奈什かと思へば、せめて、之が眞實の阿樣ならこゝに居て、寂しいながら氣兼なしに、御過ごしなさるだらうにと、口でこそ、言はないけれども、眞個に御痛はしう思つて居りますのよ、廿と言へば、もう子供ぢや有りませんわ、私、姉樣の話相手には立派になれる積りですよ」私は

堪へきれなくて、伏し沈みました、すると姉様は私の方へすり寄つて、「露さん有がたう、眞個に那麼に言つて吳れるのは露さん一人よ、姉様は子、思慮も分別もない者ならば、私は疾うに死んでるでせう、私ほんとに父様にだつて母樣にだつて逢はする面はない露さん、私は眞實馬鹿の意氣地なしの骨頂よ世界に是程の馬鹿が、有るでせうか、自分の心迄が自分の思ひ通りにならなくて、其の苦しさつたら、露さん、察して頂戴よ」と身を投げ出して、泣きました、尤もです、泣くのは尤です代らるゝものならば私は姉



様に代つてやり度う御ざいます、「姉様、今迄の事は全然夢と、思ひ斷つて下さいな、子ー姉様、あんな、薄情な健様等をいつ迄も思ひ切れない姉様の心が私には解らないわ、私なら、向ふで、捨てるならば、此方だつて捨ててやる位の氣が出るのに、ほんとに姉様が焦れつ度い」「露さん忘れたら幸福かしら、私も子大分、忘れ様と力めたのよ、……でも子、露さんの親切に對してゞも全然忘れて仕舞ひませう、あゝ熟うく解つてよ〳〵でも子今夜は泣き仕舞にどうか、かまわないで、放つといて露さんは早く休んで御

呉、」と充血した眼を指で鳥渡抑へ、深い吐息をもらしました、私は唯もう、遣瀬なくて、此の切ない、姉樣の、御樣子を健樣が御覽なすつたら人間だもの、可哀想だ位の情はおこるだろう、今茲に連れて來て、恨みの數々、言ひ盡して不人情、不德と罵り散らしてやり度い樣です。姉樣は突と、立つて、違ひ棚の袋戸から信玄袋を取り出しました、高く積まれた、赤、靑、白の封筒は、健樣からの手紙でせう、數ふれば百通にも餘る程を一束ねにして一齊、上の裏書を、眺め入つて居りましたが思ひ出の微笑を淋しう見せて「露さん、之わネ、皆、明日燒い了つてよ、いゝでせう、そして此處の寫眞ネ」と机の中の手箱を指して「之は、私が嫁つた後で、彼の人の住處が解つたら、送り返して頂戴、恨みがましい事は一言でも書いちやいけませんよ、又は立派に捨てられて、思い切りよく井原へ嫁きましたつてネ。其から私が井原へ嫁つても露さんは毎日の樣に來て頂戴、赤坂から麹町迄、造作ないわ、眞實、露さん一人が力だからネ」と眼を抑へて口許計りに笑を見せました、「姉樣、忘れるつて、眞實、是非忘れて頂戴な、そりや忘られないのは無理ぢやないのよ、でもネ自分の思ひ代へ樣一ツだわ」「然うネ、僅ばかしの一生を、泣いて過ごしちや、つまらないわ、露さんがあつち、こち、姉樣の樣だわネ、」つて染々言つて、呆然と、何かの影を追ふ樣に手紙の上を見詰めました。明日の事も有るからつて横になるにはなりましたものゝ、二人共容易に寢つかれません、姉樣は又、起き出でゝ駄目〳〵今夜は到底眠れないの、露さん、あなたは御休みよ、」つて立上つて羽織を引かけ室の中を往つたり來たり、いつも眠れない時の癖が始まりました、「姉樣、もう大抵にして、御休みなさいよ、私だつて、眠れないわ、」つて言ひますと「露さん御願ひだから茶の間から葡萄酒をほんの、ぽつちりでいゝから持つて來て頂戴な」とさも氣の毒さうに言ひますので、早速立つて運びました、すると一口飲んで、露さん、あなたも御上り」とコップを渡しますの、「ホヽ、この夜中に二人で御酒宴なんてずい分だわネ、でも姉樣が井

原へ行つ了や這麼事は出來ないわ」つて、うすら寒い初秋の夜風に身を縮めますと「露さん、冷へやしない事、早く御這入りなさいな」とちらと夜具の方を見て「もう默まりで寢ませうネ。姉樣は間もなく眠られた樣ですけれども、私は前よりも倚頭がさへて、眠れません、夜中、姉樣の行末を氣使つて。

今日は愈々姉樣の結婚の日です、下谷の住居に居る頃ならば定紋付の簞笥幾棹、ねらしてやるのに」と父樣は、口惜しがつて被居います、けれども古河に水絕へずとの、諺にもれず、昔からの出入の者等多く集つて、人形箱でも轉倒した樣な騷ぎです、流石、母も今日は、そゝくさと忙はしがつて悦んで居りますのに、御當人の姉樣は落ち着き澄まして、何だか一生懸命に縫つて居ります、「姉樣、今日になつて、一體何を拵らへて被居るの？」 取つて見れば、まあ呆れるぢや有りませんか、人形の衣服なんですもの、「之を如何なさる御積り」つて尋ねますと「是の子に着せて連れて行くのよ、」と桐の箱を見せました、其れは雛樣が京都へ御出なすつた時、人形好の姉樣へ御土產として下すつた、可愛い人形です、私は又何となしに氣懸りになつて、姉樣の御心が恨めしくも焦れつたくもなりました。

私が盛裝を濟まして、御座敷に行て見ると姉樣も御こしらゑが出來て、さも〳〵疲れたらしく床柱にもたれて有居いました、御召物は黑縮緬に枝面白き古松の裾模樣金茶の帶も配合よく、厚化粧に少し上氣せたる頰の血色常よりも活々して、その氣高さ、その美くしさ、暫時茫然と見恍て居りますと「露さん、愈々今宵になつたのネ、何だかもう、落膽し了つてよ」と、私の顏を熟と見て「張子の人形見る樣でせう、」「何うして餘り御美くしいから、見惚れて居りましてよ」「然う、張り子だわ外ばかりは着飾つて、中は空虛なんだものネー露さん」と蜂丈笑つて、口は曲めもしませんの、姉樣は何ともなさゝうネ、藤樣杯の御嫁入の時は嬉しい、悲しいの情緒が胸を壓して、苦しい位だつたと有仰つてよ」「さう、私は又其の情の度が餘り過ぎてるん

でせうか、何ともないわ殆んど此屁なの子」「姉樣其れ位なら何故初めつから止さなかつたの、那麼心で被行つて、第一井原樣に濟まないわ」「だから何も彼も捨てるつて、言つてるぢやないの、起らない情を殊更起す事も出來ないぢや有りませんか、露さんも、解らないの子」と腹立たし氣に見へましたが直ぐと又優しい眼に私を視据へて「露さんもう〳〵、心配な事は有りませんよ」と聲が少し顫へて、紅玉の光る美くしい手を私の肩に、此度は私が無性に情けなくなつて「姉樣、酷い事を言ふ樣ですけど、私は姉樣が恨めしくて焦れつたくて、仕樣が有りません、怎うして那麼でせう子ー、姉樣、健樣に對する面當にでも、全く前を忘れて幸福な身になつて、見せると思はないんですの、眞實、私は姉樣の意氣地ない御心が恨しう御ざい升」と言ひ度い事を言つて居りますと、父樣が被來つて、「露は暫らく彼方へ行つて御居で」と姉樣がすゝめられた座蒲團に御坐りなさいましたので、私は其の儘退きました。其から三十分許り後には、愈々姉樣も車に御乘りなされ私も父樣や母樣の後に、恰度花嫁樣の樣な嬉しさと心配を胸に抱いて、麴町へと走らせました無事に式も、披露の宴會も濟んで歸りましたものゝ、何となしに姉樣の事が氣に懸つて、喜んで被居る父樣や母樣の中で私一人、盛裝も解かずに茫然、茶の間の火鉢の前に坐つたきり、「露、何を那麼に生眞面目な顏をしてる」との父樣の御言葉を拍子に、ホヽと笑つて立ちました。

下

井原の兄樣は陸軍の大尉です、何も彼も承知の上で御貰ひなすつた程ですもの、そりや一通りや二通りの可愛がり樣ぢや有りません、私は一週に二度位は必らず行つて泊ります、姉樣も案じた程でもなく兄樣と、御二人で夜店等にも出かけますし、日曜日等は目黒や大森へ被往る事もあります、私は何よりも嬉しくつて、姉樣の前では過去を語るのが、禁物と心を用ひて居りました、偶には手も附けられない樣に沈み込んで困ら

せる事も有るけれども、大變忙く注意して大事に仕へて與れるから喜んで居りますがネ、翻つて見れば妹が兄に仕へてる樣なもので、欲を言へばもつと我儘も言ひ、拗もし、甘へても貰ひ度いのさ「ネー露さん、露さんが來て與れると、家の中が一層賑やかになつて、父の機嫌も上々です、何うか、毎々來て下さい」つて有仰つて私が行くのを姉樣に劣らない程喜んで下されます、御約束した日に行かなければ、迎ひをよこして下さる程で、私の爲にはもう、此上もない善い兄樣で御ざいます。姉樣は姉樣で、「露さん兄樣は眞實に御氣の毒だわネ、彼の通り親切にも大事にも可愛がつて下さるのに、私の樣な枯木見たいな者ぢや御滿足なさる樣な事が出來なくつて、濟まないけれども時々は些もかまわないで放擲かして下さりや善いにと、嫌ーになる事が有るの、よ、雖然、何うか、自分を抑へて、御幸福にして上げ度と隨分力めて居るにや居るの」つて申ます、「姉樣、那麼に力めなくつても、姉樣が無要過去の影を追はないで、世の中に縋るも賴るも兄樣一人と思つて被居りやいゝんだわ、遠慮も何もなく、時には兄樣が御困んなさる樣な我儘も有仰つて、御覧なさいな、御氣の毒だから大事に仕へて上樣なんて、那麼事なら姉妹にだつて、又は仲のいゝ友にだつて出來ますわ、ネエー姉樣その樣な水臭い夫婦つてものがあるものですか、こゝの兄樣見たいな人は少ない事よ、男らしくて、情が濃やかでと、「姉樣の心に過去の影を置く餘地もない迄に兄樣の長所を見出さし度いと、願つて居りました、這麼風で、とにかく、御正月も迎へ花咲き盛る四月の二日、私は二三日泊りの積りで麹町へ行きました、其の夜は二七不動の緣日ですから夕食後三人連れで、家を出て、今の東郷坂を上つて、澤山並んだ植木屋の前に彼がいゝ、是がいゝと、遊蝶花と櫻草との色を撰んで居りますと、姉樣が「露さん私は鳥渡、例の菓子屋へ」と言ひ捨てゝ急ぎ足に行かれました、別に氣にも止めず、兄樣が御拂ひを御すましなさる迄待つて、角の菓子屋の前で、姉樣は？と、立止まつて、見れば其らしい人もなく、小僧が何か讀んで居

ります、「問ふて見ませうか」つて言へば「靖國神社の方へでも徐々歩行てるんだろう」と兄樣がつか〳〵被仕たもんですから、私も然うかもしれないと思つて途上も其らしい人を探しながら招魂社の橫手の門を入つて御池の周圍遊就館の邊りを何奈に步行て見ても影も見えません、すると、兄樣が「露さんもう歸ろう文の事だもの突如に歸つてるかも知れない」と御辭は平常と變りませんけれども、御眉根の皺に不快の御心は讀まれました、私も內心腹が立つてなりませんのを故意と平氣らしう裝つて「然うだわ、屹度、御菓子でも買つて、茶でも入れて待つて被居るのかもしれませんのね、人を困らせ樣と思つて、と兄樣を見上げますと、「那麼だと少々困らせられても却つて、愛嬌だがね」と兄樣は浮かぬ調子で有仰る私は何だか氣に懸つて耐りませんから、さつさ、と一人で急いで一番町の宅のくゞりを入り玄關の障子を開けるや否や、ランプ片手に迎へた、女中に突然「松、御姉樣は」と問ひますと、「あら御孃樣、奥樣も御一緒で被居いませう」と眞實に歸つて居ないらしいので、上る心もせず突立つて居りますと、兄樣も御這入なすつて、「まだ歸つて居ませんか」失望したらしく女中を見詰て被居いましたが「露さん何を呆然してるんです、今に何處からか歸つて來るでせう、立つて居たつて仕樣がない、松、御茶でも入れて御吳れと、御上りになりました、私も後に附いて上りましたもの、心配で落ち着いて居られませんから松と二人でも一度探して來ませうと言ふのを兄樣が「何有、消へて亡くなる事もあるまいから打放らかして置いたら可いだろう」つて御聞入も御ざいません唯空しく、下駄の音がする每に失望の太息漏らして二十分計り「もう耐へられません」つて立上ると同時、車が宅の前で止まりました、急いでランプを持つて、玄關に出づれば這入つて來たのは姉樣に違ひ御ざいませんけれども、御顏の色は眞青で泣いた後の樣な御眼ですもの、今迄は歸つたら散々怒つて遣りませうと思つて居た言葉も引込んで仕舞ひ、姉樣まあ一體何うなすつたのと、言つた切り、そのまゝ茶の間に

這入つて、屑掛止めの針を取つてる姉様に甚麽に氣を揉んだか知れませんよ、チー兄様」と言つて何とか兄様に挨拶をして呉れゝば可いと思つて居りますと「私？私はチ途不思不識、神田迄行つ了つてよ、吃驚さして御免なさいチー貴方」と兄様に詫びて「露さんもう床を布かしてお呉れ、車屋に急がしたもので頭が」と物憂さゝうに、手を額に當てゝ俯むきました、今夜は例になく兄様の御機嫌が悪く突と立つて「露さん今夜は此處で文とやすんで下さいと御足音も荒らく書齋の方へ被往いました、後で、委しく何の爲に神田邊迄被往たか、その理由を聞き度いと思ひましたけれども今夜は緩くり氣を休まして卜様と、松と二人で床を布べ終るのを待ちきれない様にして姉様は寢みました。彼の夜から今日迄恰ど三日間姉様に對する兄様の御機嫌は解けず今朝も大變早く御出ましになりました、今日こそは姉様に眞實の事を言つて頂き度いと思つて茫然、椽側に彳んで彼在る姉様を呼びますと此方を顧向ふともしないで考へ込んで居りますの、氣の所爲だか顔の色も悪く滅切痩せた様です屹度、夜眠むれないんでせう、其れに言ふ事や爲る事が當り前で御ざいません、この先き何うなる事かと思へば平常の私にも似



合はない、口を利けば涙が出さうで暫らく私も默つて居りました、すると、突然「露さん私はネ此儘此の柱になつて消へ了ひ度いわ」つて耐らなささうに、兩手で自分の肩を抱きしめて、身を顫はせました、私はこの時、姉樣何が那麼に切ないの、此間の晩は何故私等と離れて神田邊り迄被往たの、姉樣有仰つて下さいなネー姉樣若しか健樣に御逢なすつたんぢやなくつて、よー姉樣、四邊に心を配つて小さな聲で問ふて居るのに、御自分はいそ〳〵と机の上の小襖を開けて、取り出したのは我子の樣に大事がつてる京人形です「露さん可愛い雛樣でせう、私が生んだ一人娘たつた一人の初娘よ」つて、小さな人形に頰擦りして懷に入れる樣子は、宛然三ッ子の樣ぢや有りませんか、いくら人形が好きだつても、人が見たら狂人と思つてよ、姉樣今日、兄樣が御歸りなすつたら何とか御詫をして御心を解き升から、私丈に眞實の事を打明けて頂戴ネー姉樣、あなたは乾度健樣に逢つたんでせう、まだ健樣が忘れられないの、あんな薄情な義理も人情も知らない樣な人をそれ程思つて、一生這麼に悶へ度いんですの、私、姉樣の御心が解らなくて、眞實にくやしう御ざい升、出來るならば私の心と姉樣のと、入れ代へ度くて……」涙に聲も詰まつて、唯懷の人形を奪ひ取ろうと差し延ばした手を振り放つて「叔母樣も御前を捨てるんだとさ、そゝ、可哀想に〳〵御前の父樣は非道い人ネ、矢部樣の財産に御目が眩んだの、那麼に御金が欲しけりや上ませう〳〵澤山上げてよ、さあ露さん持つて御出で」つて、げら〳〵と笑ひ續けて立上つた樣を呆れ返つて見て居りますと、有り丈の簞笥引き出して緋もみ緋綸子の裏、花々しう室中に布き亂し、嫁入衣裝を引摺りて歩行き廻る樣子は、愈々狂人になつたんでせうか、私の大事な〳〵姉樣は全く狂人になつ了つたんです、迎ひの車が父樣を連れて來る迄の悲しさ、狂ひまわる、姉樣の前に女中と二人、泣き伏して居りました。三週間計し前の萬朝に花嫁、花婿として矢部子爵の令孃と、健樣と載せて有りました、殊に大學卒業生中の秀才と健樣の事を賞めてたゝへて。義理し

らず、情知らず、之でも秀才か、人物か、山形の片田舍で不自由勝に育つた者が一足飛びに未來の子爵となる人だもの秀才に違ひない人物に違ひはなかろう、と腹立たしく口惜しく早速姉樣に御目にかけて、思切らして上げなけりや、と思つたもの丶又思ひ返して、まだ御覧にならなひのを幸ひ物と切り拔いて、置きました、でも先夜縁日で乾度健樣を見かけて、後を追つて其の事を覺つたんでせう、そりや然うと知れば狂ひ度くもなるでせう、あんなに信じて居たんですもの無理ぢやないけれども、「姉樣の心も餘り小さ過ぎるぢや、ありませんか」つて縋つて恨んで



も、泣いても聞き分けても呉れません、あゝ私の大事なく\な姉樣は遂々狂人になつて了ひましたの。御玄關に御父樣の御聲がするのを聞き知て「父さん父樣ぢやなくつて、御金を澤山持つて被來つたんでせう嬉しい事く\」とさも嬉しさうに笑ふ聲を外に、父樣は晴涙に咽んで被居いますと、さあ父樣御近入なさいましよと、手を取つて「おやまあ、父樣、失敗なすつたの、根岸の邸もなくなつて了ひまして」と潸然と泣きますの、父樣も餘りの情なさに「文、情けない者になつて呉れた、藤井家の爲、又井原に對して、貴樣は切腹して死ね、死なゝけや父が殺すぞ」つて、涙を呑ん

で御怒の處へ兄樣も御歸りになりました、「この樣な不束者も親の目には人並に見えて、御所樣に甘えて今更面目も、御ざいません、と切なさうな父樣の挨拶、「いゝえ、此樣な事になる程なら初めつから僕が思ひ切つて仕舞へば可かつたんです、何も彼も運命で御ざいませう、兎に角、暫時御預り下さいまして、心任せに養生を御させなすつて、下さいまし、」と有仰つた兄樣の御言葉にはこの私が姉樣に代つて、手を合して拜みました、でも流石に姉樣の心中にも兄樣の御情が染みて居たんで御ざいませう、いざ車へ乘ると云ふ際、「今夜は乾度歸ります、怒らないで下さいよ、ねーあなた」と兄樣の前に廻り後に廻つて、子供の樣に縋りますので到々赤坂迄送つて下さいました。

…………………………

牡丹が散て紫蘭が咲いて、萩がこぼれて今年も菊の盛りとなりました、氷川神社の銀杏が眞黄になつて、風に狂ひ散る樣子の寂しさつたら今迄の私の生涯に之程悲しい秋は覺えません、姉樣の結婚も去年の恰ど今頃でした、今年の秋は山形の叔母樣の許に泣いたり笑つたり京人形を相手に暮らして居りますさうな、昨日、叔母樣より井原の兄樣へ小包が屆いて、

文が心地の平かなる時、毛糸をとの求めに、買ひ與へ候處、井原樣の靴下を久しく編まねば、さぞや損せし事ならんと編みては解き、解きては、編み、終り覺束なしと思ひつゝも任せ置き候處、東京に送りてよと今朝、嬉しさうに差し出し候、手業を見做へば心狂ひたる者の技とも思はれ申さず候にと情なさに一人打泣き申候、昨今の痩せ細り、痛はしき迄にて氣力も衰へ心細き事のみ口走り候、此の秋の末迄如何かと覺束なう思はれ候、此品は文の遺物と相成候はんか、…………

京人形は箱の儘、露さんに養女にやつて下されと申候まゝ小包の中に入れ候處、魂ある人に言ふ樣に潸然と打泣きて別れを惜しみ候、彼の一件は當方にても望ましく、嬉しく御許樣の深き御志に對して、御禮の申上樣も之なく候、身に代へて思ひし妹の身の落ち着きを文も喜び候はん、藤井の兄も此上なき喜びと存じ候…………

春よ、秋よと遷り變りの人の身の上、また來ん秋の我身や如何に。

懸賞小説——第貳等

●當選者靜子女史へ賞金を送呈致度候間至急現住所御知らせを乞ふ



言はぬ思

あかね子

一

思へば早き月日なりけり、妾が都に出でゝより、月と替り雪と移りて、花咲く事早や四度びになりぬ、文の林の事繁く學びの庭の奥深くて、未だ足らはぬ智識ながら、滞なく行かば、後一歳にして卒業すべし、人よりは疎く生れて、才も力も淺ければ、郷に装るべき錦なけれど、切めては故郷の父母に、五年が間に惡しき噂聞かせて、心煩はさせ參らする事もなく、この身も壯健にて、卒業證書を土産にせば、强ちに御悄しみも蒙るまじきぞ、何事も心堅う持ちてなど、寄宿舍の庭に立ちて、春の朝日に親みつゝ。

試驗休暇も矢のやうに過ぎて、殘り少うなりぬ、上野あたりの花の噂ちらほらとなど聞きしも、つい二三日前の事と思ひしに、何くれに日暮らして、柳が榮にそむきつる程に、心忙しう咲亂れて、早や見頃は過ぎたりとか、兎角う云ふ間、隅田も時を移さずと聞きければ、春に追はるゝ心地して、同宿の親しき友、二人ばかりと誘ひ合ひて、はしたなくも笑ひふためき寄宿舍を後に見つ。

水は眠るが如く緩う流れて、永に醒めざらんとし、花は誇れる樣に装ひを盡して、春を專恣ならんとせり、隅田の堤は人もて滿ちて、笑ひ興ずる聲、呼び合ふ聲、或は可笑しげなる姿して、醉ひしなるべし、皷簞など打ちふりて舌たるうのゝしるなど、人の容姿の樣々なると共に、其趣も種々に異りて、何れも今日一日に歡を盡さんと、ひしめけるに似たるかな、妾等も亦何となく心浮きて、互に可笑しき事ばかり云ひ合ひ、ひた笑ひに笑ひつゝ、宛ら高う香れる幕を、ひた

と張りつめけんやうなる花の中をば過ぎ行くにぞ、笑止しきものゝ内に數へて、過ぎたる人もあるなるべし。船に乘れるは如何なる人ならん、三味太鼓など賑しく、如何なる事の如何ばかり可笑しくてか、憎きまでに笑ひ興じて、或は流に逆り、或は水に隨ひて幾艘となく入れ違え、綾織る儘に漕ぎ廻るも、品下りて口惜しけれど、傳ひ聞く、管絃詩歌の古き風流の、有繋に忍ばれざるにしもあらず。

見る限り陸にも水にも、唯春の氣の滿ち〳〵て、其をかしさを寫さんには、拙き筆の恨めしきなり。

春の日を長しとは云へ、斯くて暮せばあはれにも短くて、花と鳥とは假りの別れを何時か泣きけん、早や川岸の家の窓には、ちらほらと燈火赤う。

急ぎ促し合ひて電車に乘るに、ひしとつまりて疲れたる足を憩むるすがもなく、泣き度き程の思ひして辛くも釣革に縋り居るに、傍に居たりし人の角帽頂き給ひけるが、伜と思ぼしきに私語きて、立ちて席を與へ給ひける、嬉しくも有難くて辭儀も述べ敢えず、ちと窮屈なれど三人小さくなりて、嬉しき人の情けにほと息をつきぬ。

時を經る程に疲れ益々出で來て、電車を下りし頃には足も腰も棒のやうになりて、ちぎれ落つるかと思はるゝ足を、片身がはりに肩に倚りつゝ辛くも踏み支えて、八時と云ふに寄宿舍に着く。

やれ〳〵嬉しや、慾も德もなく疲れぬ、顏も洗ふまじ手もそゝぐまじ、唯この儘に寐るばかりが願ひぞと、一人の友のあはれに呟くもをかしく、さらば彼もおつき合に、埃だらけの顏をこの儘に、明日まで保存して置かんなど、打ち笑ひつゝ部屋に入るに、主待顏のものもなくて、唯徒らに暗かりける。

二

漸くに探り當てゝマッチを擦るに、サと小さく光つて消えぬ、再び擦つて洋燈に移すに、プス〳〵と二つばかり音して、一室は見る〳〵明うなりぬ。

先づ一と息つかねば何する元氣もなしと、崩るゝや

うに机に倚るに、硯箱の上に一通の書面あり、留守の間に來けるを小使の老爺が、持て來て置きつるものならん、何よりも嬉しきは人よりの消息ありし時の心ぞと、常には思ひもし云ひもしたりしを、今は心地悪しきまでに疲れたれば文見るも物憂くて、頓には手に取らんともせざりつるは、常の妾にも似ぬ事かな。

されど有繋に心引かれて、取るともなしに打ち見るに、見馴れぬ書きぶりにて手跡も餘り美しうはあらず、わけてたけ子殿と書きたるが異様なり、たけ子は妾が名なれば怪しくもあらねど、



女名の下に殿と書きたるは、例ば日傘さして靴穿きたらんやう、何となく適應はぬ心地して、をかしくも怪しみつゝ裏を見れば故郷の母君の御名あり、扨ては封筒は近隣の誰かの代筆せしものか、母君はいと内輪なる御心にて、今迄御消息の度びごとに父君の御手紙の中にばかり入れおこせ給ひて、終ぞ御自分にて表まで書き給ひつる事なし夫にしても斯く餘人に表書かせておこせ給ひける事も例なき事なりと、怪しみつゝも開きけり。

玉章くり開くに懐しき母君の御手跡なり、怪しく心

聞りて讀み行くに先づ胸潰れたるは、父君御病氣云々の御言葉なり、さればこそ常のやうに父君の表書かせ給ひつるには非ざりけるよと、わなゝき〳〵讀み行くに、悲しき忌はしき事のみなり。

父君の御病氣は何より心配なりとのみにて、委しうは記させ給はず、今迄父君の腕一つにて家計も立て學費も送りしかど、去年來より不景氣殊に甚だしく、家計にも道はるゝ程なりしを、色々と才覺して今日迄學費も續けたれど、今度の御病氣にて出る一方にて、收入る道は全く絶え如何とも致しかたなし、後一年にて卒業の出來るものを中途にて止めさすは、何とも〳〵口惜しけれど、これも定まれる運と斷念め一と先づ歸國せよ、和女も嘸かし殘念ならん、皆親達が至らぬなり、許してよと、勿體なき御言葉なり。

餘りの事に心惑ひて涙も出でず、暫時御手紙持ちたるまゝ氣の遠くなる樣に覺えて、何思案するの力も無く、唯呼吸ある石像のやうになりて、手も足も冷く堅うなりしやうなり。學校の事は殘念は殘念なれど、妾身の如きものに取りては、これ迄修業の出來たのは仕合せなり、この上を彼是と不平がましき事云ふは、罪の程も恐ろしきぞ、夫にしても父君の御容態は……と恐れておのゝき、おのゝきて憂ひぬ、母君の委しう記させ給はざりつるは、餘程お惡き爲めにはあらざるべきかと、更に恐れて更におのゝきぬ。

兎にも角にも親しき友にも計らんと、御手紙持ちたるまゝ、急ぎ廊下を行きて訪ふに、又惡戯しに來られてか、へと〳〵に疲れたれば今夜だけは御免し〳〵、お休みなさい左樣ならとて、から〳〵と笑ふも口惜し、さる戲れ事には非ず、鳥渡開けさせ給へと云へど笑ふて却々に承引ざるに、腹立しく悲しくて、初めて涙はら〳〵と落ちぬ、無理に戶押開きて、云々の事なりとて玉章見するに、友も初めて驚きて忙しなう眼を動かすも、いたく思ひ迷へる樣なり、一生の大事なれば心靜めて思案し給へ、この四年を力盡して、後一歲にて遂れ磨き上げらるべき珠を、この儘打ち捨てんは、何ぼう恨めしき限りならずや、餘り立入りて云ふも無躾

なれど、生計の御都合は貴女様ばかりならず、妾とても同じ事、手紙の度毎に倹約々々と、耳痛きまで聞かさるゝなれ、必ず静かに分別し給へ、逸り給はゞ悔多からんと、優しき言葉に反つて涙關堪えず。

歸國せよとあるものを、歸らば又の上京は覺束なからん、さりとてあゝ、兩親を骨と皮ばかりにして卒業證書を貰ふた處、嬉しくもあらじ誰が褒めやうぞ……胸は苦しう思ひ亂れて、思ひ亂れて胸ふたがりぬ、明日にもならば又能い考へも付くなるべし、兎に角今宵は心靜かに休み給へ、身體に障らんと染々と云ふ、友の情の嬉しくも悲しかりけり。

心騒ぎて苦しけれど、とまれかくまれ今宵は寝なんとて、部屋に歸りて机の邊り少し仕末して、夜着など引き伸ぶる際、小使の老爺走り來て、電報ですと投ぐるやうに置きて、又忙しなう走せて行きぬ。電報の聲に胸破れ、舌硬うなりて呼吸詰りぬ、急ぎ慄く手に取り上げて見れば、こは如何に。

三

チチキドクスグコイ、

チチキドク……あ、チチ、あゝ！、思はず高く喚びて身の倒るゝを覺えざりけり。

あゝ誰が斯る不祥の言を爲すものぞ、夢なれかし夢ならずとも、妾が眼の誤りなれかしと、再び見れど三度び見れど、唯不祥の言を繰り返すに過ぎず。

斯る不祥の報に接せし時には、既に／＼懐しき妾が家には、更に不祥の事の起れるには非ざる可きかと、忌はしくも亦更に不祥の想はれて、手も脣も冷たう慄き、妾ながら物狂はしく身の置き處も知らず、泣くより外はなかりけり。頭は亂れて顛るゝやう、胸は苦しくて裂くるやう、起ちては泣き坐ては泣き、扨ては部屋を廻りて泣きぬ、この心の苦しさは、人に語るべき言葉もなき。

心弱く如何に泣けばとて詮なき事なり、一刻も早う歸りて御看病申さんもの……と、漸うにして思ひ定め

つ、時計見れば九時を過ぎたり、如何に急くとも早や今宵は詮なし、唯荷物ども紮げ置きて明日の一番列車に乗らんと、部屋々々を訪れて友にも云々の次第を語り、夫々に別れを述ぶれば何れも皆あはれがりて、異情の涙注がるゝに嬉しき悲しさの犇と迫りて、噛しむる歯を漏れて、苦しき聲の出づるなりけり。

優しくも慰めつゝ何くれと友達の手傳ひ呉るゝに、大方の仕末も出來ければ、何れ歸國の上委しくは申上げんと、厚く禮云ふて先づ今宵は眠らんと、兎に角に褥に入る。

身は靜に横はれど心は荒く亂れ騒ぎて、様々の事胸に浮び、夫から夫と思ひなせば又忌はしき事の浮び出で、宛ら着き纒ふ影のやう、如何に追へども去りやらず、不吉な事思ふなと強く心を苛責めど、其束の間も消えやらで、思ひは終に幻となりぬ。

父君の御顔の歴々と見ゆるに、驚きて跳ね起きれば、掻き消えて綾なき暗に、こたびは母君の御顔、弟の顔！、チチキドクと耳に聲ありて、チチキドクと暗に閃きぬ。

父君よ母君よ、あゝ罪多かりき宥させ給へ、如何に知らぬ事とは云へ、花の木陰に戯れ笑ひて今日を樂しと興じける事の、はしたなくも淺ましかりけるよと、恨みて悔えて戰慄きて、伏して遙かの父に泣きぬ。

涙のみ溢れて思ひのみ亂れぬ、四邊物凄く靜まり返りて心臓の音のみ高う亂れ打つ。

苦しき夜を悶え明して、心急くまゝ未だ暗きに起き出でつ、車備ふて來て見れば懐しき友は早や起きて、昨日の疲れの未だ去りやらぬべきに、自己が事のやうに忠實に助けつ、様々に云ひ慰めらるゝに又しても新たなる涙なり。まさきく居ませ、再び逢はん時もと契りて退舎の事など頼むに、快う承諾ひ、その邊り迄送らんと云ふを、涙に謝して涙に別れぬ。停車場に着くに未だ一時程早し、待合室の片隅によりて急く心を制ゆれば、何として今日ばかりは時計の針の遅う進むぞと、口惜しう悲しくて自と漏るゝ嘆息に、又誘はれて涙なり、泣かじとすれど溢る眼の人に怪しう見られな

んかと、兩の袂に涙を包めば、胸の小波のやるせなや。

時來ぬの聲に驚きて、泣きける眼を人に見られじと伏目にして急ぎ走り、軈て汽車に乗るに汽笛の聲の東雲に響きて、汽車はことこと搖ぎ出でぬ。山となり川となり、或は野となり森となる常ならばをかしき景色も今日は少しも眼に入らす、遠く漂ふ雲の一片を故郷はあの右か左か、早うあの邊り迄と墓無き空のみ望みつゝ、汽車の走るの遲きを託つ。十時となり十二時となりぬ、辨當調へて見たれど、胸詰りて少しも咽喉に通らねば、手荷物の上に置きて故郷の空にあこがるゝに、雲何方にか消えて慰むべき影もなきに、心細さのいや増さりぬ。



午を過ぎぬ、三時となりぬ……四時となりぬ、汽車は止まりぬ。

汽車は止まりぬ、あゝ故郷！、今更胸は早鐘のやうに鳴く。

轉ぶやうにして汽車を下りて人力車傭ふて急ぐに、小さき橋や田甫路、今に變らぬ故郷の樣は有繋に心嬉しけれど、春とは云ひ田舍の景は、あはれにも物淋しくて、妾に悼辭を述ぶるに似たり。

車の走るに從れて妾が家は近うなりぬ、早や鎭守の森が見ゆるよ、あゝ遠く桑畠と柿の木との間に、妾が家の屋根が見え初むるよ！、父君は今如何にしてぞ、能くてか惡くてか、妾が歸りしを嬉しと笑ませ給ふらんか……。門は見え初めぬ！、思はず腰浮かすやうに延び上るに、庭も見えぬ、二人三人隣の方より忙しなく走り來て、表口より入りしも見えぬ、こたびは走り出でたるが見えぬ、入りしは訪ひ來し人か、出でしは去りし人か、それにしても走り入り走り出るは、唯事には非ざるべきぞと、早や魂も身に添はず。

人力車の戸口に着くより早う轉び下りて、夢のやうに家に入るに、それと見て弟は走り來けるが胸の邊りにしがみ着きて、姉ちやん！とばかり聲ふり上げて泣くなりけり、おゝ好ちやん、お、お父樣は？と云ふ時、母君の奥より出で來られつるを見れば、御眼の邊り赤う腫れて御顏さへいたく窶れ給へり、母君よと云ふ間もなく、たけよ、一足遲かりつるぞ、遲かりつるぞと、後は涙に咽ばせ給ふ。あゝ遲かりける……。

四

野邊の御送り濟みて後は、身も心も共に萎えて、十日ばかり床につきぬ。

濕り勝ちなる春雨はこのあはれなる妾家を圍みて、容易く晴れんとはせざりけり、杖とも柱とも賴みの人に、取り殘されたる一家のものは、舵失へる船にも似て、如何なる風に導かれて如何なる島に向ふらん、日と共に迫り來る一家の運命は、あはれや細き女の腕にかゝれり。

一月二月はさまでにも非ざりけれど、貯へは山程あるも坐して喰へば直ちに盡るものを、況してや去年本年の不景氣に、疲れ果てたる幾干の財が、能く幾月を支ふべきや、筍の竹になりて軒に凉しき風送る頃には夏痩にしもあらずして、母君いたく細り給ひぬ。

痛ましや今迄は榮花の身にはあらぬながら、召使ひの一人もありけるものを、替る淵瀬は、如何に人の世の習ひとは云へ、此頃の御有樣は何事ぞ、御年も假か

に四つ五つ老け給ひて、御髪さへも淋しう、淺ましくも亂れ給ひつる。母君の痛々しさに、如何にもして假染にも、少しは御心を安め參らせん術もがなと、朝夕夫のみ心に願へど、文讀む業少しばかりは覺えたれ、扨て焦眉の急にかばかりの力何かせん、女の身には針持つ術の如何ばかりか優りたりけんと、口惜しくも妾身の甲斐なきを、父の御墓に泣くのみなり。

一日いと暑苦しくて心地あしかりければ、母君に少しばかり暇願ひて裏の田甫の方に行くに、綠薫りて風涼しく、何日になく氣の晴々となるに、其處此處と逍遙くうち、をかしき草花二本三本、ちよろ〳〵流れに望めるがあり、名も知らぬ花なれど薄紫の床しきに捨て難き思ひして摘み取りて接吻しつ、母君に奉らばやと急ぎ歸りて喘ぎ〳〵、つと奥の室に入るに、いと佳き衣裁ち下して、傍目もふらで縫はせ給へり、其衣の麗しさ、綾亂れて母君の膝をこぼるゝ樣なんど、云はんやうもなくて心おどりぬ。

竈の煙一日に細り行く妾が家に、斯く美しき衣あるは心得ず、よし有りとするも苦しき中に、賣らば幾干の助けとならんを、誰に着よとて縫はせ給ふらん、怪しき母君の御心かなと御傍にゝじり寄りて、御美しき衣かな、縫はせ給ふて如何にし給ふ御心ぞと云へば、いと淋しう笑ませ給ひて、妾等が着るべきものにはあらぬよとの給ふ、誰が着給ふにやと重ねて問へば、知らねど他家の孃樣ぞとの給ひて、見る〳〵御顏曇り給ひぬ、扨てはこの頃の苦しき中を、立てねばならぬ竈の煙に、悲しき賃仕事せさせ給はん御志かと、切らるゝやうの思ひして胸俄かに塞がりつ、思はず涙はらはらと零れぬ、母君は眼敏く見つけ給ひて、和女は泣くか、斯う云ふ美しきものが欲しくてやと、悲しく勿體なきは親なりけり。

其御言葉はいよ〳〵悲しう、いたく慄ひて亂るゝ聲に、痛ましき御姿を見參らする身の、何とて衣など欲しがり申すべき、妾等に出來る事あらば身を粉にしても御助け參らせたくと、夫のみ朝夕心に掛くれど、腑甲斐なき身の足はぬを悲しみ居るものを、御手づから賃仕

事など仕給ふ程ならば、何とてこのたけに下女奉公せよとは仰せ給はぬぞ、御恨めしくこそとばかり、御膝に縋りて泣きぬ。能く云ふて呉れつるよ嬉しく思ふぞ妾とても斯る淺ましき事爲たくはなけれど、爲ねばならぬ今日の境遇、笑つて呉れなと咽ばせ給ふ、母君にばかり苦勞させ參らせて、奈何して子の道が立つべき憂き艱難を分つべき、子は無いと思召してかと搔き口說き參らせば、可愛のものや優しき事云ふて、この母を泣かすかと、抱き寄せてさめ〲と泣き給ふ。

暫くありて、優しい言葉に付け入て言ふでは無けれど、實は此間も去る素封家にて仲働きの欲しき由、遉つては奈何かと知る人よりの話もありしが、假令其日が送れねばとて、年齒の行かぬものに迄苦勞さすのが痛はしさ、能く考へての上にてとばかり、未だ確とした返事もせねど……といと苦しげにの給ひけり。

五

滯りもなく話決着りて、六月の中旬頃、手術物少しばかり車に乘せて、三里妾家を隔たれる、去る素封家へ行く事になりぬ。

ちよい〲とは逢はれまじ、隨分身體を氣をつけて、粗匆ないやう病はぬやうと、門口迄送り出でゝ繰り返し〲の給ふ母君の御情けに後髮引かるれど、心弱くては、氣を勵まし、面に笑ふ心には涙の波を打つなりけり。

人力車にかたこと〱と揺らるゝ間に、何時しか妾が家は後に消えて、心細さの田舍道、年こそ十九、浮世の雨も風も知らねば、他人は恐いと聞いたばかり、初めての奉公故、辛いは萬々覺悟なれど、若し辛棒の出來ぬ程辛い家ではあるまじきかと少さき胸の騒ぎける。

來て見れば聞きしにも優る大家なり、仲働きも妾の外に二人ありて、妾は奥樣づきなりけり、直ぐ樣此方へと導かれて眼眩ましきやうなる御室二ッ三ッ通れば、中庭の風情えも言はれぬに對せる淸雅なる、一室は奥樣の御室なり、近うとの御意に恐る〱伺ふやうにして御前に出れば、嘸ぞ暑かりけんなど御優しく〱も物の

給ふ、忍びて御顔を拝せばいと、能く太り給へるに、想像へるとは餘りに異れど、大様にして格備はれるは有數大家の奥様なりけり。

案じたるよりは御氣立も能御優しく、朋輩も皆親切にて物馴れぬ妾を何くれと導き與るるに、日を經るに伴れ、家の様子も知らるゝ程に、憂き事もなくて嬉しかりけり。

三月許りして殿様にもお目にかゝりぬ、奥様とは反對に細形の御方なれど御氣立は一様に御優しく、をかしき事ばかり御氣輕にの給ふ、この



御館程御奉公仕よき處は、三千世界に又とあるまじと初めての夜朋輩の語りけるもげに追從の類ひには非ざりけらし。

何事も正直にと心掛て、御奉公専一ぞと勉むる程に嬉しくも何一とつ過ちもなく一月二月と經る内、取り分け奥様の御意に入り、讀み書きも他のものより佳ければとて、重寶がらせ給ひ、常に御傍に置かせ給ひて何事もたけよく〳〵との給ひつゝ、折ふしは殿様にも御吹聴遊ばさるゝに有難くも嬉しくて、益御奉公を勵まんと心に誓ひぬ。

奥様の御優しさ殿様の御氣輕さ、朋輩の心切な事など、屢母君にも聞えさすれば、御消息の度毎に、良き御主人得たりけるよ、勿體なけれど御奥様を母とも思ひて、乾度疎かの心起すまいぞと、深さ知られぬは親の慈悲なり、照りはたゝく夏の暑さは、玉の樓と雖ども茅の屋と撰ばず、岐阜提灯の涼しげなれど、唯涼しげなるばかりにて流るゝ汗のやるせなさに、たけよ夏暑くなき工風は出ぬやなど、奥様の託たせ給ひけるも、流るゝやうに日は經ちて、早や前栽の千草秋草、梧桐一葉に驚く間もあらせず、紫苑刈萱女郎花、月の色さへ濟みまさりて、珠や閃めく草の葉陰、歌の譜つゞる虫の聲々。

そぼ降る雨に雁啼けば征夫も腸を斷つとかや、月に向ふて奏ずる糸には涙の玉もつゞるべし、秋こそ物を思ふ間に、月夜烏に驚けば、いつか霜置く星の色、延壽の菊の花萎えて、秋もあはれに更けたりけり。

某日御前に招かれて草々の御話相手致しけるに、ふと思ひ出でられ給ひける樣にて、ちと迷惑な事頼みたきがとの給はするに、妾身に及ぶ程の事ならば何なりともと申せば、實は親類の次男なるが此秋大學を卒業したれば、一年志願してこの暮に入營する由、未だ少しは間のある事にて今日明日と云ふにはあらねど、はや餞別したる方もある由なれば、當家にても何か心ばかり遣したく、半里程隔りたれば、女の足には辛からうて氣の毒なれど、折見て使して給はるかとの給ふ、御易き事にこそ、今日にも明日にも參り申すべきと申せば氣の早き事かな、さらば今からでも行く心かとの給はするにぞ、御命ならば夜徹夜にても參り申すべきと云ふ、をかしがらせ給ひて、急ぐ事にはあらねど、餘りに心強き事云ふがをかしければ、妾も負けぬ氣になりて今より行けと云はんぞとて、晴々しく打笑はせ給ひつ、小さき御包渡させ給ふ、急ぎ姿改めてさらばとて館を出るに、御門の邊りまで出でさせ給ひて、一人にても可きか早や二時に近きぞなど、心弱くもの給はするに、御心に掛けさせ給ふな、鳥渡一と走りの間にこそと、御情けを心に拜みて、面はから〳〵と、笑

ふて出でぬ、町を出でゝ森一つ拔ければ、細流に沿える徑の、處々散り初めたる柳なんど、淋しげなる細道を辿るに川は環りて橋あり、渡れば小さき町に入りつ。

程なく思ふ方に着きて、玄關にて案內もとめて云々の御使にて參りつる、可きなにと云へば暫時と云ひて取次ぎの人の奧に入りけるが、軈て再び出で來て此方へとあるまゝ、恐る恐る導かるれば、十疊の客室なり、調度强ちに奢らねど惜からず、床の掛物の錆びたるも趣き多し、暫時して出で來ましけるは、小さき髷結はせ給へる品好き五十ばかりの御方なり、奧樣ならめと謹みて、禮して御使の次第細々と申せば和女さんの噂は兼てより聞きぬ、大さうな忠義者との事、妾からも御禮申す、殊に今日は遠き處をとて、いたく慰勞はせ給ふ、足はぬ妾が事を此方までも噂せさせ給ひけるかと嬉くしも恥しさに堪えざりけり、折角なれば軍さ人になる倅にも御會ひ下されやと、いと御打解け給ひて御手鳴して女に何やら仰せらるゝに、かしこまりて、彼方に走り入る間もなく、入れ違えに來給ふは、年紀廿五六になん、眼鋭しく面清らかに、懷かしげなる口元に笑みをたゝえて、輕く會釋して坐に着かせ給ふ、恭しく一禮するに、御辭儀と勉强は大嫌ひな男、御手柔かになんど、をかしき事ばかりの給ひて、萬氣輕にばかり仕給ふに、何となく去ぎし寄宿舍時代の思ひ出されて、懷しさの增る心地す、君には既に學士の身にならせ給ひつるを、猶書生の御心失せ給はぬにや、御話振も更に誇り給ふ樣なく、唯々串戯ばかりの給ひては高らかにのみ笑はせ給ふ、御話の面白くて時の移るも知らざりけれど、ふと夕陽の淋しげなるに心着きて、驚き急ぎて御暇乞ふに、却々に許し給はぬ御心の染々と嬉しけれど、餘り遂うなりては奧樣の案じ給ふべければと、心殘れど腰少し浮かしていふに、奧樣の心配するよりは歸途が恐いなるべし、其樣は御配慮御無用なり、某力量では猥藉者と引組んでの功名覺束なけれど、逃げる方では人並よりは足早なり、女御の御供は某承り申さんず、先づ其氣で御寛緩など、御

串戯の内にも御優しさ籠りて、つい止められて燈火點きたり。

御顔初て見參らせし時には、然る心も浮ばざりけるが、熟熟と御見上げ參らする程、御口の様なり御眼の麗しさ、奈何も似た人のあるやうに思はるれど、扨て誰に似給へるなりけん、如何にしても思ひ出でられねば、偷み〳〵御顔覗ふに、覗ふ程確かに心にある俤なり、彼か此かと知れる人、聞ける人、一々思ひて頭拔れ出して見つれど、鏡に映る姿は知らず、似るは無くて頭拔れぬ。



軈て時計の八時を打つに驚きて、今度こそはと御暇乞へば、さらば御送り申すべきとの給ふ、勿體なければと只管遁ぶるに送るとは貴女への御世辭ぞ、實は今日の餞別の御禮に行くなりとの給はするに、御辭退すべき言葉もなくて………………。

君の御手づから提灯取せ給ひて、先きに立ち給ふにぞ、従ふて戸外に出れば、風肌に寒くして星淡くあはれなり、橋からころと渡れば堤長く、川瀬の水音何となく淋しきに、自と兩の袂を合せてひたと御傍に寄れ

ば提灯の火の眩くも、並べる影法師の恥しさよ。
女の遲き足には嘸かし焦躁しがらせ給ふらんと、小走りにして從ふに、顧み給ひて、いと緩徐と歩ませ給ひつ、何日學校廢めたるにやなど問はせ給ふ、妾が書生したりける事も既に御耳に入り給ひけると覺えぬ、包むべきにもあらねば云々と申せば、さらば本年の花は見ざりけるかと聞かせ給ふ。

花と云はれて思ひ出でられたる事こそあれ！、似つると思ひしは實に其人よ！

君には此春某日頃、隅田の花見給はざりけるかと問ふに、見たりとの給ふ、其日夕方某時頃電車にて歸り給はざりつるかと申せば、然なりとの給ふ、其時女學生に席與へ給ひけるを記憶え給ふやと云ふに、確とは覺えねど然る事ありし心地もするとの給はす、あゝ其時御情けにて疲れし足搔りたりしは、妾身なりけるよと申せばそは、奇しき事かな、何事も緣なりけりと莞爾に笑ませ給ふ、怪しくも心跳りぬ。

程なく歸館るに奥樣いたく案じさせ給ひ、玄關迄走り出でさせられ、何とて斯くは遲かりつるぞと問はせ給ふに、云々と申上ぐる暇もなく、後より故意と大きなる聲して、某引止めて候とをかしげなる句調にの給はせければ、黑暗から牛のやうに嫌な人よと笑はせ給ひつ、君と御奥に入らせ給ひける。

君の歸らせ給ひて後、幾時もなく妾も床に入りけれど樣々の事思ひ出でられて御俤の去り遣らず、怪しくも胸安からぬ今宵哉。

其後三日程經て嬉しき君の訪ひ來ましぬ、何となう御心安う覺えて、自と打ち解けて物申せば、君にもいとど親しげにの給はするにぞ、大分仲好になりけるよと奥樣の笑ませ給ふも、異樣に胸に響きて、總身朱のやうに赤うなりぬ。

嬉しき日の短さは、何時しか暮れて十時となるに、やれ〳〵遊び過しけるぞ、又來んとて起たせ給ふ、この前の日の御返禮に、今日は當方にて歸し參らすまじきぞと申せば、奥樣も御言葉を添え給ひて、家の娘を引止めたる不屆の報ひに、明日にならねば歸すまじ、た

け床伸べよとの給ふ、かしこまりて急ぎ御寝室の間に御伏床設けて、此方へと申せば、因果應報で餘義なしなど笑はせつ。

御布團懸け參らせて下らんとするに、少し話し給ずやとの給ふ、御嬉しさは山々なれど二人ばかりは後めたくてと申せば、然らば我が入營しても、我を忘れ給ふなとの給ふ、妾より君こそ忘れ給はんと申せば、人は知らず我ればかりはと、御瞳輝き給ひぬ、そは誠の御心にやと申すに、男が一旦唇を漏らしつる事を何とて戯れになど輕々しう云ふべきぞと、嬉しさに唇乾きぬ、御疑ひ參らすにはあらねど、男の心はと申せば、疑ひ深き奴よと手を取らせ給ふを、爲さるゝまゝに委かせ參らするに、御指輪拔き取り給ひて、當座の片身ぞ人に見すなと…………。

…………………………

來年の年の暮、少尉の軍服着て歸り給はん時までは、秘め尾花や穗に出すな、月の風情の嫉たくとも、花に胡蝶を怨むとも、よし雨ともなれ風ともなれ、胸の焰に身を燒くまでも、神にも秘して言はぬ思ひ。

懸賞小説―第壹等

芝區四久保廣町四十四 小室たみ子

實に心清く幽雅かなる乙女の姿かゞみにうつる花の如とくに見ゆ、文辭婉び筆路婉りて、千變萬化の趣致に富めり。

上流婦人の外國語

上流婦人社會の外國語練習の爲め明治卅一年の暮に藥學博士ドクトル長井長義氏等が設立したる麹町區平河町五丁目十八番地會話女學校雙葉會は嘗て皇族方の王女殿下なども御通學遊ばされし事もあり上流婦人社會の信用を博し居るが今其近況を聞くに現今通學の貴婦人中に香川皇后宮大夫令孃汐子は(三十)英佛の兩國語に通じ常に畏くも皇后陛下の御許に侍りて御通譯を申上げ又東郷海軍大將令孃八千代子(十六)も妙齡ながら流暢なる歐語を以て高輪御殿なる常宮周宮兩内親王殿下の御相手申上げ居る由。又夫人方には寺島伯爵夫人きよう子(二十)萩原韓國領事夫人浮子(濱尾大學總長令孃)三井八郎右衛門夫人五十子細川男爵嗣子夫人芙蓉(二七)子の諸貴婦人ありて英佛何れにも通曉せり外に中島男爵夫人八千子(二四)は語學の傍ら西洋繪畫の研究中なり又林外務大臣令孃芳子(一七)も熱心語學に心を注ぎ三井三郎助氏令孃多津維子も(二二)此處にて修學せし結果今は歐米漫遊の途に在り又小學程度にありては岩倉公爵令孃花子(一三)同末子(一一)の姉妹島津公爵令孃繁子(一三)など秀才の名あり少女の側には原六郎氏令孃みよ子(六)山内鐵道課長令孃文子(七)山口工學士令孃よし子(六)外十數名は何れも學習院女學部の放課後同會に立寄り、毎日三十分乃至一時間位宛英語を習ひ居るが中年以上の婦人が初歩より學ぶに比すれば却々進歩早しといふ一體に上流には佛語を重んじ居るが英語に熟達してさへあれば差したる不便なかるべし出淵獨逸大使館附書記官夫人はま子(二二)の如きは結婚前同會にて修學し又別に同會の規程中にあるピアノを修めたるが其技の優秀は其人の赴任地にて持て囃され居り山中佛國大使館附書記官夫人貞子(二三)も嘗て此處に遊び今は夫と共に巴里に在りて自由に佛語にて社交場裡に活動せりといふが前者は當路武夫氏の令孃後者は珍田外務次官の令孃なりと

十月號記事概要

十月五日發行

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二册　增刊四回……一、四、七、十月　價格同一）

郵税　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	五十八錢	五十錢	四十二錢
半頁（卅二行）	二十圓	十七圓	十四圓五十錢	十二圓
一頁（六十四行）	四十圓	三十三圓	二十八圓	二十三圓

▲等級の位置ハ一切日數御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は總て前金の外送本せず
●御注文の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢郵券相添申込あれ

明治四十年九月五日發行　第七卷第拾貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番

本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

女（後付の一）

國府種徳君　櫻田又次郎君　田山錄彌君著

訂正 日露戰史

第壹卷　既成發行

全部四卷　洋裝四六二倍判
總クロース背皮金文字入
紙數各七百二十頁餘
定價一册金壹圓貳拾錢
小包料　金拾六錢

◉日露戰鬪地圖七葉◉諸將軍題字九葉◉戰況實景寫眞凡八十葉挿入

明治三十九年丙午元旦、始て日露戰史初卷を發刊し、爾來卷を重ぬること十有六、星霜を閲すること一年有餘にして、全部完了せり。當時嘖々の評、街衢に滿ち、洛陽の紙價、爲に貴きに至る。然るに今日より之を見る、既に善を盡くす、未だ美を盡さゞるの憾あり。是に於てか訂正改竄、十六册を改めて四卷に分つ。其裝の偉麗にして堅牢なる、宛も偉丈夫の堅甲冑を擐くが如し。斯の如くにして、國威は六合に耀き、戰史は四海に行はるべし。今や其第一卷を發刊す。之を東洋絶無の一大戰史と謂はんも、敢て誇言に非さるなり。

第壹卷概略目次

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(後付の二)

報知新聞記者

文學士 高田知一郎君
法學士 佐藤忍君
共譯

英獨戰爭未來記

本書は昨夏英國議會の問題となりしもの、又以て本書の價値を知るに足らしむ、世界の形勢を揣摩し來れば、英獨の戰爭は必ず來らむ、之れが來るの日は世界一の海軍と陸軍とは千古無比の活闘を演ず可し、倫敦の陷落、ウォーターロー橋上の惡戰、國民同盟會の活躍沈毅なる元帥あり、熱血なる少壯政治家あり、英海軍の勇戰と獨陸軍の精鋭とは轉た肉飛び血躍るの感に堪えざらしむ、東洋の英國たる吾等には必讀の書なり、殊に攻撃方略と云ひ。防禦方策と云ひ凡て專門家の手になりたるものなれば坊間の凡書と自から撰を異にす

全一冊菊判洋裝
紙數凡四百三十頁
海戰大判精書及戰鬪圖三葉挿入頗美本
正價金六拾五錢
郵税金六錢

東京本町 博文館

伊達奥洲君著

女性觀 附通人漫語

著者は日夕繁忙なる業務に從事せる某少壯事務家なり彼れが半生の世故風流の間に贏ち得たるもの之を「女性觀」幷に「通人漫語」となす、名の實に件はざるは世間ありうちのことなり、獨り之を本著に於て怪むを要せず

三六版洋裝石版表紙美本
紙數約百八拾頁
定價金貳拾錢
郵税六錢

東京本町 博文館

(後付の三)

今井柏浦君編
中村不折君畫

新選一萬句

全一冊

四六判横綴帙美本
紙數五百貳十頁
正價四十五錢
郵税八錢

編者明治一萬句を公にして現代の俳壇に大貢獻を爲し今又此書を編纂にむ載する處は最近二十年間に於ける當代諸派の俳傑**鳴雪、碧梧桐、虚子、青々**の諸先生を始め全國各地に割據せる所謂**日本派**同人の俳句約千五百題、**一萬四千句**を蒐錄せるもの、洵に**明治俳壇**の無比**偉觀**たり、加ふるに類題精確、編次整然、全く在來の句集と其選を異にし更に多くの新題を網羅せり。俳句に志す人は勿論、苟くも文壇に遊ぶの士は花晨月夕必す此書を可備也。

發兌元　東京本町　博文館

●●再版●●

江見水蔭君著並畫



全一冊菊判洋裝
紙數約二百頁
實況寫眞版入
正價三拾五錢
郵税六錢

卷中目次

▲日本海の沈默
▲暗夜韓國に入る
▲出漁の前日
▲捕鯨記（ニコライ丸にて）
▲鯨の解剖（蔚山にて）
▲韓人の言（奇異なる社會の一端）
▲相模と鯨歌
▲鯨擊の名人（レックス號便乘記）
▲蔚山の一日
▲鯨の油
▲月峰寺
▲鯨組
▲女一人
▲歸航記
▲渡韓前記
▲大冒險？
▲蔚山行
▲其他數篇

東京　博文館　本町

文學博士原秀四郎君著作

中等國史教科書

各冊、口繪精巧着色石版、時代服裝圖各一面、挿畫木版繪畫三冊、合計四十四葉百五十有餘圖附載

地圖着色石版、史蹟集覽圖版圖沿革圖挿入

菊版洋裝總クロース美本

第一學年用　正價四十錢　郵税六錢

第二學年用　正價五十錢　郵税十錢

第五學年用　未成

中等國史地圖

菊版洋裝總クロース美本

第一、二、五學年共通有

定價金壹圓拾錢

郵税拾貳錢

●地圖菊判二倍大精巧着色石版十五面收載細圖六十有餘圖、圖解及附錄參照諸表合計百卅餘頁

●中等國史教科書は文部省令に規定せる教授要目に準據し傍ら精良なる數種の教科書を參考して編纂せるものなりといへども其文章體例には多少の新意匠を加えし點なきに非ず特に添附せる口繪挿繪地圖は其數量豐富にして新奇の材料より成れるもの少なからず學生の趣味を喚起すると共に記述以外の智識を與へ得ること多かるべし又一、二學年用と五學年用とは同時に起稿せるを以て精細周到に彼此文章繪畫の聯絡參照を考量して立案せり蓋し中等程度教科書にして良好なるもの〻一ならむ

●中等國史地圖は嚮きに公にせる日本國史地圖の紙數を省約し圖面の文字を節略して編成せるものにして史蹟各細圖の大多數は日本國史地圖所載のものと同じく描寫極めて精細なれば山河墟落の形勢に一目瞭然恰も身親ら其地を踏み其景を目擊する想あるべし其外交關係事蹟の地圖は新なる研究を加えし點多く歷代國政の一般地圖と共に彩色を用ゐて標示したれば日本國史地圖に比して更に明瞭鮮麗のものとなれり蓋し中學程度特に師範學校用中學初級用高級用として尤も良好なる參考地圖たるべく又中等國史教科書と併用すれば國史に關する健全なる智識を收得するには遺憾なきに庶幾からん

女(後付の五)

（後付の六）

女(後付の七)

帝國教育會長 辻新次君
陸軍教授 矢津昌永君
東京高等師範學校教授 山崎直方君
東京高等師範學校教授 町田則文君
女子高等師範學校長 東京美術學校長 正木直彦君
陸軍教授 文部省參事官 牧瀨五一郎君

帝國教育會編 東[illegible]

本圖ハ東經百三十五度ヲ[illegible]幅ノ中心トセ我大日本帝國ノ位置ハ正シク全幅ノ**中心**ヲ占ム又經度ニ對シ毎一時間ノ時間ヲ掲ゲ本邦ト各地トノ時差ヲ知ルニ便ナラシメ郵船航路、海底電線及ビ鐵道線路ヲ詳細ニ記入シ特ニ本邦汽船ノ外國定期航路ニハ旭旗アル汽船ヲ適宜ニ配置シ我ガ大使館、公使館、領事館ノ所在地ニハ特ニ觀目ヲ惹クベク用意シ韓國及南滿洲ノ精圖ハ附錄トシ又各國ノ面積、人口、軍備、貿易額等ヲモ圖式的ニ掲ゲ又陸上ノ山脈河流等ハ極メテ精細ニ之ヲ描キ又海面ニハ主要ナル海流、風向、風域、流氷ノ限界等ヲモ網羅セリ一幅披覽ノ下現世界ノ光景ハ瞭々トシテ掌ヲ指スガ如シ尚ホ本圖註記ノ文字ハ日、清、韓ノ地名ニ就キテハ漢字ヲ用ヒ蒙古、滿洲等ハ漢字ノ下ニ羅馬字ヲ添ヘ西洋地名モ倫敦、伯林ノ如キ主要ナルモノハ羅馬字ニ添フルニ漢字ヲ以テシアレバ清國、韓國人士ノ閲覽ニモ便益少ナカラザルベシ世ノ政治家、教育家、實業家、其他一般ノ人士此好紀念ノ大地圖ヲ所有シテ世界的智識ヲ修養シ以テ本圖編纂ノ目的ヲ達成セシメラレンコトヲ乞フ

石版銅刻美麗着色ニテ掛圖折圖調製赤道比例尺二千五百萬分一縦三尺五寸橫四尺七寸

[illegible]成發賣

軸仕立 正價金六圓 荷造料金拾五錢 送料實費

帙入 正價金五圓 小包料十六錢

價 一 金四圓廿錢 人 五圓 一種共要送料

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替口座第二百四十番 博文館


腦病藥の覇王
腦病
神經病全治良劑
健腦丸
本劑の赫々たる信認は
世既に定評あり
迷ふ勿れ腦病患者
▲一日早く本劑を服せば。一日早く不快なる病苦を脱して。爽快なる健康を得るのである
▲常に持藥として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき腦充血を全治し。中風卒中を未發に防ぎ。記憶力が増進する特効あるは獨り健腦丸のみである
効能
腦充血
腦膜炎
頭痛
大便秘結
逆上症
中風
卒中
五週分 金貳円 郵税十戔
三週分 壹円廿五戔 仝 十戔
二週分 八拾五戔 仝 六戔
一週分 四拾五戔 仝 四戔
三日分 貳拾戔 仝 貳戔
一日半 金拾戔 仝 貳戔
本舖 大阪市心齋橋 丹平商會藥房

女學世界
第七卷第拾貳號
（明治四十年九月五日發行 每月一回五日發行）
（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）

定價金貳拾錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊹
明治40年8月（第7巻第11号）、9月（第7巻第12号）

2008年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3509-7　C3321